

# 西橋遺跡発掘調査報告書

— 明日香村役場新庁舎建設及び明日香村中山間地域  
農村活性化総合整備事業に伴う調査 —



令和6年3月

明日香村教育委員会





平成4年度調査 西橋遺跡 東地区 第4調査区（E4区）遠景（南西から）





令和2年度調査 西橘遺跡 遠景（南から）



## 序 文

このたび、明日香村役場新庁舎が完成し、令和5年5月8日より新庁舎に移転しました。新庁舎の屋根は瓦葺きで、村内の景観と調和した景観となっており、また、庁舎内の玄関ホールは牽牛子塚古墳の八角形の吹き抜け、四方には四神のイラストが描かれていて、明日香村らしいデザインが取り入れられています。新庁舎は災害発生時の防災拠点としての機能もあるほか、交流棟では議会の開会やイベントの実施など多目的な活用が可能となっています。新庁舎を村民皆様と一緒に使い、そして明日香村がさらに元気になることを祈念しています。

さて、今回刊行いたしました西橘遺跡は、明日香村役場新庁舎の下に眠る遺跡です。現在の橘寺境内の西側に広がる西橘遺跡は、明日香村中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い、平成3・4年度に発掘調査を実施しました。そして、今回の村役場移転に伴い、新庁舎が建設される場所を再発掘することで地下遺構への影響がないことを確認しました。地下に眠る遺跡を保存しながら、その上に景観と調和した新庁舎を建設することができ、明日香村の新たなむらづくりの象徴といっぴよいでしょう。本書では、長きにわたっておこなわれてきた西橘遺跡の発掘調査及び出土遺物の調査・研究成果を報告いたします。

最後になりましたが、調査にあたりいろいろとご高配を賜りました独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県教育委員会及び奈良県文化・教育・くらし創造部、奈良県立橿原考古学研究所等の関係機関、並びに橘大字の皆様にご心から御礼申しあげる次第であります。

令和6年3月

明日香村長 森川 裕一





## 例 言

1. 本書は奈良県高市郡明日香村大字橘に所在する西橘遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本事業は明日香村が明日香村中山間地域農村活性化総合整備事業として平成3年度から平成4年度まで、明日香村役場移転及び新庁舎建設として平成29年度から令和2年度にかけて実施したものである。
3. 平成3・4年度に実施した本事業は、遺跡名を亀石南遺跡と仮称して調査・報告していたが、平成9年に刊行した『西橘遺跡発掘調査報告書』において、明日香村大字橘の内、現橘寺境内より西方にある遺跡を西橘遺跡として総称することにした。
4. 調査は文化庁、奈良国立文化財研究所（現：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、奈良県教育委員会、奈良県文化・教育・くらし創造部、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村文化財保護委員会の指導のもと、明日香村教育委員会が実施した。
5. 現地調査は下記の日程で実施した。

1991（平成3）年度	1991（平成3）年12月17日～1992（平成4）年3月31日
1992（平成4）年度	1992（平成4）年4月1日～1993（平成5）年3月31日
2017（平成29）年度	2017（平成29）年5月15日～2017（平成29）年6月13日
2017（平成29）年度	2018（平成30）年3月1日～2018（平成30）年3月30日
2020（令和2）年度	2020（令和2）年7月28日～2020（令和2）年12月23日
6. 基準点測量、航空写真測量、航空写真撮影は下記の業者に委託した。

（株）アイシー、（株）共和
7. 本書所収の座標値は国土交通省規定の世界測地系平面直角座標を示し、高さは東京湾平均海面を基準とする海拔高を示している。
8. 遺構の写真は各現場担当者がおこなった。
9. 表紙カットは、西橘遺跡東地区第4調査区（E4区）青灰色粘質土出土の墨書土器である。
10. 地図は国土地理院発行の「畝傍山」（1：25000）、奈良国立文化財研究所発行の「川原」「立部」（1：1000）、明日香村基本地図（1：2500）を使用した。
11. 土器の色調については『新版 標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 /（財）日本色彩研究所 色票監修）を参照した。
12. 西橘遺跡の調査概要についてはこれまで明日香村教育委員会などにより『明日香村遺跡調査概報』や『西橘遺跡発掘調査報告書』等が刊行されているが、記載事項の異なる点については本書の記載内容をもって正報告とする。
13. 本書の執筆は長谷川透、西光慎治、高橋幸治、辰巳俊輔、納谷守幸の他に相原嘉之（奈良大学）、谷澤亜里（奈良文化財研究所）、藤井裕之（奈良県文化財保存事務所）、松永悦枝（文化庁）、山崎健・山本崇（奈良文化財研究所）の各氏が担当した。それぞれの執筆分担は目次に記している。
14. 遺構の実測は各現場担当者が担当し、遺物の実測は各執筆担当者が行った。
15. 出土遺物及び関係書類・図面等は明日香村教育委員会にて保管している。
16. 遺構図にはS B（建物）、S A（柵）、S E（井戸）、S K（土坑）、S P（小穴）、S X（その他）などの略号を用いた。遺構番号は4桁で表記し、4桁目は調査地区（北区=1、南区=2、東区=3）、2・3桁目は調査区番号（1区=01、12区=12）、4桁目は通し番号とした。
17. 本書の編集は長谷川透・相原嘉之が行った。

# 目 次

序 文	明日香村長 森川 裕一
例 言	
目 次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯と経過	(納谷守幸・西光慎治) 1
第2節 調査の概要	(長谷川透) 2
第3節 調査体制と報告書の作成	(長谷川透) 4
第2章 位置と環境	(辰巳俊輔) 6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 検出遺構	17
第1節 各地区の概要	(納谷守幸・長谷川透) 17
第2節 北地区の遺構	(納谷守幸・高橋幸治・長谷川透) 17
第3節 南地区の遺構	(納谷守幸・高橋幸治・長谷川透) 29
第4節 東地区の遺構	(納谷守幸・相原嘉之) 37
第5節 検出遺構	(納谷守幸・相原嘉之・長谷川透) 41
第4章 出土遺物	48
第1節 土器類	(相原嘉之) 48
第2節 木簡	(山本崇) 79
第3節 木製品・骨角製品・植物遺存体	(松永悦枝・谷澤亜里) 100
第5章 自然科学分析	111
第1節 西橘遺跡出土木簡及び木製品の樹種同定	(藤井裕之) 111
第2節 西橘遺跡出土の動物遺存体	(山崎健) 114
第6章 総括	(納谷守幸・相原嘉之・長谷川透) 118
図 版	
出土木簡釈文	
抄 録	

## 図面目次

- 図1-1：西橋遺跡周辺の遺跡地図（1：6000）
- 図2-1：飛鳥地域周辺遺跡分布図（1：25000）
- 図3-1：西橋遺跡 平成3・4年度調査地区割図（1：2500）
- 図3-2：西橋遺跡 平成29・令和2年度調査地区割図（1：2500）
- 図3-3：第1調査区（N1区）遺構平面図（1：200）
- 図3-4：第2調査区（N2区）遺構平面図（1：200）
- 図3-5：第3調査区（N3区）遺構平面図（1：200）
- 図3-6：第4調査区（N4区）遺構平面図（1：200）
- 図3-7：第5調査区（N5区）遺構平面図（1：200）
- 図3-8：第6調査区（N6区）遺構平面図（1：150）
- 図3-9：第7調査区（N7区）遺構平面図（1：200）
- 図3-10：第8調査区（N8区）遺構平面図（1：200）
- 図3-11：第9調査区（N9区）遺構平面図（1：200）
- 図3-12：第10調査区（N10区）遺構平面図（1：200）
- 図3-13：第11調査区（N11区）遺構平面図（1：200）
- 図3-14：第12調査区（N12区）遺構平面図（1：200）
- 図3-15：第13調査区（N13区）遺構平面図（1：200）
- 図3-16：第14調査区（N14区）遺構平面図（1：200）
- 図3-17：第15調査区（N15区）遺構平面図（1：100）
- 図3-18：第16調査区（N16区）遺構平面図（1：100）
- 図3-19：第17調査区（N17区）遺構平面図（1：100）
- 図3-20：第18調査区（N18区）遺構平面図（1：250）
- 図3-21：第1調査区（S1区）遺構平面図（1：200）
- 図3-22：第2調査区（S2区）遺構平面図（1：200）
- 図3-23：第3調査区（S3区）遺構平面図（1：200）
- 図3-24：第4調査区（S4区）遺構平面図（1：200）
- 図3-25：第5調査区（S5区）遺構平面図（1：200）
- 図3-26：第6・11調査区（S6・11区）遺構平面図（1：200）
- 図3-27：第7調査区（S7区）遺構平面図（1：200）
- 図3-28：第8調査区（S8区）遺構平面図（1：200）
- 図3-29：第9調査区（S9区）遺構平面図（1：200）
- 図3-30：第10調査区（S10区）遺構平面図（1：200）
- 図3-31：第13調査区（S13区）遺構平面図（1：100）
- 図3-32：第14調査区（S14区）遺構平面図（1：200）
- 図3-33：第15調査区（S15区）遺構平面図（1：200）
- 図3-34：第1・2調査区（E1・2区）遺構平面図（1：200）
- 図3-35：第3・4調査区（E3・4区）遺構平面図（1：200）
- 図3-36：第4調査区（E4区）実測基準線

- 図3-37：第6調査区（N6区）北壁土層断面図（1：150）
- 図3-38：第2調査区（E2区）井戸S E3022A・B周辺 平面・断面図（1：40）
- 図3-39：第4調査区（E4区）谷S X3041東壁 土層断面図（1：80）
- 図4-1：北地区 第6調査区（N6区）土坑S K1061出土土器①（1：4）
- 図4-2：北地区 第6調査区（N6区）土坑S K1061出土土器②（1：4）
- 図4-3：東地区 第2調査区（E2区）井戸S E3023出土土器（1：4）
- 図4-4：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器①（1：4）
- 図4-5：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器②（1：4）
- 図4-6：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器③（1：4）
- 図4-7：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器④（1：4）
- 図4-8：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器⑤（1：4）
- 図4-9：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器⑥（1：4）
- 図4-10：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器⑦（1：4）
- 図4-11：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器⑧（1：4）
- 図4-12：東地区 第4調査区（E4区）谷S X3041出土土器⑨（1：4）
- 図4-13：東地区 第4調査区（E4区）黄褐色山土（整地土）出土土器（1：4）
- 図4-14：東地区 第4調査区（E4区）青灰色粘質土層出土土器（1：4）
- 図4-15：東地区 第4調査区（E4区）墨書土器（1：2）
- 図4-16：谷S X3041出土土師器の径高指数
- 図4-17：谷S X3041出土須恵器の土器法量（接地口径）
- 図4-18：須恵器 杯H・G・Bの土器法量（接地口径）
- 図4-19：木製品1（1：3、1：2）
- 図4-20：木製品2（1：2）
- 図4-21：木製品3（1：2）
- 図4-22：木製品4（1：2）
- 図4-23：骨角製品（1：2）

## 挿図版目次

写真4-1：西橘遺跡出土植物遺存体

## 表目次

表3-1：西橘遺跡 調査区一覧

表4-1：西橘遺跡出土積読不能木簡一覧

表4-2：西橘遺跡出土種実一覧

## 自然科学分析 写真目次

写真5-1：木材組織の顕微鏡写真

写真5-2：西橋遺跡から出土したカツオの尾椎

写真5-3：西橋遺跡から出土した動物遺存体（縮尺1/3）

## 自然科学分析 表目次

表5-1：同定結果一覧（木簡・樹種 / 分類群別）

表5-2：同定結果一覧（木器・樹種 / 分類群別）

表5-3：西橋遺跡から出土した動物遺存体

## 写真図版目次

巻首図版：西橋遺跡 東地区 第4調査区 平成4年度（南西から）

巻首図版：西橋遺跡 令和2年度 航空写真（南から）

図版1：上 北地区 第1調査区 全景（東から）

下 北地区 第2調査区 全景（東から）

図版2：上 北地区 第3調査区 全景（東から）

下 北地区 第4調査区 全景（東から）

図版3：上 北地区 第5調査区 全景（西から）

下 北地区 第6調査区 近景（西から）

図版4：上 北地区 第6調査区 近景（北から）

下左 北地区 第7調査区 全景（東から）

下右 北地区 第7調査区 全景（西から）

図版5：上 北地区 第8調査区 全景（西から）

下 北地区 第9調査区 近景（東から）

図版6：上左 北地区 第10調査区 全景（東から）

上右 北地区 第10調査区 全景（西から）

下左 北地区 第11調査区 全景（東から）

下右 北地区 第11調査区 全景（西から）

図版7：上 北地区 第12調査区 全景（東から）

下左 北地区 第13調査区 全景（東から）

下右 北地区 第13調査区 全景（西から）

図版8：上 北地区 第14調査区 全景（南東から）

下 北地区 第15調査区 全景（南東から）

図版9：上 北地区 第16調査区 全景（南から）

下 北地区 第17調査区 全景（南東から）

図版10：上 北地区 第18調査区 全景（南西から）  
           下 南地区 第1調査区 近景（東から）  
 図版11：上左 南地区 第2調査区 全景（東から）  
           上右 南地区 第3調査区 全景（西から）  
           下左 南地区 第4調査区 全景（西から）  
           下右 南地区 第5調査区 全景（北から）  
 図版12：上 南地区 第6調査区 全景（東から）  
           下左 南地区 第7調査区 全景（東から）（左奥：第8調査区）  
           下右 南地区 第9調査区 全景（北から）  
 図版13：上 南地区 第10調査区 全景（南から）  
           下 南地区 第11調査区 全景（南西から）  
 図版14：上 南地区 第12調査区 全景（西から）  
           下 南地区 第13調査区 全景（南西から）  
 図版15：上 南地区 第14調査区 全景（西から）  
           下 南地区 第15調査区 全景（北西から）  
 図版16：上左 東地区 第1調査区 全景（西から）  
           上右 東地区 第1調査区 近景（東から）  
           下 東地区 第1-2調査区 近景①（西から）  
 図版17：上 東地区 第1-2調査区 近景②（西から）  
           下 東地区 第2調査区 近景（南から）  
 図版18：上 東地区 第1-2調査区 近景③（南から）  
           下 東地区 第2調査区 井戸S E 3022（北から）  
 図版19：上 東地区 第3調査区 近景（北から）  
           下 東地区 第4調査区 南拡張前 全景（東から）  
 図版20：上 東地区 第4調査区 南拡張区 全景（東から）  
           下 東地区 第4調査区 南拡張区 全景（西から）  
 図版21：東地区 第4調査区 上空写真（上が北）  
 図版22：木簡（一）  
 図版23：木簡（二）  
 図版24：木簡（三）  
 図版25：木簡（四）  
 図版26：木簡（五）  
 図版27：木簡（六）  
 図版28：木簡（七）  
 図版29：木簡（八）  
 図版30：木簡（九）  
 図版31：木簡（一〇）  
 図版32：木簡（一一）  
 図版33：木簡（一二）  
 図版34：木簡（一三）  
 図版35：木簡（一四）  
 図版36：木簡（一五）  
 図版37：木簡（一六）  
 図版38：木製品（一）  
 図版39：木製品（二）  
 図版40：木製品（三）

---

## 西橋遺跡の調査成果

---





## 第1章 はじめに

### 第1節 調査に至る経緯

西橋遺跡は、奈良県高市郡明日香村大字橋に所在する飛鳥時代から平安時代にかけての複合遺跡である。この地域は明日香村の中央にあり、明日香村中央公民館をはじめ明日香小学校などの公共施設が存在する文教地区である。古代においては宮殿や寺院が存在する宮殿エリアの中に位置している。西橋遺跡が存在する明日香村は日本の国家形成の歩みを知る重要な遺跡が点在する地域で、高度成長期には開発の波が押し寄せる中、歴史的風土や遺跡群を保存するため、昭和41年（1966）に「古都における歴史的風土に関する特別措置法（古都保存法）」が制定された。その後、昭和45年（1970）に「飛鳥地方における歴史的風土および文化財の保存当に関する方策」が閣議決定され、国営公園などが整備されていくこととなる。昭和47年（1972）には明日香村大字平田に所在する小さな古墳から極彩色の壁画が発見され、地名から「高松塚古墳」と命名された。「飛鳥美人」の発見は専門家のみならず一般の方々の注目をあつめ「飛鳥ブーム・考古学ブーム」が巻き起こり、全国から多くの人々が明日香村に押し寄せることとなった。全国から明日香村が注目を集める中、遺跡や風土を保護するうえで明日香村の住民生活の向上が不可欠となってきたことから昭和55年（1980）に「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境等に関する特別措置法（明日香法）」が施行・公布されることとなった。

一方で、明日香村の農業生産の効率化と生産量の安定化を図るため「明日香村農業振興地域整備計画」に基づいた農業生産基盤整備の一環として、圃場整備事業が実施された。昭和56年度の真弓地区の新農業構造改善事業を皮切りに、昭和57年度には「地ノ窪地区」で、さらに農村基盤総合整備事業として昭和57年度から平成2年にかけて「栗原・上平田地区」、県単独土地改良事業として平成2年から平成3年度にかけて「上平田地区」が整備されていった。そして平成3年度から平成7年度にかけて中山間地域農村活性化総合整備事業として「橋・立部・稲淵・阪田地区」で計画された。この圃場整備のうち橋地区に所在する遺跡群については「西橋遺跡」と総称することとなった。西橋遺跡の所在する明日香村大字橋には聖徳太子の誕生地とされる橋寺を中心に東側に飛鳥時代の大型掘建柱建物群が検出された東橋遺跡が存在し、『万葉集』にある「橋の嶋」との関連や中大兄皇子の邸宅との関連が注目されている。南方には奈良時代の土馬が出土した立部芝山遺跡が存在している。

このように西橋遺跡は橋寺境内の西から北は「亀石」、南は立部芝山遺跡の存在する谷部までの東西約300m、南北約250mの範囲に及んでおり、丘陵部と谷部から形成されている。西橋遺跡は平成3年度の中山間地域農村活性化総合整備事業の事前調査で飛鳥時代の中期から後半頃の年代決定の標識資料に位置づけられる土器群（土師器・須恵器）及び大量の木簡が出土している。その後、明日香村の文教地区としての土地利用のあり方の検討が行われてきた。そういった中で平成29年には明日香村新庁舎建設基本構想が策定され「橋地区」も新庁舎の候補地として位置づけられるようになった。さらに平成30年には明日香村新庁舎建設基本計画が、令和元年には明日香村新庁舎建設基本設計が策定されたことを受けて令和5年春の新庁舎開庁に向けて、「橋地区」に所在する西橋遺跡の遺構の有無や保存状況を確認することを目的とした範囲確認調査を平成29年度、令和2年度にわたって明日香村教育委員会により実施したものである。

（納谷守幸・西光慎治）

## 第2節 調査の概要

ここでは各年度の調査概要を報告する。調査は、平成3年度においては亀石がある丘陵頂部から亀石南方に延びる谷筋一帯の水田、平成4年度はこの谷筋の東端付近の谷頭一帯の水田で調査をおこなった。農村活性化総合整備事業による圃場整備が実施された後、平成29年度及び令和2年度は、明日香村役場新庁舎の移転及び建設に伴って、平成3年度に実施された調査地一帯の水田を調査した。以下年度ごとに概要を報告する。

### 1. 年度ごとの概要

#### 平成3年度

明日香村中山間地域農村活性化総合整備事業に先立ち、遺構の有無と状況を確認するためトレンチ調査を行った。調査地は橘寺境内から西に約500mに位置し、調査地に北接して川原寺跡の飛び地となっている亀石がある。亀石がある丘陵は西に向かって緩やかに下る丘陵で、この丘陵上には飛鳥宮跡と下ツ道（紀路）を結ぶ東西道路があったとされる。この丘陵の南には東西に延びる細い谷筋があり、このさらに南側にも東西に延びる丘陵が張り出している。平成3年度は、農村活性化総合整備事業の範囲内である東西の谷筋とその両側に延びる丘陵斜面で調査を実施した。調査区は23か所設定した。調査の結果、北側の丘陵上では、亀石より西側の6区で飛鳥時代の遺構・遺物が認められたものの、それ以外は後世の削平もあって遺構・遺物の残存状況はよくなかった。一方、北側丘陵上は、古墳時代の遺構・遺物が出土するが、飛鳥時代の遺構は希薄な状況であった。調査面積は合計2218㎡。

#### 平成4年度

前年同事業に先立ち、遺構の分布状況を把握するため調査をおこない、一部で調査区を拡張した。調査地は橘寺境内から西に約500mに位置する。橘寺の寺域外であるが、古代の東西道路の南に接する位置にあたる。調査区は、東西に延びる細い谷の谷頭付近と北側丘陵の南斜面で調査を実施した。調査区は4か所設定した。調査の結果、飛鳥時代から中世までの遺構・遺物が多量に出土し、西橘遺跡を考える上で重要な成果となった。なかでも、4区にある谷地形の埋立土から出土した土器と木簡は一括資料であり、飛鳥時代の編年を検討するうえで貴重な資料に位置付けられる。調査面積は合計747㎡。

#### 平成29年度

明日香村役場新庁舎の移転に伴う試掘調査である。中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い、平成3・4年度調査地は盛土による造成が行われ、遺構に対する十分な保護層が設けられた。その後、明日香村役場新庁舎の新たな移転先として西橘遺跡平成3年度調査地が選ばれた。これにより、地下遺構の残存深度を確認し、新庁舎建設による地下遺構への影響を検討するため調査を実施した。北側・南側丘陵部及び谷筋に7か所調査区を設定した。調査の結果、北側・南側丘陵部では造成土による保護層が1m以上、谷筋部では約3m以上の保護層が確認できた。一方、北側丘陵部では新たな遺構も認められたが、遺構を完掘し記録保存とした。調査面積は合計500㎡。



図1-1 西橋遺跡周辺の遺跡地図(1:6000)

### 令和2年度

明日香村役場新庁舎建設に伴って発掘調査を実施した。新庁舎は十分な保護層が設けられた谷筋部と遺構が希薄な北側丘陵部に設計された。ただ、貯留槽や地盤改良など一部の工事で切土が生じるところは、記録保存による発掘調査を実施した。調査区は、貯留槽予定地で2か所、新庁舎(議会棟・行政棟)で1か所設定した。貯留槽の発掘では遺構もなく、保護層も十分確保されたが、新庁舎部分では旧トレンチの遺構を再確認するとともに遺構の完掘に努めた。行政棟の地下ではGL-5mで遺構面を確認し、地盤改良による影響は少ないと判断された。調査面積は合計880m<sup>2</sup>。

### 第3節 調査の体制と報告書の作成

#### 調査体制

調査は平成3・4・29年度、令和2年度の4次にわたって明日香村教育委員会が実施した。これらの調査には明日香村文化財保護委員会の指導のもと、奈良国立文化財研究所（現：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、奈良県教育委員会文化財保存課（現：奈良県文化・教育・くらし創造部文化財保存課）、奈良県立橿原考古学研究所の助言を得ながら実施した。各年度における調査体制は以下の通りである。

#### 明日香村教育委員会

##### 〈調査事務局〉

平成3年度		平成4年度	
教 育 長	岡本 清（※）	教 育 長	岡本 清（※）
教 育 次 長	石田 憲彦	教 育 次 長	島田 賢二
文化財保存課長	辻本 佳央	文化財保存課長	米川 友多加
課 長 補 佐	垣内 義隆、北村 憲彦	課 長 補 佐	平井 康友、北村憲彦
課 員	米田 記三子	係 長	森 栄之
課 員	納谷 守幸（※※）	課 員	米田 記三子
	田中 宏明		納谷 守幸（※※） <small>（平成15年12月18日逝去）</small>
			田中 宏明
平成29年度		令和2年度	
教 育 長	田中 祐二（※）	教 育 長	田中 祐二（※）
文化財顧問	木下 正史	文化財顧問	木下 正史
	田辺 征夫		田辺 征夫
文化財課長	相原 嘉之	文化財課長	小池 香津江（奈良県 文化資源活用課併任）
課 長 補 佐	北村 旭	課 長 補 佐	北村 旭
調 整 員	西光 慎治	調 整 員	西光 慎治
	吉川ゆかり	文化財課付主査	高橋 幸治（奈良県研修派遣）
主 査	高橋 幸治（※※）	主 任 技 師	長谷川 透（※※）
主 任 技 師	長谷川 透	主 事	辰巳 俊輔
		事 務 員	沖野 裕大

※調査責任者 ※※調査担当者

##### 〈発掘調査及び整理参加者 平成3・4年度〉

浅山 善清	石田 弘	石田 キヨエ	石田 弘江	井上 勢津子	井村 義男	大鳥 正男
河合 美治	北村 利一	幸田 義隆	嶋田 トシエ	嶋田 弘	杉本 潔	竹上 文子
辰己 宇市郎	辰己 武司	田中 久雄	田中 真一	辻本 定信	寺口 正雄	寺田 幾子
豊田 基予子	西川 義男	西川 ヨシエ	東 ヨシコ	福井 譲吉	藪内 定義	山本 繁雄
山本 繁春	吉田 美智子	米川 寿美子	六條 香子	脇田 久子	尾崎造園	

<発掘調査及び整理参加者 平成29年・令和2年度>

井村 道得 上田 小也香 大谷 隆義 川島 孝雄 小木曾 優佳 鈴木 雄輝 田村 則佳  
辻 茂 辻本 隆茂 中井 久一 中野 正見 西浦 芳昭 福田 誠司 森本 義多加  
山川 聡大 吉川 広司 米川 弘次 明西建設

### 遺物整理作業と報告書の作成

西橋遺跡の調査における出土遺物や調査に伴う図面、写真等については、相原嘉之が中心となって整理し、西光慎治・高橋幸治・長谷川透がこれを補佐した。各年度の調査については、一定の整理を行い、年度概報としてその調査概要を報告している。本報告書作成にあたり、令和3・4年度には出土遺物や検出遺構の再検討及び図面等の記録類の再整理を行い、令和5年度に報告書作成業務を実施した。

遺物整理作業は、東地区第4調査区（E4区）から出土した多量の土器、木簡、木製品について、発掘直後から奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部（当時）に持ち込んで整理作業及び資料の検討が行われた。その後、西橋遺跡において明日香村役場新庁舎が移転・建設されるに伴い、明日香村教育委員会は、これまでの整理及び調査・研究をまとめた『西橋遺跡発掘調査報告書』刊行に向け再整理業務を開始した。この再整理業務は、奈良文化財研究所都城発掘調査部飛鳥・藤原地区による多大なご尽力があつて進めることができた。木簡の保存処理を経た再積読は、平成31年度から令和5年度まで実施した受託研究の成果によるものであり、令和4年度からは木製品の整理及び保存処理もあわせて実施した。木簡と木製品の保存処理は田村朋美氏により進められ、写真撮影は、企画調整部写真室の栗山雅夫氏が担当した。

出土遺物の自然科学分析については、木簡及び木製品の樹種同定を奈良文化財研究所客員研究員（当時）の藤井裕之氏にお願いし、玉稿を賜った。動物骨の鑑定は、奈良文化財研究所の山崎健氏にお願いし、玉稿を賜った。種実の同定については、奈良文化財研究所客員研究員（当時）の上中央子氏のご協力を得た。

### 謝辞

調査を実施するにあたり、橘大字総代をはじめ地元役員の方々、大字の皆様方に多大なるご理解ご協力を賜った。ご尽力を賜った関係各位に感謝の意を表します。

調査期間中、多くの方々のご来跡され、様々な教示、助言を賜った。また、整理作業や遺物分析調査にあたって多くの方々からご尽力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。

泉森皎、伊藤勇輔、井上直夫、猪熊兼勝、岩本圭輔、小澤毅、大脇潔、亀田博、河上邦彦、川越俊一、北村憲彦、木下正史、黒崎直、櫻井雅樹、佐々木好直、島田敏男、立木修、巽淳一郎、辰巳俊輔、鶴見泰寿、寺崎保広、東野治之、中井一夫、西口壽生、橋本裕行、橋本義則、花谷浩、深澤芳樹、藤間温子、松村恵司、宮川伴子、宮原晋一、山岸常人、山本忠尚、奈良国立文化財研究所（現：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）、奈良県教育委員会文化財保存課（現：奈良県教育・文化・くらし創造部文化財保存課）、奈良県立橿原考古学研究所

すべてのご芳名を記すことは叶わなかったが、ご尽力を賜った各位に感謝の意を表します。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

明日香村は奈良盆地の東南部に位置し、村域は南側背後の竜門山系の一部を取り込んでいる。東からは大峰山系の支脈が迫り、竜門山地では竜門岳（904m）を主峰として、北には熊ヶ岳（904m）、経ヶ塚山（889m）、音羽山（819m）が連なり、東には多武峰の御破裂山（619m）、西には高取山（583m）が位置している。これらの山地の狭間では、飛鳥地域より芋峠を越えて吉野へと通じる道が稲淵谷において南淵川が流れ、多武峰へ至る道が通じる細川谷には冬野川が流れている。芋峠を越える道以外にも、高取川沿いの下ッ道から続く巨勢路（紀路）が飛鳥地域を貫いており、これらの幹線道の存在から飛鳥地域は交通の要衝であったことがわかる。西北部では、竜門山地から流れる飛鳥川と高取川による堆積が沖積平野を形成している。さらに明日香村北半では、飛鳥川による堆積で形成された平地が竜門山地から伸びる100m～200mの低い丘陵に囲まれることで、飛鳥盆地という小盆地が形成され、西南部の高取川流域では小さく浅い檜前盆地が形成されている。この竜門山地から伸びている丘陵は飛鳥川・高取川による浸食で主に東部丘陵、中部丘陵、真弓丘陵の3つに分かれている。飛鳥盆地や檜前盆地では、これらの丘陵が樹枝状に伸びることで複雑な地形が形成されている。

### 第2節 歴史的環境

#### 【縄文時代】

飛鳥地域における人類の活動の始まりは縄文時代まで遡ることができる。高取川の支流である檜前川流域の檜前脇田遺跡からは遺構が伴わないものの、河川跡から縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土し、飛鳥川流域では有茎尖頭器と木葉形尖頭器が出土している。縄文時代中期以降の遺跡として、稲淵ムガンダ遺跡、坂田寺下層遺跡、島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、大官大寺下層遺跡等が認められる。稲淵ムガンダ遺跡では、中期から晩期後半の土器や集石遺構が検出されている。

#### 【弥生時代】

弥生時代においても飛鳥川右岸流域において遺構が検出され、島庄遺跡や飛鳥京下層遺跡などで人間の活動痕跡を認めることができる。島庄遺跡では弥生時代中期の多角形プランに基づく竪穴住居が検出されている。また、高取川流域においては、御園アライ遺跡で中期第Ⅲ様式新段階に位置付けられる土器と土器埋納遺構が見つかっている。この遺跡の南側に位置する御園チシアイ遺跡でも弥生土器が検出されていることから、これらの遺跡の周辺にも集落が存在していたと考えられる。

#### 【古墳時代】

飛鳥地域における古墳は前期・中期のものは少ないが、坂田寺下層遺跡や島庄遺跡、飛鳥京下層遺跡、飛鳥水落遺跡、大官大寺下層遺跡等で6世紀前半～後半にかけての竪穴住居等が数棟検出されている。また東橋遺跡や川原寺下層遺跡、甘檜丘東麓遺跡、古宮遺跡、上ノ井手遺跡、山田道下層遺跡等でも竪穴住居のほか、韓式系土器、初期須恵器、滑石製玉類や土坑等が検出されている。さらに飛鳥宮周辺に所在する酒船石遺跡や竹田遺跡などにおいては、円筒埴輪や形象埴輪の破片が出土している。宮殿等の造営に伴う周辺の削平前は、古墳が存在していたと考えられる。冬野川流域では、約200基からなる細川谷古墳群、下流域では都塚古墳等の



1. 西橋遺跡 2. 亀石 3. 川原下ノ茶屋遺跡 4. 小山田古墳 5. 橋寺跡 6. 東橋遺跡 7. 川原寺跡 8. 川原寺裏山遺跡 9. 飛鳥宮跡
10. 飛鳥京跡苑池 11. 甘樫丘東麓遺跡 12. 甘樫丘遺跡群 13. 飛鳥寺西方遺跡 14. 飛鳥寺跡 15. 飛鳥寺瓦窯 16. 飛鳥池工房遺跡
17. 飛鳥東垣外遺跡 18. 飛鳥水落遺跡 19. 石神遺跡 20. 東山カワバリ遺跡 21. 竹田遺跡 22. 小原シウロ遺跡 23. 東山マキド遺跡
24. 八釣・東山古墳群 25. 酒船石遺跡 26. 岡寺跡 27. 島庄遺跡 28. 石舞台古墳 29. 打上古墳 30. 都塚古墳 31. 坂田寺跡
32. 飛鳥稲淵宮殿跡 33. 塚本古墳 34. 稲淵ムカダ遺跡 35. キトラ古墳 36. 稲村山古墳 37. 観鏡寺遺跡 38. 坂ノ山古墳群
39. 檜前大田遺跡 40. 檜隈寺跡 41. 檜前門田遺跡 42. 栗原寺跡 43. 檜前上山遺跡 44. 檜前タバタ遺跡 45. 御園アライ遺跡
46. 御園チシヤイ遺跡 47. 塚穴古墳 (文武天皇陵) 48. 高松塚古墳 49. 中尾山古墳 50. 岩屋山古墳 51. 平田キタガワ古墳
52. 梅山古墳 (欽明天皇陵) 53. カナツカ古墳 54. 鬼の俣・雪隠古墳 55. 野口王墓古墳 (天武・持統天皇陵) 56. 定林寺跡 57. 菖蒲池古墳
58. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 59. 五条野向イ古墳 60. 五条野城脇古墳 61. 五条野内垣内古墳 62. 植山古墳 63. 五条野丸山古墳
64. 軽寺跡 65. 孝元天皇陵 66. 石川精舎 67. 和田廃寺 68. 田中廃寺 69. 本薬師寺跡 70. 豊浦寺跡 71. 雷丘 72. 雷丘東方遺跡
73. 雷丘北方遺跡 74. 紀寺跡 75. 大官大寺跡 76. 奥山久米寺跡 77. 奥山リウゲ遺跡 78. 上の井手遺跡 79. 山田寺跡

図2-1 飛鳥地域周辺遺跡分布図 (1:25000)

大型横穴式石室を有する古墳も存在する。群内には緑泥石片岩の箱式石棺を内蔵した堂ノ前塚古墳や戒成組田古墳、穹窿状横穴式石室を有しミニチュア炊飯具等が出土した上5号墳、石材の一部に切石を用いた打上古墳など特徴のある古墳が多く分布している。都塚古墳では、墳丘が多段築を呈することが判明しており、朝鮮半島との交流が窺えることから、飛鳥前史を考える上で重要な位置を占める。曾我川の支流である前川流域では真弓鐘子塚古墳や与楽古墳群、真弓スズミ1号墳等が造営され、ミニチュア炊飯具も確認されている。真弓鐘子塚古墳は玄室の北側に奥室を有し、玄室床面積は石舞台古墳をしのぐ規模であり、石室内からはミニチュア炊飯具をはじめ銀象嵌刀装具、玉類、金銅製馬具、そして獣面を模った獣面飾金具などが出土している。与楽古墳群は貝吹山（標高210m）の南側斜面に数百基の古墳が展開する群集墳である。また高取川流域では方格規矩鏡や四獣形鏡等が出土した向山1号墳をはじめ、ミニチュア炊飯具や釵子出土した坂ノ山古墳群や阿部山遺跡群、銀製釧などが出土した稲村山古墳などが点在している。隣接している観覚寺遺跡や清水谷遺跡、薩摩遺跡、檜前大田遺跡からは大壁建物やオンドル遺構、方形池が検出されるなど檜隈地域周辺には多くの渡来系氏族が蕃居していたことが窺える。

#### 【飛鳥時代】

飛鳥時代になると、飛鳥盆地において宮殿や多くの古代寺院が造営された。飛鳥川右岸の段丘上の飛鳥宮跡では、飛鳥岡本宮、飛鳥板蓋宮、後飛鳥岡本宮、飛鳥浄御原宮が同地に築かれていった。宮殿の周囲には、亀形石造物等の存在から斉明朝の祭祀遺構とされ、酒船石を中心に砂岩を使用した石垣の遺構がめぐる酒船石遺跡や、多くの木簡や富本銭、金属製品及びその鋳型の出土により総合工房と考えられている飛鳥池工房遺跡がある。

古代寺院では、蘇我氏の氏寺とされ、初めて本格的な伽藍配置を備えた飛鳥寺をはじめ、山田寺、豊浦寺、坂田寺、奥山久米寺等の氏寺が建立されている。甘樫丘東麓遺跡では掘立柱建物群が検出されており、蘇我氏等の氏族の邸宅との関連性が指摘されている。さらに甘樫丘の南端では、榛原石を段状に積み上げた遺構や大型横穴式石室の石材を抜き取った痕跡が認められる小山田古墳がある。

高取川流域の檜前盆地や真弓丘陵では、多くの終末期古墳が築かれるようになる。檜前盆地では、四神像や男子・女子群像、星宿図といった極彩色壁画が描かれている高松塚古墳や、四神・十二支像が描かれているキトラ古墳が築かれている。檜前盆地の北側には梅山古墳、カナヅカ古墳、鬼の俎・雪隠古墳、野口王墓古墳が東西一直線に並んで造営されている。真弓丘陵では精美的な横穴式石室を有した岩屋山古墳をはじめ、八角形の墳丘と凝灰岩の巨石を割り貫いた石槨が特徴である牽牛子塚古墳や隣接する石英閃緑岩を割り貫いた石槨を有する越塚御門古墳などが存在している。南方には高松塚古墳やキトラ古墳と類似した石槨を有するマルコ山古墳が位置する。マルコ山古墳に隣接して磚積石室墳のカヅマヤマ古墳や平瓦を棺台等に用いた真弓テラノマエ古墳が点在している。

#### 【奈良時代以降】

藤原京、そして平城京へと政治の中心地が遷ると、飛鳥地域では主だった遺構は認められなくなる。宮殿や寺院はそれぞれ維持管理されていたようで、雷丘東方遺跡では井戸枠の年輪年代によって小治田宮が奈良時代から平安時代まで存続していたことが判明している。平安時代には『興福寺雑役免田等坪付帳』の記述から、阿部山が興福寺領庄園となっていたことが明らかとなっている。また阿部山遺跡群では平安時代の柵列や11～13世紀代にかけての白磁碗を使



用した火葬墓や一辺約4mの墳丘をもつ木棺墓が検出されており、棺内から龍泉窯系青磁碗も確認されている。

中世になると落雷などが原因で飛鳥寺や山田寺が焼失・廃絶したことにより、飛鳥地域の景観は大きく変化していくことになる。南北朝時代には越智氏が台頭し、飛鳥地域はその勢力圏（越智郷）の一部となった。そして越智城、高取城が構えられ、砦として貝吹城や佐田城が築かれた。高取城は越智郷を豊臣秀吉から与えられた本多氏が高取藩の居城とし、植村氏が受け継いで幕末まで存続した。

近世では周辺に西国七番札所である岡寺の門前町がある島庄遺跡において、門前屋敷の一角と考えられる遺構が検出されている。『大和名所図会』や『西国三十三所名所図会』等には飛鳥地域の旧跡が記され、観光名所として広く知られていたことがわかる。村内各所には、伊勢や吉野などの寺社を往来する旅人の案内として分岐点に道標が設置されている。西国七番札所である岡寺の門前町も賑わいをみせ、本居宣長も岡の薬屋で一夜を過ごしており、今日もなお古い町並みは往時を偲ばせてくれる。 (辰巳俊輔)

#### 【参考文献】

相原嘉之・光谷拓実2002「小治田の井戸－井戸枠の年輪年代と出土土器－」『明日香村文化財調査研究紀要 第2号』明日香村教育委員会

飛鳥資料館1981『飛鳥時代の古墳』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録 第8冊

飛鳥資料館1983『渡来人の寺－坂田寺と檜隈寺－』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録 第10冊

飛鳥資料館2000『あすかの石造物』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館図録 第35冊

飛鳥資料館2002『あすか以前』奈良文化財研究所飛鳥資料館図録 第38冊

明日香村教育委員会1977『史跡中尾山古墳環境整備事業報告書』

明日香村教育委員会1978「真弓マルコ山古墳」リーフレット

明日香村教育委員会1980『奈良県高市郡明日香村越 岩屋山古墳』

明日香村教育委員会1987『史跡牽牛子塚古墳－環境整備事業に伴う発掘調査－』

明日香村教育委員会1988『雷丘東方遺跡第3次発掘調査概報』

明日香村教育委員会1988「桧前・脇田遺跡」『明日香村遺跡調査概報 昭和62年度』

明日香村教育委員会1989「奥山・リウゲ遺跡」『明日香村遺跡調査概報 平成元年度』

明日香村教育委員会1991「小原地内の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成2年度』

明日香村教育委員会1992「飛鳥・東山地区での遺跡」『明日香村遺跡調査概報 平成3年度』

明日香村教育委員会1993「酒船石遺跡第1次」『明日香村遺跡調査概報 平成4年度』

明日香村教育委員会1994「酒船石遺跡第2次」『明日香村遺跡調査概報 平成5年度』

明日香村教育委員会1996「酒船石遺跡第3次・第4次・第5次」『明日香村遺跡調査概報 平成6年度』

明日香村教育委員会1996「雷内畑遺跡」『明日香村遺跡調査概報 平成6年度』

明日香村教育委員会1997「御園アライ遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成7年度』

明日香村教育委員会1997「カナヅカ古墳（第1次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成7年度』

明日香村教育委員会1998「カナヅカ古墳（第2次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成8年度』

明日香村教育委員会1998「桧前門田遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成8年度』

明日香村教育委員会2001「八釣・東山古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成11年度』

## 歴史的環境

- 明日香村教育委員会2004「細川谷古墳群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成14年度』
- 明日香村教育委員会2005・2006「島庄遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成15～17年度』
- 明日香村教育委員会2006「マルコ山古墳（第4次）範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成16年度』
- 明日香村教育委員会2006「御園アリエ遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成16年度』
- 明日香村教育委員会2006『酒船石遺跡発掘調査報告書一付、飛鳥東垣内遺跡・飛鳥宮ノ下遺跡一』明日香村文化財調査報告書 第4集
- 明日香村教育委員会2007「竹田遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成18年度』
- 明日香村教育委員会2007「真弓籬子塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成18年度』
- 明日香村教育委員会2007「真弓遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成18年度』
- 明日香村教育委員会2007『カヅマヤマ古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第5集
- 明日香村教育委員会2008『島庄遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第6集
- 明日香村教育委員会2009「阿部山遺跡群の調査」『明日香村発掘調査報告会資料』
- 明日香村教育委員会2009「檜前遺跡群の調査」『明日香村発掘調査報告会資料』
- 明日香村教育委員会2009「細川谷古墳群の調査」『明日香村発掘調査報告会資料』
- 明日香村教育委員会2009「竹田遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』
- 明日香村教育委員会2009「島庄遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』
- 明日香村教育委員会2009「仮称キトラ公園内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』
- 明日香村教育委員会2009「真弓籬子塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』
- 明日香村教育委員会2009「真弓遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成19年度』
- 明日香村教育委員会2010「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会2010「島庄遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会2010「阪田遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会2010「仮称キトラ公園内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会2010「阿部山遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成20年度』
- 明日香村教育委員会2010『真弓籬子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第7集
- 明日香村教育委員会2011「阪田遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「檜前遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「牽牛子塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「仮称キトラ公園内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2011「真弓テラノマエ古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成21年度』
- 明日香村教育委員会2012「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012「川原寺裏山遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012「檜前遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012「仮称キトラ公園内遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012「牽牛子塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成22年度』
- 明日香村教育委員会2012『竹田遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第8集
- 明日香村教育委員会2013『キトラ公園内遺跡発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第9集

- 明日香村教育委員会2013『牽牛子塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書 第10集
- 明日香村教育委員会2013「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査報告」『明日香村遺跡調査概報 平成23年度』
- 明日香村教育委員会2013「島庄遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成23年度』
- 明日香村教育委員会2013「越塚御門古墳の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成23年度』
- 明日香村教育委員会2014「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査報告」『明日香村遺跡調査概報 平成24年度』
- 明日香村教育委員会2014「島庄遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成24年度』
- 明日香村教育委員会2014「史跡牽牛子塚古墳応急保護処理」『明日香村遺跡調査概報 平成24年度』
- 明日香村教育委員会2014「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成24年度』
- 明日香村教育委員会2015「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査報告」『明日香村遺跡調査概報 平成25年度』
- 明日香村教育委員会2015「阿部山遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 平成25年度』
- 明日香村教育委員会2015「御園遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成25年度』
- 明日香村教育委員会2015「都塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成25年度』
- 明日香村教育委員会2016「牽牛子塚古墳発掘調査報告書Ⅱ」明日香村文化財調査報告書 第11集
- 明日香村教育委員会2016「都塚古墳発掘調査報告書」明日香村文化財調査報告書 第12集
- 明日香村教育委員会2016「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成26年度』
- 明日香村教育委員会2016「都塚古墳範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成26年度』
- 明日香村教育委員会2017「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成27年度』
- 明日香村教育委員会2017「牽牛子塚古墳発掘調査報告書Ⅲ」明日香村文化財調査報告書 第13集
- 明日香村教育委員会2017「牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査」『明日香村遺跡調査概報 平成27年度』
- 明日香村教育委員会2018「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成28年度』
- 明日香村教育委員会2018「御園遺跡群範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成28年度』
- 明日香村教育委員会2018「牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査」『明日香村遺跡調査概報 平成28年度』
- 明日香村教育委員会2019「飛鳥寺西方遺跡範囲確認調査」『明日香村遺跡調査概報 平成29年度』
- 明日香村教育委員会2020「飛鳥寺西方遺跡発掘調査報告書」明日香村文化財調査報告書 第14集
- 明日香村教育委員会2020「牽牛子塚古墳等整備事業に伴う発掘調査」『明日香村遺跡調査概報 平成30年度』
- 明日香村教育委員会2021「史跡酒船石遺跡応急対策整備事業報告書」明日香村文化財調査報告書 第15集
- 明日香村教育委員会2023「甘樫丘遺跡群の調査」『明日香村遺跡調査概報 令和3年度』
- 明日香村史刊行会1974『明日香村史 上』
- 明日香村史刊行会2006『続明日香村史 上』
- 安達厚三・木下正史1974「飛鳥・藤原京域出土の古式土師器」『考古学雑誌60-2』日本考古学会
- 石田茂作1936『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会
- 橿原市千塚資料館1982『橿原の飛鳥・白鳳時代寺院』橿原市千塚資料館企画展図録
- 橿原市千塚資料館2001「植山古墳の調査」『かしはらの歴史をさぐる』9 橿原市千塚資料館企画展図録
- 関西大学考古学研究室1968「奈良県明日香村阪田都塚古墳発掘調査報告」『関西大学考古学研究年報二』
- 関西大学考古学研究室1984「キトラ古墳・吹上塚の調査」『関西大学考古学研究紀要4』
- 関西大学考古学研究室1987「稲淵ムカンダ遺跡発掘調査概報」『関西大学考古学研究紀要5』
- キトラ古墳学術調査団1999『キトラ古墳学術調査報告書』明日香村発掘調査報告書 第3集 明日香村教育委員会
- 京都帝國大學1937『大和島庄石舞臺の巨石古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第14冊
- 宮内庁書陵部1994「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要 第45号』
- 宮内庁書陵部1999「欽明天皇 檜隈坂合陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要 第50号』

## 歴史的環境

- 西光慎治2000「飛鳥地域の地域史研究（1） 檜隈坂合陵・陪冢カナヅカ古墳の覚書」『明日香村文化財調査研究紀要』創刊号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2001「飛鳥地域の地域史研究（2） 石上山石」『花園大学考古学研究論叢』花園大学考古学研究室20周年記念論集刊行会
- 西光慎治2002「飛鳥地域の地域史研究（3） 今城谷の合葬墓」『明日香村文化財調査研究紀要』第2号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2003「飛鳥地域の地域史研究（4） 細川谷古墳群・堂ノ前塚古墳誌」『明日香村文化財調査研究紀要』第3号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2004「飛鳥地域の地域史研究（5） 結晶片岩使用古墳研究序説」『明日香村文化財調査研究紀要』第4号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2005「飛鳥地域の地域史研究（6） 礎石来歴」『飛鳥文化財論攷』 納谷守幸氏追悼論文集刊行会
- 西光慎治2007「石舞台古墳測量調査報告」「打上古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅱ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第6号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2011「牽牛子塚古墳・越塚御門古墳の調査成果－律令国家形成期の大王墓の実像－」『日本考古学』第32号 日本考古学協会
- 西光慎治2015「檜隈大内陵の埋葬施設」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念献呈論文集刊行会
- 西光慎治2017「飛鳥地域の地域史研究（7） 律令国家形成期における棺台の様相」『明日香村文化財調査研究紀要』第16号 明日香村教育委員会
- 西光慎治2012「真弓テラノマエ古墳の研究」『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・松谷久史2006「カヅマヤマ古墳測量調査報告」「庚申塚古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の終末期古墳測量調査報告Ⅰ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第5号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2009「都塚古墳測量調査報告」「牽牛子塚古墳測量調査報告」「真弓テラノマエ古墳踏査報告」「野口王墓古墳の凝灰岩切石」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅲ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第8号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2010「中尾山古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅳ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第9号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2011「岩屋山古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅴ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第10号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2012「石舞台古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥地域の後・終末期古墳測量調査報告Ⅵ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第11号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2013「カナヅカ古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥の後・終末期古墳測量調査報告Ⅶ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第12号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2014「神明神社古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥の後・終末期古墳測量調査報告Ⅷ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第13号 明日香村教育委員会
- 西光慎治・辰巳俊輔2015「塚本古墳測量調査報告」（「王陵の地域史研究－飛鳥の後・終末期古墳測量調査報告Ⅸ－」所収）『明日香村文化財調査研究紀要』第14号 明日香村教育委員会
- 島本 一1937「稲村山古墳について」『考古学雑誌』27-1 考古學會
- 白石太一郎1978・関川尚功・大竹弘之「橿原市小谷古墳の測量調査」『青陵』第39号奈良県立橿原考古学研究所附属博物館彙報
- 高市郡役所1923『高市郡古墳誌』
- 高橋誠一2006「歴史地理学よりみた明日香村」『続明日香村史』明日香村高取町教育委員会1987『坂ノ山古墳群』高取町文化財調査報告 第6冊
- 高取町教育委員会1998『佐田遺跡群Ⅱ』高取町文化財調査報告 第19冊

- 高取町教育委員会2005『観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅰ』高取町文化財調査報告 第22冊
- 高取町教育委員会2006『観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ』高取町文化財調査報告 第31冊
- 高取町教育委員会2006『寺崎白壁塚古墳』高取町文化財調査報告 第33冊
- 高取町教育委員会2007『観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅲ』高取町文化財調査報告 第35冊
- 高取町教育委員会2008『観覚寺遺跡発掘調査報告書Ⅳ』高取町文化財調査報告 第37冊
- 高取町教育委員会2009『薩摩遺跡第9次調査 現地説明会資料』
- 高取町教育委員会2011『薩摩遺跡発掘調査報告書(第9次・第11次調査)』高取町文化財調査報告 第38冊
- 高取町教育委員会2012『与楽カンジョ古墳・与楽籬子塚古墳発掘調査報告書』高取町文化財調査報告書 第39冊
- 辰巳俊輔2015「八角墳の再検討」『明日香村文化財調査研究紀要』第14号 明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2016「飛鳥の始祖王墓－梅山古墳の歴史的意義－」『明日香村文化財調査研究紀要』第15号 明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2017「細川谷古墳群の基礎的研究－『奈良縣高市郡古墳誌』の活用と展望－」『明日香村文化財調査研究紀要』第16号  
明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2018「飛鳥地域における古墳研究の軌跡(上)」『明日香村文化財調査研究紀要』第17号 明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2019「飛鳥地域における古墳研究の軌跡(中)」『明日香村文化財調査研究紀要』第18号 明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2021「幕末・維新期における檜隈安古岡上陵の実像」『明日香村文化財調査研究紀要』第20号 明日香村教育委員会
- 辰巳俊輔2022「飛鳥時代における墓道改修の一樣相」『明日香村文化財調査研究紀要』第22号 明日香村教育委員会
- 奈良県教育委員会1974「第42次調査(都宮に先行する遺構)」『飛鳥京跡－昭和48年度発掘調査概報』
- 奈良県教育委員会1974「明日香村打上塚古墳」『奈良県の主要古墳Ⅱ』緑地保全と古墳保護に関する調査報告二
- 奈良県史編集委員会1989『奈良県史3考古』名著出版
- 奈良県立橿原考古学研究所1961『橿原』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第17冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1969『藤原宮』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第25冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1971『飛鳥京跡一』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第26冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1972『壁画古墳 高松塚 中間報告』
- 奈良県立橿原考古学研究所1976『石舞台古墳及び周辺の発掘調査概要』
- 奈良県立橿原考古学研究所1980『飛鳥京跡二』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第40冊
- 奈良県立橿原考古学研究所1980「飛鳥京跡第71～73次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1982「飛鳥京跡第81～83次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1981年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1983「明日香村塚本古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1987『与楽古墳群』奈良県文化財調査報告書 第56集
- 奈良県立橿原考古学研究所1989「明日香村飛鳥京跡－島庄遺跡第20～22次および飛鳥京跡第144次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1988年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1989「島庄遺跡22次発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報1988年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1990「明日香村飛鳥京跡発掘調査概報－第111次～113次および平田キタガワ遺跡の調査－」『奈良県遺跡調査概報1987年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1993「明日香村塚本古墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1992年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1997「島庄遺跡第25次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1996年度』
- 奈良県立橿原考古学研究所1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』奈良県立橿原考古学研究所創設60周年記念出版事業 由良大和古代文化研究協会
- 奈良県立橿原考古学研究所・高取町教育委員会1999『東明神古墳の研究』
- 奈良県立橿原考古学研究所1999『橘寺』奈良文化財調査報告 第80集

歴史的環境

奈良県立橿原考古学研究所2002『飛鳥京跡苑池遺構調査概報』

奈良県立橿原考古学研究所2003『奈良県高市郡明日香村－細川谷古墳群－上5号墳』奈良県文化財調査報告書 第92集

奈良県立橿原考古学研究所2005『ホラント遺跡－ふるさと農道緊急整備事業高市地区に伴う発掘調査－』奈良県文化財調査報告書 第112集

奈良県立橿原考古学研究所2005「飛鳥京跡2003・2004年（151次・152次・154次調査）」『奈良県遺跡調査概報2004年度』

奈良県立橿原考古学研究所2008『飛鳥京跡Ⅲ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第102冊

奈良県立橿原考古学研究所2011『飛鳥京跡Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第108冊

奈良県立橿原考古学研究所2012『史跡・名勝飛鳥京跡苑池（1）－飛鳥京跡Ⅴ－』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第111冊

奈良県立橿原考古学研究所2015『飛鳥京跡Ⅵ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告 第117冊

奈良国立文化財研究所1959『飛鳥寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 第5冊

奈良国立文化財研究所1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報 第9冊

奈良国立文化財研究所1978「大官大寺下層遺跡の縄文土器」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報8』

奈良国立文化財研究所1991「山田道第2・3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報21』

奈良国立文化財研究所1992「山田道第4次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』

奈良国立文化財研究所1994「左京十一條三坊（雷丘北方遺跡）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』

奈良国立文化財研究所1995『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ－飛鳥水落遺跡の調査－』

奈良国立文化財研究所1998「飛鳥池遺跡の調査 第84次・第87次」『奈良国立文化財研究所1998－Ⅱ』

奈良国立文化財研究所1999「飛鳥池遺跡の調査 第87次・第93次」『奈良国立文化財研究所年報1999』

奈良文化財研究所2001「水落遺跡の調査－第108-4次」『奈良文化財研究所紀要 2001』

奈良文化財研究所2001「石神遺跡の調査－第110次」『奈良文化財研究所紀要 2001』

奈良文化財研究所2001「吉備池廃寺の調査－第111次」『奈良文化財研究所紀要 2001』

奈良文化財研究所2001「飛鳥池遺跡の調査－第112次」『奈良文化財研究所紀要 2001』

奈良文化財研究所2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報 第63冊

奈良文化財研究所2002「石神遺跡の調査－第116次」『奈良文化財研究所紀要 2002』

奈良文化財研究所2002「石神遺跡の調査－第114-1次」『奈良文化財研究所紀要 2002』

奈良文化財研究所2002「奥山廃寺（奥山久米寺）の調査－第114-8次」『奈良文化財研究所紀要 2002』

奈良文化財研究所2003『宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 金銅製四環壺の調査』

奈良文化財研究所2003『吉備池廃寺発掘調査報告－百済大寺跡－』奈良文化財研究所学報 第68冊

奈良文化財研究所2003「キトラ古墳の調査－飛鳥藤原第126次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2003「飛鳥寺の調査－第119-1次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2003「古宮遺跡の調査－第119-3次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2003「飛鳥寺の調査－第119-4次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2003「山田道の調査－第121次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2003「石神遺跡（第15次）の調査－第122次」『奈良文化財研究所紀要 2003』

奈良文化財研究所2004『川原寺寺域北限の調査 飛鳥藤原第119－5次発掘調査報告』

奈良文化財研究所2004「キトラ古墳の調査－飛鳥藤原第130次」『奈良文化財研究所紀要 2004』

奈良文化財研究所2004「石神遺跡（第16次）の調査－第129次」『奈良文化財研究所紀要 2004』

奈良文化財研究所2004「川原寺寺域北限の調査－第119-5次」『奈良文化財研究所紀要 2004』

- 奈良文化財研究所2004「川原寺の調査－第127-3次」『奈良文化財研究所紀要 2004』
- 奈良文化財研究所2005「豊浦寺の調査－第133-9次」『奈良文化財研究所紀要 2005』
- 奈良文化財研究所2005「石神遺跡（第17次）の調査－第134次」『奈良文化財研究所紀要 2005』
- 奈良文化財研究所2005「高松塚古墳の調査－第137次」『奈良文化財研究所紀要 2005』
- 奈良文化財研究所2006『高松塚古墳』国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討のための平成16年度発掘調査報告
- 奈良文化財研究所2006「川原寺の調査－第133-12次」『奈良文化財研究所紀要 2006』
- 奈良文化財研究所2006「雷丘の調査－第139次」『奈良文化財研究所紀要 2006』
- 奈良文化財研究所2006「石神遺跡（第18次）の調査－第140次」『奈良文化財研究所紀要 2006』
- 奈良文化財研究所2006「甘樫丘東麓遺跡の調査－第141次」『奈良文化財研究所紀要 2006』
- 奈良文化財研究所2007「甘樫丘東麓遺跡の調査－第146次」『奈良文化財研究所紀要 2007』
- 奈良文化財研究所2007「石神遺跡（第18・19次の調査－第140・145次）」『奈良文化財研究所紀要 2007』
- 奈良文化財研究所2007「高松塚古墳の調査－第147次」『奈良文化財研究所紀要 2007』
- 奈良文化財研究所2007「飛鳥寺の調査－第143-6次」『奈良文化財研究所紀要 2007』
- 奈良文化財研究所2009「甘樫丘東麓遺跡の調査－第151・157次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2009「石神遺跡（第21次）の調査－第156次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2009「飛鳥寺の調査－第152-2・152-3次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2009「飛鳥寺南方の調査－第152-5次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2009「高松塚古墳の調査－第154次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2009「檜隈寺周辺の調査－第154次」『奈良文化財研究所紀要 2009』
- 奈良文化財研究所2010「高松塚古墳の調査－第154次」『奈良文化財研究所紀要 2010』
- 奈良文化財研究所2010「甘樫丘東麓遺跡の調査－第157・161次」『奈良文化財研究所紀要 2010』
- 奈良文化財研究所2010「檜隈寺周辺の調査－第159次」『奈良文化財研究所紀要 2011』
- 奈良文化財研究所2011「水落遺跡の調査－第165次」『奈良文化財研究所紀要 2011』
- 奈良文化財研究所2011「甘樫丘東麓遺跡の調査－第161次」『奈良文化財研究所紀要 2011』
- 奈良文化財研究所2011「檜隈寺周辺の調査－第164次」『奈良文化財研究所紀要 2011』
- 奈良文化財研究所2012「水落遺跡の調査－第165次」『奈良文化財研究所紀要 2012』
- 奈良文化財研究所2012「甘樫丘東麓遺跡の調査－第171次」『奈良文化財研究所紀要 2012』
- 奈良文化財研究所2012「キトラ古墳の調査－第170次」『奈良文化財研究所紀要 2012』
- 奈良文化財研究所2012「檜隈寺周辺の調査－第172次」『奈良文化財研究所紀要 2012』
- 奈良文化財研究所2013「甘樫丘東麓遺跡の調査－第171・177次」『奈良文化財研究所紀要 2013』
- 奈良文化財研究所2013「檜隈寺跡の調査－第172次」『奈良文化財研究所紀要 2013』
- 奈良文化財研究所2014「甘樫丘東麓遺跡の調査－第177次」『奈良文化財研究所紀要 2014』
- 奈良文化財研究所2014「キトラ古墳の調査－第173-8次・第178-6次」『奈良文化財研究所紀要 2014』
- 奈良文化財研究所2014「檜隈寺跡の調査－第180次」『奈良文化財研究所紀要 2014』
- 奈良文化財研究所2015「豊浦寺の調査－第181-8次」『奈良文化財研究所紀要 2015』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺周辺の調査－第180次」『奈良文化財研究所紀要 2015』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺周辺の調査－第184次」『奈良文化財研究所紀要 2015』
- 奈良文化財研究所2015「檜隈寺瓦窯の調査－第181-4次」『奈良文化財研究所紀要 2015』
- 奈良文化財研究所2016「奥山麿寺（奥山久米）の調査－第185-10次」『奈良文化財研究所紀要 2016』
- 奈良文化財研究所2016「檜隈寺周辺の調査－第184次」『奈良文化財研究所紀要 2016』

## 歴史的環境

- 奈良文化財研究所2017「山田寺北面大垣の調査－第188－8・188－11次」『奈良文化財研究所紀要 2017』
- 奈良文化財研究所2018「山田寺北面大垣の調査－第188－11次」『奈良文化財研究所紀要 2018』
- 奈良文化財研究所2018「飛鳥寺北方の調査－第188－19次、第192－1・9次」『奈良文化財研究所紀要 2018』
- 奈良文化財研究所2018「山田道の調査－第193・194次」『奈良文化財研究所紀要 2018』
- 奈良文化財研究所2018「大官大寺南方の調査－第196次」『奈良文化財研究所紀要 2018』
- 奈良文化財研究所2019「大官大寺南方の調査－第196・199次」『奈良文化財研究所紀要 2019』
- 奈良文化財研究所2019「飛鳥寺旧境内の調査－第197－1・2・6次」『奈良文化財研究所紀要 2019』
- 奈良文化財研究所2020「飛鳥寺旧境内の調査－第197－6次」『奈良文化財研究所紀要 2020』
- 奈良文化財研究所2020「大官大寺南方の調査－第199・203次」『奈良文化財研究所紀要 2020』
- 奈良文化財研究所2021「大官大寺南方の調査－第203・206次」『奈良文化財研究所紀要 2021』
- 奈良文化財研究所2021「奥山麁寺（奥山久米）の調査－第204－7次」『奈良文化財研究所紀要 2021』
- 奈良文化財研究所2022「大官大寺南方の調査－第206次」『奈良文化財研究所紀要 2022』
- 奈良文化財研究所2022「石神遺跡東方の調査－第209次」『奈良文化財研究所紀要 2022』
- 長谷川透2015「古代檜隈の渡来文化（上）」『明日香村文化財調査研究紀要』第14号 明日香村教育委員会
- 長谷川透2016「古代檜隈の渡来文化（下）」『明日香村文化財調査研究紀要』第15号 明日香村教育委員会
- 長谷川透2019「飛鳥「カナヤケ」考」『明日香村文化財調査研究紀要』第18号 明日香村教育委員会
- 長谷川透2020「飛鳥の石造露盤調査報告」『明日香村文化財調査研究紀要』第19号 明日香村教育委員会
- 長谷川透2022「司馬江漢がみた飛鳥の風景－『吉野紀行』を読む－」『明日香村文化財調査研究紀要』第21号 明日香村教育委員会
- 長谷川透2023「松浦武四郎がみた飛鳥の風景－『己卯記行』を読む－」『明日香村文化財調査研究紀要』第22号 明日香村教育委員会
- 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会2008『特別史跡キトラ古墳発掘調査報告書』
- 文化庁・奈良文化財研究所2011『キトラ古墳壁画フォトマップ資料』
- 文化庁・奈良文化財研究所・奈良県立橿原考古学研究所・明日香村教育委員会2017『特別史跡高松塚古墳発掘調査報告』
- 保井芳太郎1932『大和上代寺院誌』大和史学会
- 大和弥生文化の会1995『大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅰ』



## 第3章 検出遺構

### 第1節 各地区の概要

西橋遺跡は、史跡橋寺旧境内の西側一帯に広がる遺跡で、北は亀石の前の周遊歩道、東は橋寺の推定西面大垣、明日香小学校南辺、西は橋大字と野口大字の境界までの南北約320m、東西約370mの範囲である。遺跡の地形は、遺跡中央に西に開く東西方向の谷が延び、この谷を挟むように北と南に丘陵がある。

西橋遺跡の地区分けは、遺跡の中央に延びる東西の谷を軸にして、谷の深部から北側の丘陵にかけての地区を北区（N区）、谷の深部から南側の丘陵にかけての地区を南区（S区）、谷部の先端である谷頭付近を東区（E区）と設定した。西橋遺跡は、中山間地域農村活性化総合整備事業による圃場整備の前後で大きく地形が改変されているが、谷地形を踏襲した造成であったため、新庁舎に伴う発掘においても同様の地区分けをしている。なお、調査区名は、調査時期が古いものから順に通しで調査区番号を振り、調査区名とした。（納谷守幸・長谷川透）

### 第2節 北地区の遺構

北地区は、橋寺旧境内から西に緩く傾斜した丘陵とその南に位置する谷筋である。この丘陵上に川原寺・橋寺の間を通過する東西道路と史跡川原寺の飛び地である亀石がある。この丘陵上とそこから谷筋に向かって雛壇状に形成された水田に調査区を設定した。平成3年度の調査では13か所、平成29年度の調査では4か所、令和2年度の調査では1か所設定して調査をおこなった。調査面積は計2229.25㎡である。以下、各調査区の概要について記す。

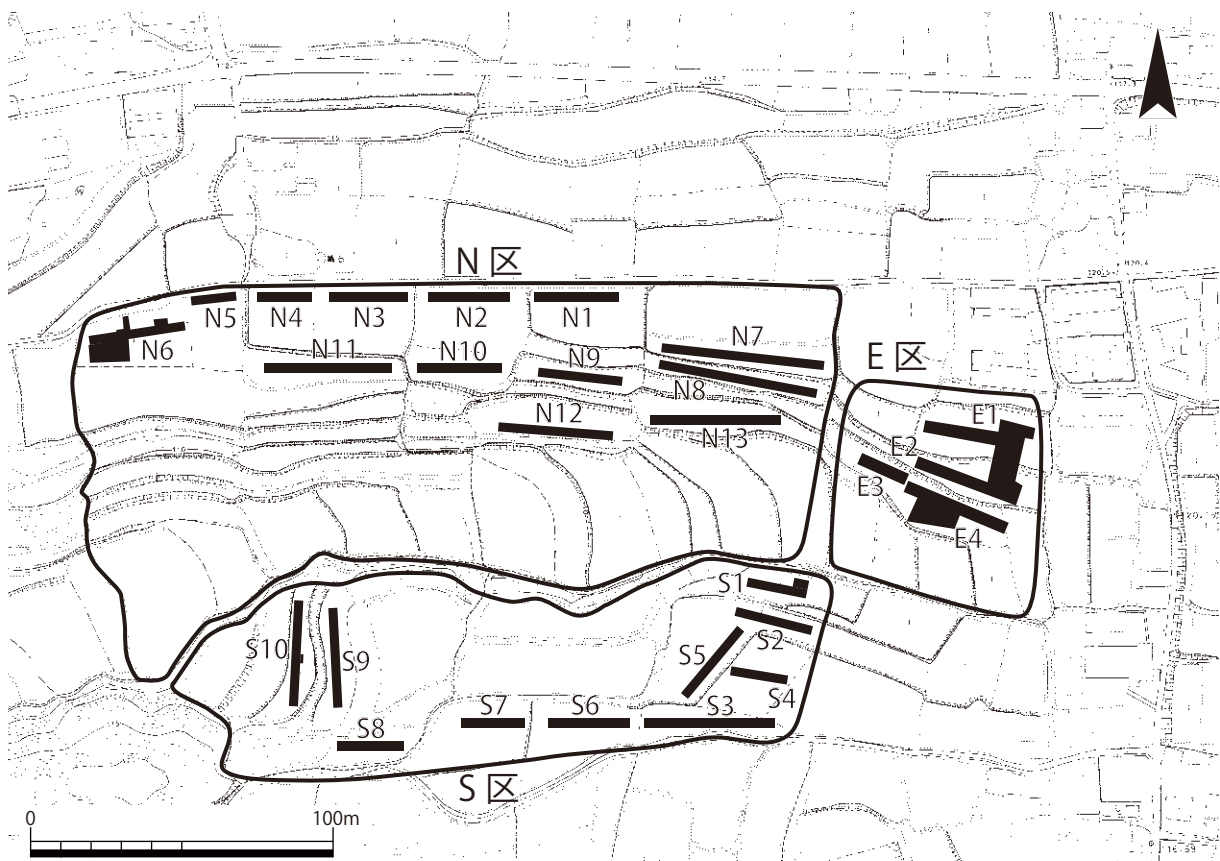


図3-1 西橋遺跡 平成3・4年度調査地区割図（1：2500）

表3-1 西橋遺跡 調査区一覧

地区名	調査年度 調査回数	旧地区名	調査面積 (m <sup>2</sup> )	主な遺構	主な遺物	主な時代	報告書
N1区	平成3年度 1991-5次	1区	84	掘立柱建物カ、小穴、小溝	土師器、須恵器、瓦器、青磁、瓦	中世	A、C
N2区	平成3年度 1991-5次	2区	81	掘立柱建物、土坑、小穴、 小溝	師器、須恵器、瓦器、土釜、白磁	中世	A、C
N3区	平成3年度 1991-5次	3区	78	柱穴、土坑、小溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦	中世	A、C
N4区	平成3年度 1991-5次	4区	54	柱穴、土坑、小溝	土師器、須恵器、瓦器、鞆羽口	中世	A、C
N5区	平成3年度 1991-5次	5区	45	小溝	土師器、須恵器、瓦器	中世	A、C
N6区	平成3年度 1991-5次	6区	174	土坑、南北大溝、掘立柱塀、 小溝	土師器、須恵器、瓦器、鉄製品、 銅製品、砥石	飛鳥、中世	A、C
N7区	平成3年度 1991-5次	7区	162	土坑、小穴、小溝、	土師器、須恵器、瓦器、瓦	中世	C
N8区	平成3年度 1991-5次	8区	159	土坑、溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器	平安、中世	C
N9区	平成3年度 1991-5次	9区	84	柱穴、小溝、落ち込み	土師器、須恵器、瓦器	飛鳥、中世	C
N10区	平成3年度 1991-5次	10区	84	柱穴、土坑、小溝	土師器、須恵器、瓦器	中世	C
N11区	平成3年度 1991-5次	11区	126	石組遺構、土坑、小溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦	中世	C
N12区	平成3年度 1991-5次	12区	114	柱穴、土坑、南北溝、落ち 込み	土師器、須恵器、瓦器、瓦	飛鳥、中世	C
N13区	平成3年度 1991-5次	22区	129	柱穴、土坑、溝	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器	飛鳥、平安、中世	C
N14区	平成29年度 2017-4次	5区	125	掘立柱建物・塀、土坑、溝、 小穴、落ち込み	土師器、須恵器、瓦器、石材	飛鳥、中世	E
N15区	平成29年度 2017-4次	3区	35	—	なし	—	E
N16区	平成29年度 2017-4次	4区	55	—	なし	—	E
N17区	平成29年度 2017-4次	2区	60	—	なし	—	E
N18区	令和2年度 2020-2次	3区	580	柱穴、土坑、南北溝、東西 溝	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、 瓦、石材	飛鳥～中世	F
S1区	平成3年度 1991-5次	21区	75	竪穴建物、小溝	土師器、須恵器	古墳、中世	A、C
S2区	平成3年度 1991-5次	23区	78	小穴	土師器、須恵器、瓦器	中世	A、C
S3区	平成3年度 1991-5次	13区	130	土坑、溝	土師器、須恵器、瓦器、白磁	古墳、中世	A、C
S4区	平成3年度 1991-5次	14区	57	小穴、小溝	土師器、須恵器、瓦器	中世	A、C
S5区	平成3年度 1991-5次	15区	87	小穴、小溝	土師器、須恵器、瓦器	中世	A、C
S6区	平成3年度 1991-5次	16区	81	柱穴、小溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦	中世	A、C
S7区	平成3年度 1991-5次	17区	63	溝、谷の落ち込み	土師器、須恵器、瓦器、瓦	古墳、中世	A、C
S8区	平成3年度 1991-5次	18区	66	小穴、小溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦	中世	A、C
S9区	平成3年度 1991-5次	19区	99	焼土坑、谷の落ち込み	土師器、須恵器、瓦器、瓦	古墳、中世	A、C
S10区	平成3年度 1991-5次	20区	108	焼土坑、谷の落ち込み	土師器、須恵器、瓦器、瓦	古墳、中世	A、C
S11区	平成29年度 2017-1次	1区	150	掘立柱建物、土坑、溝	土師器、須恵器、瓦器、瓦、玉類	古墳、中世	D
S12区	平成29年度 2017-1次	2区	20	—	なし	—	D
S13区	平成29年度 2017-4次	1区	55	—	なし	—	E
S14区	令和2年度 2020-2次	2区	150	—	なし	—	F
S15区	令和2年度 2020-2次	1区	150	—	なし	—	F
E1区	平成4年度 1993-3次	橋1区	293	掘立柱建物、柱穴、土坑、 溝	土師器、須恵器、瓦器、	飛鳥、中世	B、C
E2区	平成4年度 1993-3次	橋2区	145	掘立柱建物、掘立柱塀、柱 穴、井戸、石敷、溝	土師器、須恵器、緑釉・灰釉陶器、 黒色土器、瓦器、瓦、銭貨、銅製 品	飛鳥～中世	B、C
E3区	平成4年度 1993-3次	橋3区	68	南北溝			B、C
E4区	平成4年度 1993-3次	橋4区	241	谷地形	土師器、須恵器、瓦、木製品、木簡、 石材	飛鳥	B、C

所収報告書

- A. 納谷守幸 1992 「(2) 中山間地域農業基盤整備事業に先立つ試掘調査(亀石南遺跡)」「明日香村遺跡調査概報 平成3年度」明日香村教育委員会  
 B. 納谷守幸 1993 「(5) 中山間地域農業基盤整備事業に先立つ調査(西橋地区)」「明日香村遺跡調査概報 平成4年度」明日香村教育委員会  
 C. 納谷守幸ほか 1997 「西橋遺跡発掘調査報告書 明日香村中山間地域農業基盤整備事業に伴う調査」明日香村教育委員会  
 D. 高橋幸治 2019 「(2) 2017-1次 西橋遺跡の調査」「明日香村遺跡調査概報 平成29年度」明日香村教育委員会  
 E. 高橋幸治 2019 「(3) 2017-4次 西橋遺跡の調査」「明日香村遺跡調査概報 平成29年度」明日香村教育委員会  
 F. 長谷川透 2022 「(2) 2022-2次 西橋遺跡の調査」「明日香村遺跡調査概報 令和2年度」明日香村教育委員会

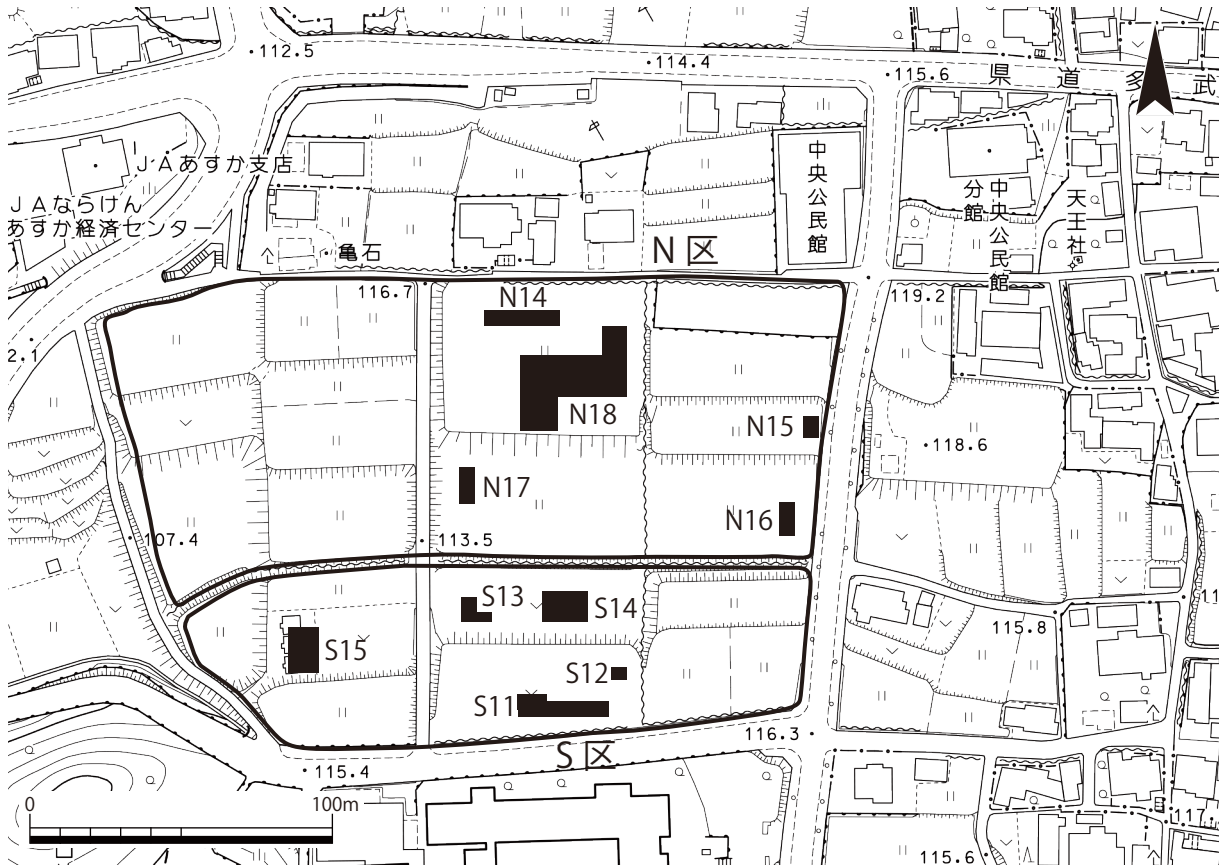


図3-2 西橋遺跡 平成29・令和2年度調査地区割図 (1:2500)

**第1調査区 (N1区)**

丘陵上で最も標高が高い調査区。東西28m、南北3mの調査区を設定し、84㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、黄灰色土、灰褐色土、山土混じり黄褐色土、地山である黄褐色山土(花崗岩風化土)の順で堆積する。調査区東半部ではGL-0.2m(標高116.7m)で地山となるが、西半部ではGL-0.7m(標高116.2m)で地山を確認し、地山面は西に向かって緩く傾斜している。地山上面で遺構検出を行い、柱穴(掘立柱建物SB1011)、小穴、小溝を検出した。柱穴は掘立柱建物か柵の一部とみられるほか、小穴が多数あり小規模な建物跡があったとみられる。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、青磁、瓦が少量出土した。

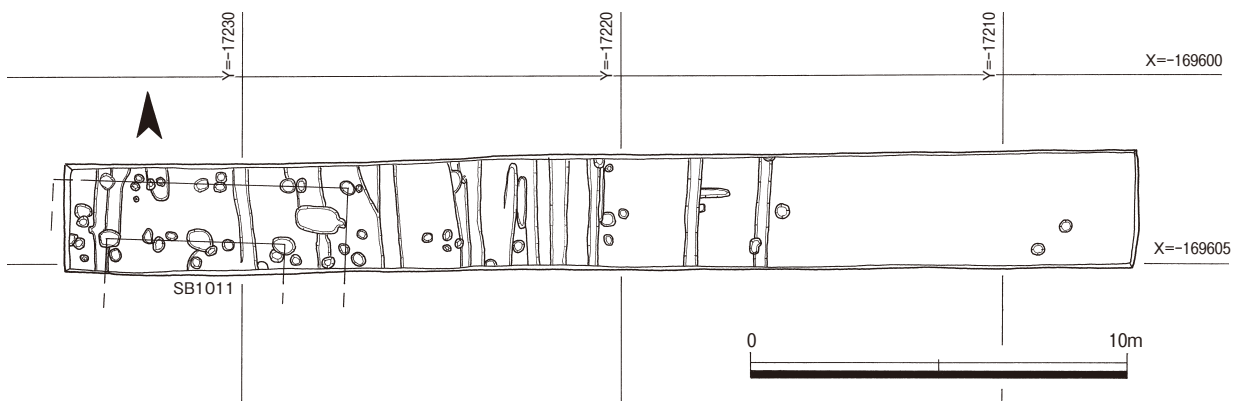


図3-3 第1調査区 (N1区) 遺構平面図 (S = 1/200)

## 第2調査区（N2区）

1区の西側の水田に東西27m、南北3mの調査区を設定し、81㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、黄褐色土、灰褐色土、茶褐色土、暗茶褐色土、暗灰褐色土の順に堆積し、GL-0.25~0.45m（標高115.6~115.8m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山面は東に向かって緩く傾斜している。遺構の検出は地山上面で行い、掘立柱建物（掘立柱建物SB1021・SB1022）、土坑、小穴、小溝を検出した。掘立柱建物は2棟あり、南北棟建物が並び立つ。この内、東側の建物の柱掘形から瓦器が出土した。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、土釜、白磁が出土した。

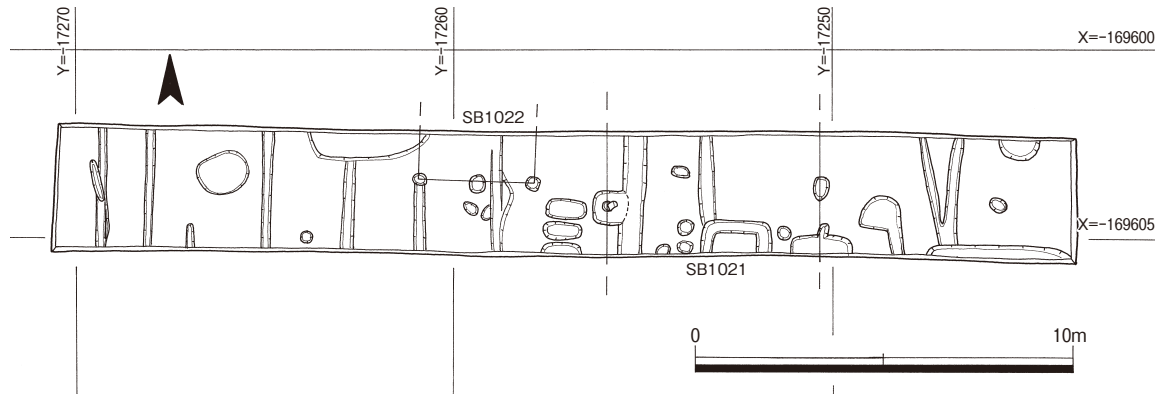


図3-4 第2調査区（N2区）遺構平面図（S = 1/200）

## 第3調査区（N3区）

2区の西側の水田で亀石に南接する調査区。東西26m、南北3mの調査区を設定し、78㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、灰褐色土、暗褐色土の順に堆積し、GL-0.3~0.55m（標高115.32~115.47m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、土坑、小溝を検出した。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が少量出土した。

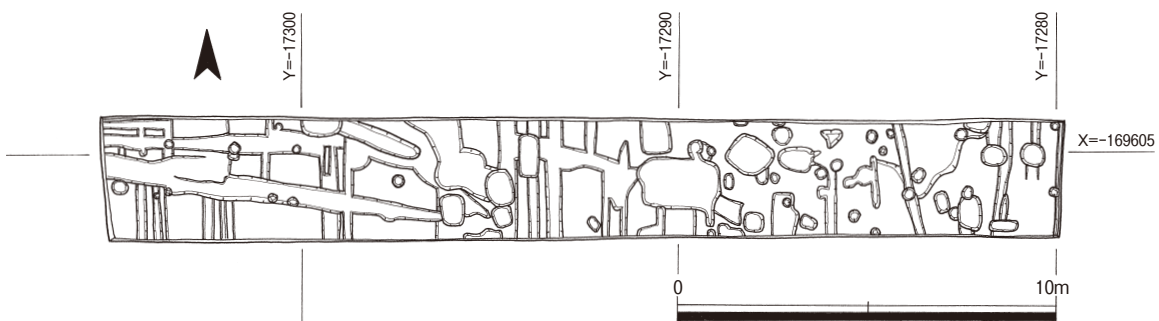


図3-5 第3調査区（N3区）遺構平面図（S = 1/200）

## 第4調査区（N4区）

3区の西側の水田で亀石に南接する調査区。東西18m、南北3mの調査区を設定し、54㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗褐色土の順に堆積し、GL-0.2~0.5m（標高114.8~115.1m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、土坑、小溝を検出した。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、轆羽口が出土した。

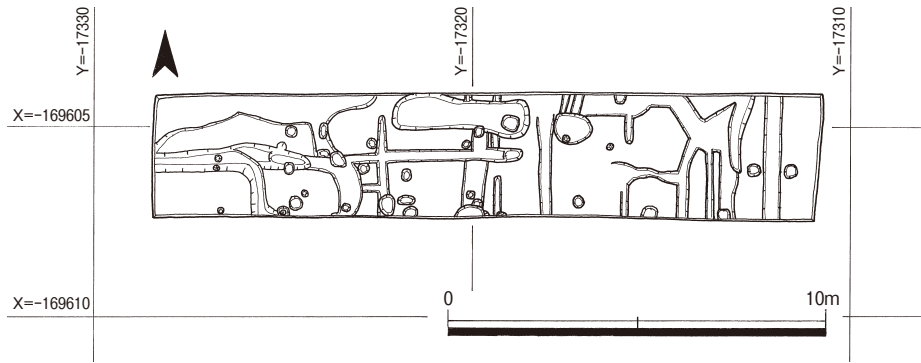


図3-6 第4調査区 (N4区) 遺構平面図 (S = 1/200)

### 第5調査区 (N5区)

4区の西側の水田に東西15m、南北3mの調査区を設定し、45㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、暗褐色土の順に堆積し、GL-0.3m (標高114.1m) で黄褐色山土 (花崗岩風化土) の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、小溝を検出したのみである。遺構は水田耕作に伴うもので、時期はいずれも中世である。遺物は、土師器、須恵器、瓦器が少量出土した。

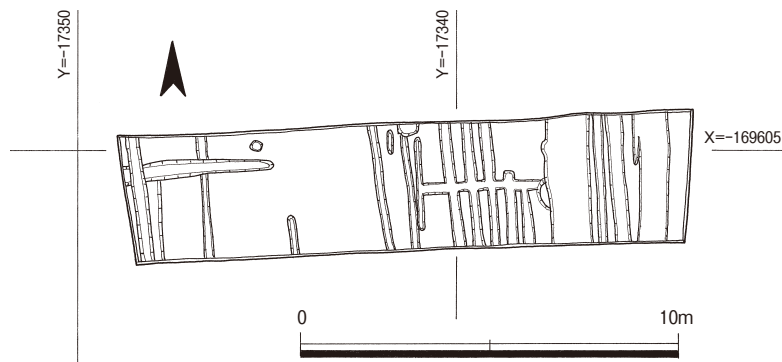


図3-7 第5調査区 (N5区) 遺構平面図 (S = 1/200)

### 第6調査区 (N6区)

5区の西側の水田に東西32㎡、南北3mの96㎡を対象に調査を行い、さらに調査区北側に19.25㎡と南側に58㎡拡張し、西側にサブトレ1㎡を追加して合計174.25㎡調査した。調査区の層序は、上から耕土、床土の直下、GL-0.2m (標高113.35~113.53m) で黄褐色山土 (花崗岩風化土) の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、飛鳥時代後半の土坑1基 (SK1061) と南北大溝1条 (SD1062) のほか、掘立柱塀1条 (SA1063)、小溝を検出した。遺構の時期は、飛鳥時代と中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、鉄製品、銅製品、砥石が出土した。

### 第7調査区 (N7区)

N区の東端にあって明日香村中央公民館駐車場の南側に位置する。N1~6区がある丘陵頂部から一段下がった水田に東西54m、南北3mの調査区を設定し、162㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、茶褐色土の順に堆積し、GL-0.3~0.4m (標高117.3~117.4m) で黄褐色山土 (花崗岩風化土) の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、

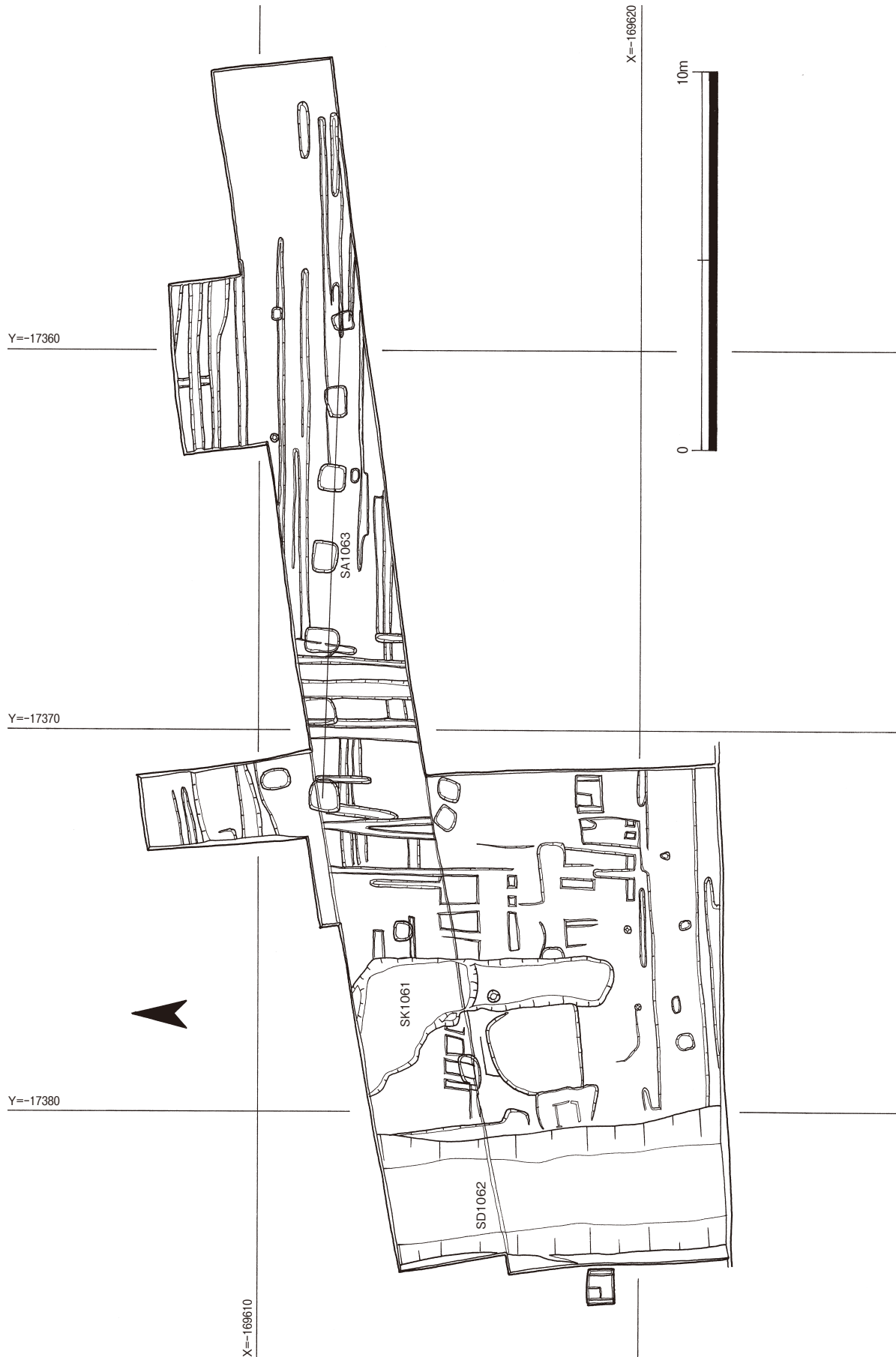


図3-8 第6調査区(N6区)遺構平面図(S=1/150)

土坑、小穴、小溝を検出した。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。



図3-9 第7調査区(N7区)遺構平面図(S=1/200)

#### 第8調査区(N8区)

N7区から南に一段下がった水田に東西53m、南北3mの調査区を設定し、159m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、黄灰色土、暗黄褐色土、暗茶褐色土の順に堆積し、GL-0.7~0.8m(標高116~116.1m)で黄褐色山土(花崗岩風化土)の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、土坑と溝を検出した。遺構の時期はいずれも平安~中世である。遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土した。

#### 第9調査区(N9区)

N8区の西側に位置し、N1区から一段下がった水田に東西28m、南北3mの調査区を設定し、84m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、灰褐色土、暗褐色土、暗茶褐色土の順に堆積し、GL-0.7~1.25m(標高113.6~114.1m)で黄褐色山土(花崗岩風化土)の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、小溝、落ち込みを検出した。遺構の時期は、柱穴は飛鳥時代、その他の遺構は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

#### 第10調査区(N10区)

N9の西側に位置し、N2区から一段下がった水田に東西28m、南北3mの調査区を設定し、84m<sup>2</sup>を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗茶褐色土の順に堆積し、GL-0.4~0.6m(標高113.9~114.1m)で黄褐色山土(花崗岩風化土)の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、土坑、小溝を検出した。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

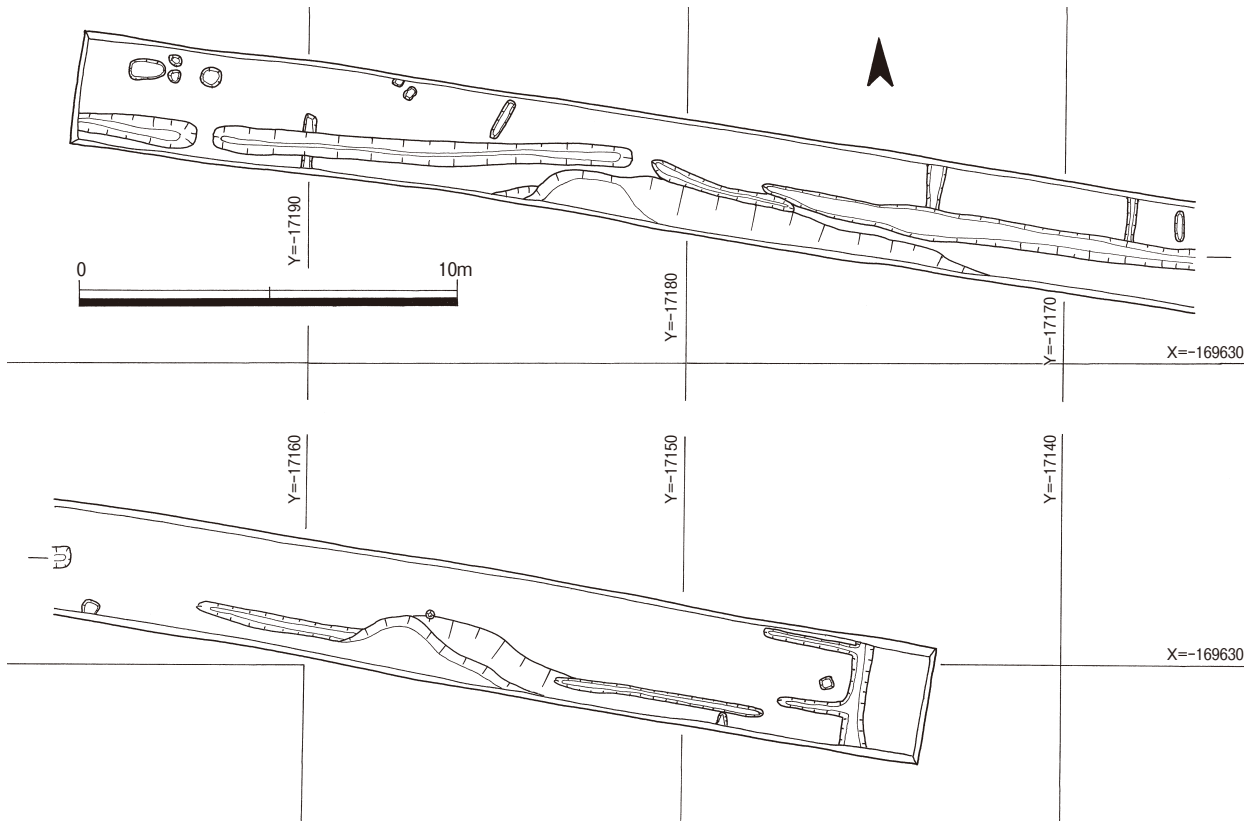


図3-10 第8調査区 (N8区) 遺構平面図 (S = 1/200)

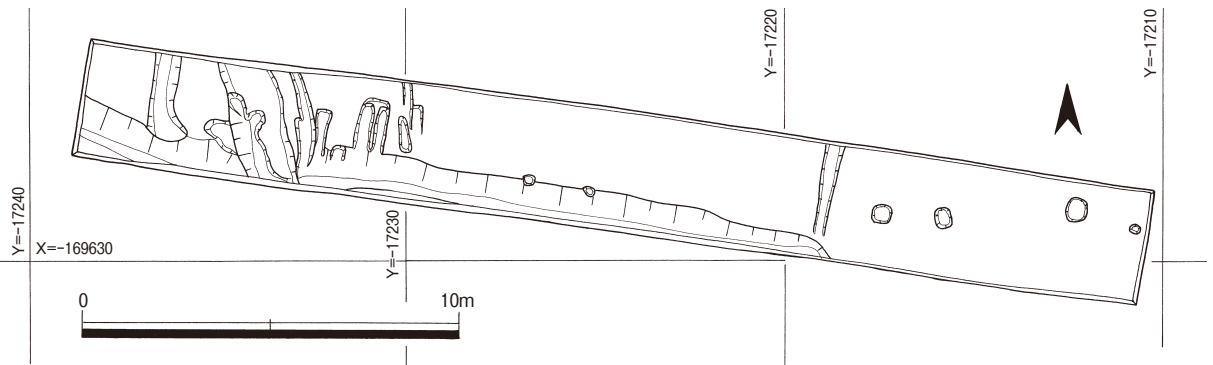


図3-11 第9調査区 (N9区) 遺構平面図 (S = 1/200)

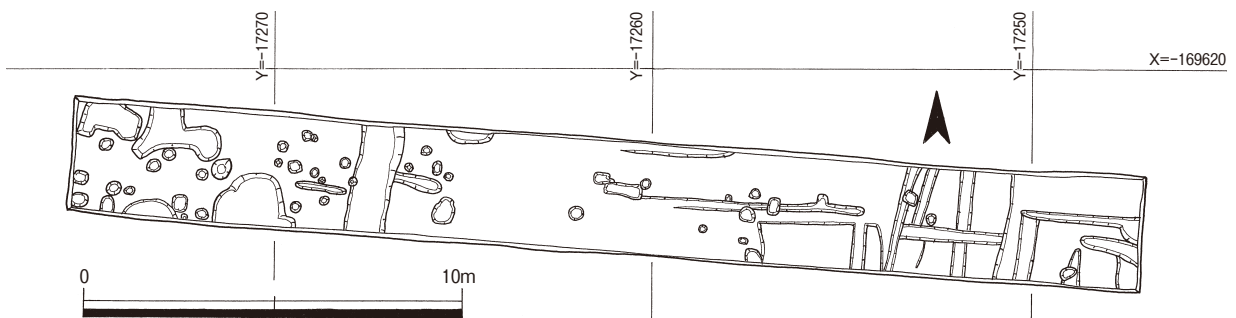


図3-12 第10調査区 (N10区) 遺構平面図 (S = 1/200)



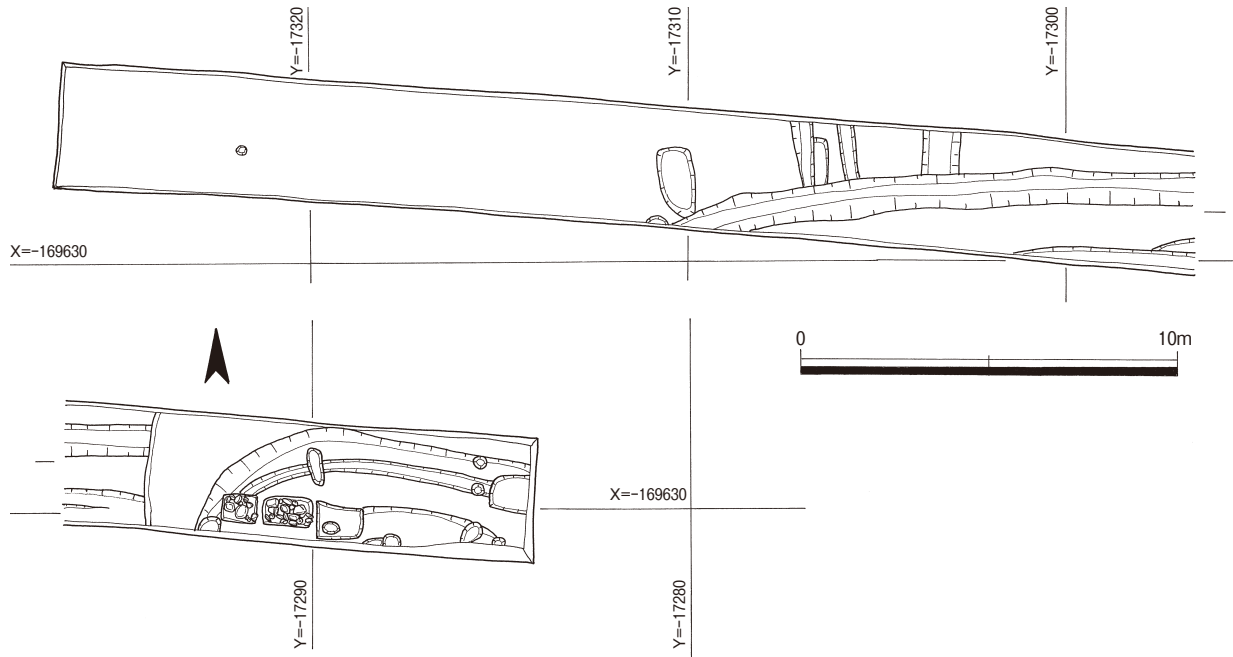


図3-13 第11調査区（N11区）遺構平面図（S = 1/200）

#### 第11調査区（N11区）

N10区の西側に位置し、N3・4区から1段下がった水田に東西42m、南北3mの調査区を設定し、126㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、暗黄灰色土、灰茶褐色土、暗黄褐色土、暗茶褐色土の順に堆積し、GL-0.2～1m（標高114.2～115.2m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、石組遺構、土坑、小溝である。遺構の時期はいずれも中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

#### 第12調査区（N12区）

N9区から2段下がった水田に東西38m、南北3mの調査区を設定し、114㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土の順に堆積し、GL-0.2～1.65m（標高112.47～113.9m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、土坑、南北溝、落ち込みを検出した。遺構の時期は飛鳥時代と中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

#### 第13調査区（N13区）

N8区から一段下がった水田に東西43m、南北3mの調査区を設定し、129㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、黄灰褐色土、暗褐色土、暗灰色土の順に堆積し、GL-1～1.6m（標高112.0～112.6m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴、土坑、溝を検出した。遺構の時期は飛鳥時代、平安時代、中世である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土した。

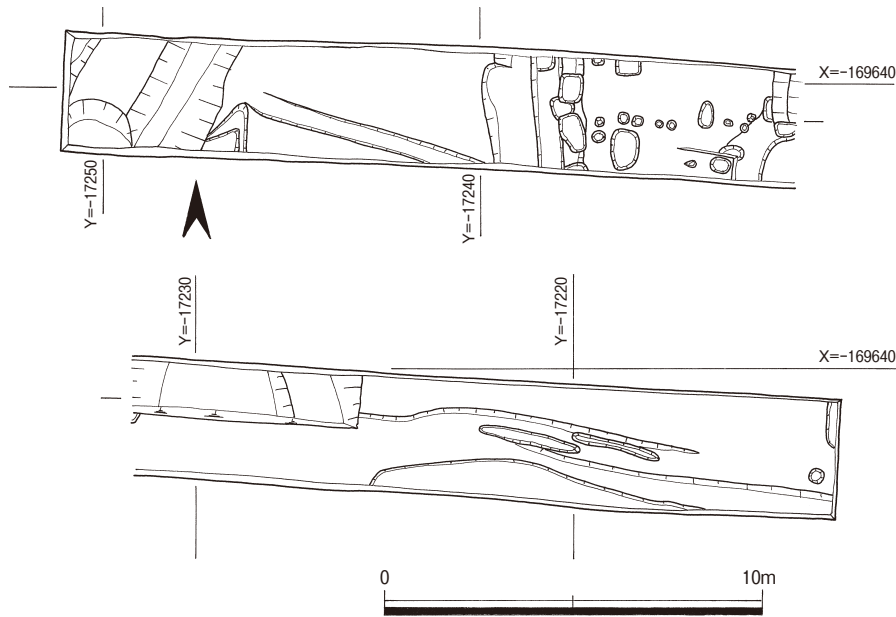


図3-14 第12調査区 (N12区) 遺構平面図 (S = 1/200)

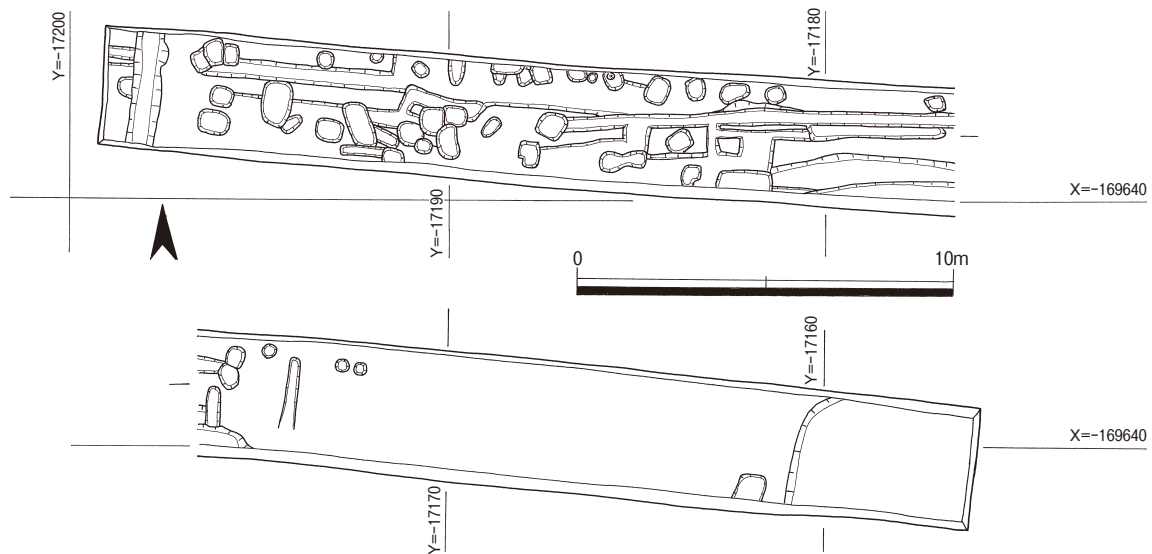


図3-15 第13調査区 (N13区) 遺構平面図 (S = 1/200)

### 第14調査区 (N14区)

N1・2区とN9・10区に挟まれた位置の調査区。平成29年度2017-4次調査における5区に相当する。東西25m、南北5mの調査区を設定し、125㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、造成土（褐色土・茶褐色土）、旧耕土（青灰色土）、旧床土（暗茶褐色土）の順に堆積し、GL-0.7~1.5mで黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴（掘立柱建物S B1141、掘立柱塀S A1142）、土坑（S K1143~1147）、溝（S D1148）、小穴、落ち込み（S X1149）を検出した。遺構の時期は飛鳥時代と中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、石材（室生安山岩）が出土した。

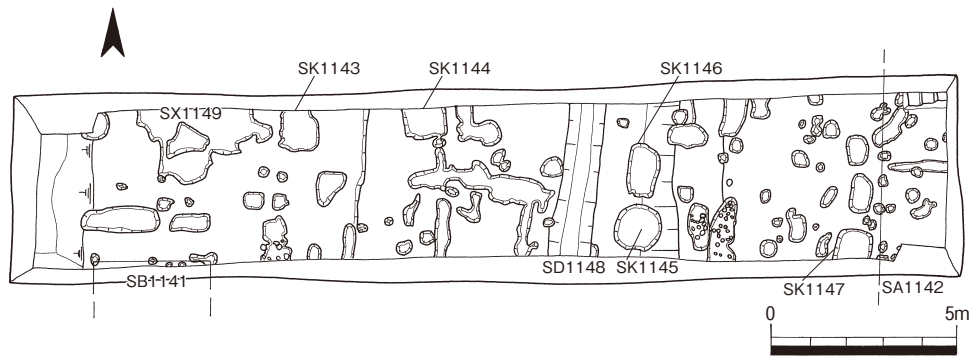


図3-16 第14調査区 (N14区) 遺構平面図 (S = 1/200)

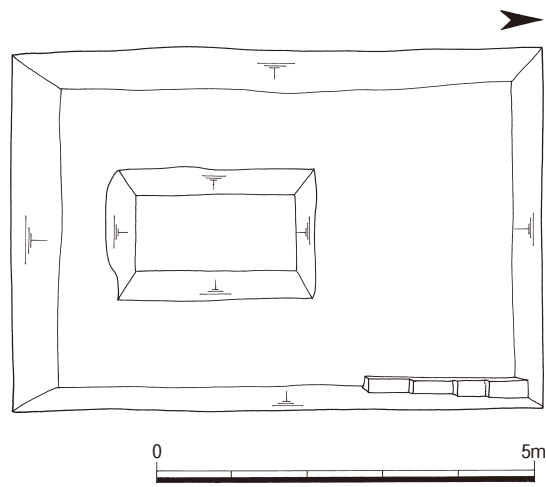


図3-17 第15調査区 (N15区) 遺構平面図 (S = 1/100)

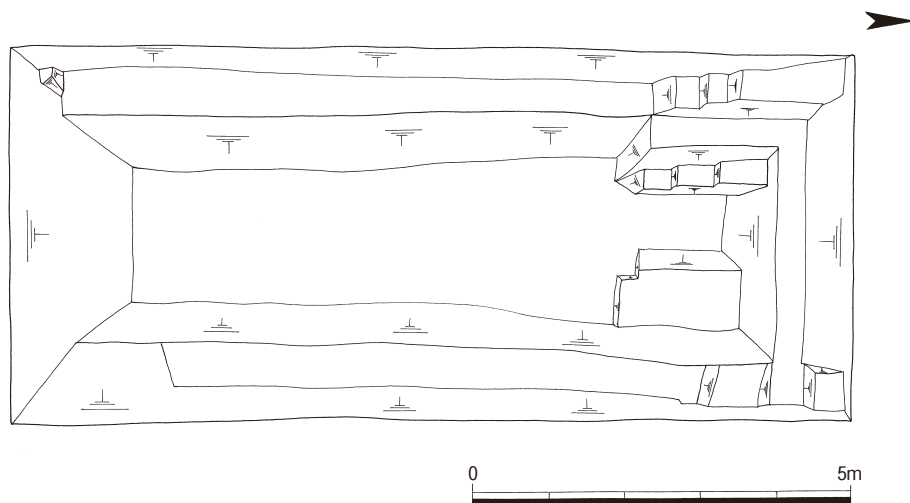


図3-18 第16調査区 (N16区) 遺構平面図 (S = 1/100)

**第15調査区 (N15区)**

N13区の東側に位置する調査区。平成29年度2017- 4次調査における3区に相当する。東西

5 m、南北7 mの調査区を設定し、35㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、造成土（茶褐色土、青灰色土、褐色土）の順に堆積し、GL-2.7mで青灰色土の旧耕田の土手となる。造成土が厚く堆積して、遺構面及び地山面は確認できなかった。出土遺物はない。

### 第16調査区（N16区）

N15区の南側に位置する調査区。平成29年度2017-4次調査における4区に相当する。東西5 m、南北11mの調査区を設定し、55㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、造成土（茶褐色土、青灰色土、茶褐色土）の順に堆積し、GL-2.2mまで掘削したが地山には至らなかった。造成土内での調査に留め、遺構面及び地山面は確認できなかった。出土遺物はない。

### 第17調査区（N17区）

N12区の南西に位置する調査区。平成29年度2017-4次調査における2区に相当する。東西5 m、南北12mの調査区を設定し、60㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、床土、造成土（褐色土、茶褐色土）の順に堆積し、GL-2.0mまで掘削したが地山には至らなかった。造成土内での調査に留め、遺構面及び地山面は確認できなかった。出土遺物はない。

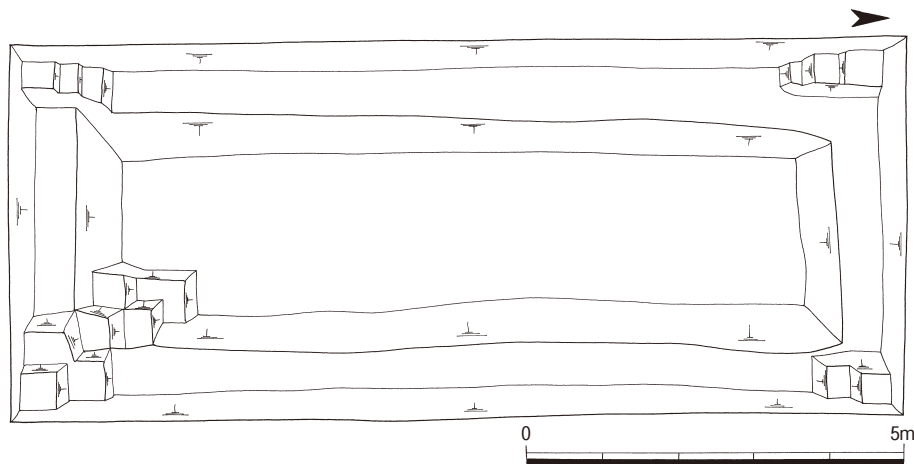


図3-19 第17調査区（N17区）遺構平面図（S = 1/100）

### 第18調査区（N18区）

N9区とN12区に重複した調査区。令和2年度2020-2次調査における3区に相当する。東西35m、南北25mの調査区を設定したが、造成土が厚く堆積して全面掘削できなかったため、北と南に拡張区を設けた。この設定範囲の内、580㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、床土、造成土の順に堆積し、浅いところでGL-0.4m（標高116.35m）、深いところでGL-5 m（標高111.12m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山は南に向かって段々と傾斜する地形となっており、調査区内では地山が3段確認できた。中段ではN9区の西半部、下段ではN12区の西半部を再検出した。遺構の検出は地山上面で行い、地山上段では柱穴（S P1185）、中段では南北溝3条（S D1181~1183）、東西溝1条（S D1184）、

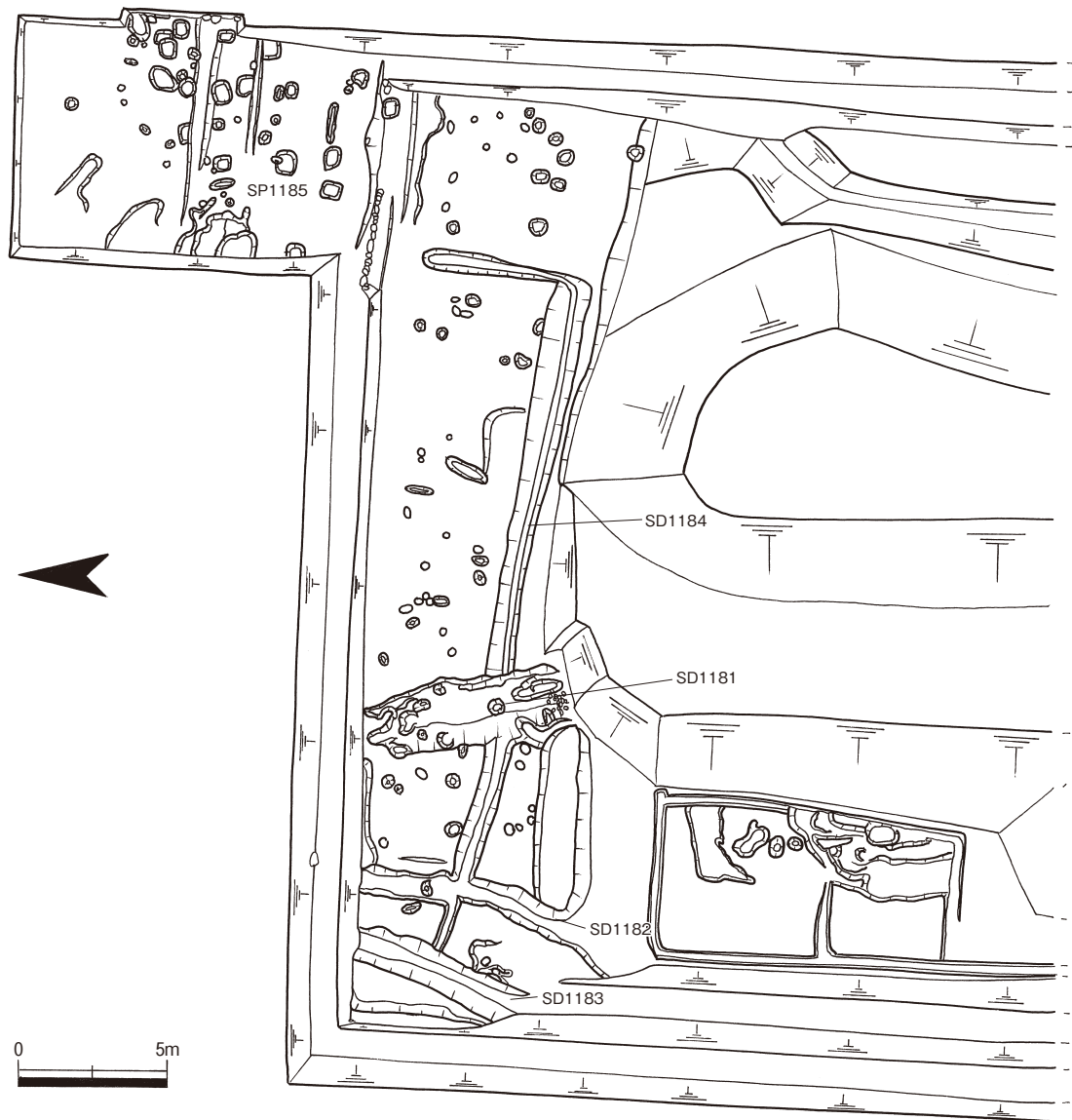


図3-20 第18調査区（N18区）遺構平面図（S = 1/250）

下段では土坑を検出した。遺構の時期は飛鳥時代～中世である。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦、石材（室生安山岩、結晶片岩）が出土した。

（納谷守幸・高橋幸治・長谷川透）

### 第3節 南地区の遺構

南地区は、丘陵部の南に接して東西にのびる谷筋の底部から南側の丘陵部にかけて広がる。この谷筋の底部には西流する水路があり、この水路から南側にある雛壇状の水田に調査区を設定した。平成3年度の調査では10か所、平成29年度の調査では3か所、令和2年度の調査では2か所に調査区を設定して調査を行った。調査面積は計1369㎡である。

#### 第1調査区（S1区）

南区の東端に位置し、谷底の水路から一段上がった水田に東西20m、南北3mの調査区を設

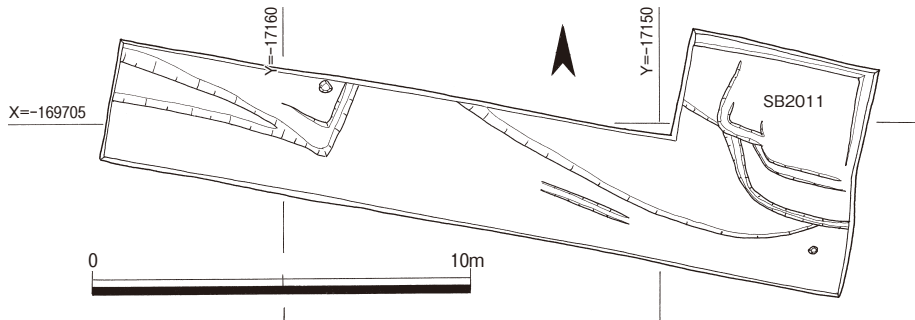


図3-21 第1調査区(S1区)遺構平面図(S=1/200)

定し、さらに北東部に東西5m、南北3mの15㎡を拡張し、合わせて75㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土の順に堆積し、GL-0.2~0.4m(標高112.7~112.9m)で黄褐色山土(花崗岩風化土)の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、竪穴建物(SB2011)、小溝を検出した。遺構の時期は竪穴建物が古墳時代、小溝は中世である。遺物は土師器と須恵器が出土した。

### 第2調査区(S2区)

S1区から南に一段上がった水田に東西26m、南北3mの調査区を設定し、78㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土の順に堆積し、GL-0.25~0.4m(標高114.8~115.0m)で灰褐色砂礫土の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、小穴を検出した。遺構の時期は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

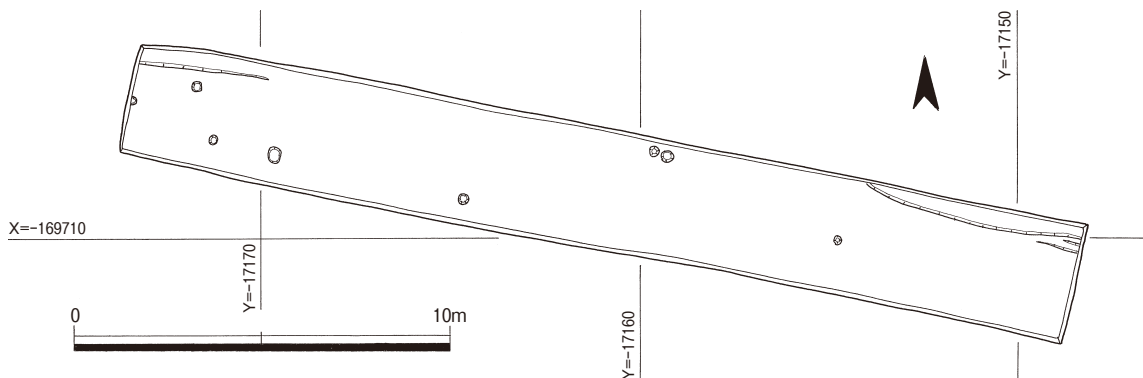


図3-22 第2調査区(S2区)遺構平面図(S=1/200)

### 第3調査区(S3区)

S2区から南に一段上がった水田の南際に東西42m、南北3mの調査区を設定し、さらに北西部に東西4m、南北1mの4㎡を拡張し、合わせて130㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、暗灰褐色土の順に堆積し、GL-0.25~0.4m(標高115.45~115.6m)で黄褐色山土(花崗岩風化土)の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、土坑と溝を検出した。土坑は幅1m、長さ2.45m、深さ0.23mで、埋土は暗黄褐色土である。土坑から古墳時代の須恵器が出土し、墓壇とみられる。その他の遺構は中世に位置付けられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、白磁が出土した。

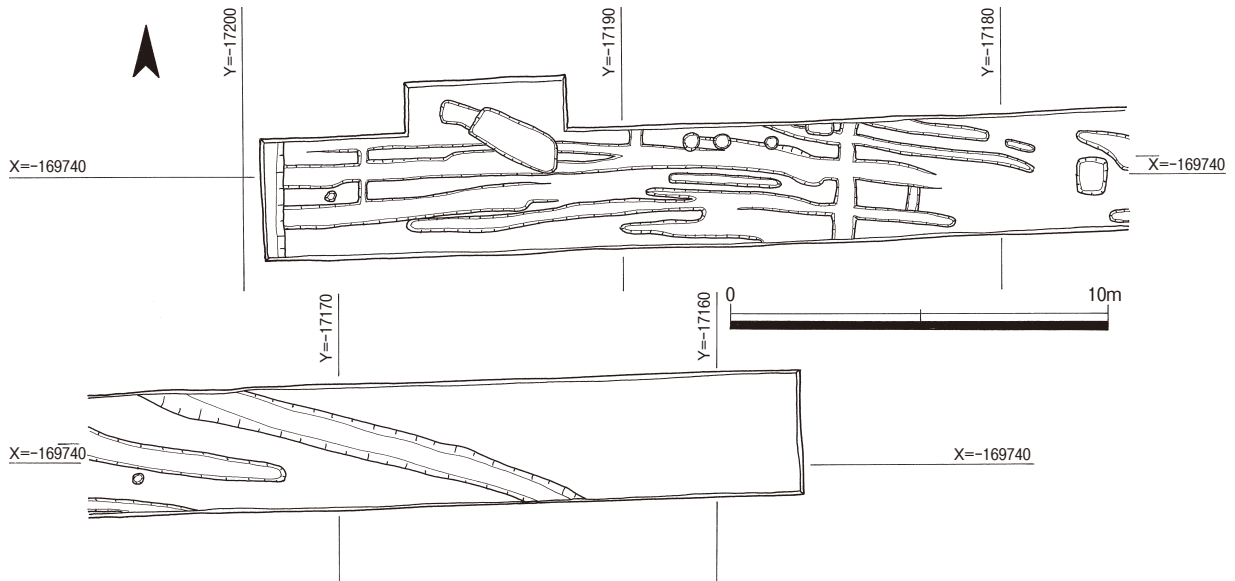


図3-23 第3調査区 (S3区) 遺構平面図 (S = 1/200)

#### 第4調査区 (S4区)

S2区から南に一段上がった水田の北際に東西19m、南北3の調査区を設定し、57㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、暗灰褐色土の順に堆積し、GL-0.1~0.3m (標高115.5~115.7m) で黄褐色山土 (花崗岩風化土) の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、小穴と小溝を検出した。遺構の時期は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

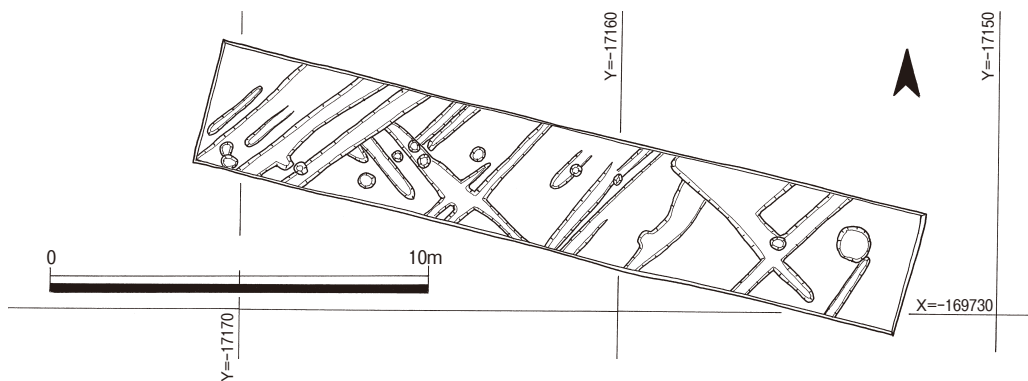


図3-24 第4調査区 (S4区) 遺構平面図 (S = 1/200)

#### 第5調査区 (S5区)

S2区と同じ水田の西際に東西3m、南北29mの調査区を設定し、87㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗灰褐色土の順に堆積し、GL-0.3~0.7m (標高114.5~114.9m) で黄褐色山土 (花崗岩風化土) の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、小穴と小溝を検出した。遺構の時期は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器が出土した。

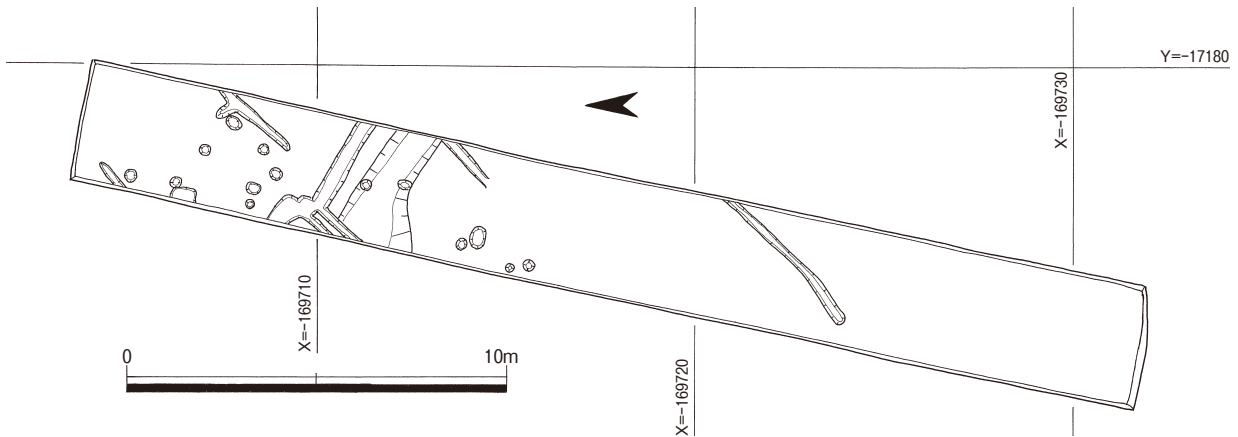


図3-25 第5調査区（S5区）遺構平面図（S = 1/200）

### 第6調査区（S6区）

S3区の西側の水田に東西27m、南北3mの調査区を設定し、81㎡を対象に調査を行った。S6区の西半部北側1.5mはS11区（平成29年度2017-1次の1区）と重複する。調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗灰褐色土の順に堆積し、GL-0.45~0.9m（標高115.85~116.3m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴と小溝を検出した。遺構の時期は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

### 第7調査区（S7区）

S6区の西側の水田に東西21m、南北3mの調査区を設定し、63㎡を対象に調査を行った。S7区の東半部北側1.5mの一部がS11区（平成29年度2017-1次の1区）と重複する。調査区の基本層序は、上から耕土、床土の順に堆積し、GL-0.3m（標高114.3m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山は西に向かって傾斜し、暗褐色土、暗青灰色土、青灰色土が堆積し、谷堆積となっている。遺構の検出は地山上面で行い、溝と谷の落ち込みを検出した。谷の落ち込みは出土遺物から古墳時代、溝の時期は中世に位置付けられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

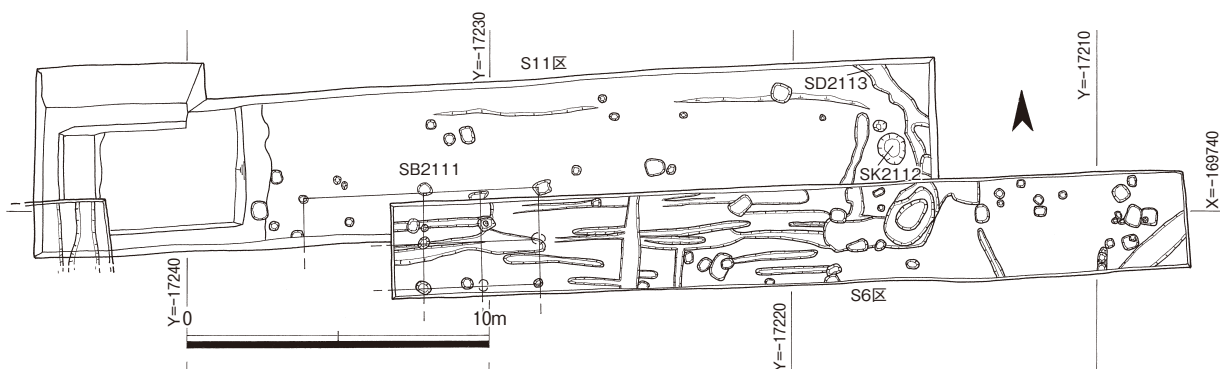


図3-26 第6・11調査区（S6・11区）遺構平面図（S = 1/200）



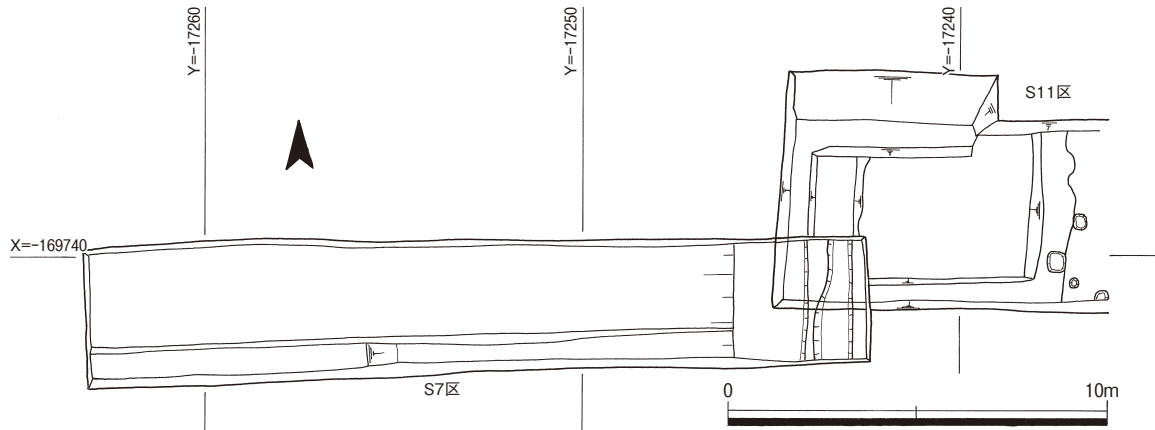


図3-27 第7調査区（S7区）遺構平面図（S = 1/200）

### 第8調査区（S8区）

S7区の西側の水田に東西22m、南北3mの調査区を設定し、66㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、暗茶褐色土の順に堆積し、GL-0.2~1.1m（標高112.8~113.7m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、小穴と小溝を検出した。遺構の時期は中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

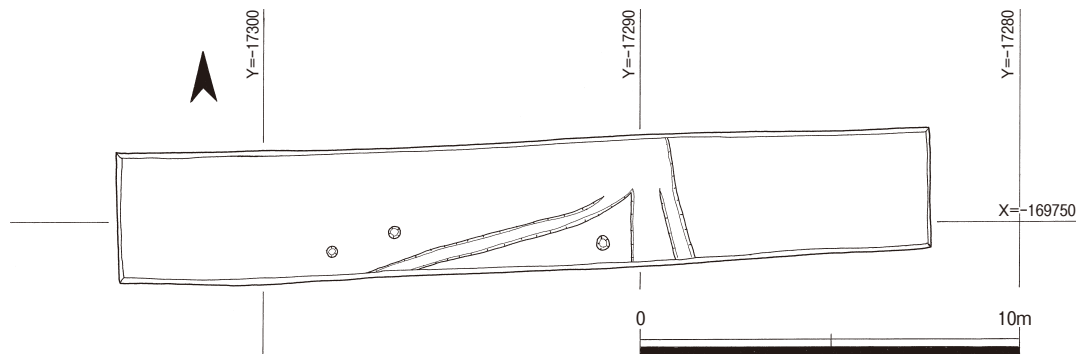


図3-28 第8調査区（S8区）遺構平面図（S = 1/200）

### 第9調査区（S9区）

S8区から北に一段下がった水田に東西3m、南北33mの調査区を設定し、99㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、耕土直下、GL-0.2m（標高114.2m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山は北に向かって傾斜し、灰黄褐色土、暗黄褐色土、暗灰褐色土、暗茶褐色土、青灰色土が堆積し、谷堆積となっている。遺構の検出は地山上面で行い、焼土坑と谷の落ち込みを検出した。谷の落ち込みは出土遺物から古墳時代、溝の時期は中世に位置付けられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

### 第10調査区（S10区）

S9区から西に一段下がった水田に東西3m、南北35mの調査区を設定し、さらに調査区東側の中央部に東西1m、南北3mの拡張区を設け、合わせて108㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土、床土の順に堆積し、GL-0.35m（標高107.7m）で黄褐色

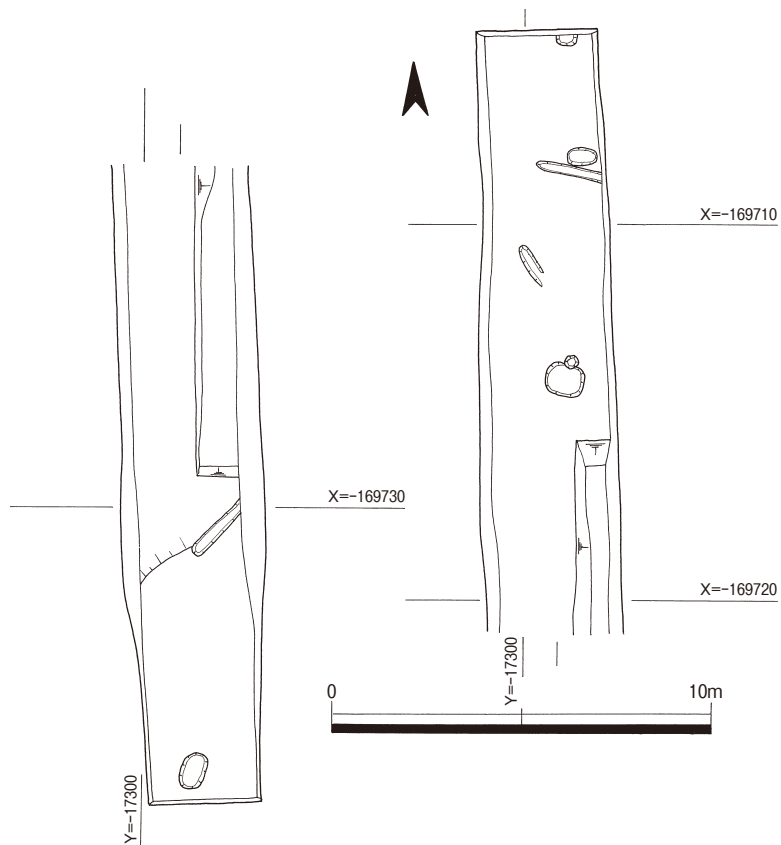


図3-29 第9調査区 (S9区) 遺構平面図 (S = 1/200)

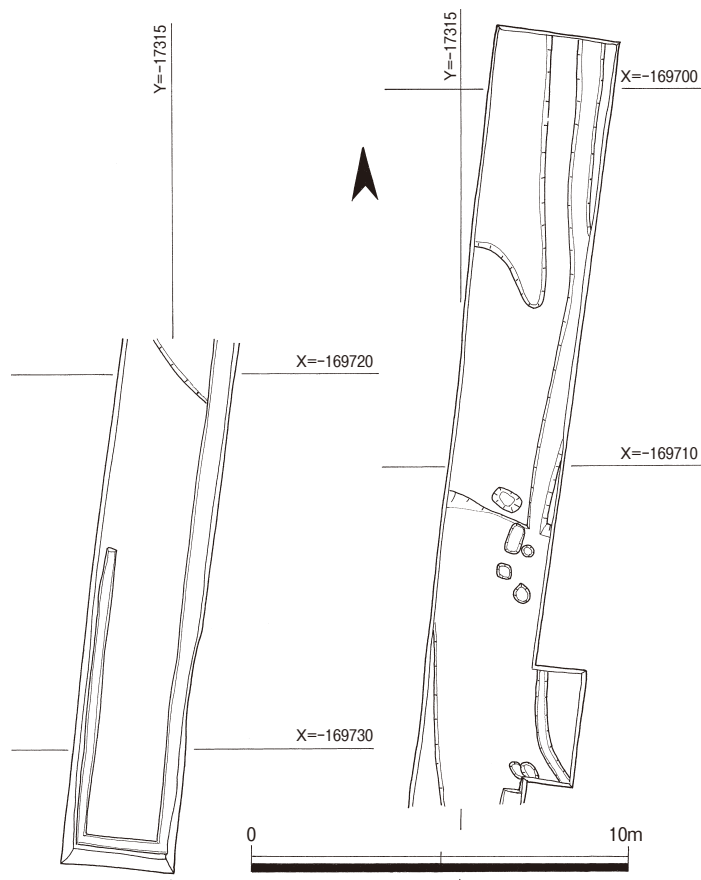


図3-30 第10調査区 (S10区) 遺構平面図 (S = 1/200)

山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山は南に向かって傾斜し、灰茶褐色土、暗茶褐色土、暗黄褐色土、緑灰色土が堆積し、谷堆積となる。遺構の検出は地山上面で行い、焼土坑と谷の落ち込みを検出した。谷の落ち込みは出土遺物から古墳時代、溝の時期は中世に位置付けられる。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦が出土した。

### 第11調査区（S11区）

S 6区とS 7区と重複した調査区。平成29年度2017-1次調査の1区に相当する。東西30m、南北5mの調査区を設定し、150㎡を対象に調査を行った。調査区の層序は、上から耕土、造成土（にぶい黄色土、褐灰色土、灰白色土、黒褐色土）の順に堆積し、GL-0.8~1.8mで黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、柱穴（掘立柱建物S B2111）、土坑（S K2112）、溝（S D2113）を検出した。柱穴はS 6区との重複関係により、掘立柱建物の柱穴となることがわかった。これら遺構の時期は古墳時代と中世である。遺物は土師器、須恵器、瓦器、瓦、玉類が出土した。

### 第12調査区（S12区）

S 11区の北側に東西4m、南北5mの調査区を設定し、20㎡を対象に調査を行った。平成29年度2017-1次調査の2区に相当する。調査区の層序は、上から耕土、造成土の順に堆積し、GL-2mまで掘削したが地山には至らなかった。造成土内での調査に留め、遺構面及び地山面は確認できなかった。出土遺物はない。

### 第13調査区（S13区）

S 11区の北に一段下がった水田に東西5m、南北8mの調査区を南北方向に設定し、さらに調査区の南端に東西5m、南北3mの拡張区を設け、L字形の調査区とした。合わせて55㎡を

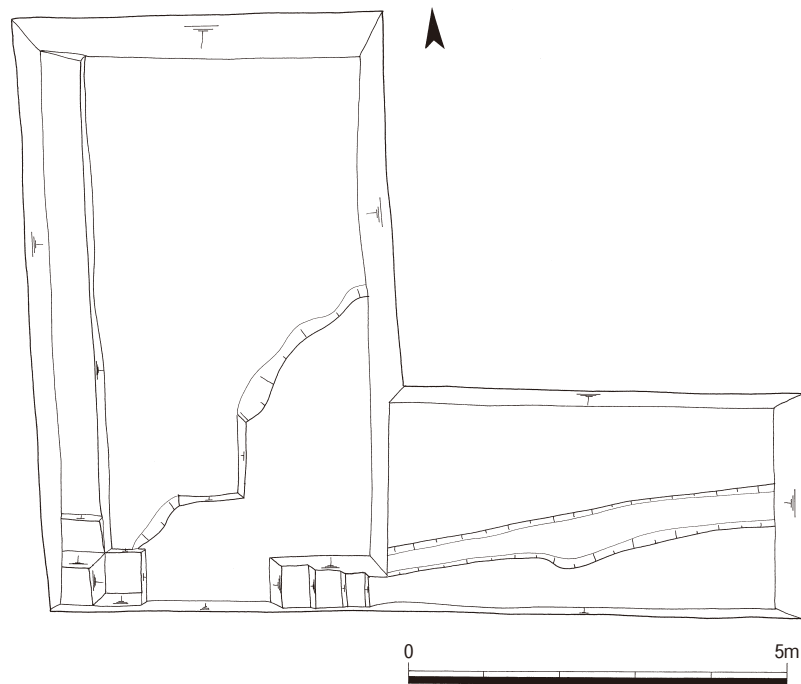


図3-31 第13調査区（S13区）遺構平面図（S = 1/100）

対象に調査を行った。平成29年度2014-1次調査の1区に相当する。調査区の層序は、上から耕土、造成土（褐色土、緑灰色土）の順に堆積し、GL-0.5~0.8mで黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行い、遺構は確認できなかった。出土遺物はない。

#### 第14調査区（S14区）

S13区の東側に東西15m、南北10mの調査区を設定し、150㎡を対象に調査を行った。令和2年度2020-2次の2区に相当する。調査区の層序は、上から耕土、床土、造成土の順に堆積し、GL-1~3.6m（標高108.43~111.18m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。遺構の検出は地山上面で行ったが、遺構はなく、地形の落ち込みを検出したのみである。出土遺物はない。

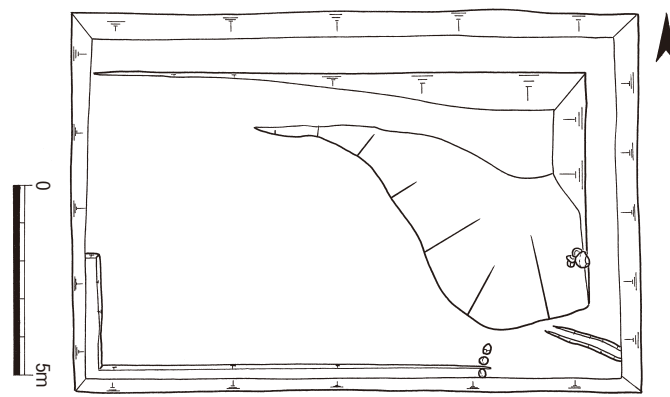


図3-32 第14調査区（S14区）遺構平面図（S = 1/200）

#### 第15調査区（S15区）

S20区と重複して東西10m、南北15mの調査区を設定し、150㎡を対象に調査を行った。令和2年度2020-2次の1区に相当する。調査区の層序は、上から耕土、床土、造成土の順に堆積し、GL-3.5m（標高108.9m）まで掘削したが地山には至らなかった。造成土内での調査に留め、遺構面及び地山面は確認できなかった。出土遺物はない。

（納谷守幸・高橋幸治・長谷川透）

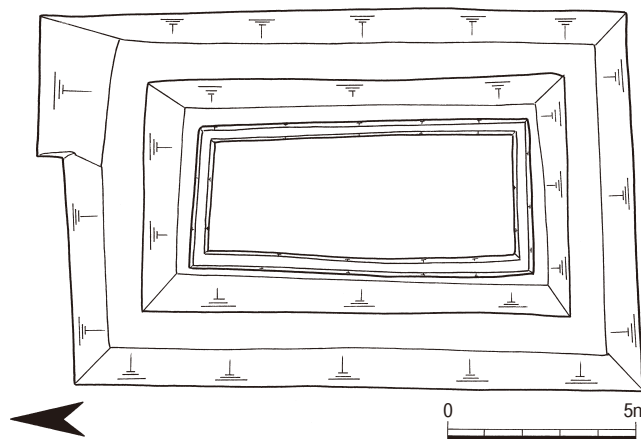


図3-33 第15調査区（S15区）遺構平面図（S = 1/200）

## 第4節 東地区の遺構

東地区は、橘寺旧境内西面大垣（推定）の西（外）側で、川原寺・橘寺の間を通過する東西道路の南に接する位置である。この東西道路がある丘陵の頂部ちかくに第1・2調査区を設定し、丘陵南斜面に下る部分に第3・4調査区を設定した。東地区の調査総面積は747㎡である。ここでは各調査区の概要について記していく。

### 第1調査区（E1区）

東西35m、南北4mの140㎡を対象に調査を行い、さらに北東に36㎡、南東に117㎡拡張し、合計293㎡調査した。調査区の基本層序は上から耕土・明黄褐色土・床土①（黄灰色土）・床土②（暗黄灰色土）・灰褐色土①・灰褐色土②・暗灰褐色土の順で、GL-60~90cm（標高116.8~116.6m）で黄褐色山土（花崗岩風化土）の地山となる。地山は南西に緩く傾斜している。暗灰色土層までは瓦器や土師皿を含んでおり、中世の遺構は暗灰褐色土上面から掘り込まれている。また、飛鳥時代の遺構は地山上面から掘り込まれる。

検出した遺構には、飛鳥時代の掘立柱建物2棟と、中世の掘立柱建物1棟の他小柱穴が多数あるが、建物等にはまとまらない。調査区の東半の方が、後世の削平が激しいため、西半に比べて、遺構密度が低い。

### 第2調査区（E2区）

E1区の南に隣接する水田に、東西34m、南北4mの136㎡を対象に調査を行った。北東部を9㎡拡張したので、合計145㎡を調査し、最終的にE1区とつなげた。

調査区の基本層序は、上から耕土・床土①（黄褐色土）・床土②（灰褐色土）・暗灰褐色土・灰茶褐色土・暗灰茶褐色土と堆積し、GL-90~110cm（標高115.5~115.25m）で黄褐色粘質土・花崗岩風化土の地山となる。遺構検出は、黄褐色粘質土・花崗岩風化土上面で遺構検出を行った。黄褐色粘質土には飛鳥時代の遺物を含んでいる。遺構は掘立柱建物・掘立柱塀・井戸・石敷等を検出している。この他にも埋土に瓦器を含む小規模な小柱穴を多数検出しているが、建物等にはまとまらない。全体に後世の削平が大きい。

### 第3調査区（E3区）

E2区の南に隣接する水田に、東西17m、南北4mの68㎡を対象に調査を行った。調査区の基本層序は、上から耕土・床土（黄褐色土）・黄灰色土・灰褐色土・暗褐色土と堆積し、GL-60~70cm（標高114.6~114.5m）で、花崗岩風化土の地山となる。この面で遺構検出を行ったが、北東から南西に流れる南北溝1条を確認したのみで、この丘陵の旧地形と考えられる地山の傾斜を確認したに留まる。

### 第4調査区（E4区）

E3区と同じ水田に東西36m、南北4mの144㎡を対象に調査を行い、ついで調査区中央付近を南に97㎡調査区を拡張して241㎡を調査した。調査区の基本層序は上から耕土・床土（黄灰色土）・灰褐色土・暗灰茶褐色土・暗茶褐色土・暗灰色粘質土の順に堆積し、GL-50~80cm（標高114.5~114.2m）で黄褐色山土（整地土）となる。遺構検出は黄褐色山土（整地土）あるいは調査区北辺では地山上面で行ったが、顕著な遺構は確認していない。この黄褐色山土（整地土）は厚み15~25cmで、7世紀後半の土器を含む。これを除去すると、南に向かって落ちる谷地形（SX3041）を確認したので、調査区の中央付近を南に拡張し、谷の堆積土を除去した。その過程で、大量の木簡・土器と瓦・榛原石等が出土している。谷の掘削は、E4区の

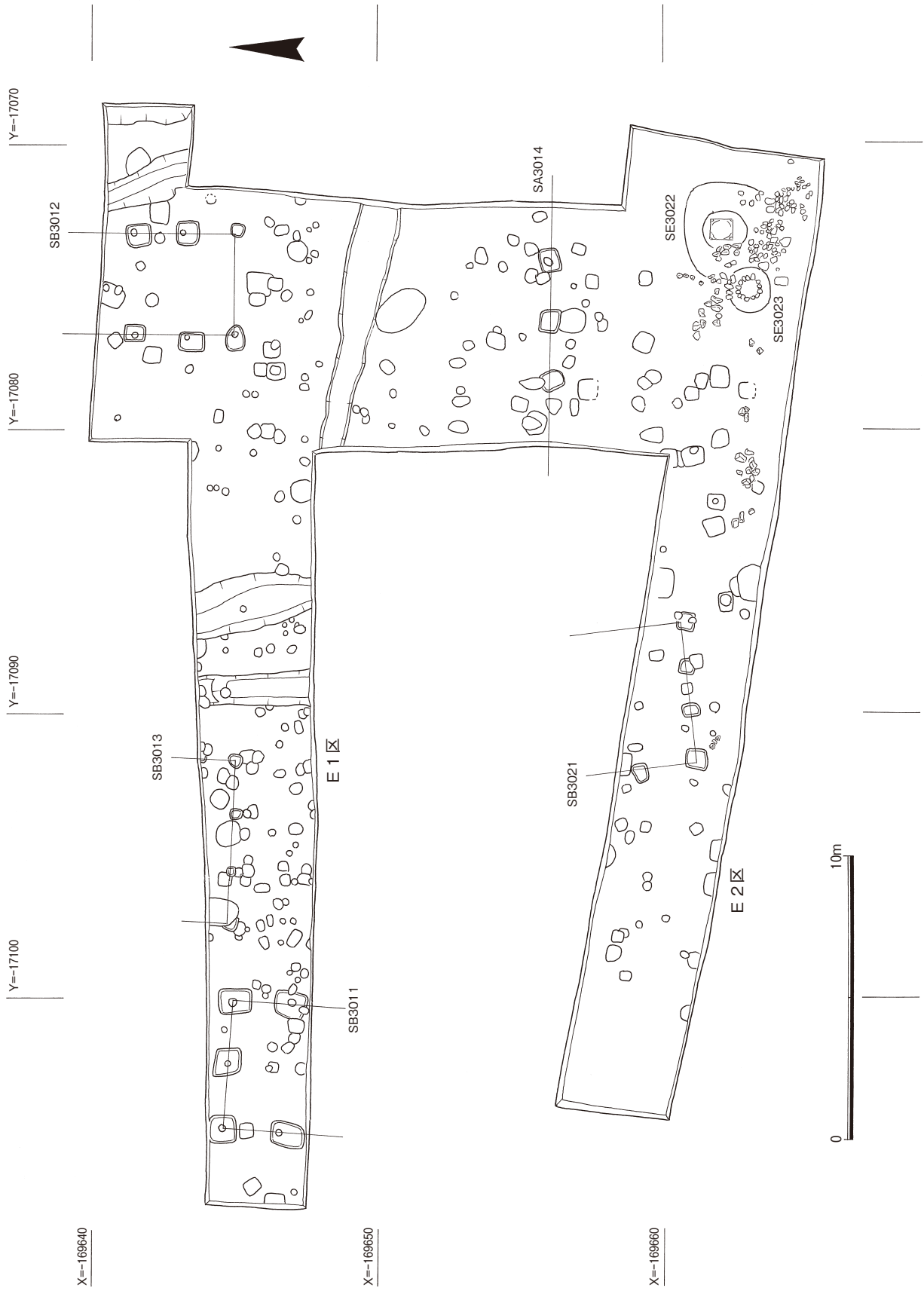


図3-34 第1・2調査区 (E1・2区) 遺構平面図 (S = 1/200)

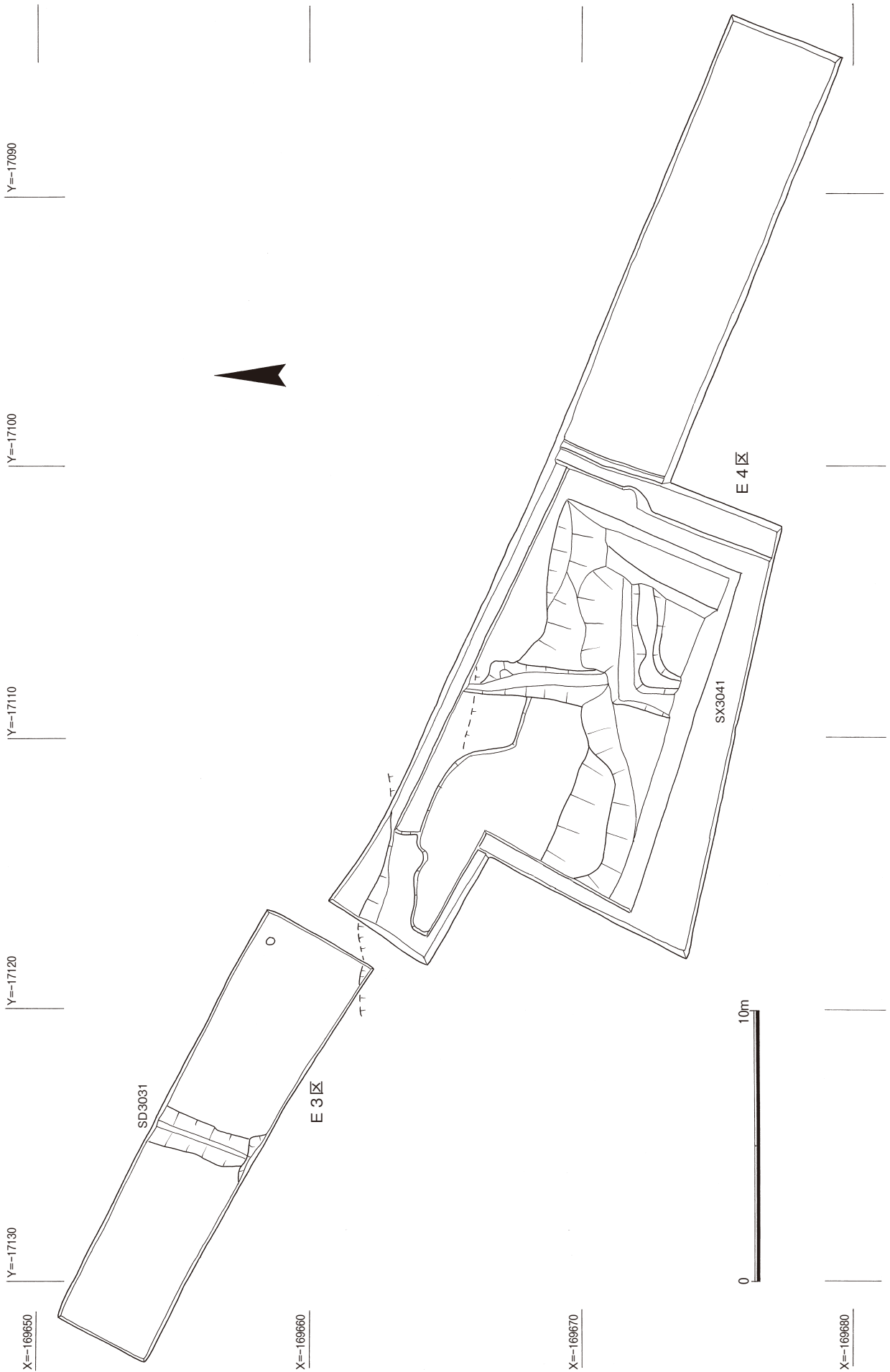


図3-35 第3・4調査区(E3・4区)遺構平面図(S = 1/200)

実測基準線から南へ0.5mや1.5m、2.5mと、1 mずつ広げながら、北から順に掘削をしていった。最終的には基準線から南に6.5mまで掘削したことになる。

調査行程では、まずIV層までの土層を北から南へ掘削し、その後に下層であるV・VI層を掘削する。ただし、2.5～3.5m、及び4.5～5.5mの範囲は、IV層までの掘削をそれぞれ2回行っているため、畦を残して確認しながら掘削をしたと考えられる。(納谷守幸・相原嘉之)

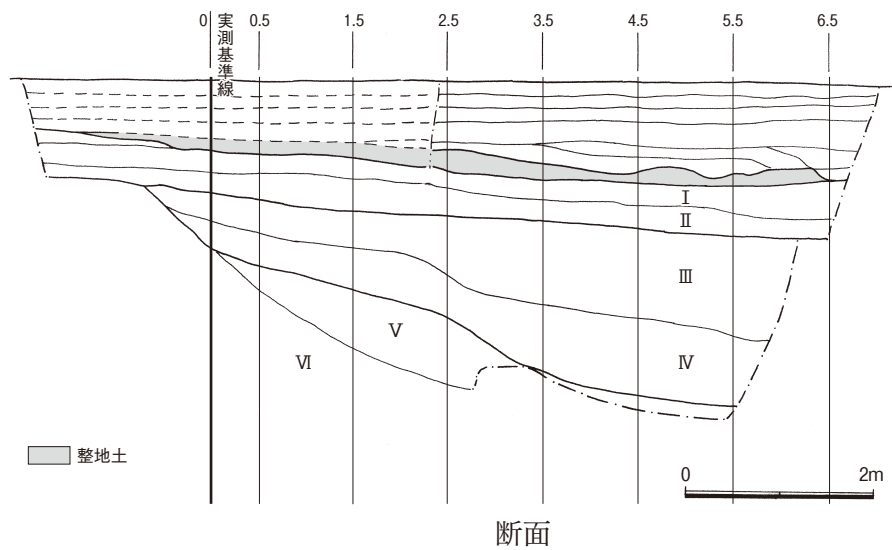
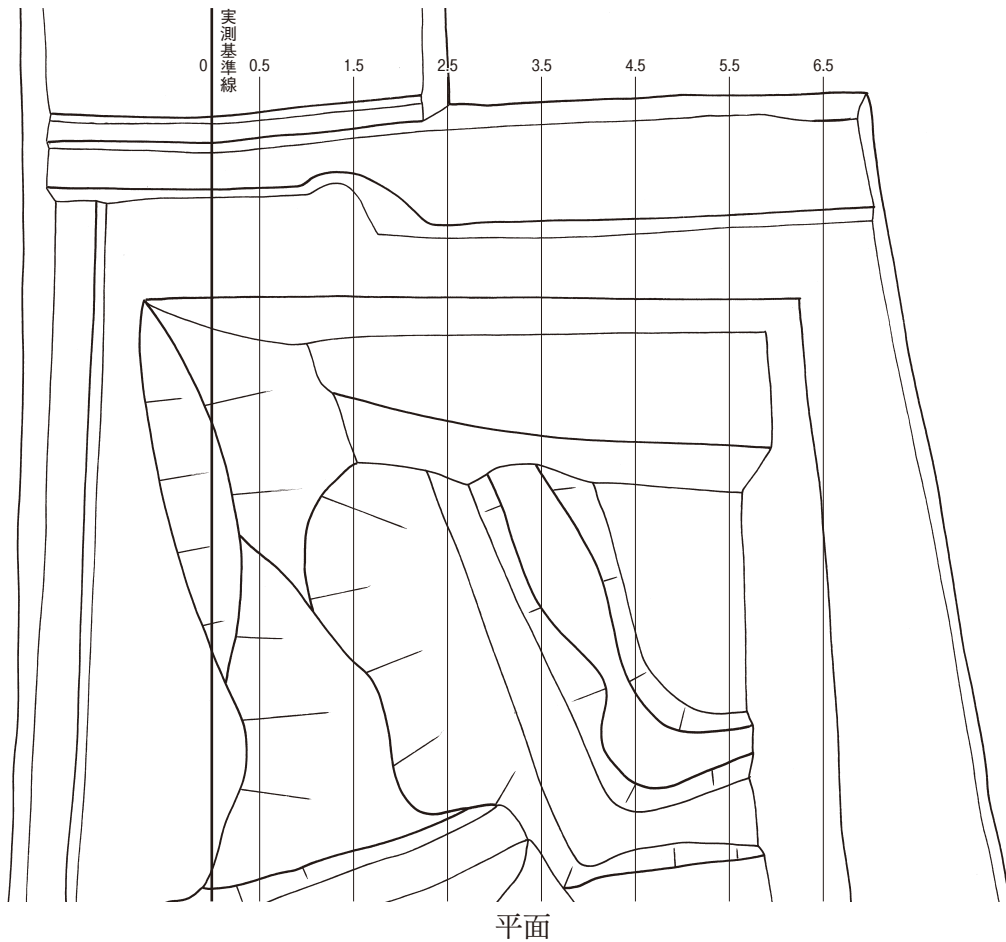


図3-36 第4調査区(E4区)実測基準線



## 第5節 検出遺構

### 1. 北地区の遺構

#### 第1調査区（N1区）

**掘立柱建物S B 1011** 柱穴は、平面形態が隅丸方形で、一辺0.6mを測る。柱間は2.4mで、2間分確認した。この柱列を囲むように30～40cm大の小穴が並んでいるため、建物の庇が想定されるが、柵の一部かもしれない。出土遺物から鎌倉時代に位置付けられる。

#### 第2調査区（N2区）

**掘立柱建物S B 1021** N2区東半部で検出した梁行3間の南北棟掘立柱建物である。一辺0.9mの柱掘形を2基検出した。西側柱の掘形には径0.16mの柱痕が残る。2基の柱間が7.2mあることから、梁行3間（柱間寸法2.4m）の南北棟建物と推定した。柱掘形から瓦器が出土した。

**掘立柱建物S B 1022** N2区中央付近で検出した梁行2間の南北棟掘立柱建物である。一辺0.35～0.45mの隅丸方形の柱掘形を3基検出した。梁行2間（柱間寸法1.5m）分検出し、南側柱筋と考えられる。鎌倉時代頃に位置付けられる。

#### 第6調査区（N6区）

**土坑S K 1061** N6区西半部で検出した溝状の土坑である。規模は、南北に長さ7m、幅は最大で4m、深さ0.46mを測る。土坑は、断面形状が箱形で、埋土は上から順に炭混じり暗褐色土、炭混じり暗黄褐色土、黄褐色土（地山崩落土）が堆積する。埋土には多量の土師器と須恵器のほかに鉄製品、銅製品、砥石を包含する。飛鳥時代後半頃の廃棄土坑と考えられる。

**南北大溝S D 1062** N6区西端で検出した南北方向の大溝である。長さ9m分確認し、溝の幅は3.2m、深さ0.8～1mを測る。溝の断面形状は逆台形状を呈する。埋土は上から順に褐色土、山土混じり褐色土、茶褐色土、暗褐色土、山土混じり暗黄褐色土が堆積する。埋土には飛鳥時代後半の土師器と須恵器を少量包含する。周辺部でおこなわれた川原下ノ茶屋遺跡の発掘調査（橿原考古学研究所2006「川原下ノ茶屋遺跡」『奈良県遺跡調査概報2005年度』ほか）でもこれに連なる遺構は確認できず、溝の性格は不明である。

**掘立柱塀S A 1063** N6区中央で検出した東西7基の柱列である。方位は東で南に2度振れる。柱列はさらに東に展開すると推定され、他に組み合う柱穴もないため、東西方向にのびる掘立柱塀と推定した。柱間寸法は、7尺（2.1m）等間。柱穴掘形は一辺が0.65～0.8mの隅丸方形で、残存する深さは0.3mである。埋土は山土混じり暗灰褐色土と暗茶褐色土からなる。時期は不詳。

#### 第14調査区（N14区）

**掘立柱建物S B 1141** N14区の南西端付近で検出した東西2間の柱列である。調査区の壁際で検出したため、南に展開すると考え、掘立柱建物の北側柱列と推測した。柱間寸法は、5尺（1.5m）等間。柱穴掘形は規模が0.25～0.35mで、平面形状は不整円形もしくは隅丸方形である。掘形からの出土遺物は認められないが、時期は中世であろう。

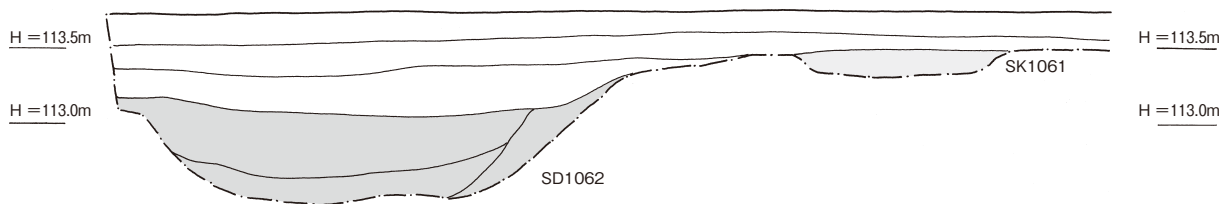


図3-37 第6調査区(N6区)北壁土層断面図(S=1/150)

**掘立柱塀 S A 1142** N14区の東端付近で検出した南北2基以上の柱列である。柱穴はさらに南北に展開し、他に組み合う柱穴もないことから、南北方向にのびる掘立柱塀と推定した。柱間寸法は、4尺(1.2m)等間。柱穴掘形の規模は0.25~0.3mで、平面形状は不整円形もしくは隅丸方形である。掘形からの出土遺物は認められないが、時期は中世であろう。

**土坑 S K 1143** N14区西半部の北壁際で検出した土坑である。平面規模は一辺1~1.1mで、平面形状は隅丸方形を呈する。出土遺物はなく、時期、性格とも不明。

**土坑 S K 1144** N14区中央部の北壁際で検出した土坑である。平面規模は一辺0.9~1.1mで、平面形状は隅丸方形を呈する。出土遺物はなく、時期、性格とも不明。

**土坑 S K 1145** N14区中央部の南壁寄りで検出した土坑である。平面規模は直径1.15~1.45mで、平面形状は不整円形を呈する。土坑内から土師器と瓦器が出土し、時期は中世である。

**土坑 S K 1146** 土坑 S K 1145の直ぐ北側で検出した土坑である。平面規模は直径0.85~1.45mで、平面形状は隅丸方形を呈する。土坑内から土師器と瓦器が出土し、時期は中世である。

**土坑 S K 1147** N14区東半部の南壁際で検出した土坑である。平面規模は残存箇所で一辺0.95m、平面形状は隅丸方形を呈する。出土遺物はなく、時期、性格とも不明。

**溝 S D 1148** N14区中央部で検出した南北方向の溝である。溝の規模は幅3.5m、深さ0.7mである。遺物は土師器、瓦器、瓦、石材(室生安山岩)が出土し、時期は中世である。

**落ち込み S X 1149** N14区西半部の北壁際で検出した落ち込みである。落ち込みの規模は、検出した長さは約3mで、平面形状は不整形である。出土遺物はなく、時期、性格とも不明。

### 第18調査区(N18区)

**溝 S D 1181** N18区西半部で検出した南北方向の溝である。溝の規模は幅2.1~2.4m、深さ0.6mを測る。溝肩は北端で立ち上がるため北には延長せず、南に流下する構造となっている。溝の底部には凹凸があり、窪んだところに土器が入り込んでいる所があった。埋土には炭粒や土器の細片、石材(室生安山岩)が包含される、最下層には土器片が圧着していた。遺物は土師器、須恵器、黒色土器が出土し、遺構の時期は奈良~平安時代である。

**溝 S D 1182** N18区の西寄りで検出した南北方向の溝である。溝の規模は幅0.8~1.1m、深さ0.4mである。溝の断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄褐色土である。溝底面と側面に礫が貼りついており、溝内は石詰めだった可能性がある。遺物は土師器、須恵器、黒色土器、石材(室生安山岩)が出土した。時期を特定できるものはなかったが、溝 S D 1181とほぼ同時代と考えられる。

**溝 S D 1183** N18区の西端で検出した南北方向の溝である。溝の規模は、幅1.5m、深さ0.7mを測る。溝の断面形状は「U」字状を呈し、埋土は褐灰色土である。遺物は瓦器が出土したことから、時期は中世である。

**溝 S D 1184** N18区の地山中段に東西方向に延びる溝である。溝は東西に23m延びるが、東端で北向きに折れるものの地山上段までは延びない。溝の規模は、幅0.4~1.2m、深さ0.5mを測る。断面形状は「V」字状を呈し、いわゆる薬研掘りに類似する。埋土は褐灰色土で遺物は少ない。埋土の様相から溝 S D 1803と同時期に埋没したと考えられる。

**柱穴 S P 1185** N18区の東から北東の拡張区で検出した柱穴である。柱穴は、北拡張区では17基、地山中段では3基検出した。柱穴掘形の規模は、一辺0.42~0.65mで、深さ0.15~0.4mである。多くは削平を受けており、残存状況はよくない。柱間寸法は、中段では1.65m間隔、北拡張区では2~2.4mの不等間隔でまとまらない。これらの柱穴は他に組み合わせるものがないため、性格は不明である。柱穴掘形から飛鳥時代の須恵器片が出土したことから、遺構の時期は飛鳥時代と考えられる。

## 2. 南地区の遺構

### 第1調査区 (S 1区)

**竪穴建物 S B 2011** S 1区の北東隅で検出した竪穴建物である。竪穴建物の南西角を検出した。建物内埋土から須恵器杯身と土師器が出土した。

### 第11調査区 (S 11区)

**掘立柱建物 S B 2111** S 6区から S 11区で検出した東西2間、南北1間以上の掘立柱建物。東西の柱間寸法は2m、南北の柱間寸法は1.5m。時期は不明。

**土坑 S K 2112** S 11区の東端で検出した土坑である。土坑は、径1mの不整円形を呈する。土坑の埋土はにぶい黄褐色土で、古墳時代の土師器高杯と須恵器の杯身が出土した。遺物の時期は5世紀後半から6世紀前半である。

**溝 S D 2113** S 11区東端で検出した溝である。土師器と須恵器の細片が出土した。時期は不明。  
(納谷守幸・長谷川透)

## 3. 東地区の遺構

### 第1調査区 (E 1区)

**掘立柱建物 S B 3011** E 1区西端で検出した桁行2間以上、梁間2間の南北棟掘立柱建物で、北で東に2度振れる方位を示す。柱間寸法は、桁行7尺(2.1m)、梁行7.5尺(2.25m)等間。北西隅と妻柱の柱穴掘形は一辺1mの隅丸方形であるが、他のものは南北が1.2~1.4mの隅丸長方形となっている。柱痕跡は直径15~20cmで、掘形埋土には互層に土を入れており、丁寧なつくりである。掘形埋土からは7世紀代の須恵器片が出土している。

**掘立柱建物 S B 3012** E 1区北東部の拡張した場所で検出した桁行3間以上、梁行2間の南北棟建物で、ほぼ正しく方位に揃えている。南妻柱穴は削平のため、確認できなかった。柱間寸法は、桁行6尺(1.8m)等間、梁行6尺(1.8m)等間である。柱穴掘形は60~90cmの隅丸方形のものが多いが、50cm四方のものもあり、ばらつきが大きい。ただし、遺構の残存状況が南の方ほど悪く、柱穴の深さ10cmしか残っていない。南側柱列は、かなり削平されていると考えられる。柱痕跡は直径25cm程度である。

**掘立柱建物 S B 3013** E 1 区西半中央で検出した東西 3 間の柱列である。方位は、S B 3011 同様に、北で東に 2 度振れる。調査区の壁際で検出したため、北に展開すると考え、掘立柱建物の南側柱列と推測した。柱間寸法は、6 尺 (1.8m) 等間。柱穴掘形は 30~50cm で、円形から隅丸方形と様々である。掘形埋土からは瓦器片が出土している。

**掘立柱塀 S A 3014** E 1 区南東の拡張した部分で検出した東西 3 基の柱列である。方位は東で南に 3 度振れる。他に組み合う柱穴がないため、東西方向にのびる掘立柱塀と推定する。柱間寸法は、7 尺 (2.1m) 等間。柱穴掘形は一辺が 70~80cm の隅丸方形である。

## 第 2 調査区 (E 2 区)

**掘立柱建物 S B 3021** E 2 区の中央で検出した東西 3 間、南北 1 間以上の掘立柱建物である。建物方位は北で西に 7 度振れる。北半が調査区外にあたるため、東西棟か南北棟かは明確ではない。柱間寸法は 3 間分で東西 4.8m であるが、柱間のばらつきが大きいので、等間にはならない。南北の柱間は 9 尺 (2.7m) である。柱穴掘形は一辺 60~90cm の隅丸方形で、西側柱列の方が大きいのは、遺構の残存状況によると考えられる。柱痕跡は不明。掘形埋土からは瓦器片が出土している。

**井戸 S E 3022A** E 2 区東端で検出した木組みの井戸である。掘形は径 3.4m の隅丸方形を呈して、深さ 3.5m である。この中に幅 60cm、長さ 1.1m、幅 30cm、厚さ 5cm の板を二段にし、内寸 105cm の方形の井戸枠を構築する。この木枠の外側には、湧水のために、10~20cm 程度の石を詰めて固定している。この井戸枠の上に、長さ 1.6~1.8m、幅 10~15cm の板を、各辺に 7 枚ずつ立て並べて、内寸 80cm の方形の井戸枠とする。この縦板同士は、楔で留めている。ここより上部は、後世に改修されており、S E 3022B として再利用されている。この井戸の南には、2.5m の範囲にわたって、石敷の一部が残っており、本来は井戸に伴うものと考えられる。

井戸掘形の埋土は、下段木枠の外側には人頭大の石を詰めており、透水性を高めている。その上の縦板木枠の外側は土で充填している。一方、井戸枠内には、玉砂利の小石を敷き詰めている。井戸枠内の埋土は、下段木枠内には礫混じり土が堆積し、和同開珎・萬年通宝 (760 年初鑄)・刀子が出土している。縦板木枠内には褐灰色粘質土が堆積し、瓦器が出土している。このように、S E 3022A は、中世に改修されながら利用されていたので、その構築時期は不明である。

**井戸 S E 3022B** E 2 区の S E 3022A は、S E 3022A を再利用する形で作られた縦板組の井戸である。S E 3022A の横板沿い (深さ 1m) に掘形を掘り、角材を 4 本立て、沿わすように板を縦に並べている。角材間は棧を入れて支える。横板木枠は幅 30cm、長さ 1m の板 4 枚を横板に組み、裏に板を沿わせて井戸枠内に土砂が入らないようにする。さらにその上には 20~30cm 幅板を各辺に重ねながら 5~6 枚縦並べる。上部が遺存しないので、高さは最大 60cm までしか確認できない。掘形は、礫混じり暗青灰色粘質土で埋めており、その上層に暗青灰色砂土で埋める。S E 3022B の掘形からは瓦器が出土しており、この改修は中世のものである。

**井戸 S E 3023** E 2 区の S E 3022 の西に隣接して掘られた石組井戸で、S E 3022 よりも新しい。1.5m の円形の掘形を掘り、ここに人頭大の川原石を積み上げて井戸とする。井戸の内寸は 55cm と小さい。深さ 1.2m までは掘削したが、井戸内に巨石が落とし込まれていたため、井戸底の確認はできていない。また、井戸掘形から黒色土器が出土していることから、平安時代以降の井戸である。

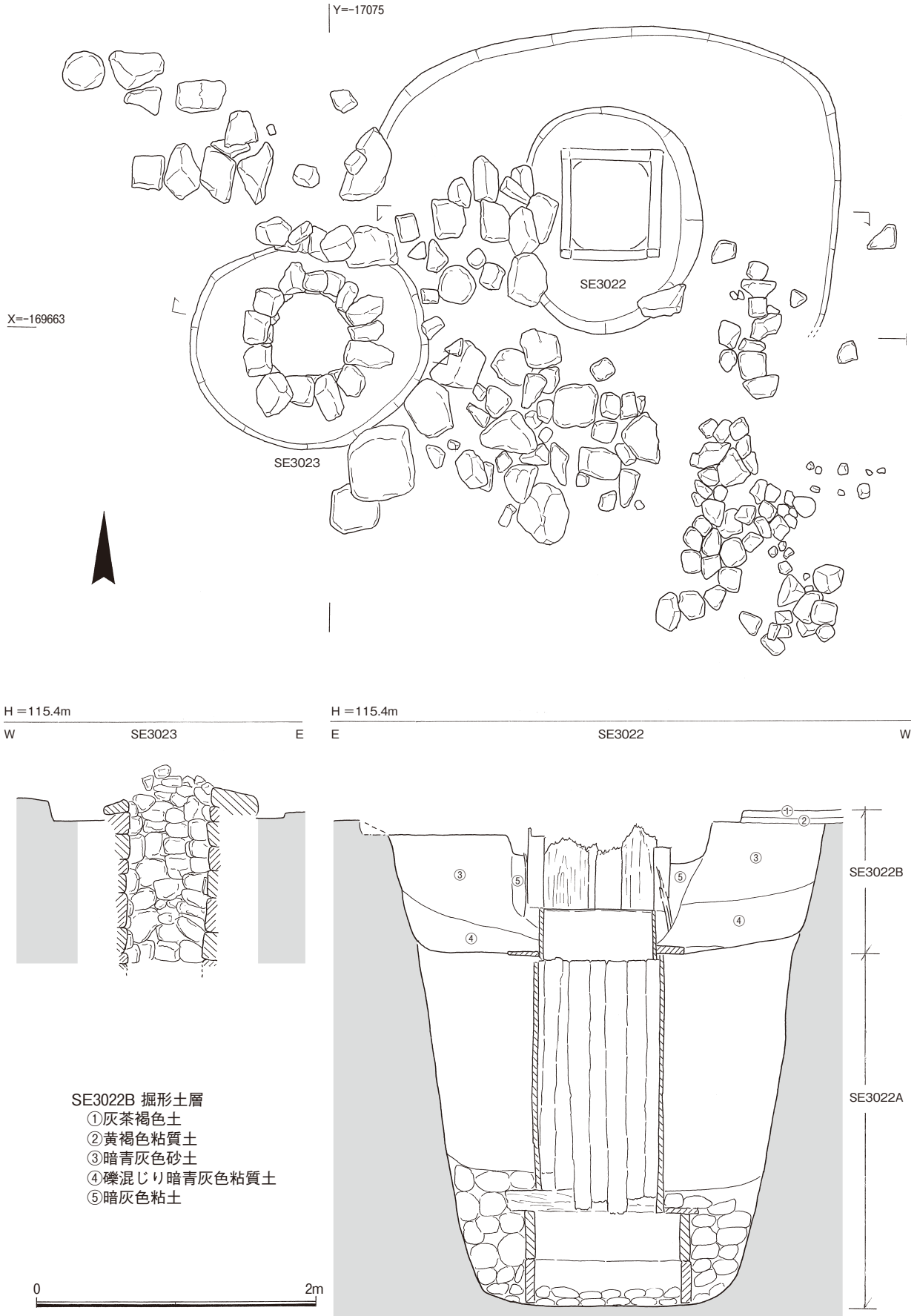


図3-38 第2調査区(E2区)井戸SE3022・3023周辺平面・断面図(S=1/40)

### 第3調査区

**素掘溝 S D 3031** E 3 区の中央で検出した北東から南西へ流れる斜行溝である。幅1.1～1.5m、深さは南端で50cmである。埋土は上から黄灰色砂質土・暗灰色粘質土・山土混じり暗灰色土と堆積する。谷地形に向けて掘削されていることから、排水用の溝と考えられるが、出土遺物がないので、時期は特定できない。

### 第4調査区

**谷 S X 3041** E 4 区では地山確認のため黄褐色山土（整地土）より下層を掘り下げて調査を行った。黄褐色山土（整地土）より下層では、上からⅠ層（暗灰色粘質土）・Ⅱ層（暗青灰色粘質土）・Ⅲ層（暗青灰色砂土）・Ⅳ層（暗青灰色粘質土・灰黒色有機土・緑灰色粘土）・Ⅴ層（暗青灰色粘土・暗青灰色砂土）・Ⅵ層（青灰色粘土）と堆積する。

整地直下のⅠ・Ⅱ層は、やや南に下がるもののほぼ20～35cmの厚みで水平に堆積しており、整地土同様に、Ⅰ・Ⅱ層も整地土であった可能性が高い。この下層のⅢ層は、南にいくほど厚く堆積し、調査区南端では110cmの厚みをもつ。Ⅳ層も南にいくほど厚みを増し、南端では70cmの厚みをもつ。このⅣ層は、遺物の取り上げ状況からみて、3層に分かれると考える。Ⅳ層内の下層には全域にわたって灰黒色有機土が堆積するが、基準線より2.5～5.5mの範囲のみ、灰黒色有機土の下に緑灰色粘土が堆積する。

Ⅴ・Ⅵ層は谷の下層にある河川の堆積土である。Ⅴ層は2層に細分され、暗青灰色粘土は2.5m位置では70cmの厚みで、さらに南には厚く堆積すると推定されるが確認できていない。

このように谷 S X 3041は、谷地形の自然河川の堆積（Ⅴ～Ⅵ層）が堆積し、その上に、Ⅲ・Ⅳ層を人為的に埋め、最終的にはⅠ・Ⅱ層の整地を行い、黄褐色山土（整地土）でパックされることになる。Ⅲ～Ⅵ層からは木簡や土器などが出土しているが、その多くは、Ⅲ・Ⅳ層からの出土である。自然河川の堆積（Ⅴ～Ⅵ層）からの出土は、調査時の混入の可能性も考えられ

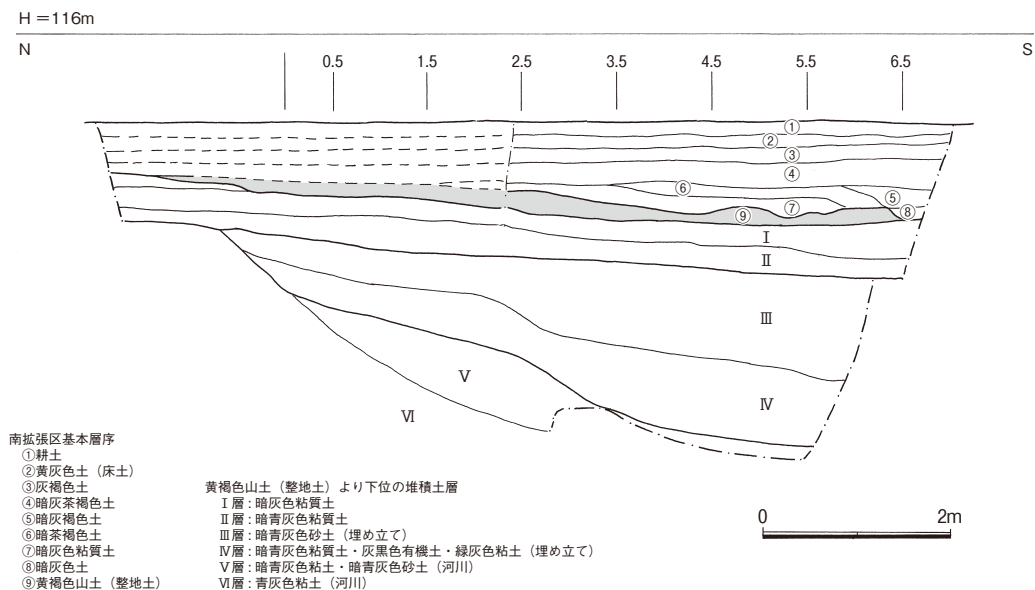


図3-39 第4調査区（E 4区）谷 S X 3041東壁 土層断面図（S = 1/80）

るが明確ではない。Ⅲ層より下位の土層から出土する土器では、上層と下層の土器が接合することや、土器形式に大きな違いがみられないことから、河川の埋没（Ⅴ～Ⅶ層）と埋め立て（Ⅲ・Ⅳ層）は、比較的短期間に行われたと考えられる。一方、Ⅰ・Ⅱ層はほぼ水平堆積することや、出土遺物があまりないことからみて、黄褐色山土（整地土）と一連の整地作業の可能性がある。この黄褐色山土出土土器は、Ⅲ～Ⅵ層出土土器よりも新しいことから、Ⅲ・Ⅳ層の埋め立て作業とⅠ・Ⅱ層の整地及び化粧土にあたる黄褐色山土の整地は、一連の作業ではなく、一定の時間差があった可能性が高い。

（納谷守幸・相原嘉之）

## 第4章 出土遺物

西橘遺跡では多数の遺物が出土した。出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、土製品、瓦、金属器、木製品、骨角製品、植物遺存体、木簡、動物遺存体、銭貨、鞆羽口、鉄滓、石製品、玉類、石材などがある。本章では土器類、木簡、木製品、骨角製品、植物遺存体について報告し、動物遺存体は次章で報告する。その他の遺物については、今後、準備が整ったものから補遺として報告する予定である。なお、東地区第2調査区（E2区）井戸S E3022Aから出土した銭貨（和同開珎と萬年通宝）については、松村恵司による詳細な報告・分析がある。参照されたい。

松村恵司2005「飛鳥の古和銅銭」『飛鳥文化財論攷－納谷守幸氏追悼論文集－』納谷守幸氏追悼論文集刊行会

松村恵司2007「和同開珎をめぐる諸問題」『和同開珎をめぐる諸問題（一）－平成17年度研究集会報告書－』科学研究費補助金  
基盤研究（B）（2）『富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究』

### 第1節 土器類

土器類は各調査区から出土しているが、細片が多く、遺構の時期等を特定できる遺物が少ない。ここでは、比較的まとまって出土している、北地区の第6調査区と東地区の第2・4調査区で出土した土器及び墨書土器について報告する。

#### A. 第6調査区（N6区）

##### 土坑S K1061出土土器（図4-1～2）

土師器・須恵器のほかに、調査時の混入と思われる13世紀代の瓦器椀小片2片と平安時代の灰釉陶器椀2片がある。須恵器の遺存状態が良好なのに対して、土師器の遺存状態が悪く、器表面の暗文や調整方法の観察はほとんど不可能にちかい。

##### 土師器

土師器には、杯A・B・C・G・H、皿A、高杯B・H、鉢H、甕A・B・C、韓竈があり、出土量としては相対的に杯類などの供膳具が甕などの煮沸具を上回っている。

**杯A**は平らで大きな底部と外上方にのびる口縁部からなり、口縁端部を内側に丸く小さく肥厚させる。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。法量的には口径18.2～19.3cm、器高5.0～5.8cmの杯A I（2～4）と、口径16.4cm、器高4.8cmの杯A II（1）がある。口径指数25.5～29.3となる。

**杯B**（5）は、杯Aに断面長方形の高台をはりつけたもので、高台は内端面が接地面となり、外方に張り出している。口径19.3cm、器高7.0cm。

**杯C**は、小さな平底とやや内湾気味に上方にのびる口縁部からなり、口縁内端部が内傾し、時には、沈線状になる特徴をもつ。色調は淡赤褐色を呈し、精良な粘土を使用する。法量的には口径15.4cm、器高約4.6cmのC I（10）、12.7～12.9cm、器高.0cm前後のC II（7～9）、口径10.1cm、器高2.6cmのC III（6）がある。

**杯H**は丸底状の底部と短く外上方にのびる口縁部からなり、底部全面のヘラケズリ、口縁部のヨコナデが特徴である。従って底部と口縁部の境界には明瞭な稜を生じる場合が多い。肌色を呈し、胎土には多くの赤褐色粒子が含まれる。法量では、口径15.6cm、器高約4.2cmの杯H I（13）と、口径11.9～12.9cm、器高3.3～3.5cmの杯H II（11・12）とがあり、各々杯C 1・C II



の法量に対応している。また、11の内面には漆が付着しており、パレットとして使用されたと考えられる。

**高杯**にはBとHがある。高杯B（14）の杯部は杯Cを浅くした形態をとり、脚部は面取りを施さないものである。高杯Hは杯Hに脚をとりつけた形態となり、筒部を中実につくり、外面をヘラケズリによって面取りし、脚部内面もヘラケズリを施す。なお、高杯Aは出土していない。

**皿A**は広く大きな底部と短く内湾気味に立ち上がる口縁部からなり、口縁端部は内側に丸く肥厚する。口径は22.2～22.8cmであるが、器高は3.5cm前後のもの（15・16）と2.2cmのもの（17）がある。

**甕A・B**はいずれも小片である。甕Aは、球形の胴部と短く外反する口縁部からなる。全形の窺えるものはないが、口縁端部には内側にわずかに肥厚するものと、肥厚せず尖り気味に丸くおさめるものの二種がある。甕Bは甕Aに把手のついたもので、把手の接合には、挿入するものと貼り付けるものの二種がある。甕C（18）は、長い円筒状の体部と外反する口縁部からなり、口縁内端面は断面三角形となる。体部内外面にハケメ調整を施し、口縁内外面はハケメをナデ消している。

**須恵器**

須恵器には、杯A、杯B・同蓋、杯G・同蓋、皿A、皿B・同蓋、椀A、椀B・同蓋、高杯、鉢A（鉄鉢）、鉢F（すり鉢）、壺A（薬壺）、壺C（小型短頸壺）、壺（東海系扁壺）、壺M（高台付）、壺蓋、平瓶、盤A、甕A・甕Bがあり、土師器と同じように供膳形態をとる器種の出土量が大半を占めている。

**杯A**（38）は平底の底部と外上方にのびる口縁部からなり、底部にはロクロケズリを施す。

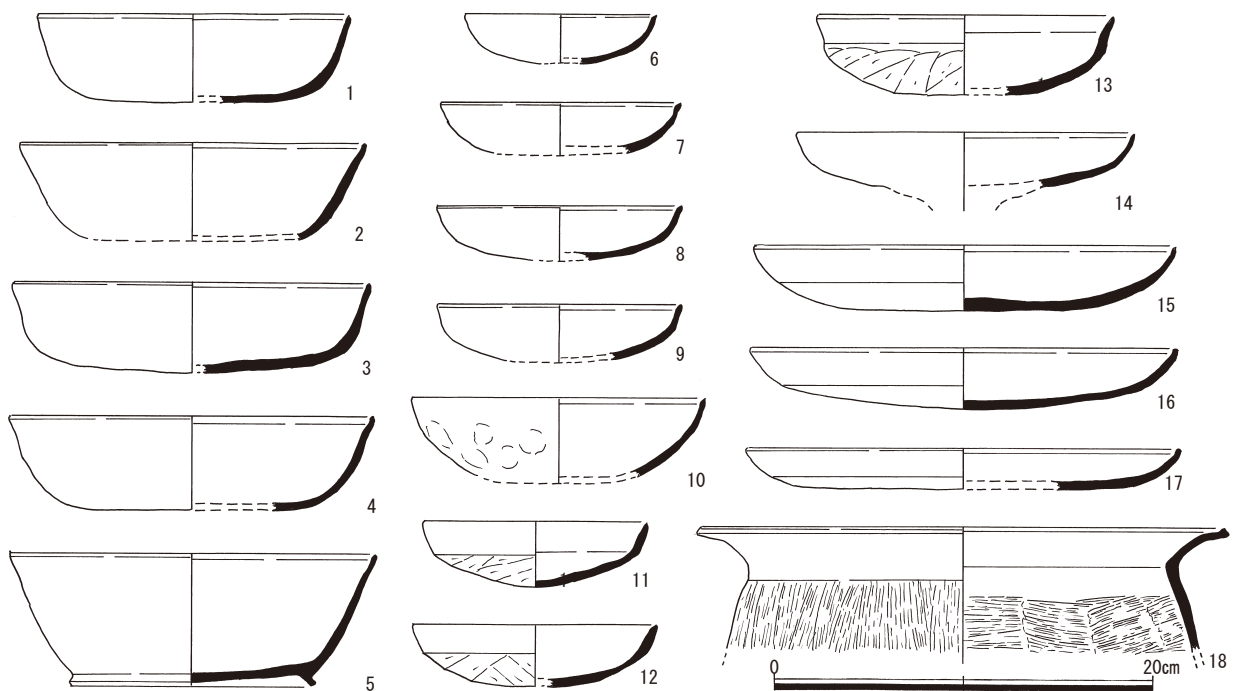


図4-1 北地区 第6調査区（N6区）土坑S K1061出土土器①（1：4）

淡青灰色を呈し、胎土に白色砂粒を含むものの堅緻である。

**杯B** (39～50) は杯Aの底部に高台を貼り付けた形態をとり、法量では口径13.0～13.8cm、器高4.3～5.1cmの一群と、口径15.2～17.0cm、器高4.2～5.0cmの一群に分類できる。色調・形態・調整手法は多様性が認められ、色調や焼成の状況では、乳白色を呈し軟質なもの (39・44・45)、灰色ないしは淡青灰色を呈しやや軟質なもの (40・41・46・47・50)、青灰色を呈し硬質なもの (42・43・48・49) に分類できる。杯部の形態では、丸みをもち椀状になるもの (39) と、丸みをもたないものに大別され、後者には口縁部が外反しながら上方にのびるもの (40・42・47・49) と、ほぼ直線的にのびるもの (41・45・46・48) がある。高台の高さには5mm以下のもの (40・47)、8mm前後のもの (41～46)、1.5cm以上のもの (39) がある。また、高台の設置面では内端面が設置面となるもの (39～44・46)、外端面がなるもの (45・47)、平坦面となるもの (48～50) などがある。底部外面の調整にはロクロケズリを施すものが大半であるが、ヘラキリのみのもの (42・45・46) が少量ある。

**杯B蓋** (27～31) は頂部中央に宝珠形ないし円形のツマミを貼り付けたもので、身受けのかえりがあるもの (27～30) と、かえりを省略し口縁端部を下方に折り曲げたのみのもの (31) の2種類があり、かえりはすべて口縁内端面より上方に貼り付けられている。受け部径14.2～14.4cm、器高2.8～3.7cmの一群と、15.2～15.8cm、器高3.3～3.7cmの一群にわかれ、色調や焼成の状況には乳白色を呈し軟質なもの (28・30・31) と、青灰色ないし淡青灰色を呈し硬質なもの (27・29) がある。ツマミには主頭形 (27)、宝珠形 (28・30)、宝珠形の稜が発達したもの (29)、円形 (31) のものなど種々の形態が認められ、また、口径に比してツマミ形の小さなもの (28・30) がある。かえりの省略される (31) は、他のものに比較して器高も低く、頂部外面にはカキ目が施される。

**杯G** (32・33) は小さな平底の底部と外上方に短くのびる口縁部からなる。32は暗青灰色を呈し、胎土に石英などの白色砂粒を多く含むが、硬く焼成されている。底部外面はヘラキリのみである。口径9.3cm、器高2.9cm。33は淡青灰色を呈し、胎土に黒色砂粒を多く含む。底部の調整はヘラキリのみで、口径9.9cm、器高4.0cm。

**杯G蓋** (19～23) は身受けのかえりと頂部に貼り付けた宝珠形ツマミを特徴とする。かえりは口縁端面よりわずかに下方に突出するもの (23) 1点のほかは、いずれも口縁内端面より上方に貼り付けられている。器高は2.7～3.1cm、受け部径は8.8～10.2cmである。ツマミには宝珠形の稜の発達したもの (19) や、丸くおさめたもの (20) などがある。淡青灰色ないし青灰色を呈し、焼成はいずれも良好である。胎土に砂粒を多く含むもの、外面に自然釉のかかるもの (19) や、白色粒子の多いもの (23)、頂部外面に「川」状のヘラ記号のあるもの (21) などがある。

**杯X** (34) は平底と内湾する口縁部からなり、底部はヘラキリのままで未調整である。青灰色を呈し、口径11.2cm、器高3.1cm。

**皿A** (35) は凹み底の底部と短く外上方にのびる口縁部からなり、底部にはロクロケズリを施す。杯Aとも考えられるが、最大器高が2.9cmしかないことから、小型の皿として分類する。

**椀A** (36) は小さな平底と外上方に長くのびる口縁部からなる。底部をヘラキリ、口縁内外面にロクロケズリを施す。杯白色を呈し、外面には自然釉がかかる。胎土には黒色粒子を多く含むが、焼成は良好である。口径11.8cm、器高11.8cm。

**椀B** (37・51) には大型のものと小型のものがある。小型の椀B (37) は、椀Aに断面長

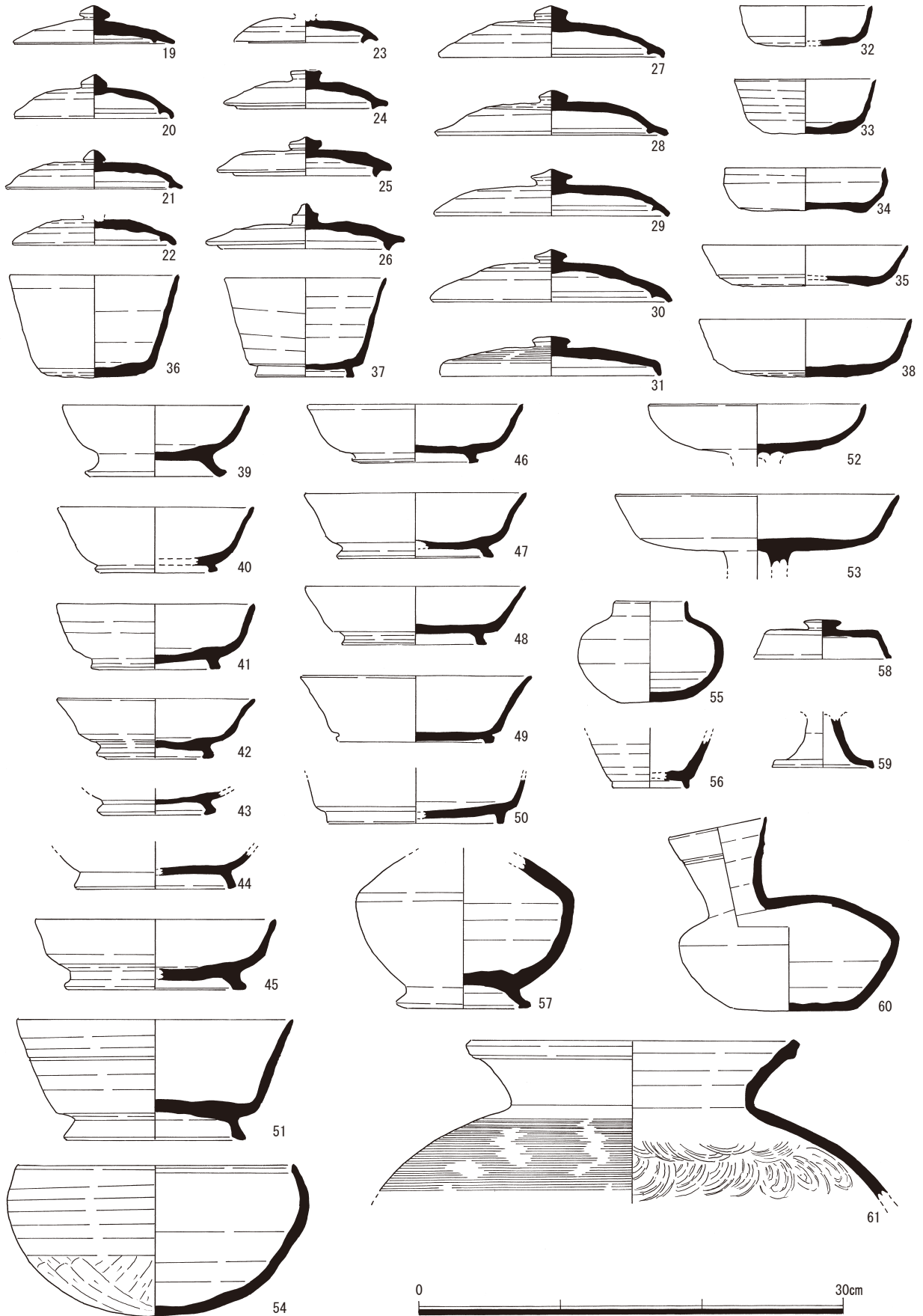


图4-2 北地区第6調査区(N6区)土坑S K1061出土土器②(1:4)

方形の高台を貼り付けたものである。底部外面の調整はロクロケズリである。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。口径11.4cm、器高7.1cm。大型椀B（51）は、口径19.4cm、器高7.0cmのあげ底状を呈する椀に高い高台を貼り付けたものである。杯褐色を呈し、焼成は堅緻である。底部外面はロクロケズリの後、ロクロナデを施し、口縁部には一条の沈線をめぐらす。高台高は1.6cmあり、形態は杯Bの47と類似している。

**椀B蓋**は（24～26）は、かえりがいずれも口縁内端面より下方に突出するもので、つまみには主頭形・宝珠形・円形などがある。受け部径10.6～11.1cm、器高2.7～2.8cmの一群と、受け部径13.2cm、器高3.2cmのものに分かれる。いずれも白灰色ないし乳白色を呈し、焼成は堅緻であり、頂部外面に黄緑色の自然釉のかかるもの（24・25）がある。

**高杯**（52・53・59）には杯部と脚部がある。52は丸みをおびた浅い椀状の杯部をなす。口径15.2cm、53は皿状の杯部をなすもので、口径19.8cm。いずれも無蓋の高杯と推定され、脚部を欠失している。脚（59）は小型の高杯の脚でスカシは認められない。おそらく杯Gタイプの杯部となるものと推定される。

**鉢A**（54）は丸底と内湾する口縁部からなり、口縁内端は平端面をもつ底部外面に横方向のヘラケズリ、その他についてはロクロナデを施す。

**平瓶**（60）は平底の底部・扁球形の体部・体部の片方から細くのびる口縁部からなる。底部はヘラキリのまま未調整、体部下反をロクロケズリの後に、体部から口縁部にかけてロクロナデを施し、口縁部外面に一条の沈線を巡らしている。

**壺C**（55）は球形の胴部と内湾気味にのびる短い口縁部とからなる。底部は未調整、体部下半はロクロケズリ、上半から口縁部にかけてはロクロナデを施す。青灰色を呈し、焼成は良好である。壺M（56）は断面三角形を呈する高台を貼り付けた小型壺の下半部である。外面に淡灰褐色の自然釉がかかる。長頸壺（57）は高台を貼り付けた平底状の底部と肩の張った体部からなり、口縁部を欠く体部下半をヘラケズリの後、体部はロクロナデを施す。高台は設置内を内側に引き出す。壺蓋（58）は短頸壺の蓋である。平らな頂部と斜め下方にのびる口縁部からなり、口縁端部を外側に引き出しながら平坦におさめる。ツマミの扁平で上半部に稜をもっている。

**甕**にはA・Bがあるが、全形の復元できるものはない。甕A（61）は、口縁端部を外側に肥厚させ、角張っておさめる。体部外面にカキ目を施し、内面には青海波文を残す。口径23.0cm。

## B. 東地区 第2調査区（E2区）

### 1. 井戸SE3023埋土出土土器（図4-3）

井戸の埋土からは少量の土器・土製品が出土した。遺物は7世紀から10世紀にかけての時期のものが含まれるが、ここでは10世紀代の遺物を中心に解説する。土器類には土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器のほか陶硯がある。

#### 土師器

土師器には、杯A（1～8）、杯B（9）、皿A、盤、甕A（14）がある。

杯Aはいずれもe手法にて調整<sup>(1)</sup>し、口縁端部を丸く肥厚させる形態（1～5）と、肥厚せず丸くおさめるもの（6～8）がある。口径は12.7～16.2cm、器高は2.9～3.4cmまであり、口径からは13cm前後、14～15cm、16cmを越えるものの3種に分類できる。杯B（9）は1点胴のみである。e手法で調整し、底部高台を欠いている。口径は15.9cmである。皿Aにはb手

法で調整した器高の薄いもの1個体がある。盤は口縁部の小片のみである。甕A(14)は球形の部と外上方にのびる口縁部からなり、口縁端部を内側に丸く肥厚させている。内外面ともにナデ調整を施す。外面全体に厚く煤がかかり、内底面近くに焦げ付きが残る。

### 黒色土器

黒色土器にはA類杯・碗、B類碗がある。図示した土器は、いずれも金属器を模倣した形態をとる。10はA類碗で、平らな底部と内湾気味にのびる口縁部からなり、口縁端部は内傾面をもつ。外面は底部を含めて横方向、内面は底面をジグザグに磨いた後、口縁部をラセン状に丁寧に磨く。口径10.2cm、器高3.7cmである。11はB類碗の小型品である。内面は底面を平行に磨いた後に、側面をラセン状にミガキ、外面も底面を平行にミガいた後に、側面を四方向に分けて井桁状に丁寧に磨いている。

### 土製品

製塩土器は胎土に砂粒を多く含み、器壁は1cm弱の厚さであるが、図化できるものはない。

陶硯(13)は円面硯の小片で、山中分類によれば無提式の圈足硯となる。スカシは格狭間状となるが、外提や脚を欠いている。灰色をした胎土にほとんど砂粒を含まず、堅緻で、全面に自然釉がかかる。

## 2. 井戸S E 3023掘形出土土器(図4-3)

井戸掘形からは土師器杯A・高杯・甕、須恵器高杯・鉢・壺、黒色土器A類杯A、灰釉陶器碗、新羅土器が出土した。土師器杯Aはc手法にて調整した小片がある。また、この他に胴部上半に人面墨書をした奈良時代の甕片が出土している。

**新羅土器**(12)は長頸壺の口縁部で、口縁外面に二条の凹線をめぐらす。胎土は暗紫色を呈し、緻密で内外面には自然釉がかかる。7世紀後半から8世紀初めにかけての年代が考えられる。

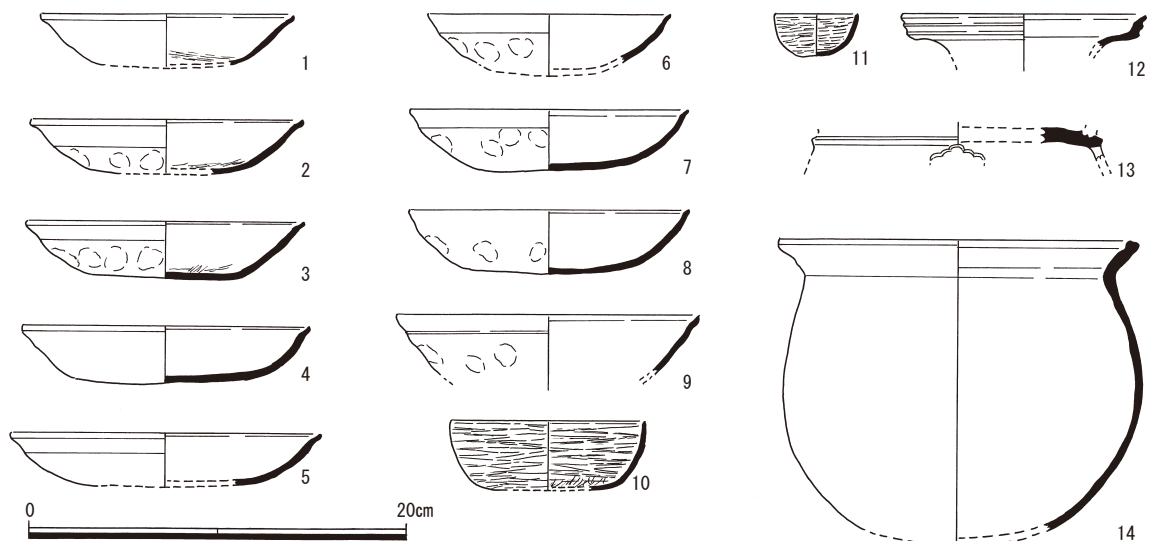


図4-3 東地区第2調査区(E2区)井戸S E 3023出土土器(1:4)

## B. 東地区第4調査区（E4区）

## 1. 谷（S X3041）出土土器（図4-4～12）

S X3041は橋寺旧境内の西辺外を谷頭とする、西に向かって開く谷である。丘陵頂部にちかい第1・2調査区では地山上で飛鳥時代から中世までの遺構が展開するが、第4調査区では、南に下る谷を埋めて整地を行っている。調査所見によると、最下層（V・VI層）に自然河川の堆積があり、この上を最大1.8mにわたって木簡・土器などを包含する粘土層（Ⅲ・Ⅳ層）が堆積する。この堆積土を人工的な埋め立て土とみるか、自然堆積とみるかは難しいが、後に記すように、土器形式がまとまっていることや、各層から木簡が出土することから、埋め立て土の可能性が高い。さらに上層にはⅠ・Ⅱ層の整地土があり、黄褐色山土（整地）で全体が覆われている。

この河川堆積より上層で、黄褐色山土（整地）で覆われた土層は大きく4層（Ⅰ～Ⅳ層）に分層でき、各層はさらに細分されるが、上層の土器と下層の土器が接合することや、出土層位による時期差がみられないこと、さらに木簡も各層から出土することから、ここでは一括して扱う。

## 土師器

土師器には、杯A・C・D・G・H・X、椀B、皿A・D・G・H、高杯B・D・G・H、鉢A・B・D・H・X、蓋、壺A、同蓋、甕A・B・C、甌、竈などの器種がある。これらのうち供膳形態をとる器種は、器形に加え胎土・色調・調整手法から4群に分類することができる。各群の特徴を記すと以下のようになる。なお、ここでの群別は、平城宮の群別とは異なる。

**Ⅰ群土器** 色調は赤褐色を基調とし、胎土は精良で、内面には暗文を施す。また、外面のヘラミガキは各々の幅が1mm以下と狭い。このグループには、杯A・C、皿A、高杯B、椀B、鉢A、壺Aと蓋の一部が含まれる。

**Ⅱ群土器** 色調は明るい黄褐色土を基調とし、胎土は精良である。内面には暗文を施さず、外面のみにヘラミガキを施す。各々のミガキの幅は1mm前後あり、Ⅰ群土器に較べて幅広いのが特徴である。杯D・高杯D・皿D・鉢Dがこれにあたる。

**Ⅲ群土器** 色調は淡黄褐色ないし淡い赤褐色を基調とし、胎土は精良であるが、赤褐色粒子を含む場合が多い。口縁部にヨコナデ、底部にヘラケズリを施して整形する。杯H・皿H・高杯H・鉢Hがこれにあたる。

**Ⅳ群土器** 色調は淡い黄褐色あるいは赤褐色を基調とし、胎土には石英・長石などの砂粒を多く含む。口縁部下半から底部にかけては指オサエのまま未調整である。従って、底部から口縁部に向かって斜上方に成形時の粘土紐の痕跡を残すものが多い。杯G・皿G・高杯Gがこれにあたる。

**杯A（1・2）**は、内面を二段放射暗文と底部ラセン暗文、外面は底部ちかくまで全面に幅の狭いミガキを施す。平底の底部に口縁がほぼ真っ直ぐにたちあがるもの（1）と、大きく開くもの（2）があるが共に、口縁端部は杯Cのような内面に小さな面をもつ。口径16.1～16.3cm、器高5.4～5.5cmである。径高指数33.5。

**椀B（3・4）**は、共に深い椀形をし、外面はケズリの後にミガキを施し、内面は一段放射暗文+ラセン暗文のもの（3）と、二段放射暗文+ラセン暗文のもの（4）がある。口縁はやや強くナデすることによってわずかに外反させ内面に面をもつ。4は焼成がややあまく、乳灰白色を呈する。口径16.0～16.9cm、器高7.5～8.5cmである。



图4-4 東地区第4調査区(E4区)谷S X3041出土土器①(1:4)

**杯C**（5～28）は法量によって、I（口径14.8～16.8cm、器高4.2～5.6cm）、II（口径11.0～12.6cm、器高2.6～4.0cm）、III（口径9.0～10.8cm、器高2.6～3.6cm）があるが、II・IIIについては口径に幅があり、必ずしも明瞭に区分できない。杯C Iには底部外面が未調整のもの（5・6）、ミガキを施すもの（7・8）、ヘラケズリを施すもの（9～12）がある。これに対して、杯C II・III（13～28）は大半が底部外面未調整であるが、21のみヘラケズリを施す。また、27は内面に漆が厚く付着しており、暗文は観察できない。これら杯Cは焼成・色調によって、軟質で赤褐色に発色するもの、硬質で茶褐色に発色するものに分けることも可能であるが、口縁形態には、内面に面をもつもの、つまみあげるもの、外反するものなどバラエティーがあり、焼成・色調の特徴とは必ずしも一致はしない。

**杯D**は（29～38）法量によってI（口径17.2～17.5cm、器高5.4～5.6cm）、II（口径14.5～14.7cm、器高4.0～5.0cm）、III（口径11.6～12.2cm、器高3.1～3.7cm）に分けられる。杯D I（29・30）は内湾気味にのびる口縁をもち、口縁外面を強くヨコナデする。口縁端部は内面に面をもち、つまみあげる。底部外面はヘラケズリの後に幅の広い緻密なミガキを施す。内面に暗文はない。杯D II（31～33）も形態的には杯D Iと同じで、外面に緻密なミガキを施す。杯D III（34～38）も口縁まで磨くものが多く、口縁外面は強くナデるが、口縁端部が外反気味のもの（35）や丸くおさめるもの（37）がある。

**杯G**（42～59）は、口径によって大きくI（口径12.0～14.3cm）、II（口径9.2～10.0cm）の大小にわけられる。ただ中間にあたる口径11.0cm、器高3.1～3.2cmのもの（44・45）もあり、厳密には口径による分類は難しい。しかし、径高指数をみるとI II共に30前後のもの（42～48）、25前後のもの（49～53・55～58）に分けることが可能であり、大型のものが径高指数25前後のものである傾向がある。杯G I（46～59）のうち口径12.3cm以上のものは径高指数25前後で、それ以下のものは30前後である。口径形態には外面に面をもつもの、内面に面をもつものなど様々なものがある。杯G II（42～45）は、43が口径10.0cm、器高3.6cmと深い形態をとるものを除けば、径高指数30前後である。口縁はナデあげるだけである。

**杯H**（60～79）は、口径が9.5～13.8cm、器高2.5～4.2cmのものまで存在する。杯H II（口径12.1～13.8cm）と杯H III（口径9.5～12.1cm）に分けることも可能だが、今資料ではほぼ均一に出土しており、法量による分類は難しい。口縁部を強くヨコナデし、底部外面をヘラケズリする。全体的な形態は丸底の底部から斜めにまっすぐ開く口縁をもつものが主流だが、平底にちかいものや外反する口縁をもつものもある。また、口縁と底部との境に明瞭な沈線をもつものや、この段もケズリ落としてしまうものなどがあるが、その要因としては個体差、工人差、地域差などが想定される。

**杯X**（39～41）。39は内湾する口縁をもち端部は内側に丸くおさめる。砂粒の多いやや粗い胎土で、色調は暗赤茶色である。内面と口縁外面をナデ調整し、底部外面を粗いヘラケズリする。口径10.2cm、器高3.0cm。40は杯Gにちかい胎土をしているが、口縁をヨコナデし、底部外面を細かくヘラケズリする。内面に暗文を施す。底部外面に「卍」の針書きがある。口径9.5cm、器高2.9cm。41は杯D同様に口縁端部外面を強くナデ、椀にちかい形態をとる。外面は全面ミガキ調整であるが、杯Dよりも粗く、内面の暗文も幅広く、間隔も大きい。胎土は黒色砂粒を含むやや粗い土で位茶褐色を呈する。

**高杯B**（80～84）は脚部まで遺存するものは少ないが、80はほぼ完形である。杯部は内湾気味にのびる口縁をもち、口縁部外面をヨコナデする。内面には放射暗文+底部ラセン暗文を



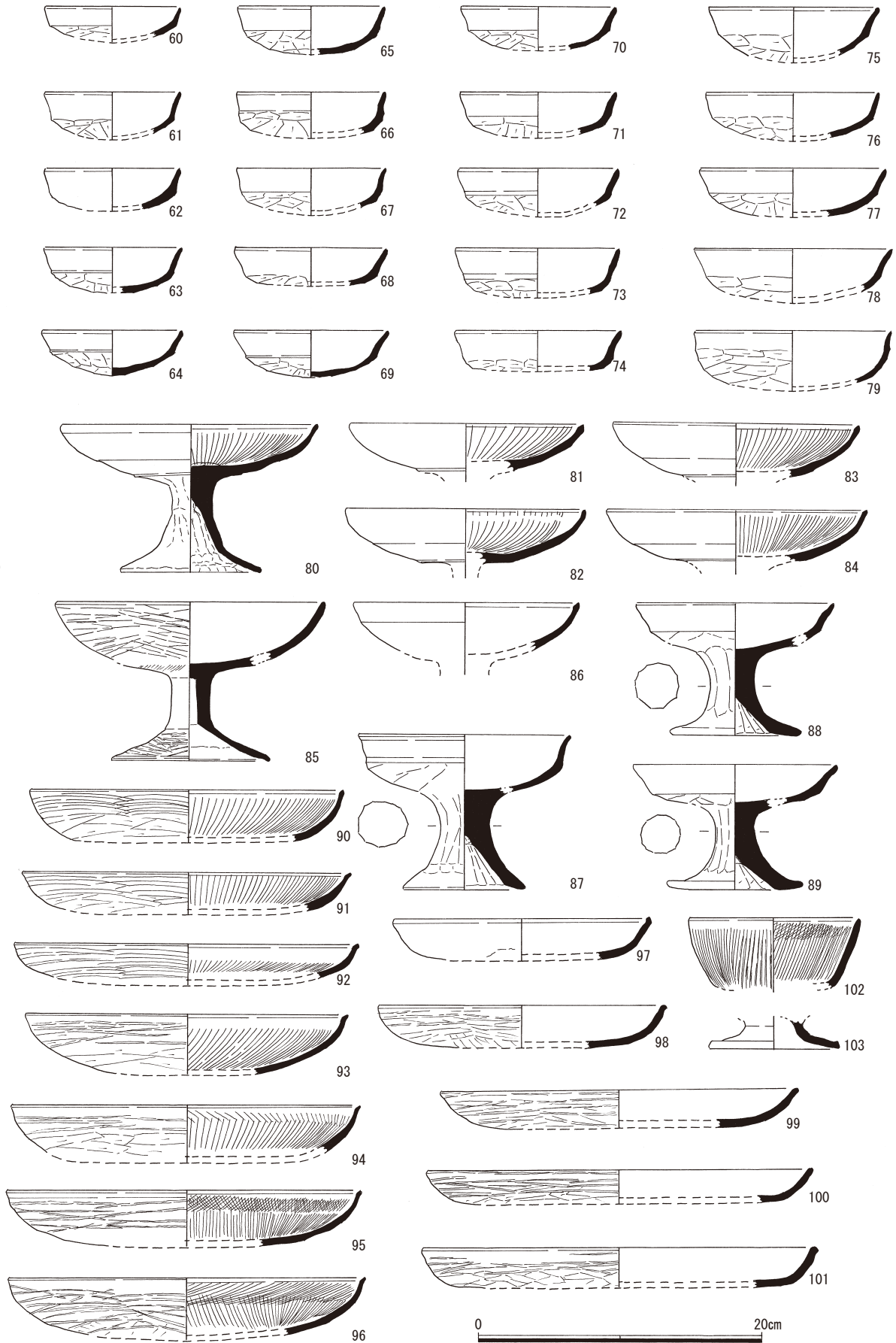


图4-5 東地区第4調査区(E4区)谷S X3041出土土器②(1:4)

施す。脚部は杯部と貼り付けで接合し、裾部をハ字形に大きく開く。内面は絞り痕跡、裾部内面には指頭圧痕を残す。口径16.4～18.2cmで、80の器高は10.4cmである。

**高杯D** (85) は、II群土器である杯Dに脚部が付く形態である。杯部および脚裾部の外面には幅の広いミガキを緻密に施し、杯部内面はナデ調整である。口縁は内湾気味にのびる。脚筒部内面はまっすぐにヘラケズリしているが、裾部内面はナデ調整である。口径18.9cmである。

**高杯G** (86) は、IV群土器である杯Gに脚がつく。脚部は欠損しており、杯部のみであるが、口縁は大きく開きヨコナデする。端部は内面に小さな面をもつ。口径15.8cmである。

**高杯H** (87～89) は、III群土器である杯Hに脚を貼り付けたものである。杯部は口縁底部外面を不定方向にケズリ、口縁はヨコナデする。口縁は外側にまっすぐに大きく開くもの(88・89)、杯体部から真上に屈曲し、外反しながらのびるもの(87)がある。脚部は外面を縦方向に11～14面のヘラケズリし、裾部をヨコナデする。内面はヘラでえぐるように削っており、中実である。口径13.9～14.8cm

**皿A** は、器高が3.0～3.7cmの低いもの(90～92)と、4.0～4.4cmの高く浅鉢状の形態をとるもの(93～96)に大別できる。前者は平らな底部と内湾気味にのびる口縁からなる。端部は内面に面をもつ。外面調整はすべて、底部をヘラケズリし、口縁部にミガキを施し、内面は一段放射暗文である。一方、後者は丸底の底部に湾曲しながらのびる口縁をもち、端部は内面に小さな面をもつ。外面調整は前者同様、底部をヘラケズリし、口縁部にミガキを施すが、内面は(93)を除いて二段放射暗文である。前者は口径22.0～24.2cm、後者は口径22.6～25.1cmで、I群土器である。

**皿D** (98～101) は平らな底部から屈曲しながらまっすぐ開く口縁をもち、端部は丸くおさめる。外面調整は底部ヘラケズリで口縁をミガキ調整する。内面はナデ調整である。口径20.0cmのもの(98)と25.0～27.2cmのもの(99～101)がある。II群土器である。

**皿G** (97) はIV群土器で口縁内外面をナデ調整し、底部外面は未調整である。口縁端部はやや丸く内側に小さく折り曲げる。口径17.9cm、器高3.0cmである。

**椀** (102) は、口縁の立ち上がりがきつくと、ややコップ形にちかい形態をとる。口縁端部にナデによって上方につまみあげている。内面は二段放射暗文、外面はケズリの後に縦方向のミガキを施す。口径11.9cm。I群土器である。103は椀Bの脚部である。杯部が欠損するが、大きく開いた脚部がふんばる。

**蓋** は器形的に4つに分けられる。104～110は丸みをおびた天井と大きくひらく口縁をもち、円柱状のツマミがつくものと思われる。外面調整はすべてミガキを施しているが、内面については、暗文がなく、ナデ調整のもの(104・105・109・110)、一段放射暗文のもの(106・107)、二段放射暗文のもの(108)がある。いずれもI群土器である。口径はI(22.0cm)、II(16.6～18.4cm)、III(12.0cm)、IV(8.2cm)の4群にわかれる。111～114は、平らな天井部から真っ直ぐのびた口縁をもつ。外面を緻密なミガキを施し、内面はナデ調整である。口径10.0～10.7cm、器高3cm前後で、II群土器に属する。115～118は大きく開く口縁をもち、端部は大きな面をもつ。外面を緻密なミガキを施し、内面はナデ調整である。口径11.0～15.2cmのI群土器である。

**壺A** は(121)で、大きく張った肩部と直立する口縁からなる。口縁端部は水平な面をもつ。蓋同様に外面は体部にミガキ調整、口縁部に暗文を施し、内面はナデている。口径13.5cm。これに対応する蓋(119・120)は共に器高の高い形態で、外面に緻密なミガキ調整、内面にナ

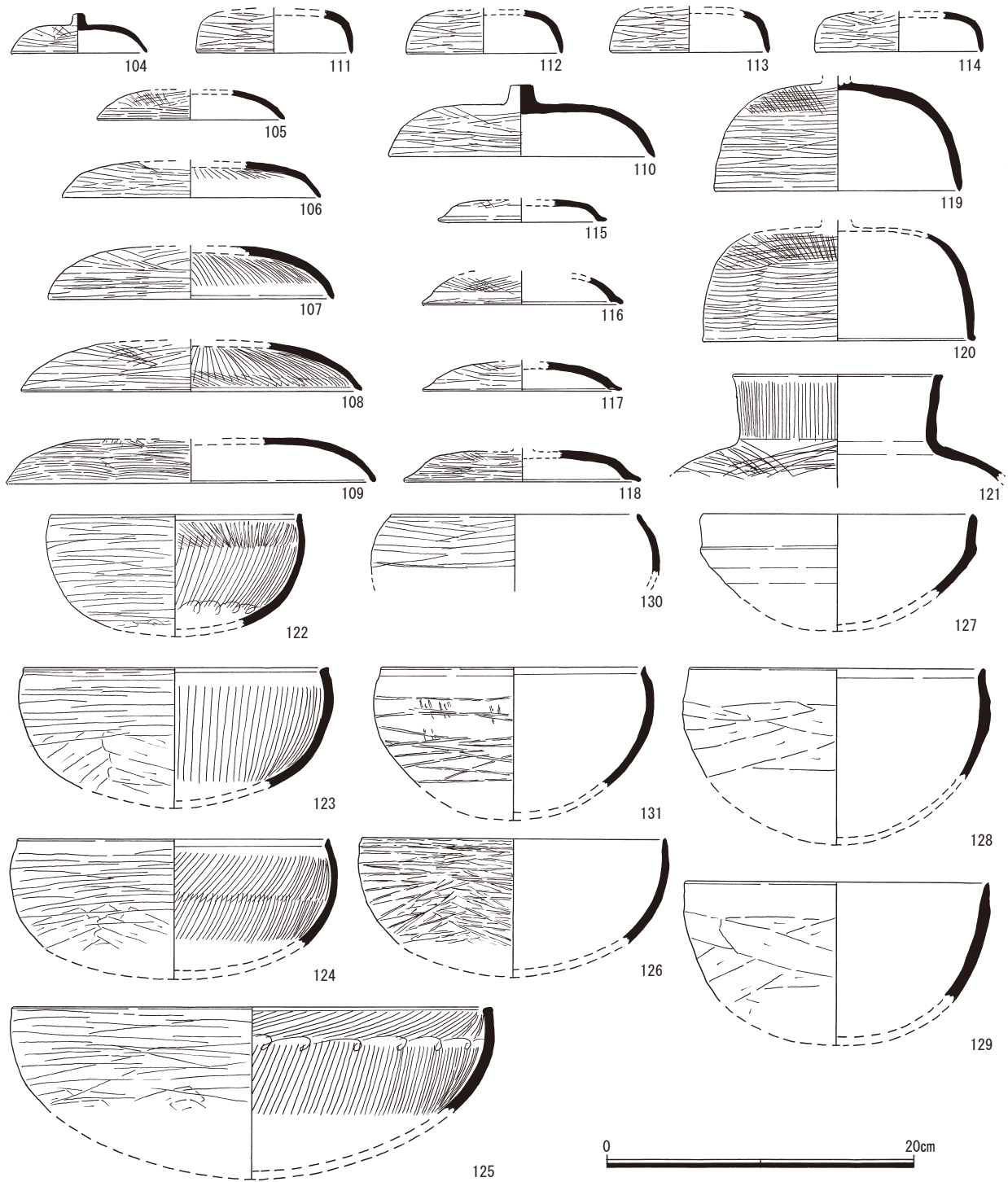


図4-6 東地区 第4調査区 (E4区) 谷S X3041出土土器③ (1:4)

デ調整を施す。口径15.8~17.4cm、器高7.4~8.0cm (ツマミを除く) のI群土器である。

**鉢A** (122~124) は内湾する口縁と球形の底部からなる。口縁端部は断面方形で水平に面をもつもの (123) と、ややつまみあげ気味に内面に面をもつもの (122・124) がある。外面はミガキで、底部をケズリ調整するが、内面の暗文は一段のものと二段のものがある。口径からI (19.6~20.0cm) とII (16.0cm) に分かれるにわかれる。I群土器である。

**鉢B** (125) は内湾する口縁と球形の底部からなり、口縁端部は断面方形で水平に面をもつ。外面はミガキ、内面は二段放射暗文で各段暗文の間にラセン暗文がある。口径は31.0cmで、I群土器である。

**鉢D** (126) も鉢Aと同様に内湾する口縁と球形の底部をもつ。口縁端部は外面を強くヨコナデする。外面はミガキ調整を施すが、内面はナデ調整で暗文はない。口径は19.6cmである。II群土器である。

**鉢H** (127~129) は口縁を強くナデほぼ真上にたちあげる。外面は粗いケズリで調整し、底部は球形である。127は口縁部と体部との間に明瞭な段がつく。口径はI (19.0~19.6cm)、II (17.6cm) である。

**鉢X**には (130・131) がある。130は端部を丸くおさめた口縁が内側に大きく内湾し、球形の体部をもつ。木目の細かい胎土で、焼成はややあまく、軟質で、淡期灰色に発色する。口径16.0cmである。131は内湾する口縁と球形の底部からなる。口縁端部は内面に面をもち、やや外方につまみあげる。外面は粗雑なミガキを程魅し、内面はナデ調整である。胎土は砂質で粗く、焼成はやや硬い。色調は黒褐色に発色する。口径17.0cmである。

**甕A**には球形の体部と外反する口縁をもち、外面を縦方向のハケで内面ナデ調整をするもの(132)、同調整ではあるが、口縁端部に水平な面をもつもの(133)、端部を上につまみあげるもの(137・138)がある。また、外面を縦方向のハケで、内面を横方向のハケメ調整するものについても、口縁端部をそのままナデるもの(134)、やや上につまみあげ内面に小さな段のつくもの(135)、丸くおさめるもの(136)がある。この他には、外面を縦刷毛、内面を縦方向のケズリを施し、端部を小さくつまみあげるもの(143)がある。139~142は胎土が精良で、色調が黒褐色あるいは淡赤褐色で、すべてナデ調整する点が共通する。139はやや肩の張る体部からまっすぐな口縁がつき、端部は内面に面をもつ。140は肩の張らない体部から真上に長くのびる口縁をもち、端部を外に曲げる。141・142は体部と口縁との間に明瞭な段をもち、外反する口縁からなる。また、133の口縁内面に「×」状のヘラ記号がある。

**甕B** (144) は球形の体部をもち、外面を縦刷毛、内面をナデ調整する。145は甕Bの把手部分で、外面縦刷毛で内面ナデを施す。大和・山城型の甕のものであろう。146は把手部分のみで、体部は欠損する。把手の中央に縦方向のスカシがある。

**甕C**は長胴形の甕で、147・148は屈曲しながら大きく広がる口縁をもち、端部は内側に小さく曲げる。外面縦方向のハケメ調整し、内面は横方向のハケメを施す。149・150は口縁を屈曲させる。外面タテハケ、内面はナデ、口縁内面にのみヨコハケが残る。151はほぼ全体の形が判明するもので、長い胴部に屈曲・外反しながら広がる口縁をもち、端部は上につまみあげる。外面は縦方向のハケで底部を横方向のハケを施す。内面は胴部上半をヨコハケし、下半を縦に削る。

**鍋** (152) は底部を欠損するが、球形の底部に大きくひらく口縁からなる。外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケを施す。口径30.1cm。

## 須恵器

杯H・A・G、皿、高杯、鉢、壺、平瓶、横瓶、甕、蓋、甕などの器種がある。なお本書では、須恵器杯H身・G蓋の口径は、蓋身の接地する部分での口径で記す。

**杯H** (165~178) は口径9.4~11.7cmである。これらはかえりと受け部の特徴から大きく四

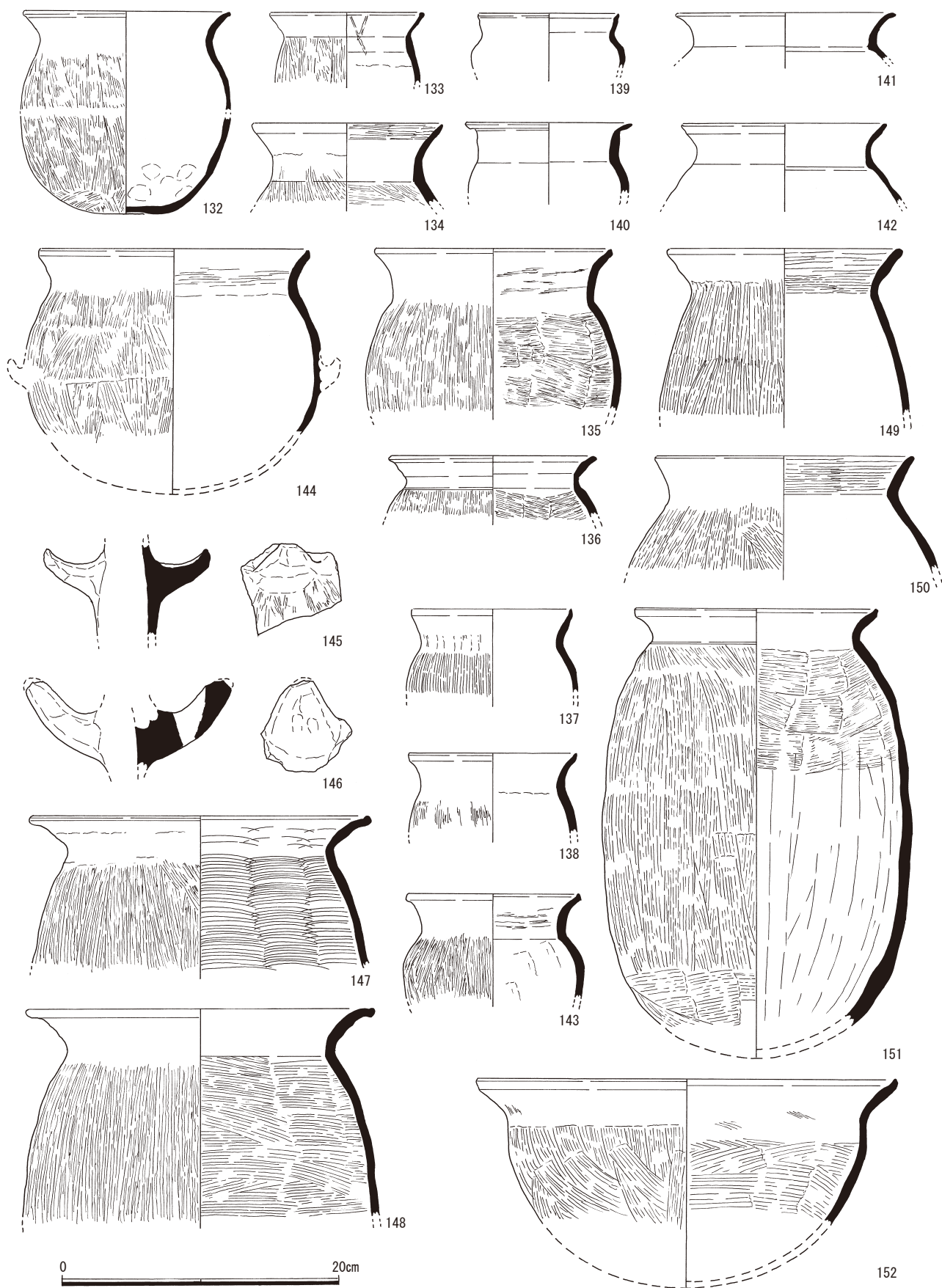


图4-7 東地区第4調査区(E4区)谷S X3041出土土器④(1:4)

つに分類できる。

165～169はかえりが受け部高より4～6mm高いもので、口径10.2～11.4cm、器高2.7～3.0cmである。平底気味の底部からまっすぐ開く口縁をもち、かえりは内上方につまみあげるものが多い。器壁は4mm前後で比較的薄い。底部調整はすべてヘラキリである。170～177はかえりが受け部高より1～3mm高いだけである。口径9.4～11.6cm、器高2.7～3.0cmで、底部が丸底気味のもの(170・173・175)で、調整は(173)以外すべてヘラキリである。器壁は薄いものと厚いものの両者がある。かえりは内方につまみあげるが、真上につまみ上げようとするため、やや外反する。176・177はかえり高と受け部高が同じで、口径9.4cm、器高2.8cmである。ヘラキリ・平底の底部から直線的にのびた口縁と内上方にのびるかえりからなる。178は受け部が極端に短く、わずかに突出する程度で、そこから内上方にやや外反しながらのびる長いかえりがつく。端部は丸くおさめる。小破片のため底部調整は不明であるが、受け部直下はナゲ調整を施す。口径11.4cmである。東海産で164に対応するものであろう。

杯H蓋には口径8.9～11.4cm、器高2.5～4.0cmで、口径に対して器高が高いものが多い。天井部はすべてヘラキリで口縁と内面をヨコナゲする。口縁部と天井部の境は明確ではない。口縁は外側に開くもの(153・155・156・158・162)、ほぼまっすぐ下に伸びるもの(154・159・160・161)、内側に内湾するもの(157・163)がある。端部は肥厚する特徴がある。164は他の杯H蓋とは異なる平らな天井に、やや下方にのびる口縁をもつ。天井部と口縁部との間に明瞭な稜線がみられる。口縁端部内面には面がある。外面全体に暗褐色の自然釉が多量に付着している。口径10.2cm。東海産のものであろう。また、162は備前産の可能性もある。

杯Gは底部調整によって大きくヘラキリ(203～220)、ロクロケズリ(221～230)の2つに分かれる。203～220は口径8.3～11.3cm、器高2.9～3.9cmである。形態的には丸底気味でややひらく口縁をもつものが主流を占める(203～207・209・212・216・217・218)が、平底で屈曲して真っ直ぐのびる口縁をもつもの(208・210・211・214・215・219・220)も一部ある。

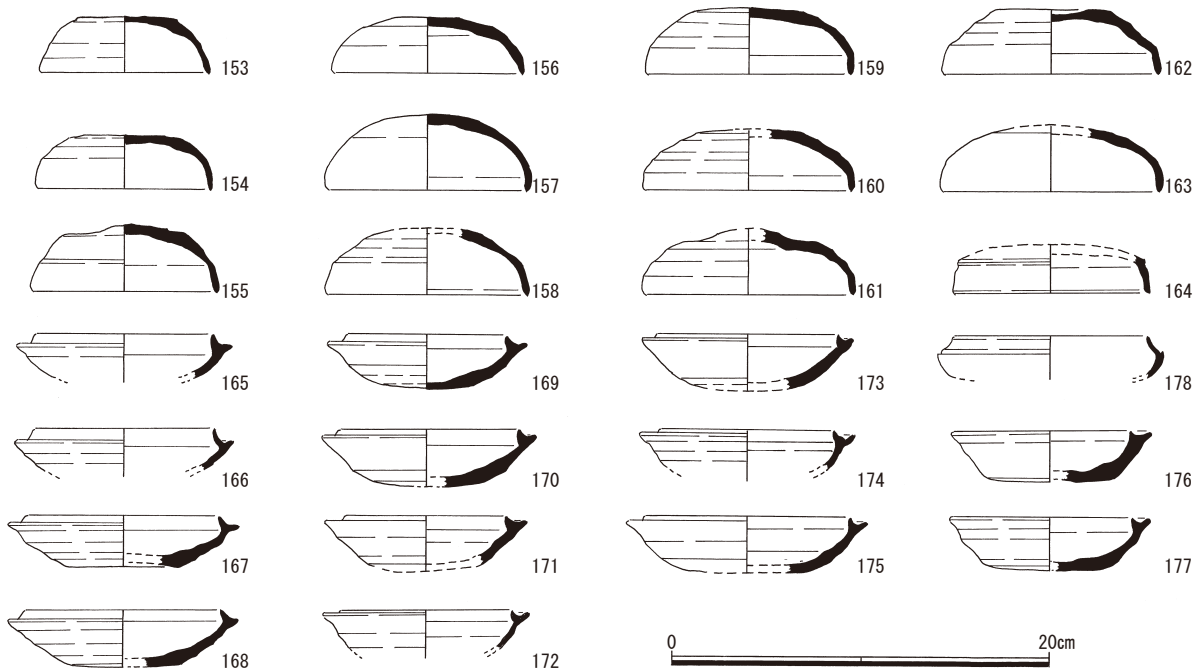


図4-8 東地区第4調査区(E4区)谷S X3041出土土器5(1:4)

218～220などは底部の丸みや口縁の開きが大きいことから、杯Hの蓋の可能性も残る。221～300は口径7.7～11.0cm、器高3.0～4.2cmである。丸底気味でややひらく口縁をもつもの（224・229）よりも平底で屈曲して真っ直ぐのびる口縁のもの（221～223・225～228・230）が主流を占める点はヘラキリの一群と対称的である。また、後者では底部と口縁との境を削る点の特徴としてあげられる。225・230は口径10.9～11.0cm、器高4.0～4.2cmで平らな底部からやや外反しながらのびる口縁をもつ。ここでは明らかに杯Aと思われる231～234を除いては、すべて杯G身として報告している。しかし、蓋とのセット関係や口径等から221～225・229・230には蓋がかぶらない可能性がある。

**同蓋**（179～202）は口径7.3～10.8cmである。かえりと受け部の関係から杯H同様に3種に分かれるが、かえりが受け部の内にはいるものが半数を占める。179～184・190はかえりが受け部高よりも1～2mmとわずかに低い。口径8.0～10.8cmで、天井部の2/3をロクロケズリする。ツマミは宝珠形のもの（182）、扁平なツマミのもの（180）がある。185～189はかえりと受け部高が同じもので、口径8.2～9.5cmである。ツマミは背の低い宝珠形のもの（185）、背の高い宝珠形のもの（188）がある。191～202はかえりが受け部高よりも内側にはいる。口径8.2～9.4cmで、ツマミは、背の高い宝珠形のもの、背の低い宝珠形のもの、扁平なものなどバラエティーに富む。

**杯A**（231～234）は口径10.4～12.4cm、器高2.8～3.4cmで、口径に対して器高が低い。232～234は平らな底部からまっすぐのびた口縁が真上あるいは開き気味にのびる。231は平らな底部と丸みをもちながら真上にのびる口縁からなる。底部調整は231がヘラキリ、232・234がロクロケズリである。蓋はかぶらないものと思われる。

**椀A**（235～238）は口径10.9～13.6cm、器高5.4～6.1cmで、平らな底部からまっすぐ開いた口縁がのびる。底部外面はロクロケズリで口縁をナデる。特に、口縁端部は強くナデることによって器壁が薄くなる。237には口縁中央に沈線がめぐる。胎土は良好で、色調は暗灰褐色、焼成良好である。重ね焼きの痕跡から、蓋の付く可能性がある。

**高杯**（261～270）は、杯部のみの遺存が多く、脚部は270のみである。杯部はその形態により、大きく4類に分けられる。261は底部と口縁部の境界が明確ではなく、球形にちかい形態を呈する。口縁端部はややつまみあげることによって上方に尖らす。口径12.7cm。262～264は杯Gにちかい形態を呈しており、底部をロクロケズリする。口縁はやや外方にまっすぐのびし、ナデ調整する。口径は（262・263）10.0～10.3cmで、264は7.3cmである。265～268は口縁中程で沈線あるいは突帯が巡るものである。265は底部と口縁の境に一条の沈線を巡らし、口縁はやや外方に真っ直ぐに立ちあがり、端部はやや丸く納め、器壁は薄い。266は口縁中程で段状に稜線がつく。底部はやや丸みをもつが、稜線を境に口縁はやや外反的にのびる。267は中程で断面三角形の稜がつく。底部は丸く、口縁は大きく外反する。268も口縁中程で一条の沈線が巡る。丸い底部からのびた口縁は、やや外方に真っ直ぐのびる。端部はつまみあげている。口径は265～267が11.3～12.9cmに対して、268は15.1cmとやや大きい。269は杯Hに脚をもつタイプである。やや丸い底部から受け部がのびる。かえりは受け部より6mmほど高い。底部調整はロクロケズリである。脚部は遺存しないが、接合痕からみると、径4cmの円形を呈して三方に方形スカシがある。口径13.2cm。270は高杯の脚部である。脚部はゆるやかに外反する。

**高杯蓋**（239～259）には口径6.8～14.6cmのものまである。しかし、杯Gの蓋との識別が困難なものもあり、また、杯B身が存在しないので高杯の蓋としたものもある。これらについて

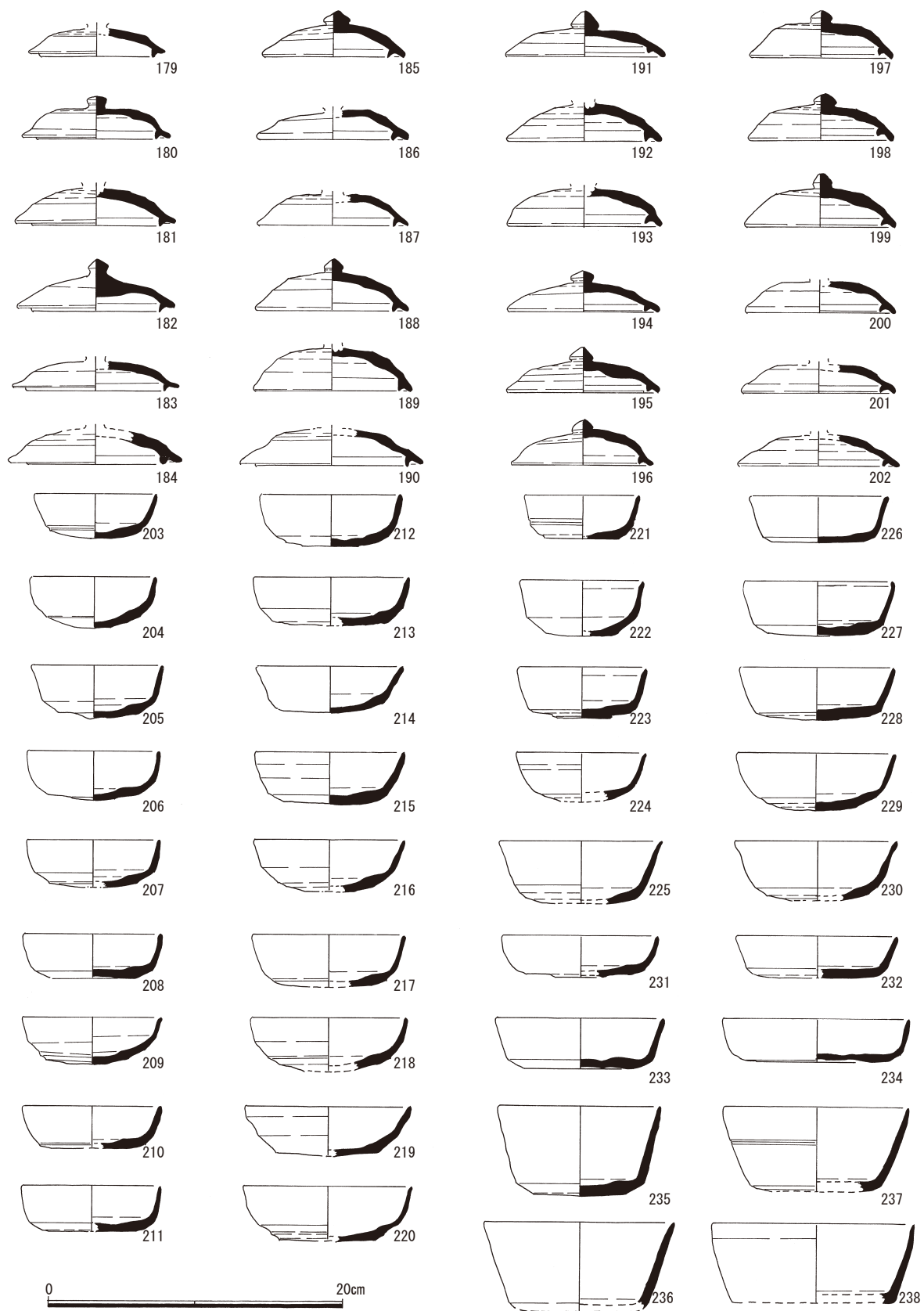


图4-9 東地区第4調査区(E4区)谷SX3041出土土器⑥(1:4)



は検討の余地を残している。特に、杯G蓋との識別については、口径・器高・天井部の調整・ツマミの形態等によって行った。239は口径6.8～7.6cmで、かえりは口縁部と同じ高さである。天井部を細かいケズリ調整しており、器形的には口縁がやや内湾する傾向があり、全体に丸い。ツマミは欠損する。この蓋の口径に対応する杯はなく、264の高杯が口径的にあう。240～246は比較的器高が低いもので、口径8.0～10.6cmに対して、ツマミを除いた器高が1.0～1.6cmである。かえりは240が口縁端部と同じ高さであるが、他は1～2mmほどかえりの方が出る。外面調整はほぼロクロナデである。ツマミは欠損して遺存しない。247～249は器高が高く、かえりが口縁端部より大きく出るものである。器形的に誕生部が高く、丸みをおびており、かえりが3～5mm程口縁端部よりも出る。天井部の調整はロクロケズリあるいは後にナデ調整を施す。口径9.2～11.8cm、ツマミを除いた器高2.1～2.6cm。250は器高は高いが、かえりが口縁端部からわずかにしか出ない。丸みを帯びた体部からのびた口縁が、ややひきながらのびる。かえりは口縁よりも2mm程出る。ツマミはややゆ扁平な宝珠形をする。また、天井部に白色の自然釉が厚くかかる。251～258は口径11.7～14.6cmでツマミを除いた器高2.1～2.3cmと比較的低い。天井部はロクロナデ調整で、かえりは口縁端部と同じか、わずかにでる。ツマミの遺存している254・256をみると頂部がやや窪むボタン形を呈する。これらはツマミの形態を除くと、口縁形態や口径が杯B蓋と類似すねが、対応する杯B身がなく、ここでは高杯の蓋として報告する。259は口径15.0cmで、天井部に三条の沈線がめぐり、その間に列点文がある。また、緑色の自然釉が厚くかかる。かえりは口縁端部より3mm程出る。

**蓋** (271～274) には形態によって3種に分けられる。271は小型の蓋で、天井部が丸く、口縁端部はとがる。口径6.7cm。272は平らな天井部から屈曲して、真下にのびる口縁からなる。口縁端部は水平な面をもち、外面がやや外方にでる。口径8.6cm。273は皿形をした蓋である。ロクロケズリを施した天井からそのまま、やや内湾した口縁がのび、端部は丸くおさめる。口径は13.0cm。274も皿形をした蓋である。やや丸みのある天井部から屈曲して真下にのびる口縁をもつ。内外面ともロクロナデを施しており、口径15.0cmである。

**皿** (275・276) は皿形土器である。275は平らな底部と屈曲して真上に短くのびる口縁からなる。器壁が薄く、器高1.4cmに対して口径12.3cmである。276はやや小さめの平らな底部に斜め外方に屈曲しながらのびる口縁をもち、さらに真上にもう一度屈曲する。内外面ともにロクロナデ調整である。口径13.6cmである。

**鉢** (277～280) のうち、277は浅鉢状をした鉢で、平らな底部からやや内湾気味にのびる口縁をもつ。端部は内傾する小さな面をもつ。底部はロクロケズリであるが、口縁は回転ナデ調整である。口径23.5cmである。279は深い丸底の鉢で、底部と口縁の境は明確ではない。体部中央部に波状文があり、底部ちかくにはカキ目状の痕跡がある。口縁は強くナデることによってつまみあげている。口径16.0cmである。278は丸底を呈する小型の鉢である。底部はロクロケズリを施すが、口縁の内外面は回転ナデである。口縁端部つまみあげている。口径12.7cmである。280は口径26.2cm、器高10.4cmの丸底の大型の鉢である。底部をロクロケズリし、口縁を回転ナデ調整する。端部は内傾する面をもつ。

**皿** (281～283) のうち、281はやや浅い皿で、平らな底部からやや外反する口縁をもつが、その境は明確ではない。端部は水平な面をもつ。底部はロクロケズリ、口縁は回転ナデである。口径26.5cm。282は平らな底部から屈曲し、真上にのびる短い口縁からなる。底部をケズリ調整する。口径28.6cm。283は口径29.1cmの大型の漆塗りの皿である。底部から直立する口縁を

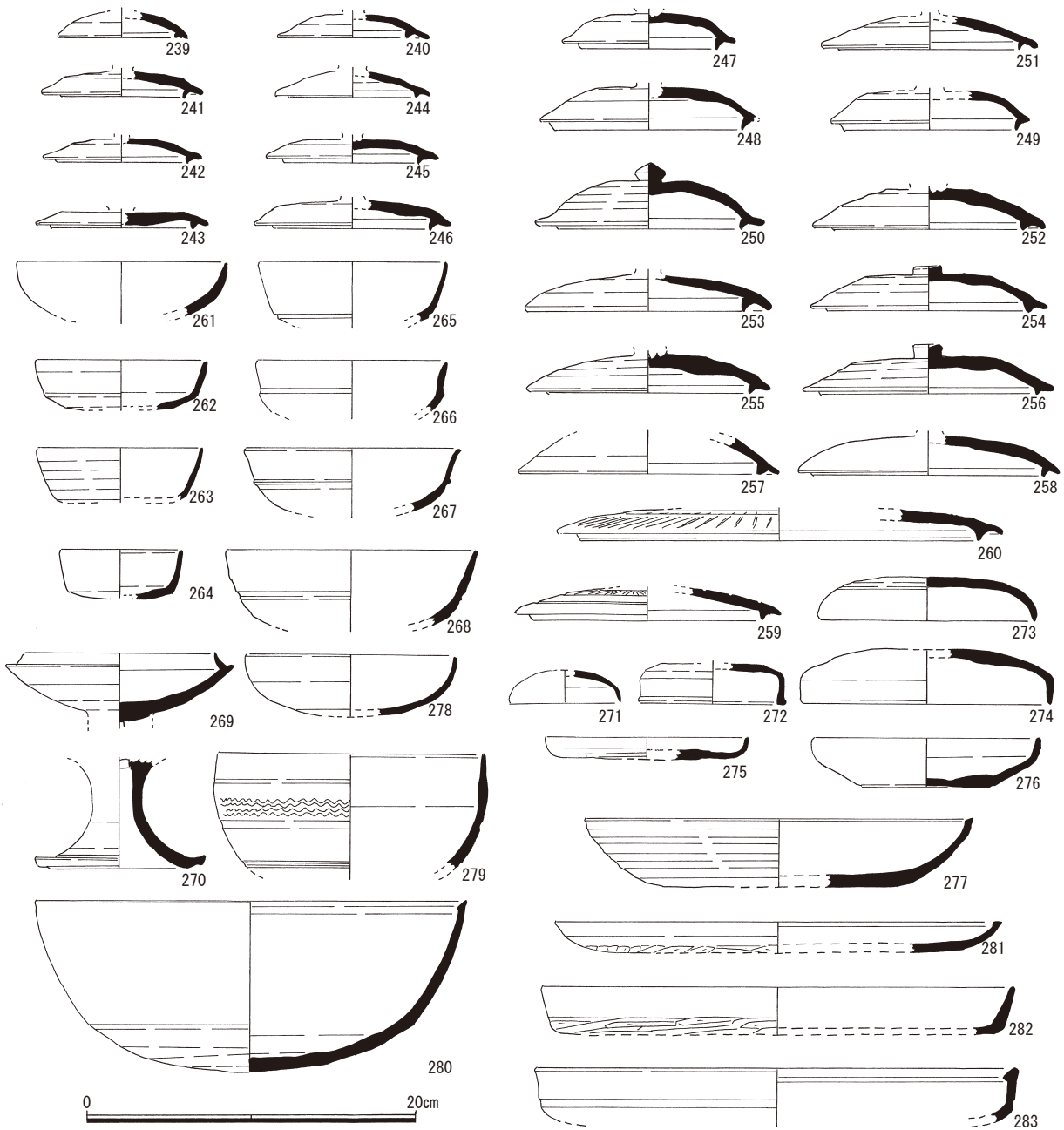


図4-10 東地区 第4調査区 (E4区) 谷S X3041出土土器⑦ (1:4)

もち、端部は内傾する大きな面をもつ。底部と口縁との間外面に沈線が一条めぐる。漆は内外面ともに塗られている。

**平瓶** (284~292) は体部片が多くあるが、図化し得たのは口縁部を中心に9点だけである。口縁の形態では、直線的にのびるもの (286~289・291)、やや内湾するもの (290・292)、外反するもの (284・285) があり、このうち (289・290・292) には口縁あるいは口縁部と頸部の間に沈線が巡る。口径は5.4~6.4cm。292は体部の天井部まで遺存しており、ナデ調整で丸い。天井部に小さな円盤 (粘土塊) をはりつける。わずかに肩が張り気味ではあるが、全体的に丸い。体部上半は回転ナデ、下半はロクロケズリである。

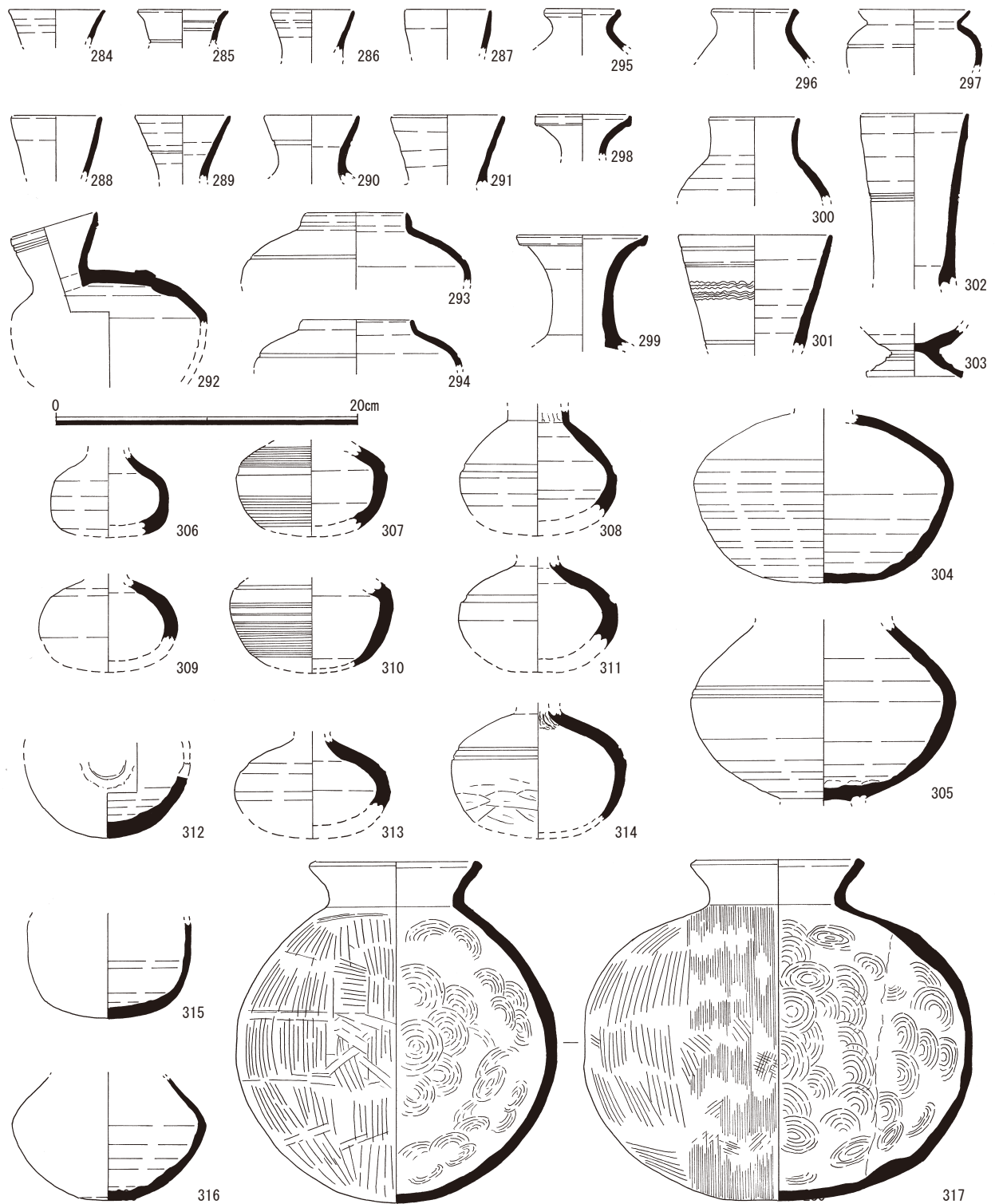


図4-11 東地区 第4調査区 (E4区) 谷S X3041出土土器⑧ (1:4)

短頸壺 (293~298) は口縁形態でバラエティーがある。295は大きく屈曲する頸部をもち、口縁端部を上につまみあげる。296も大きく屈曲する頸部をもつが、口縁端部は丸くおさめる。297は球形の体部に直線的に開く口縁をもつ。体部中央部に一条の沈線が巡る。298は細い頸部から外反しながらのびる口縁をもち、端部は上につまみ上げる。壺C (293・294) はやや

肩の張った球形の体部に、まっすぐ上にのびる短い口縁がつく。

**長頸壺** (299~305) には口縁部・体部・高台の各部が出土しているが、全体の形が判明するものはない。299は外反する頸部をもち、口縁端部をつまみあげる。300は肩の張らない体部とまっすぐ直立する頸部からなる。301はまっすぐ開きながらのびる口縁で、端部を丸くおさめる。途中3条の沈線と幅3mmの波状文が施される。302はほぼまっすぐ上にのびる頸部である。全体をナデ調整で仕上げ、端部を強くナデることによってつまみあげる点は287・288と共通する。ほぼ中央部で2条の沈線がめぐる。壺K (305) は台付長頸壺の体部である。最大径がやや下にあり、下膨れの形態をとる。最大径のやや上に沈線がめぐる。303は壺の脚部である。やや外反気味のふんばった脚である。

球形の小型の壺には形態・器壁厚・体部径によって壺 (306~314) と壺X (315・316) にわかれる。

**壺** は土器の遺存状態から、孔が確認できないものが多いが、器壁が厚く、小型である特徴から壺と推定している。形態と体部最大径の位置からみて、平底にちかい底部から垂直にたちあがる体部をもち、やや円柱状にちかい形態をするもの (312)、球形にちかい体部で最大径が体部の中央付近に位置し、やや上に沈線するもの (308・309・311・313・314)、やや肩の張った形態で、最大径が体部中央よりも上にあり、肩部に沈線が巡るもの (307・310) にわかれる。307・311は肩部と底部にカキ目を施しており、314は底部をヘラケズリする。

**壺X** (315) は体部下半しか遺存しないが、平底気味の底部から真っ直ぐ上にのびた体部で、器壁は4mmと薄い。316は最大径が体部中央部にあり、やや扁平な壺である。形態的には304に類似する。なお、306・309・312・314・316の内面には漆が付着しており、漆壺として利用されていたと考えられる。

**横瓶** (317) は、口径10.2cm、器高12.5cmで、体長径25.7cm、体短長径21.2cmである。体部外面は縦方向のカキ目と平行タタキ文があり、内面には青海波文の痕跡が残る。

**甕** には口縁部・体部の破片が多く出土しているが、完全に復元できるものはない。ここでは口縁部片 (318~337) を図示した。

318・319は大きな体部から屈曲して短い口縁がつく。端部は方形にちかく、やや内上方につまみあげる傾向がある。318は内面に青海波文、外面クロナデ調整である。口径14.4cm。319は内面には青海波文、外面公私目タタキ調整である。口径15.4cm。320は大きな体部から屈曲して、真っ直ぐ開く短い口縁をもつ。内面には青海波文、外面には平行タタキ調整を施す。口径20.2cm。321~323は体部から大きく外反する口縁をもつ。321・323には内面に青海波文がみられ、323には頸部に一条の波状文が施される。324は体部から屈曲して真っ直ぐにのびる口縁をもち、端部を外に折り曲げる。内面には青海波文・外面平行タタキ調整である。口径18.8cm。325・326は体部から屈曲しながら真っ直ぐのびる頸部とさらに外側に屈曲させる口縁部からなる。口径は324が19.4cm、326が20.8cmである。327は大きく開く頸部と端部を外側に折り曲げる口縁からなる。口径26.2cm。328は大きな体部から屈曲させた口縁をもち、端部を大きく膨らます。口径16.4cm。329はやや小型の体部から屈曲してのびる短い口縁からなる。318・319に類似するが、口縁に対する体部径の比率が小さい。口径17.6cm。330はやや長く大きくひらいた口縁で端部を断面三角形に膨らます。口径19.6cm。331・332は体部から大きくひらいた頸部をもち、端部はわずかに外下方に折り曲げ、段をつける。口径は331が19.6cm、332が19.2cmである。333・334は体部からのびた頸部にわずかに受け口風に屈曲させた口縁がつく。

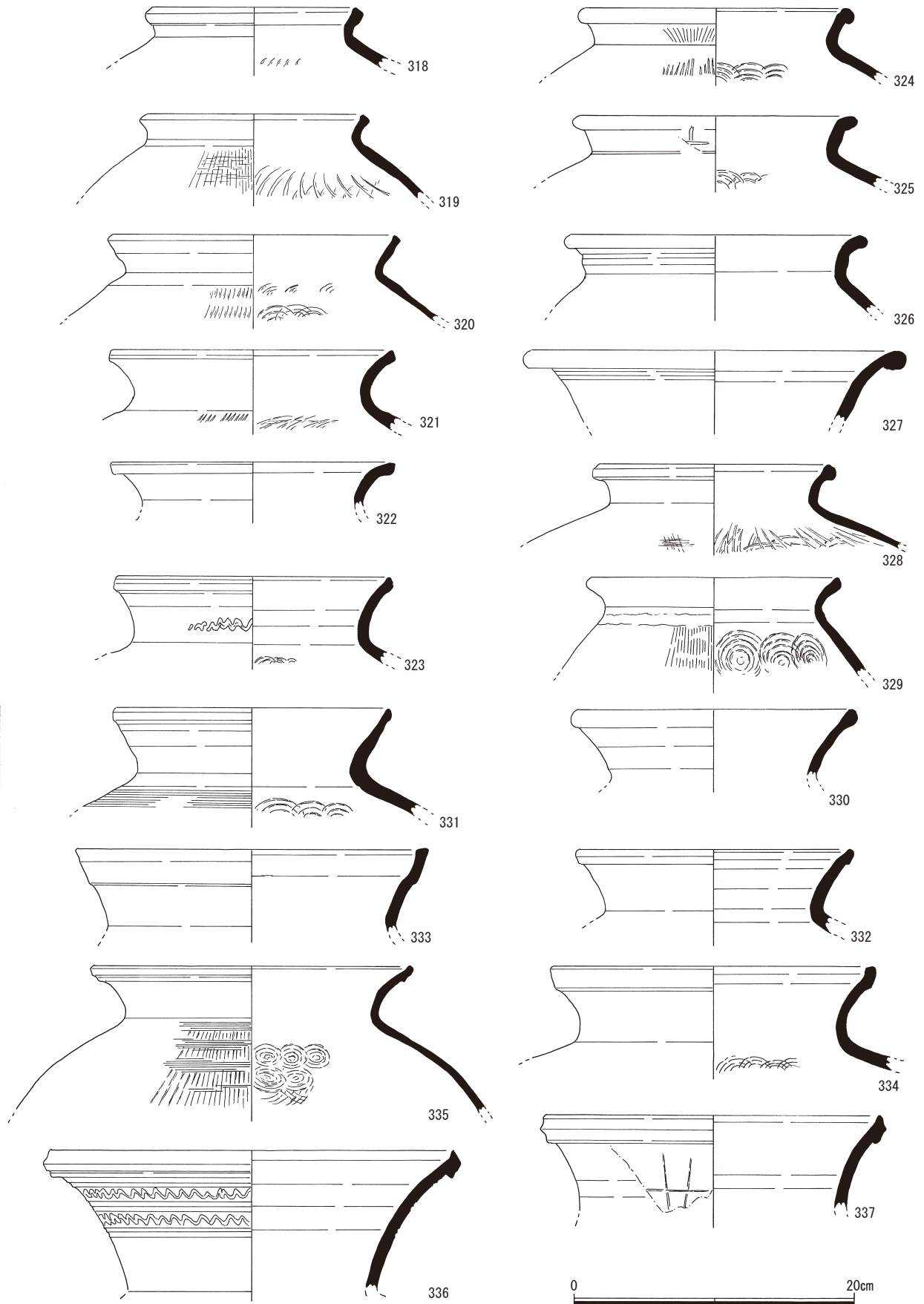


图4-12 東地区第4調査区(E4区)谷S X3041出土土器⑨(1:4)

口径は333が25.0cm、334が22.7cmである。335～337は大きく開いた頸部で口縁を二重口縁風に折り曲げ、さらに端部を上方につまみあげる。336には頸部に二条の波状文が施される。また、337の頸部にはヘラ記号がみられる。口径は335が22.6cm、336が28.8cm、337が24.0cmである。

## 2. 黄褐色山土（整地土）層出土土器（図4-13）

S X 3041を最終的に覆う黄褐色山土からは、土師器・須恵器が出土した。全体量はさほど多くなく、S X 3041（I～IV層）出土土器と同時期のものとそれより新しい飛鳥IVのものがある。

### 土師器

杯C（1～3）は、口縁外面ヨコナデし、底部未調整である。（2・3）は表面が摩滅しているため暗文は残っていないが、1には内面に放射暗文を施す。口縁端部はやや外上方向につまみ上げる。

杯H（4～6）は口縁部を強くヨコナデし、底部は粗くヘラケズリする。口縁部は外反し、底部口縁部との境に明瞭な段がつく。口径11.4～12.9cm、器高3cm前後である。

壺A蓋（7）はツマミを欠損する。口径16.4cm、現高6.7cmである。外面調整は器壁が粗れているので不明。

### 須恵器

杯G（13～15）は口径9.2～10.3cm、器高2.9～3.8cmで底部は（15）ロクロケズリし、13・14はヘラキリをする。同蓋（8～10）は口径8.6～9.8cm、器高はツマミの残る8で3.0cmで、やや器高が高い。ツマミは先端の丸い宝珠形を呈する。かえりは口縁端部より内に入るもの（8）、出るもの（9・10）がある。杯B蓋（11・12）は口径13.4～15.6cmである。ツマミは扁平な宝珠形をする。かえりは口縁端部より内にはいる。黄褐色山土出土土器としては、最も新しいもので、飛鳥IVに位置づけられる。杯X（16）は口径14.3cm、器高5.9cmで、底部をヘラキリする。精良な胎土で、灰色に発色する。底部外面に「V」形のヘラ記号がみられる。

## 3. 青灰色粘質土層出土土器（図4-14）

4区東半に広がる青灰色粘質土から出土した土器で、層位的にはS X 3041・黄褐色山土（整地土）よりも上層にあたる。出土土器は土師器・須恵器・甕がある。遺存状況は比較的良好で、須恵器よりも土師器の量がやや上回り、特に、杯・皿類の供膳形態のものが多い。主に奈良時

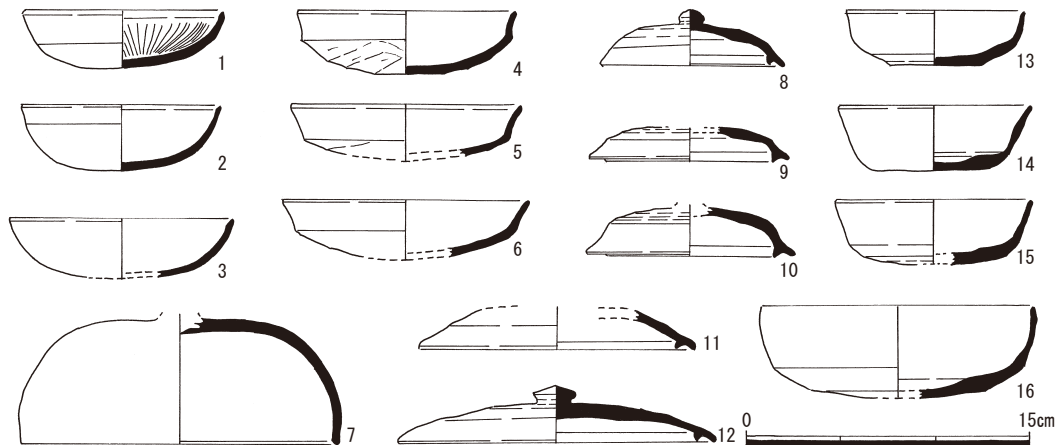


図4-13 東地区 第4調査区（E4区）黄褐色山土（整地土）出土土器（1：4）

代のものである。

土師器

土師器には杯A、杯D、高杯、椀C、椀X、皿A、甕A、甕Cがある。

杯A (1) は口縁端部をややつまみ上げ、b3手法で、内面に一段放射暗文と底部にラセン文をつける。精良な胎土で、淡橙色に発色する。口径17.2cmである。

杯D (2) はやや内湾する口縁をもち、端部は丸くおさめ、断面三角形の低い高台がつく。外面には細かいミガキを施すが、内面に暗文はない。胎土は精良で、橙茶色である。

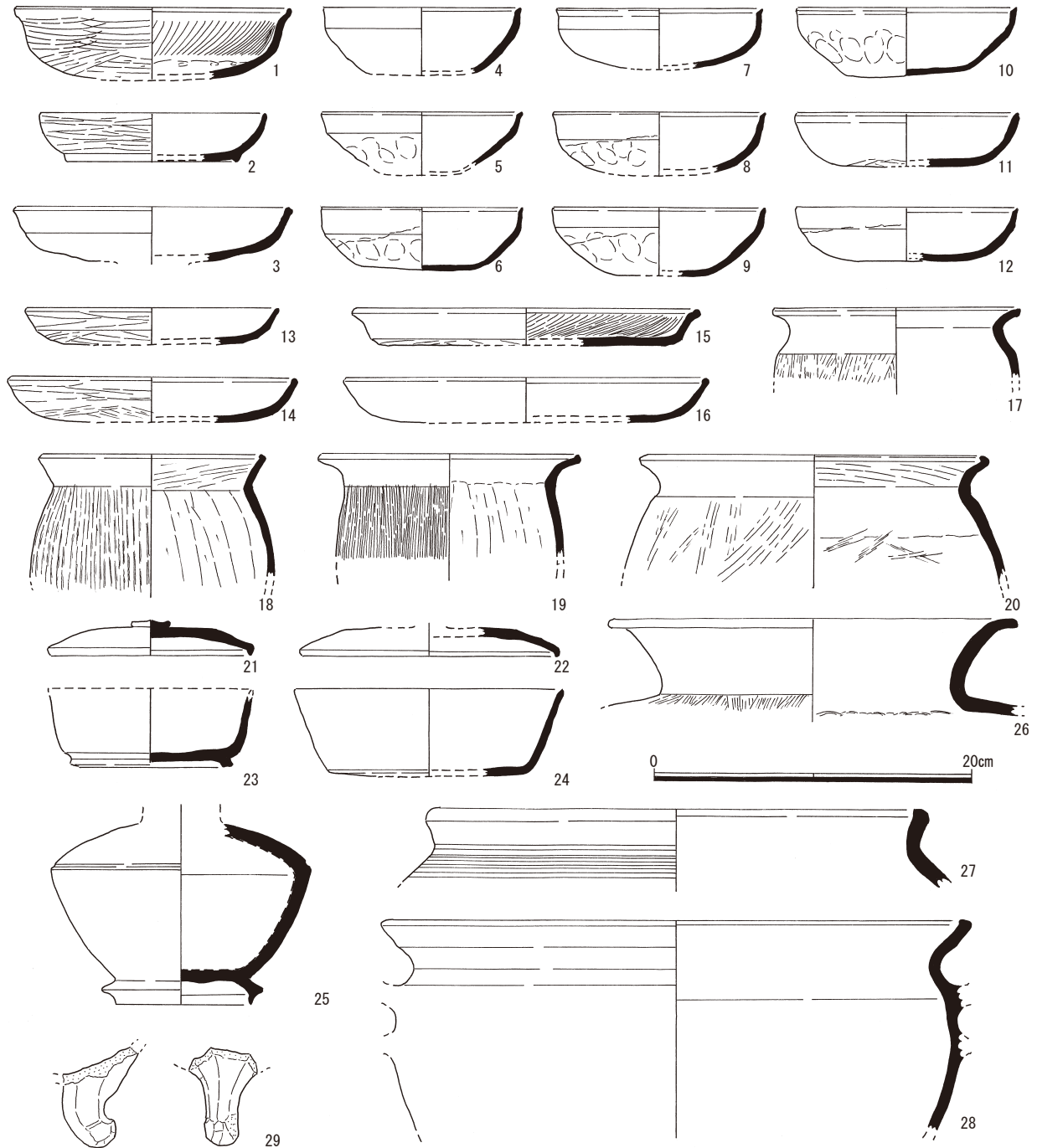


図4-14 東地区第4調査区(E4区)青灰色粘質土層出土土器(1:4)

椀Cには、器高4cm前後の深いもの椀C（4～10）と器高3cm前後の浅い椀X（11・12）がある。4～10は口径12.4～13.8cmで、e手法で口縁をヨコナデする。11・12は口径13.9cmでa手法である。

高杯B（3）は脚部が欠け、杯部のみ遺存しており、口縁部をヨコナデする。

皿A（13～16）は口径によって15.8cm（13）、17.8cm（14）、21.2～22.6cm（15・16）にわけられるが、形態的には口縁が上外方におおきく広がり、端部を肥厚させるもの（13・14・16）と、平らな底部から口縁を屈曲させ、さらに端部を大きく外反させ、端部は内に丸めるもの（15）がある。内面には放射暗文がある。

甕A（17・20）は外面をタテハケし、内面はナデ調整である。20は口縁端部を内側に巻き込む。

甕C（18・19）は外面をタテハケ、内面をケズリで調整する胴長の甕である。19は口径が胴部最大径よりも大きい。

#### 須恵器

須恵器には杯A、杯B、同蓋、壺K、甕A、甕B、壺がある。

杯A（24）は大きく開く真っ直ぐな口縁と平らな底部からなる。底部はロクロケズリである。口径16.8cm、器高5.6cmである。

杯B蓋（21・22）はかえりのないもので端部を下方へと折り曲げる。21のツマミは扁平なボタン形を呈する。口径12.6～16.0cmである。

杯B（23）は口縁端部を欠くが、ほぼ真っ直ぐに立ち上がる口縁と断面方形の低い高台を有する。

長頸壺K（25）は胴部から底部にかけて遺存しており、頸部を欠く。胴部最大径に一条の沈線が巡る。高台は外に大きく踏ん張り、端部を下方につまみ出す。

甕（26・27・28）はすべて口縁と胴部の一部のみの遺存であるが、口縁が上方に立ち上がるもの（26）、外に外反するもの（27）、内湾気味に外反するもの（28）がある。29は壺等の脚である。全面に縦方向のケズリが施される。

#### 4. 墨書土器・土製品ほか（図4-15）

S X3041から墨書土器が3点出土した（1～3）。1は土師器高杯Bの杯部内面に記された「十」の墨書である。2は土師器杯Cか杯Aの底部外に記された「乃」の墨書である。3は土師器杯Dの底部外面に記された「魚刀」の墨書である。また、青灰色粘質土からも墨書土器が3点出土した（4～6）。4は須恵器杯Aの底部外面に記された「□」の墨書で1片の文字の可能性はある。5は土師器椀Cの口縁部外面に横方向に記された「下□」の墨書である。6は土師器皿の底部外面に記された「富女」の墨書である<sup>(2)</sup>。

そのほか、ロウソク形の土製品が8個体分出土した。全形の残存するものはない。用途は不明であるが、川原寺跡でも類似の土製品が出土している<sup>(3)</sup>。詳細は別稿を用意している。

#### 5. S X3041出土土器群の特質と編年的位置

ここでは、西橋遺跡出土土器の供膳具を中心に、器種組成と形態的な特徴を整理し、それを踏まえて、編年的な位置づけについて検討する。

##### 器種組成と形態的特徴



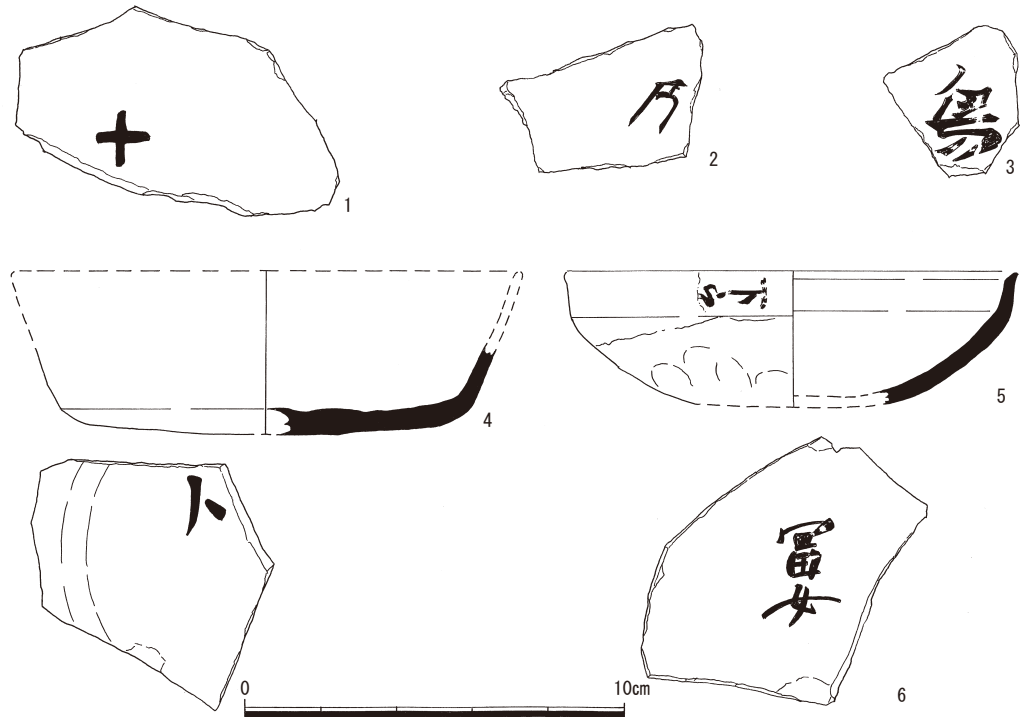


図4-15 東地区 第4調査区 (E4区) 墨書土器 (1:2)

S X3041出土土器の器種組成ならびに形態的特徴について、箇条書きでまとめる。

#### (土師器)

- これまで7世紀の土師器は、パレススタイルの杯A・C類のほか、在地産の杯G、杯H類が確認されていた。杯D類もごく少数確認されていたが、今回、一定量の杯D類が確認され、さらに杯だけでなく、高杯・皿・鉢なども確認されたことから、I～IV群の4群に区分できることになった(平城宮における群別とは異なる)。
- 土師器供膳具では、杯A・C (I群) が4割を占め最も多く、杯H (III群) が3割、杯G (IV群) が2割と続き、杯D (II群) は1割にすぎない。
- 土師器杯Aはわずかに存在する。内面は二段放射暗文、外面ミガキ調整、底部ケズリ。飛鳥IV以降の杯Aにみられる口縁端部が肉厚し、内側に巻き込む形状とは異なり、杯Cの口縁端部に似る。口径16cmほどで、杯A Iの1法量しかない。径高指数33.5である。
- 土師器碗Bはごく少量ある。杯部が碗形態であることから碗Bとする。口径16.0～16.9cmのB Iの1法量のみである。
- 土師器杯Cは、杯C I (口径14.8～16.8cm)、杯C II (口径10.8～12.6cm)、杯C III (口径9.0～10.4cm) に法量分化している。杯C Iは底部外面がヘラケズリ、ミガキ、未調整であるが、ヘラケズリが半数を占め、未調整、ミガキが各々1/4を占める。杯C II・IIIはいずれも未調整である。径高指数30前後であるが、これよりも深いもの、浅いものも少数ある。
- 杯Dは、杯D I (口径17.2～17.5cm)、杯D II (口径14.5～14.7cm)、杯D III (口径11.6～12.2cm) に法量分化している。径高指数は30前後だが、これよりも深いもの、浅いものもある。
- 杯Hは、杯H II (口径13.1～13.8cm)、杯H III (口径9.5～12.1cm) に法量分化しているが、その境界は明瞭ではない。口縁と底部の境界をケズリ落とすものや、全体に丸底の形態をとるものなど、バラエティが多く、個体差・工人差・地域差の可能性はある。径高指数は、30

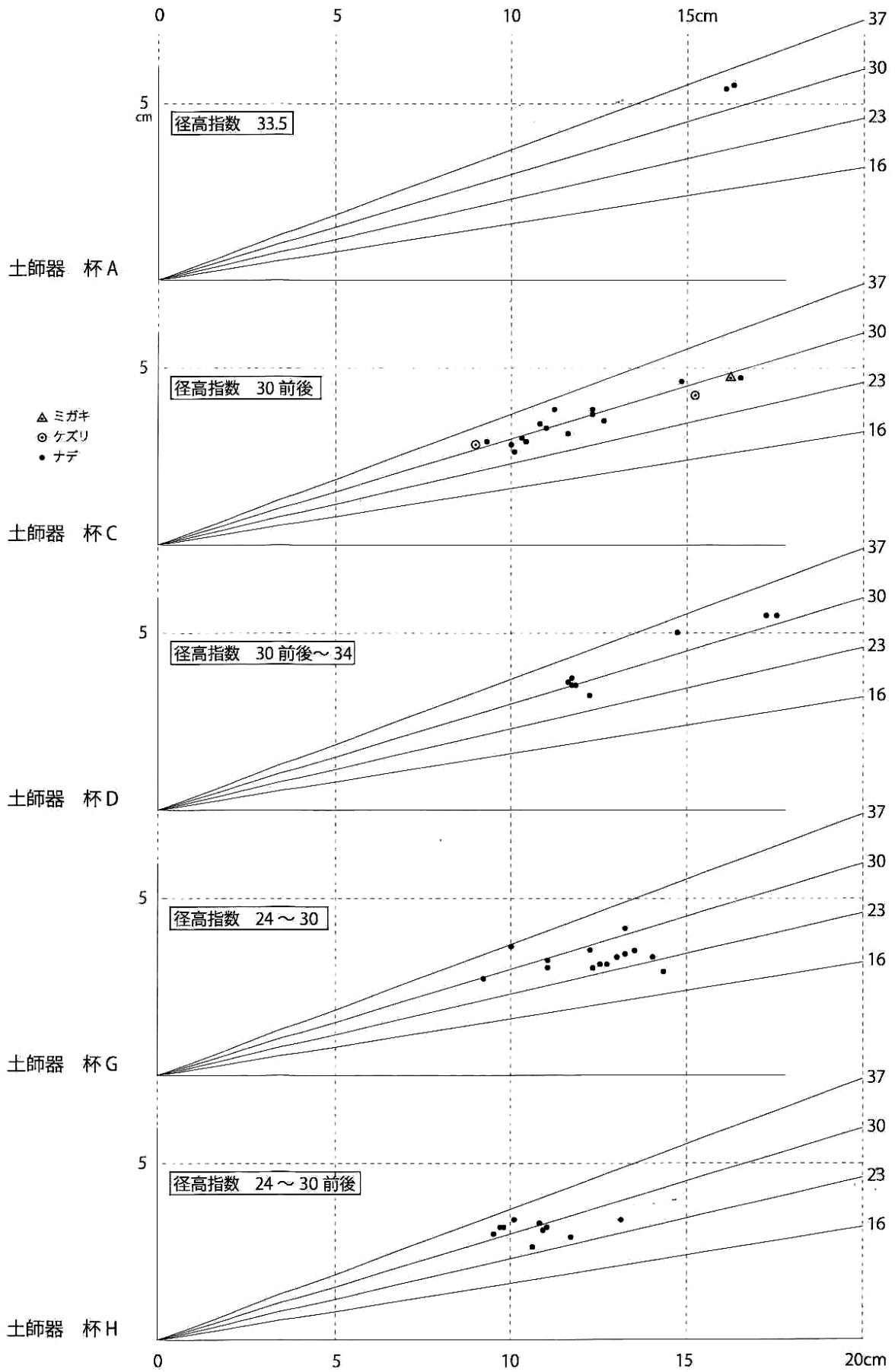


図 4 - 16 谷 S X3041出土土師器の径高指数

前後と26~27に二分される。

- 土師器杯Gは、杯G II（口径12.0~14.3cm）、杯G III（口径9.2~11.0cm）に法量分化しているが、その境界は明瞭ではない。径高指数24~30に集中するが、これよりも深いものもある。
- 高杯はB・D・G・Hがあり、各群別に対応する器種がある。この中では高杯B（I群）がもっとも多く、次に高杯H（III群）が続く。高杯D（II群）・高杯G（IV群）は極少量である。高杯Bは口径16.4~18.2cmで、やや深・浅がある。脚部は絞って整形する。高杯Hは口径13.9~14.8cmで、脚部は杯部底部外面同様に、縦方向のケズリを施し、裾部内面もケズリ。高杯Dは口径18.9cmで、脚部は中空の筒部で形成する。
- 土師器皿は、I・II・IV群土器に対応する皿があり、杯Hに対応するIII群の皿はない。このうち皿Aは一定量あり、皿の中では圧倒的に多い。口径22.0~25.1cmと大型で、深・浅がある。このうち深いものは内面二段暗文、浅いものは一段暗文を施す傾向がある。皿Bにつづいて皿Dが多い。口径25.0~27.2cmと大型のものと20.0cmの小型のものに法量分化している。皿Gは口径17.9cmの小型のものである。

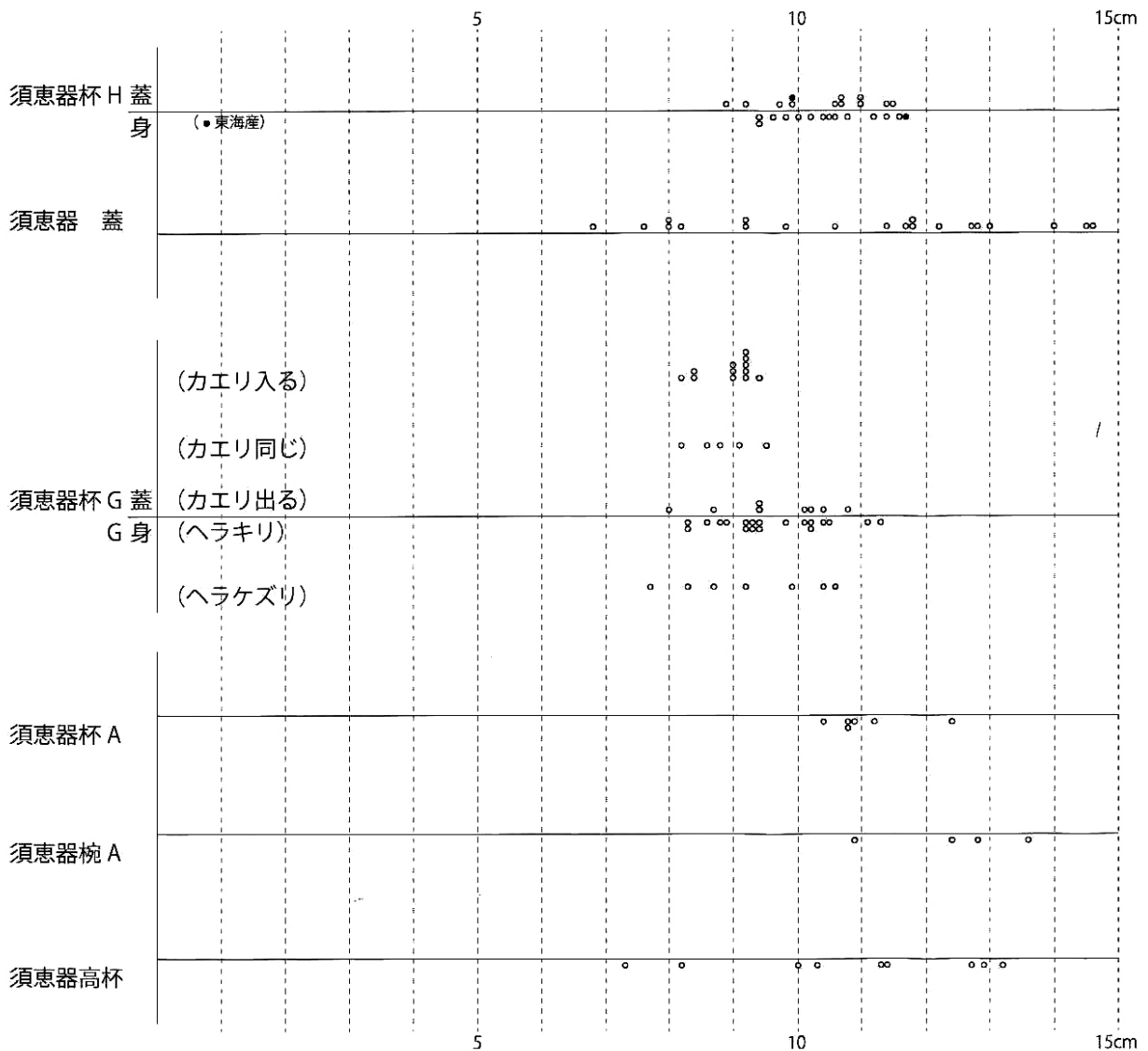


図4-17 谷S X 3041出土須恵器の土器法量（接地口径）

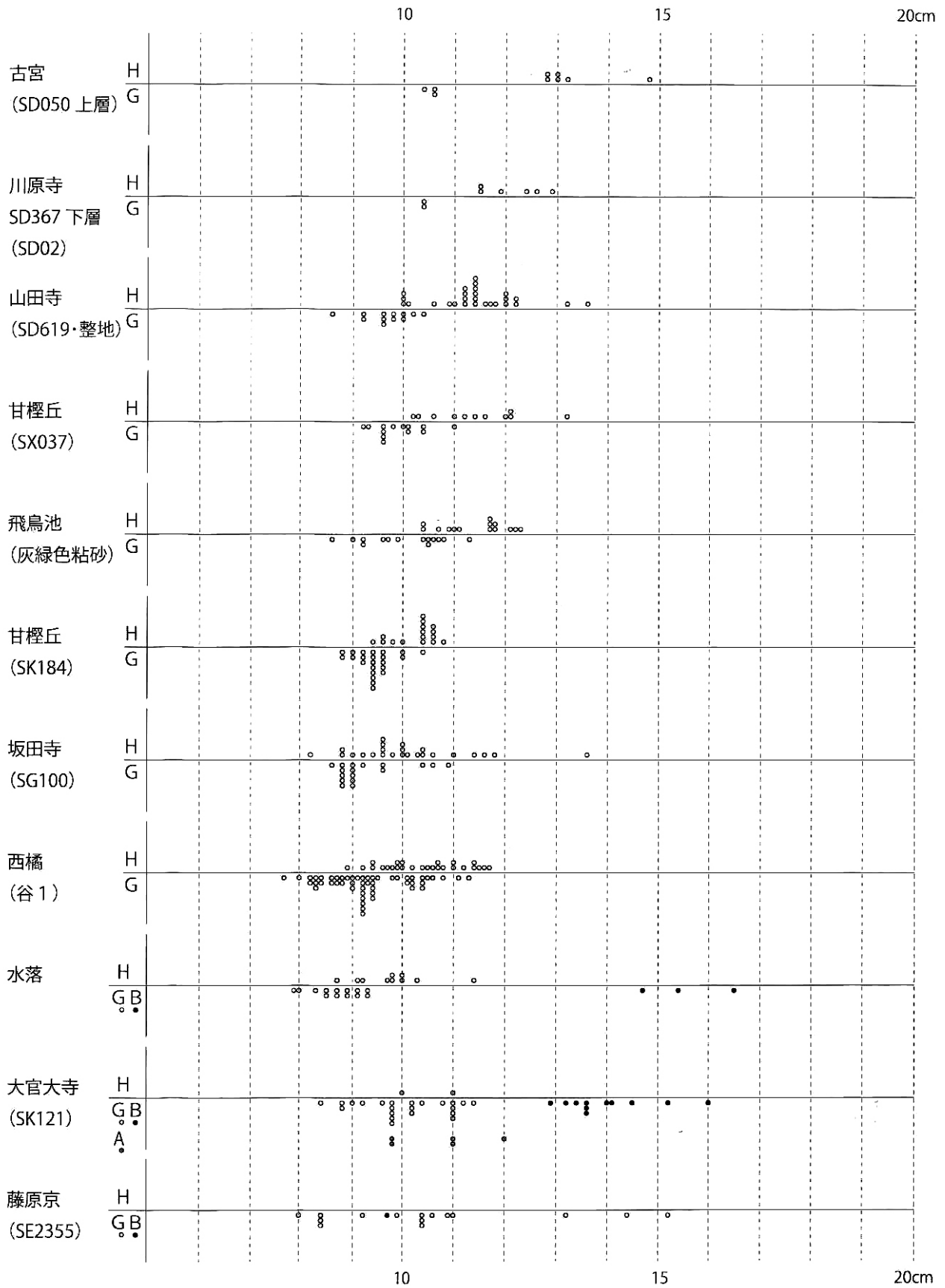


図4-18 須恵器 杯H・G・Bの土器法量（接地口径）

**(須恵器)**

- 須恵器杯H・杯H蓋と杯G・杯G蓋の比率は、3：7で後者が多い。
- 須恵器杯Hは蓋身接地口径8.9～11.7cmで、蓋天井および身底部調整は、ほとんどヘラキリ調整である。杯H身では、かえりが5mm程度高いものは大型のものに多く、かえりが同じかわずかに高いものは小型のものに多い。両者の比率は、1：2で後者が多い。また、わずかに東海産・備前産の杯Hが含まれる。
- 須恵器杯G蓋は、蓋身接地口径8.0～11.3cmであるが、かえりが内に入るもの、ほぼ同じ高さのものは8.2～9.5cmによくまとまっている。一方、かえりが下に3mm程度であるものはバラツキが大きい。その比率は12：5：7で、内に入るものももっとも多い。
- 須恵器杯G身は識別が困難で、明らかに杯Aと考えられるもの以外を杯G身とした。形態的に底部が平らなもの、底部が丸いものがある。後者の中には杯H蓋の可能性も否定できないものも含まれる。底部調整はヘラキリとヘラケズリがあるが、2：1で前者が多い。口径7.7～11.3cm。
- 須恵器杯Aは、口径10.4～11.2cmのものと、12.4cmに法量分化する。また、深さは3cm前後と、4cm前後のものがある。
- 須恵器椀Aは、ごく少量ある。口径10.9～13.6cmで、器高6cm前後である。この中には重ね焼きの痕跡から、蓋が被るものもある。
- 確実な須恵器杯B身はない。
- 須恵器高杯は、小型で平らな底部のもの、大型で外面に段あるいは沈線が巡るもの、杯H身のような形態のものに分かれる。
- 須恵器蓋は、口径6.8～10.6cmの小型で、器高が極めて低いものは、高杯や壺に被る蓋の可能性もある。また、口径11.7～14.6cmの大型の蓋は、杯Bがないことや、ツマミの形状が平坦なこと、器高が高いものがあることから、椀Aや杯Aに被る蓋の可能性を考えている。

**編年的位置**

上記のような特徴を指摘できるが、ここでは器種構成や径高指数・口径・調整技法からみて、ちかいと考えられる飛鳥Ⅰ末～飛鳥Ⅲの土器群と比較する。

- 土師器杯AⅠのみがわずかに存在する点、口縁端部が通常の杯Aとは異なる点は、杯Aの初現に近い点であるが、形態は杯Aとして定型化していることから、坂田寺S G100よりも新しく、法量分化している大官大寺S K121よりも古く位置づけられる。
- 土師器杯Cの径高指数は30前後で、飛鳥池灰緑色粘砂・甘樫丘東麓S K184よりも低く、坂田寺S G100や藤原京下層S E2355・大官大寺S K121にちかい。調整技法でみると、CⅠ底部外面にケズリ調整を施すものが半数あるが、その比率は大官大寺S K121よりも高く、坂田寺S G100より少ない。
- 土師器皿が一定量出土していることは坂田寺S G100にもみられる。
- 須恵器杯Hと杯Gの比率は、飛鳥Ⅰまでは杯Hが多いが、坂田寺S G100でほぼ同じになり、以降逆転するが、ここでは杯Gが圧倒的に多いので、坂田寺S G100より新しい。
- 口径をみると杯Hは坂田寺S G100に重なるが、最小口径は坂田寺S G100の方がわずかに小さい。一方、杯Gは坂田寺S G100と重なるが、最小口径は西橋遺跡谷S X3041が小さい。大官大寺S K121とも分布的に重なるが、やや小さいものが多い。
- 杯H蓋天井および身底部調整は、ほとんどヘラキリ調整で坂田寺S G100にちかい。

- 須恵器杯Bがないことから、大官大寺S K 121や藤原京下層S E 2355よりも古い。

これらのことから、西橘遺跡谷S X 3041出土土器群は、飛鳥Ⅱの坂田寺S G 100よりも新しく、飛鳥Ⅲの大官大寺S K 121・藤原京下層S K 2355よりも古くに位置づけられる。これは従来、飛鳥Ⅱ末の水落遺跡貼石遺構及び周辺出土土器の器種構成や径高指数・口径・調整技法と共通し、水落遺跡併行ということになる（奈文研1995）。よって、西橘遺跡谷S X 3041出土土器の編年的位置は、山田寺S D 619及び整地・甘檜丘東麓遺跡S X 037→飛鳥池灰緑色粘砂・甘檜丘東麓遺跡S K 184→坂田寺S G 100→西橘遺跡谷S X 3041・水落遺跡→大官大寺S K 121・藤原京下層S E 2355となる。ただし、これらの実年代については特定されておらず、近年の研究でもやや幅がある<sup>(4)</sup>。ここでは、形式的な変遷を提示するにとどめる<sup>(5)</sup>。（相原嘉之）

#### 註

- (1) 奈良時代の土器の器種名・調整手法については、奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告』の記載に準じる（奈文研2005）。
- (2) 墨書土器の釈読は、奈良文化財研究所都城発掘調査部飛鳥藤原地区史料研究室による。
- (3) 概報では未報告（奈文研1997）ではあるが、同形態の土製品が川原寺1996-2次調査で1点出土していることを、奈良文化財研究所からご教示いただき、確認した。
- (4) 尾張産須恵器の検討から、水落遺跡出土土器は廃絶の時期を示すもので、出土状況も含めて、従来の年代観よりも新しい傾向が強いことが指摘されている（尾野ほか2016）。これらを含めて2019年には飛鳥時代の土器編年を再検討するシンポジウムが開催され、新たな問題提起がなされた（奈文研2019）。今後、各地での再検討結果の成果に期待したい。
- (5) 本土器群の実年代については、「四月中十七日水□□」木簡から661年あるいは672年に年代の一点があるとされていた（川越2000）。しかし、本報告での木簡群の再検討の結果、この木簡で年代を特定することは難しいことが判明した。よって、この土器群の実年代を特定はできていない。

#### 引用・参考文献

- 尾野善裕・森川実・大澤正吾2016「飛鳥地域出土の尾張産須恵器」『奈良文化財研究所紀要2016』
- 川越俊一2000「藤原京条坊年代考」『研究論集X I』奈良国立文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所1995『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ』
- 奈良国立文化財研究所1997「川原寺の調査－1995-1・1996-1次、1996-2次－」『奈良国立文化財研究所年報1997-Ⅱ』
- 奈良文化財研究所2005『平城宮発掘調査報告XⅥ』
- 奈良文化財研究所2019『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会

## 第2節 木 簡

**再釈読にいたる過程** E4区の谷SX3041から、木簡は270点（うち削屑146点）出土した。木簡は出土後、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部（当時）に持ち込まれ、村教委の依頼により、故橋本義則氏が整理を担当した。記帳は平成4年10月から翌5年9月および、6年2月から7年9月にかけて、写真撮影は6年5月および7年7月に行われた。出土情報は、木簡学会第14回研究集会で紹介され（森公章「1992年全国出土の木簡」平成4年12月6日）、また奈文研の所内研究会である総合研究会において一部の釈文が示されている（7年1月17日。所内資料）。

資料の重要性に鑑み、西橋木簡の保存処理を経ての再釈読は、橋本氏の参加も依頼して計画したものの氏の逝去のため頓挫し、体制を組み直して平成31年度から4ヵ年計画（報告書刊行の延期により1年延長）の受託研究として実施した。保存処理は、31年度から令和3年度にかけて行い、すべての木簡について、保存処理前後の2回、釈文の確定を目的とした検討会を、外部有識者を招聘して実施した。保存処理前の検討は、令和3年5月16日（木）、24日（金）、6月21日（金）、4年6月15日（月）、19日（金）、保存処理後は、3年12月13日（金）、4年2月27日（木）、28日（金）、12月9日（水）に実施し、東野治之氏（奈良大学名誉教授）・寺崎保広氏（奈良大学名誉教授）・鶴見泰寿氏（奈良県立橿原考古学研究所資料係長）のほか、奈文研飛鳥・藤原地区史料研究室から山本と藤間温子（客員研究員）が参加した。樹種は保存処理前に藤井裕之氏と山本が判別し、一部の同定は藤井氏に依頼した。以下の記述は、検討会の知見をふまえ、山本がとりまとめた。

**再釈読の方針** 再釈読の方針は、可能な限り従来の釈文を尊重した。訂正は、新たに文字が読めた場合、あるいは、従来の釈読が誤りで対案が提示できる場合を基本とした。変更の多くは、保存処理により墨痕が鮮明になったことに起因する。逆に、木簡の劣化などによって墨痕が薄れたため現状では追検できない場合、原則として釈文は従来のままとし、現状にかかわる知見を解説に記した。再釈読に際して、出土当時の記帳ノートや保存処理前の写真などを参照した。釈文の体裁、符号、および型式番号は、木簡学会方式に統一した。法量は、保存処理によって若干の縮みや歪みが生じている場合もあるため、原則として水漬け状態における計測値を採用した。なお、削屑の占める割合は木簡全体の約54%であり、藤原宮期以降の古代木簡と比べてやや低い傾向にあり、新たに接続を確認できた破片もわずかであった。

巻末にはすべての木簡の釈文を、図版22～37には保存処理後の赤外線画像（原寸の約70%を基本）を掲げた。本節では、1文字以上釈読案を示したものの179点について解説を記した。以下の記述においては、煩瑣を避け、研究書・論文などの引用も最小限にとどめた。解説全般にわたり、坂本太郎・平野邦雄監修1990『日本古代氏族人名辞典』（吉川弘文館）、竹内理三・山田英雄・平野邦雄編1958～1977『日本古代人名辞典』（全7巻、吉川弘文館）、池邊彌1981『和名類聚抄郡郷里驛名考證』（吉川弘文館）、関根真隆1969『奈良朝食生活の研究』（吉川弘文館）はそのつど引用することはしなかったが、全篇にわたり参照したことを明記する。律令および延喜式の条文番号は、日本思想大系『律令』、虎尾俊哉編『延喜式 下』により、『万葉集』の歌番号は、新編国歌大観の歌番号を用いた。典拠となる史料や各地の遺跡から出土した木簡などの出典は、略称を用いて示したことがある。また、本節では、「カ」として掲げた釈文も煩瑣を避けて読み切りの形で示し、部の異体字「マ」「ア」は、字形を問題にする場合を除きすべて「部」で統一した。委細、適宜類推されたい。

## A 文書木簡

- 木簡1** 四周削り。ヒノキ科・追柾目。刻書の文書木簡。「罷」の四つ頭と能はやや離れており、「四能」ともみえる。『万葉集』によると、「四能」でシノ（篠）と読む事例があり（巻1-45番歌）、また「四能」は4種の芸能、琴棋書画をいう（『日本国語大辞典第二版』）。いずれの意としても、文意はややとりがたいものの、「罷りて見ゆる（あるいは、現はるる）人、右の勅、注（しる）して啓（もう）し奉る」と訓むか。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡2** 上端ごく一部削り、下端折れ、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。表面が木裏。某御前に上申する書式の文書木簡で、いわゆる前白木簡。「上坐」は三綱の一つで僧職。「慈姑」でくわいをさす、あるいは「いつくしむ」の意で習書したものか。裏面は、文意が通じず、あるいは習書か。E 4区IV層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡3** 上下両端折れ、左右両辺割れ。針葉樹材A\*（スギ、ヒノキ、サワラのいずれかと推定される。\*は生物顕微鏡観察による樹種同定を行った試料を示す（以下同じ）。第5章 第1節参照）・板目。某御前に上申する書式の文書木簡。裏面7文字目は「及」「反」の可能性ある。上端に欠損があり、文意がとりにくい。「田使」がタヅカイと読めるとするならば、『欽明紀』の児島ミヤケの記事にみえる「田令」（『日本書紀』欽明天皇17年7月己卯条など）、大宝元年（701）4月にみえる「田領」（『続日本紀』同月戊午条）などとの関連も推測される。あるいは、「使君」と区切るならば、古く中国で天子の命によって使者として諸方に派遣される勅使の尊称で、日本では国守の唐名（『日本国語大辞典第二版』）。『万葉集』によると、国守の意で用いられる事例がある（巻17-4015番歌左注、巻18-4132番歌題詞）。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡4** 上下両端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ\*・追柾目。上申文書の木簡。表面5・6文字目は、「以前」「御前」「御所」など、7文字目は「白」の可能性ある。9文字目は糸偏の文字。裏面1文字目は手偏がつき「授」となる可能性ある。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡5** 上端二次的切断、下端削り、左右両辺下から3分の2は削り、左右両辺とも上から3分の1は二次的削り。ヒノキ\*・追柾目。表面は上申文書の木簡か。裏面は不詳。表面別筆部分の中央2文字は禾偏の文字。裏面1行目「乃」の次の文字は、「可」を含む文字。「慈ミ…受ケ賜フ（ハル）」は、恩恵を与える（あるいは受ける）の意。類例として「慈賜」（『飛鳥藤原京木簡一』158号）、「可慈給」（『藤原木簡概報』(22) 22頁下= (18) 14頁上1号）がみえるほか、『続日本紀』宣命に、天皇が臣下に対して恩恵を与える用例が散見する（宣命第2詔・第3詔・第4詔・第5詔・第12詔・第16詔・第19詔・第25詔・第38詔・第43詔・第51詔）。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡6** 上端折れ、下端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。「恵賞」は僧名か。裏面4文字目は「塩」「福」の可能性ある。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡7** 上端非常に粗い削りか、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ\*・柾目。某御前に上申する書式の文書木簡。表面1・2文字目は削り残り。表面3文字目「前」の字体は「前」（『碑別字新編』80頁）。「頓首」は、奈良県飛鳥池遺跡出土木簡（『飛鳥藤原京木簡一』706・760・940号）、飛鳥京跡苑池遺構出土木簡（『飛鳥宮跡出土木簡』143-4号）、藤原宮跡出土木簡（『藤原宮木簡一』9号・『藤原宮木簡三』1096号）などにみえる。裏面2・3文字目は「久米」「久尔」などの可能性あり、「久米（尔）□足人」で人名か。E 4区暗褐色有機土出土。
- 木簡8** 削屑、板目。**木簡9**とともに、書儀の文言を記した文書木簡の削屑であろう。E 4区



IV層（暗青灰色粘土）出土。

木簡9 削屑、板目。E 4区III層（灰黒色有機土）出土。

木簡10 上端折れ、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。5名の名を列挙し、「仕奉」を報告した文書の断片。裏面2文字目は「人」の可能性が有る。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡11 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ\*・板目。薬を請求する木簡。あるいはその木簡を利用して送り状（荷札）に転用したか。「理中丸」は、20巻本『和名抄』の「丸薬」の項に「理中（仲）丸〈治霍乱下痢〉」（香薬部薬名類）、『医心方』に引く録驗方の「治霍乱虚冷吐逆下痢」に対する処方「理中丸方」とみえ、効驗方に「理中散方」、小品方に「理中湯」が載る（巻11治霍乱方）。『延喜式』典薬寮にみえる「四味理仲丸」のことで（3中宮臘月御薬条ほか）、人参・甘草・干薑・白朮の4種類の薬物を調合した。平城京跡出土木簡に「離中丸」がみえる（『平城木簡概報』(34) 27頁下(332号)）。E 4区暗褐色有機土出土。

木簡12 上端・左右両辺削り、下端二次的切断か。ヒノキ科・板目。6月17日付の文書木簡の断片か。表面8文字目は「地」の可能性が有る。「佐味」「倭文」は、人名あるいは地名か。人名であるならば、「佐味朝臣」は、『新撰姓氏録』右京皇別上、「佐味村主」は逸文に阿智王将来の渡来人の一としてみえる。「委文宿祢（連）」は、大和国神別、摂津国神別、河内国神別にみえる。地名であるならば、「佐味郷」は、『和名抄』によると上野国緑野郡・同国那波郡、越中国新川郡、越後国頸城郡、備後国鞆田郡にみえるほか、大和国葛上郡に「佐糜（味）」邑が（『日本書紀』神功皇后摂政5年3月己酉条）、大和国宇智郡阿陀郷鶴野村に「佐味条」がみえる（天元3年（980）9月19日太政官符。栄山寺文書・『平安遺文』2-318号）。「倭文郷」は、常陸国久慈郡、因幡国高草郡、美作国久米郡、淡路国三原郡にみえる。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡13 上端切断、下端左半焼損右半折れ、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。「土官」は土師官の意か。「肱」は「肘」の俗字（『大漢和辞典』）、くちひび、はれものなどの意（『類聚名義抄』仏中ほか）。病や薬の支給にかかわる文書木簡の断片であろうか。E 4区暗褐色有機土出土。

木簡14 上端二次的切断、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。「舎五人」にかかわる上申文書の断片。「長部（公）」は、奈良県石神遺跡出土木簡に「長部大□呂」（『木簡研究』(38) 196頁2（1）・旧积文『藤原木簡概報』(18) 21頁上90号）、「長部加□小」（『藤原木簡概報』(18) 27頁下170号）がみえ、あるいは「長谷部公」ないし「長公」か。「長谷部公」は、「長谷部公真子」（『続日本紀』天平神護元年（765）正月己亥条）、「長谷部公三宅麻呂」（神護景雲4年（770）9月29日奉一切経所解、正倉院文書続々収第40帙第3巻第20紙裏・『大日本古文書』編年文書之六-85頁。以下、『大日古』六85頁のごとく略す）が知られるほか、藤原宮跡出土木簡の1点は「長谷部公」と読める可能性がある（『藤原宮木簡二』629号）。「長公」は、『新撰姓氏録』和泉国神別にみえる。E 4区暗褐色有機土出土。

木簡15 上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。ヒノキ\*・追柎目。100代の土地にかかわる文書木簡。冒頭の「栗太」は、地名あるいは人名か。人名であるならば、「主」は尊敬を示すか。地名であるならば、『和名抄』によると、「栗太郡」は近江国にみえる。「1代」は、稲1束を収穫しうる地積で、高麗尺（あるいは唐大尺）方6尺1歩の5歩、すなわち、250歩1段制の5歩に相当する地をさし、100代は2段にあたる。E 4区IV層（暗青灰色砂

土) 出土。

木簡16 上下両端折れ、左右両辺削り。ヒノキ属\*・板目。土地にかかわる文書木簡。表裏は異筆で、裏面は天地逆であろう。E 4区Ⅲ層(灰黒色有機土) 出土。

木簡17 上端二次的整形、下端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・追柁目。「弥勒仏」とみえ、あるいは仏典の一節を記した木簡の断片か。裏面5文字目は「滅」「済」の可能性がある。刀子形(木製品17)。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡18 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ科・柁目。1文字目は墨つきで文字ではない。5文字目の「貴」の下の文字は「曾」あるいは「貴」などに似る。論語泰伯第8の2「子曰、恭而無礼則勞、慎而無礼則子蕙、勇而無礼則乱、直而無礼則絞、君子篤於親、則民興於仁、故旧不遺、則民不偷。曾子有疾……」の一部を記した習書か。E 4区Ⅳ層(暗青灰色粘土) 出土。

木簡19 上端・左右両辺削り、下端折れ。スギ\*・追柁目。長禪にかかわる木簡。「禪」は、『新撰字鏡』に「志太乃波加万」、『和名抄』に「須万之毛乃、知比佐岐毛能」(装束部衣服類)、『色葉字類抄』下に、「禪、シタノハカマ」とみえる。「禪」は、長屋王家木簡(『平城京木簡二』1688号)、「下御袴」は、平城宮跡出土木簡(『平城宮木簡二』2799号)にみえる。「長禪」は、六尺禪ともいい、近世の事例にみえる(『日本国語大辞典第二版』)。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡20 削屑、柁目。衣類にかかわる木簡の削屑。「賜衣」の右の墨痕はあるいは転倒符の可能性もある。「三衣」とすれば、僧の着る大衣、七条、五条の袈裟のこと(『日本国語大辞典第二版』)。『日本書紀』敏達天皇14年の記事にみえる「尼等三衣」は、法衣の意か(同年3月丙戌条)。加知は褐色(カチイロ)。濃い、藍色。藍色の、黒く見えるほど濃いもの。濃藍色(『日本国語大辞典第二版』)。「禪」は木簡19にもみえ、ここでの字形は旁がウ冠となる異体。「禪」ははかまの俗字。E 4区Ⅳ層下層(灰黒色有機土) 出土。

木簡21 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・追柁目。習書木簡の断片か。「是以陰陽」は、『広弘明集』弁惑篇、『漢書』などにみえるが、不詳。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡22 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ\*・板目。表面3文字目「惑」は「感」の可能性もある。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡23 上端切断、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。裏面の文字は「期」「斯」などの可能性がある。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡24 上端二次的削り、下端削り、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。裏面1文字目は木偏の文字、裏面3文字目は人偏の文字。E 4区Ⅳ層(灰黒色砂土) 出土。

木簡25 削屑、板目。天地逆の重ね書きがある。1行目2文字目は、之もしくは延繞の文字か。2行目4文字目は「乙」の可能性はあるか。E 4区Ⅲ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡26 削屑、柁目。1文字目は「若」の可能性はある。「般若波羅蜜多」と記した削屑か。E 4区Ⅳ層下層(灰黒色有機土) 出土。

木簡27 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削りか。ヒノキ科・追柁目。4文字目は冠の部分が「受」に似る。あるいは習書か。E 4区Ⅳ層(暗青灰色砂土) 出土。

木簡28 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・追柁目。表面1文字目「康」は異体字。表面2文字目は「岐」の可能性はある。E 4区Ⅳ層下層(灰黒色有機土) 出土。

**木簡29** 上端・左辺削り、下端折れ、右辺二次的削り。ヒノキ科・板目。表面4・5文字目は「庚申」の可能性はある（「庚」は別筆か）。年紀であるとするならば、齊明天皇6年（660）にあたる可能性があるが、上に3文字分の墨書があり、表裏とも習書とみるのが穏当であろう。裏面4文字目は木偏の可能性はある。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡30** 四周削り。ヒノキ科・追柂目。馬の口取に仕奉る丁を召す歴名か。表面1文字目は「召」の可能性はある。上丁が「加羅人、龍自、馬代」の3丁、下（丁）が「加羅閉、伊波、黒目、委加麻都、斯己人、□留須、□□」の7丁で、合計10丁なのであろう。長屋王家木簡にみえる「御馬曳」（『平城木簡概報』（27）10頁下104号）ともかかわり、馬の差縄を引いて前行する役目か。諸差縄は左右から兩人で（左を上手として上位の官人が）引いて前行し、片差縄は一人で轡鞆を握って前行する（『日本国語大辞典第二版』）。上丁と下丁は不詳だが、あるいはこれとかかわるか。「仗轡」「井前轡」は不詳。「轡カ」は、当初「結カ」とみたが、筆画はもっと複雑であるため、「轡」の可能性を考えた。集団の単位などであれば、「小閉」「田乃」はその監督者か。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡31** 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。「丁」5名の名を記した歴名。表面5文字目は「干」の可能性はある。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

**木簡32** 上端折れ、下端削り、左右両辺割れ。ヒノキ属\*・板目。18種の薬名を記したリスト。「慈石（ジシャク）」は、鉱物性の生薬で、磁鉄鉱のこと。『本草集注』玉石中品に「慈石」、『本草和名』玉石中に「唐」と産地が示されるほか、『続日本紀』によると、和銅6年（713）近江国に慈石を献らせている（同年5月癸酉条）。「白羊鮮」は不詳。あるいは「白鮮皮（ハクセンピ）」のことか。そうであるならば、ミカン科の植物白鮮（和名ハクセン）の根皮に比定される。『本草集注』草木中品、『本草和名』草中に「比都之久佐」、『延喜式』典薬寮に、上総・下総2箇国の年料雑薬としてみえる（60上総年料雑薬条・61下総年料雑薬条）。「橘皮（キッピー）」は、ミカン科の植物福橘（フクキツ。和名オオベニミカン）もしくは朱橘（シュキツ。和名ベニミカン）など多くの柑橘類の果皮に比定される。『和名抄』に「太知波奈乃加波、木加波」とみえ、『延喜式』典薬寮に、6雑給料条、27唐使草薬条、29渤海使草薬条、31新羅使草薬条のほか、大和・摂津・伊勢・駿河・相模・阿波・讃岐の7箇国の年料雑薬としてみえる（46大和年料雑薬条・47摂津年料雑薬条・50伊勢年料雑薬条・54駿河年料雑薬条・57相模年料雑薬条・94阿波年料雑薬条・95讃岐年料雑薬条）。「鹿腎（ロクジン）」は、シカ科の動物、梅花鹿（バイカロク。和名シカ）あるいは馬鹿（バロク。和名アカシカ）の雄の外生殖器に比定される。

養老雑令によると、銀・銅・穀を量るには大斤、その他には小斤が用いられ（2度地条）、『延喜式』雑式によると、薬用を除き大斤が用いられた（7度量権衡条）。大1斤は180匁（約674g）で、大1斤（大16両）は小3斤（小1斤は小16両）にあたるから、小1斤は約225g、小1両は約14gである。E4区V層下層（暗青灰色砂土）出土。

**木簡33** 上端折れ、下端・左右両辺削り。ヒノキ\*・柂目。余銅にかかわる木簡。帳簿あるいは付札の可能性もある。「并合余銅」の「并」はアワセテであるから、「合余銅」は合金に使った余りの銅の意か。銅の計量は千斤を用いるため（雑令2度地条）。銅150斤は101kg余りとなる。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

**木簡34** 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。裏面は、割書の左行を記したもののか。木簡36まで合計を記した木簡・削屑をまとめた。E4区IV層（灰黒色砂土）出土。

木簡35 削屑、板目。上端は原形をとどめる。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

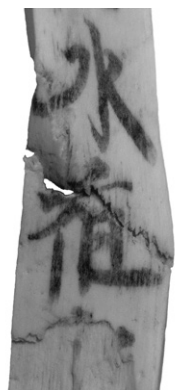
木簡36 四周削り。ヒノキ科・追柂目。形状から付札（木製品19）の可能性も否定できないが、「合」「并」（アワセテ）にしたがい、まとめて排列した。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

## B 荷札・付札

木簡37 上端・左辺削り、下端折れ、右辺の上半は削り下半は割れ。ヒノキ科・板目。水淵菹の荷札か。地名か。表面7文字目「淵」は木偏。表面10文字目の旁は「ノ文」。表面11文字目の旁は「寺」。「水淵」はミナブチで「南淵」か。そうであるならば、稲淵の古名とみられ、奈良県明日香村稲淵・坂田がその故地となる。丈六仏を造り、「南淵坂田（尼）寺」を建立した地として知られるほか（『日本書紀』用明天皇2年4月丙午条、『同』推古天皇14年（606）5月戊午条）、皇極天皇が祈雨の儀式を行った「南淵河上」（『日本書紀』皇極天皇元年（642）8月甲申朔条）、さらには大化の国博士南淵請安ゆかりの地としても知られる（『日本書紀』皇極天皇3年正月乙亥朔条）。「菹」はつけな。類似の文字でも、「菹」はつけもの、しおから、ししびしお。「苴」は「菹」に同じで、菜のつけものの意（『大漢和辞典』）。「日付+品目（水（淵）菹）+人名」の表記が木簡38とも共通することから、「水淵菹」は水淵からもたらされた菹（菜）と解し、荷札と判断した。

「連公」は木簡69にもみえ、『古屋家家譜』や『新撰姓氏録』などの系譜史料のほか、7世紀の一次資料では、石神遺跡出土木簡に「石上大連公」（『藤原木簡概報』（22）12頁8号）、法隆寺献納宝物の命過幡に「山部名嶋弓古連公」（東京国立博物館『法隆寺献納宝物銘文集成』付載1-2）が知られる（白井伊佐牟2011「人名に含まれる「連公」について」『史料』231）。また、韓国扶余双北里遺跡出土木簡に「那尔波連公」の釈読案が示されたものがある（平川南2009「百済の都出土の「連公」木簡」『国立歴史民俗博物館研究報告』153）。「□連公麻居」が進上の責任者あるいは統括者で、「仕丁男十四（人）女三（人?）」が実際に収穫あるいは運搬に従事したのであろう。「仕丁」以下は筆致が異なる。断片はいずれもE 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡38 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ\*・追柂目。水菹の荷札か。表面3文字目「中」は、やや異例の字形で、第1画目がしっかり入り、最終画の縦画がほとんど下につき抜けない。木簡37とほぼ同内容の荷札とみられ、前者は3月29日に、本木簡は4月17日に、それぞれ「水（淵）菹」をもたらしたものであろう。「淵」字を書き落としたのか、「水淵菹」＝「水菹」（水菜）とみるべきかは不詳。「菹」字の部分で土圧によりくの字に変形し、現状は2断片が接続している。右に、当該文字部分を正しく接続した状態の画像を参考として掲げた。「山直」は、『新撰姓氏録』摂津国神別・和泉国神別にみえる。「費直」は、飛鳥京跡苑池遺構出土木簡に「大棟費直伊多」とみえる（『飛鳥宮跡出土木簡』147-28号）。「山費直意比等奈」が進上の責任者あるいは統括者。なお、「四月中」は、かつて二十四節気の四月中気小満とみて、木簡の年代を示すと理解されたが、確言は難しく、時格の用法として「四月に」程度の意味に解するのが穏当と思われる（後述）。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。



木簡38部分  
（非原寸）

木簡39 上下両端・左辺削り、右辺割れ。上下に浅い切り込みがある。ヒノキ科・柂目。針間からもたらされた荷札、もしくはその物品の付札。「針間」は、播磨の古い表記。3・4

文字目は「当帰」の可能性がある。「当帰(トウキ)」は、セリ科の多年草トウキ(和名カラトウキ)の根に比定される。『本草集注』草木中品、『本草和名』草中に「也末世利、宇末世利、加波佐久」、『医心方』に「宇末世利、也末世利、於保世利、加波佐久」とみえ、『延喜式』典薬寮に、播磨国が当帰10斤を貢納するほか(85播磨年料雑薬条)、16箇国の年料雑薬としてみえる。藤原宮跡出土木簡に「(丹波国)伊看我評当帰五斤」(『藤原宮木簡四』1728号)、飛鳥京跡苑池遺構から「当帰二両」(『飛鳥宮跡出土木簡』147-18号)と記した木簡が出土している。E4区Ⅲ層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡40** 四周削り。針葉樹・板目。切り込みの上部欠損。鎮評と記した荷札もしくは付札。「評」以下の表面は刀子で削り取られている。「鎮評」は不詳ながら、「鎮」はチヌの読みであるならば、後の和泉国をさすか。出雲国風土記に「鯛 鎮仁(チニ)」とみえる(嶋根郡条・秋鹿郡条・神門郡条)。E4区Ⅳ層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡41** 四周削り。ヒノキ科・板目。綿の荷札。「八雲立つ」(『古事記』神代紀第八段)・「八雲さす」(『万葉集』巻3-430番歌)のごとく八雲は出雲にかかる枕詞として著名であるが、「八雲評」は不詳。養老雑令によると、綿は小斤で計量する(2度地条)。平城宮跡出土木簡のうち養老2年(718)以降の調綿荷札は4両=1屯としており、主計式上も同じ(2諸国調条)。「綿14斤」は約3.15kg。E4区Ⅳ層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡42** 削屑、柾目。評サト名を記した削屑。2行目4文字目は「部」「戸」「乃」などの字形に似る。「部」であるならば、近江国甲賀郡に石部駅がみえる。E4区出土層位不明。

**木簡43** 四周削り。ヒノキ科・板目。イワシの荷札。「之」の下に墨点がある。「海」は「海部郡」または「海部」の意か。「海部郡」は、『和名抄』の尾張国、隠岐国、紀伊国、豊後国にみえる。「伊委之」の表記は、奈良県山田道跡出土木簡(『木簡研究』(40)13頁(1))、藤原宮跡出土木簡(奈良県『藤原宮』(129)、『藤原宮木簡三』1186号)、二条大路木簡(『平城木簡概報』(22)19頁下159号)にみえ、ほかに「伊委志」(『平城木簡概報』(22)7頁1号)、「伊和之」(『藤原木簡概報』(11)11頁上5号)、「伊和志」(『藤原宮木簡三』1258号など)の表記もみえる。鯛は、主計式上によると、山陽道・南海道諸国の中男作物として、備中国(大鯛・比志古鯛)、備後国(大鯛)、安芸国(比志古鯛(醬小鯛))、周防国(比志古鯛)、紀伊国(大鯛)、讃岐国(大鯛)がみえるほか(4中男作物条、54備中国条、55備後国条、56安芸国条、57周防国条、59紀伊国条、62讃岐国条)、同民部下には交易雑物として、若狭国(小鯛腊)、丹後国(小鯛腊)がみえる(63交易雑物条)。紀伊国海部郡の可能性があろう。E4区Ⅲ層(灰黒色有機土)出土。

**木簡44** 上端・左右両辺削り、下端二次的切断。ヒノキ科・柾目。地名を記した木簡の断片。2文字目は「是」の可能性もある。「是」と「氏」は音通し、「是川」を宇治川と読む例(万葉集巻11-2427、2429・2430番歌)などを参照するならば、あるいは「イシカハ」で地名か。地名であるならば、『和名抄』によると、「石川郡」は河内国に、「石川郷」は山城国乙訓郡、陸奥国白河郡にみえる(加賀国石川郡もみえるが、建国以前は不詳)。また、蘇我氏ゆかりの地として、大和国高市郡の「石川」が知られる(『日本書紀』敏達天皇13年是歳条、『飛鳥藤原京木簡一』67号、『同二』1468~1470号など)。E4区Ⅲ層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡45** 上端折れ、下端切断か、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。猪穴の荷札ないし付札の断片か。「猪穴」は、内膳司式によると、元日より三日まで供せられた(14元二三日条)。また、同式によると、節料御贄のうち、近江国が元日に猪鹿を課されている(40諸国貢進御贄条)。主計式上によると、中男作物に「猪脯」「猪鮓」がみえる(61阿波國中男作物条)。

藤原宮跡出土木簡に、阿波国板野評の「猪脯」（『藤原宮木簡一』153号）、「猪宍」（奈良県『藤原宮』（98））がみえる。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡46** 上端・左右両辺削り、下端二次的削りか。ヒノキ科・板目。切り込みの上部と左辺下部を欠損。加宍の付札。「加宍」はカ（鹿）のシシであろう。「鹿宍」は、『延喜式』内膳司に歯固の正月料としてみえ（14元二三日料条）、近江国が貢進する決まりとなっていた（40諸国貢進御費条）。このほか、大膳式上、大学式および雑式に、積糞料として「鹿醢」「鹿脯」がみえる（15積糞料条・1積糞条・55諸国積糞式条）。主計式上の中男作物には「鹿鮓」がみえる（4中男作物条）。「醢」はシシビシオ（肉醬）で、今日の粕漬の類、あるいは塩辛の類か。「脯」はホジシで、干肉。「曰佐」は地名であるならば、『和名抄』によると、「曰佐郷」は筑前国那珂郡にみえるほか、近江国伊香郡、美濃国不破郡、但馬国養父郡の「遠佐郷」も通用しうるか。石神遺跡出土木簡に、「三野国不破評曰佐里」と記した白米の荷札がみえる（『藤原木簡概報』（17）21頁上126号）。人名であるならば、曰佐氏は、『新撰姓氏録』山城国皇別、大和国皇別にみえる。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡47** 四周削り。スギ\*・板目。シジミの付札。「斯自弥」は、蜆（シジミ）。藤原宮跡出土木簡に、「志自弥里」（『和名抄』の播磨国美囊郡志深郷にあたる）と記した荷札がみえる（『藤原木簡概報』（9）8頁上18号）。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡48** 四周削り。ヒノキ科・板目。楚割の付札。「須跛移利」は、『和名抄』に「魚條、読須波夜利。本朝式云、楚割」とみえ、いわゆる楚割で、魚肉を細長く割いて塩干にしたもの。字音仮名「跛」「移」は古様である。木簡にみえる楚割は斤を単位としており、「圍」を単位とするものは他にみえない。「圍」は蔬菜類や藁などに用いる単位。周3尺を1圍とした（厩牧令1厩条）。ここでは、細長く割いた楚割を束状にしたものか。飛鳥京跡苑池遺構出土木簡に「古鮑一列」とともに「古鮑三井」（井は圍の省画か）とみえ参考になる（『飛鳥宮跡出土木簡』143-6号）。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

**木簡49** 上端・左右両辺削り、下端切断。ヒノキ属\*・追柁目。釘の付札。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡50** 四周削り。ヒノキ\*・板目。スキの付札。「須伎」は鋤か。切り込みの上部欠損。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡51** 削屑、柁目。クハと記した木簡の削屑。「久皮」は鋏か。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

**木簡52** 四周削り。ヒノキ科・板目。物品の付札。「伊支□」は、あるいは伊支須か。そうであるならば、寒天の原料となる海藻の一種。正倉院文書には、「小凝菜」ともみえる（一例をあげるならば、上山寺御梅過所解案、正倉院文書続修後集第10巻第2紙・『大日古』十六502頁）。『和名抄』「海髮。和名以木須。楊氏抄云小凝菜」（菜蔬部藻類）。7世紀木簡では「伊支須」の表記が多く（『飛鳥藤原京木簡一』27・226・227号、奈良県『藤原宮概報』（54））、藤原宮跡出土木簡に「干伊伎須」がみえる（『藤原宮木簡一』206号）。E 4 区IV層（暗青灰色砂質土）出土。

**木簡53** 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・追柁目。物品の付札。「伊皮□」は不詳。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

**木簡54** 上端・左右両辺削り、下端二次的切断。モミ属\*・追柁目。物品の付札か。1文字目は「刷」に似る。E 4 区IV層（暗青灰色砂質土）出土。

**木簡55** 上端・左右両辺削り、下端折れ。針葉樹\*・板目。某五十戸からの荷札。表面1文字

- 目は「阿」の可能性もある。「□野椋五十(戸)」か。E4区IV層下層(緑灰色粘土)出土。
- 木簡56** 削屑、板目か。流麗な書風である。あるいは地名を記した荷札木簡の削屑か。古代に遡る「刀皮多」の事例は、「飛幡之浦」(『万葉集』巻12-3156番歌)が知られるが、本木簡との関係は不詳。E4区III層(暗青灰色砂土)出土。
- 木簡57** 上端二次的切断、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・板目。荷札もしくは付札の断片か。1文字目は「五」の可能性もある。E4区III層(暗青灰色砂土)出土。
- 木簡58** 上端折れ、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ科・追柁目。荷札もしくは付札の断片か。4文字目は「積」「稱」などの字形に似る。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡59** 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ属\*・追柁目。3文字目は小さい。人名を記した付札か。人名であるならば、「阿刀宿禰」は、『新撰姓氏録』左京神別上、山城国神別、「阿刀連」は、『新撰姓氏録』山城国神別、摂津国神別、和泉国神別にみえるほか、「阿刀部」が未定雑姓摂津国にみえる。『続日本紀』によると、神護景雲3年(769)、阿刀宿禰を賜姓された「阿刀造」(左京人)がみえる(同年7月壬午条)。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡60** 上端粗い削り、下端切断、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。人名を記した付札か。人名であるならば、「凡人」は『新撰姓氏録』未定雑姓和泉国にみえる。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡61** 四周削り。ヒノキ科・柁目。人名を記した付札。「神人」は、『新撰姓氏録』摂津国神別、河内国神別、未定雑姓和泉国にみえる。類例として、飛鳥池遺跡出土木簡に、播磨国宍粟郡三方里人の「神人勝牛」が知られる(『飛鳥藤原京木簡一』1309号)。「勝」は、秦氏系の朝鮮系渡来氏族(八木充1957「カバネ勝とその集団」。のち「地方政治組織の発展」(改題)『律令国家成立過程の研究』塙書房、1968再収)。「馬代」は、**木簡30**にも「上丁」の一人としてみえる。人名とみて矛盾はないが、人名でないとするならば、馬の代物、すなわち売買にともなう価直、駄馬の運賃、耕作馬の賃貸料などと解することも可能である(『飛鳥藤原京木簡一』328号)。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡62** 上下両端削り、左辺二次的削り、右辺削り。針葉樹・板目。某物品の付札か。腐食が著しく先行して保存処理が施されたため、本木簡の樹種は保存処理後の実体顕微鏡観察による知見である。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡63** 上端。左右両辺削り、下端二次的整形(削り)。**木簡66**まで、某物品の付札であろう。ヒノキ科・追柁目。裏面は草冠の文字か。E4区III層(暗青灰色砂土)出土。
- 木簡64** 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科\*・板目。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡65** 四周削り。二片接続。ヒノキ科・追柁目。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。
- 木簡66** 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ科・柁目。E4区III層(暗青灰色砂土)出土。
- C その他・不明
- 木簡67** 四周二次的整形(削り)。ヒノキ科・柁目。文書木簡を琴柱に転用したものか(木製品10)。E4区III層(暗青灰色砂土)出土。
- 木簡68** 四周二次的整形。ヒノキ科・板目。1文字目は「嶋」「鳥」「為」などの可能性がある。古い書風を残す。琴柱(木製品11)。E4区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

- 木簡69 上端・左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ\*・追柾目。木簡97まで、ウジナ、人名、カバネ、地名などを記した木簡の断片もしくは削屑。「堅部連」「正月連」は、『新撰姓氏録』にみえない。平城宮跡出土木簡に「堅部廣宅」（『平城宮木簡七』11993号）がみえる。「連公」は木簡37参照。「鎮」の傍の字体は「貴」（『碑別字新編』420頁）。「正月」はやや筆致が異なる。E 4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡70 上下両端折れ、左右両辺削り。ヒノキ\*・板目。裏面の「□冊七人」は別筆であろう。E 4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡71 上下両端折れ、左右両辺削りで下半は二次的削り。ヒノキ科・柾目。「五百木部」は、火明命の後裔と伝えられる氏族。伊福部・廬城部にも作る。「五百木部連」は、『新撰姓氏録』河内国神別、「伊福部」は山城国神別、「伊福部宿禰」は左京神別下、大和国神別、「伊福部連」は大和国神別にみえる。「私部」は、天皇の後妃のために設定された部民。『日本書紀』敏達天皇6年2月甲辰朔条に「詔、置<sub>二</sub>日祀部・私部<sub>一</sub>。」とみえる。E 4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡72 削屑、柾目。上端は二次的切断、右辺は原形をとどめる。2文字目は「継」の可能性はある。E 4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡73 上端削り、下端折れ、左辺割れ、右辺削りか。ヒノキ\*・板目。「葛城費（直）」は、『新撰姓氏録』河内国神別（葛木直）、未定雑姓撰津国にみえる。天武天皇12年（683）9月に連姓を賜った38氏の一つで（『日本書紀』同月丁未条）、葛木連氏は同14年6月忌寸を賜姓された（同月甲午条）。「葛木直」は、藤原宮跡出土木簡（『藤原宮木簡三』1227号）、長屋王家木簡（『平城木簡概報』（21）31頁下334・335号）にみえる。E 4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡74 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。「酒人」は、「以<sub>二</sub>高橋邑人活日<sub>一</sub>為<sub>二</sub>大神之掌酒<sub>一</sub>。〈掌酒、此云佐介弭荅。〉」（『日本書紀』崇神天皇8年4月乙卯条）とみえ、分註はサカビトでその職掌が掌酒であると解される。複姓の酒人に、紀酒人、草鹿酒人、日下部酒人、坂田酒人、中臣酒人、大和酒人が知られる。地名であるならば、「酒人郷」は、『和名抄』の撰津国東生郡にみえる。「干食部」は膳部のことで、膳夫人のことを「干食王后」と表記した法隆寺釈迦三尊光背銘、石神遺跡出土木簡（『藤原木簡概報』（22）22頁下＝（17）14頁下43号）にもみえる。E 4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡75 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。「葛原部」は、『新撰姓氏録』和泉国皇別にみえる。『続日本紀』によると、天平宝字元年（757）3月、藤原部を久須波良部（葛原部）と改めたとみえる（同月乙亥条）が、これ以前にも、中臣（藤原）朝臣大嶋を「葛原朝臣大嶋」（『日本書紀』持統天皇7年（693）3月庚子条）と記す例などもあり、藤原と葛原が通用したことは明らかで、8世紀以降も藤原部と葛原部の通用は認められる（「藤原部内足」天平11年4月10日経師手実帳、正倉院文書続々修第24帙第5巻断簡11、第32紙裏・『大日古』七249頁。「葛原部内足」同月15日写経司啓、正倉院文書塵芥文書第6巻第2紙・『大日古』二163頁）。地名であるならば、『和名抄』によると、「葛原郷」は、讃岐国多度郡、豊前国宇佐郡にみえる。E 4区Ⅴ層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡76 上端・右辺削り、下端折れ、左辺二次的削り。ヒノキ\*・板目。表面別筆部分3文字目は三水偏の文字。漢人は、中国系と称する渡来人集団およびその後裔。複姓の漢人に、飽浪漢人、葦屋漢人、新漢人、忍海漢人、大友漢人、西漢人、志賀漢人、高安漢人、高向漢人、南淵漢人、東漢人が知られる。ただし、「大古漢人」は類例を知らない。E 4区Ⅳ



- 層下層（灰黒色有機土下層）出土。
- 木簡77** 上端・左右両辺削り、下端二次的切断。ヒノキ科・板目。「小布部」は不詳。秋田県手取清水遺跡出土木簡に、「蝮不部」がみえる（『木簡研究』（10）69頁（5））。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡78** 削屑、板目。1文字目は「人」の可能性もある。「小ア」は小子部。「小子部宿祢」は、『新撰姓氏録』左京皇別上、「小子部連」は和泉国皇別にみえる。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡79** 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。裏面は割りのまま。「□徳」は人名か。「山本」は人名あるいは地名であろう。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡80** 削屑、板目。1文字目はあるいは偏がつく可能性がある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡81** 上端切断、下端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。E4区Ⅴ層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡82** 上端折れ、下端削り、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡83** 上端折れ、下端・左右両辺削り。ヒノキ科・追柁目。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡84** 上端切断、下端折れか、左右両辺削り。ヒノキ科・板目。裏面4文字目は「君」の可能性もある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡85** 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ科・追柁目。小子は年齢（16歳以下4歳以上）をさすか（戸令6三歳以下条）。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡86** 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。コウヤマキ科・板目。表面の異筆部分は横向きに記される。裏面3文字目は人偏の文字。「桑原」は人名あるいは地名か。地名であるならば、『和名抄』によると、「桑原郡」は大隅国、「桑原郷」は大和国葛上郡、下総国葛飾郡、近江国高島郡、信濃国諏訪郡、播磨国揖保郡、備後国世羅郡、安芸国佐伯郡、紀伊国伊都郡、伊予国温泉郡、土佐国吾川郡、筑後国上妻郡、肥後国託麻郡、同輩北郡、大隅国肝属郡にみえる。人名であるならば、「桑原公」が『新撰姓氏録』左京皇別下、「桑原村主」が左京諸蕃上に、「桑原史」が山城国諸蕃、摂津国諸蕃にみえ、大和国葛上郡桑原郷にもとづくウジナとされる。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡87** 削屑、板目。4文字目は「岡」の可能性もある。「漢人」は木簡76参照。E4区Ⅲ層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡88** 削屑、板目。1行目1文字目は、「嶋」「鳥」の可能性もある。「嶋史」は、『新撰姓氏録』右京諸蕃下にみえる。長屋王家木簡に「嶋史大国」がみえる（『平城木簡概報』（23）7頁下36号、『同』（27）17頁上215号）。「鳥史」の場合、『新撰姓氏録』にはみえないものの、「白鳥史」であるならば、長屋王家木簡に「(雅楽寮) 少属白鳥史豊麻呂」（『平城京木簡一』156号）、平城京跡出土木簡に「大初位下白鳥史老人」がみえる（『平城木簡概報』（23）18頁下181号）。「漢人」は木簡76参照。木簡91の「漢人尼摩里」は同一人物であろう。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡89** 削屑、板目。「青衣部臣」は、『新撰姓氏録』和泉国神別にみえる。宝亀4年（773）5月、古風の氏姓表記を改める官判に「青衣」を「采女」と改めるとみえる（『続日本紀』同月

辛巳条)。奈良県酒船石遺跡出土木簡に「三重評青女五十戸人」(『酒船石遺跡』143号)とみえるが、本木簡が人名に「青衣」表記を用いた初見となるか。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡90** 削屑、板目。「三河費」の「費」はやや太く、別筆の可能性はある。「三河費」は『新撰姓氏録』にはみえないが、天平5年(733)の写経所経師に「三河今土」(同年正月27日写経所啓、正倉院文書統修第16巻第3帙(1)裏・『大日古』七34頁)、天平21年(749)正月の『説一切有部発智大婆沙論』巻138奥書に「武義郡三川戸赤麻呂」がみえるといい(青山文庫蔵『古経題跋随見録』〈早稲田大学図書館蔵大正8年田中光顕自筆写本による〉・『寧楽遺文』中巻621頁)、延暦10年(791)の木簡に、参河国額田郡麻津郷の戸主「三川直弓足」(『木簡研究』(14)45頁2(1))がみえる。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡91** 削屑、板目。「矢集連」は、『新撰姓氏録』左京神別上に、「箭集宿祢」は右京神別上にみえる。『日本書紀』によると、天武天皇13年、矢集連・美濃矢集連(北野本)に宿祢が賜姓された(同年12月己卯条)。「漢人尼摩里」は、**木簡88**参照。E 4 区IV層下層(緑灰色粘土)出土。

**木簡92** 削屑、柁目。「造」に比して「万呂」は相当小さい。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡93** 削屑、板目。3文字目は言偏の文字。「犬上評」の可能性があり、そうであるならば、『和名抄』の近江国犬上郡にあたるか。E 4 区III層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡94** 削屑、板目。「三乃」はあるいは地名か。E 4 区III層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡95** 削屑、柁目。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡96** 削屑、柁目。E 4 区IV層(暗青灰色粘土)出土。

**木簡97** 削屑、柁目。**木簡179**と同一簡か。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡98** 削屑、柁目。馬にかかわる木簡の削屑。「王馬」と読めるならば、ミコノウマか。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡99** 上下両端・右辺削り、左辺二次的整形(削り)。ヒノキ科・板目。**木簡111**まで、習書の木簡もしくは削屑。あるいは馬形か(木製品5)。E 4 区III層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡100** 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ\*・板目。表面「二□」とその左行の「□□」、横傍線、2行目3文字目「口」を部位に含む文字が一次文書の可能性がある。二次文書は習書。裏面2行目3・4文字目は一文字か。「榎」は、かい、かじ(『大漢和辞典』)。E 4 区III層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡101** 上下両端折れ、左辺削り、左辺下部は二次的整形か、右辺割れ。ヒノキ科・板目。板状木製品(木製品30)。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡102** 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。E 4 区IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡103** 上下両端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。E 4 区IV層(暗青灰色粘土)出土。

**木簡104** 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・追柁目。習書。裏面1~4文字目の偏は糸偏か。また、裏面2~4文字目は「紅」の可能性はある。E 4 区IV層(暗青灰色砂質土)~IV層下層(灰黒色有機土)出土。

**木簡105** 上端・左辺削り、下端二次的切断、右辺割れ。ヒノキ\*・追柁目。表面3文字目は「紙」の可能性はある。習書。E 4 区III層(暗青灰色砂土)出土。

**木簡106** 上端折れ、下端二次的切断か、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。E 4 区IV層下層

- (灰黒色有機土) 出土。
- 木簡107 上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・追柂目。習書。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡108 削屑、板目。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡109 削屑、柂目。「哀」の字形は、異体字で『碑別字新編』82頁参照。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡110 削屑、柂目。1文字目の「嶋」の字形は「寫」。3文字目も「寫」の崩れた字形の可能性がある。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡111 削屑、柂目。「天」は送り仮名を記したものか。E 4区VI層(青灰色粘土) 出土。
- 木簡112 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・追柂目。2文字目は「即」などの可能性がある。E 4区V層(暗青灰色粘土) 出土。
- 木簡113 上端二次的削り、左右両辺削り、下端折れ。ヒノキ\*・板目。「賤室」は不詳。あるいは、天平19年(747)2月11日大安寺伽藍縁起并流記資財帳(国立歴史民俗博物館保管文書・『大日古』二648頁)、『薬師寺縁起』(大日本仏教全書118寺誌叢書第二244頁)にみえる「賤院」などの類とすれば、寺院に所属する施設の可能性がある。E 4区IV層下層(灰黒色有機土下層) 出土。
- 木簡114 上端削り、下端焼損、左右両辺割れ。ヒノキ属\*・追柂目。1行目4文字目はウ冠の文字。2行目1文字目は「一」または横棒線。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡115 上端折れ、下端切断、左辺割れ、右辺削り。ヒノキ科・板目。2文字目「代」はあるいは「戌」の可能性がある。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡116 上端・左辺削り、下端折れ、右辺割れ。ヒノキ科・板目。裏面1文字目は「鹿」の可能性があり、鹿の下部が上に縮まった字形。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡117 上端・左右両辺削り、下端二次的切断。針葉樹・柂目。E 4区III層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡118 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。表面2文字目は「摩」の林部分を著しく省画した字体。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡119 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。E 4区V層(暗青灰色粘土) 出土。
- 木簡120 上下両端・左辺削り、右辺割れ。ヒノキ\*・柂目。表面1文字目は「以」「奴」などの字体に似る。表面2文字目は「二」「六」などの可能性がある。裏面はさらに続くか。ただし文末までは続かない。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡121 上端二次的整形(削り)、下端左半折れ右半焼損、左右両辺二次的削りか。スギ\*・板目。表裏両面に削り残りの文字が多数残る。刀形(木製品16)。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡122 上下両端折れ、左辺上半削り下半二次的削り、右辺割れ。ヒノキ科・板目。刀子形か。裏面3・4文字目は、「也」の可能性がある。板状木製品(木製品29)。E 4区III層(暗青灰色砂土) 出土。
- 木簡123 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。表面1文字目は「原」の可能性がある。まだれで、縦画が突き抜ける「原」の字体(『碑別字新編』113頁、『平城宮木簡二』2265号)。E 4区IV層下層(灰黒色有機土) 出土。
- 木簡124 上端切断か、下端折れ、左辺削りか、右辺割れ。ヒノキ\*・板目。あるいは車偏の

文字の可能性がある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡125 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。E 4 区IV層（暗青灰色粘土）出土。

木簡126 上端二次的切断、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡127 上端二次的切断、下両端折れ、左右両辺削り。ヒノキ科・追柂目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡128 上端・左辺削り、下端切断、右辺割れ。ヒノキ科・板目。4文字目は人偏の文字。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡129 上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。1文字目は「茵」の可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡130 上下両端・右辺削り、左辺割れ。ヒノキ科・追柂目。表面3文字目は「奉」の可能性もある。裏面は天地逆。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡131 削屑、板目か。「五月ヵ」とみたが、あるいは1文字目は玉偏の文字、2文字目は肉月の文字の可能性もある。E 4 区VI層（暗青灰色粘土）出土。

木簡132 削屑、柂目。あるいは偏のつく可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡133 削屑、柂目。3文字目は、「其」「基」などの可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡134 削屑、柂目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡135 削屑、板目。1文字目の字形は、「受」あるいは「授」の可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡136 削屑、板目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡137 削屑、板目。E 4 区IV層下層（緑灰色粘土）出土。

木簡138 削屑、板目。2文字目は木偏の文字。E 4 区IV層下層（緑灰色粘土）出土。

木簡139 削屑、板目。4文字目は「首」、5文字目は「楚」などの可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡140 削屑、柂目。「思」の右の文字には「白」を含む。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡141 削屑、板目か。E 4 区III層（暗青灰色粘土）出土。

木簡142 削屑、柂目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡143 削屑、柂目。2文字目は偏がつく可能性もある。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡144 削屑、板目。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡145 削屑、板目。E 4 区IV層（暗青灰色粘土）出土。

木簡146 削屑、柂目。あるいは1文字目も「天」か。E 4 区IV層（暗青灰色粘土）出土。

木簡147 削屑、柂目。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡148 削屑、板目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡149 削屑、柂目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡150 削屑、柂目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡151 削屑、板目。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡152 削屑、柂目。E 4 区III層（暗青灰色砂土）出土。

木簡153 削屑、柂目。3文字目は木偏・手偏などか。E 4 区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

- 木簡154 削屑、板目。1文字目は三水偏の文字、2文字目は「生」の可能性はある。右辺の半分ないし3分の2を欠く。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡155 削屑、板目。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡156 上端二次的切断、下端削り、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。表面4文字目は「知」「短」など「矢」を偏にもつ漢字。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡157 上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。ヒノキ科・板目。裏面2文字目は「不」の可能性はある。E4区Ⅳ層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡158 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・追柁目。1文字目は「津」の可能性はある。E4区Ⅳ層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡159 上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。コウヤマキ\*・板目。現状残る墨は、縦画一本のみである。E4区Ⅲ層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡160 上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。ヒノキ科・柁目。1文字目は人偏の文字。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡161 上下両端折れ、左右両辺割れ。ヒノキ科・板目。金偏の文字か。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡162 削屑、追柁目。表裏両面に墨痕のある削屑。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡163 削屑、板目。1文字目、あるいは偏がつく文字か。E4区谷堆積土出土。
- 木簡164 削屑、柁目。3文字目の筆順は「必」に似る。4文字目は人偏の文字か。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡165 削屑、柁目。1～3文字目の旁は「寺」。同じ字の習書か。E4区Ⅵ層（青灰色粘土）出土。
- 木簡166 削屑、柁目。「寺寺」で偏がつく可能性はある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡167 削屑、板目。1文字目は、「敬」の右側に似る。E4区Ⅳ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡168 削屑、板目。上端は原形をとどめる。E4区Ⅳ層（暗青灰色粘土）出土。
- 木簡169 削屑、板目。1文字目は、「目」「司」などの可能性はある。E4区Ⅲ層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡170 削屑、板目。2文字目は、「若」の可能性はある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡171 削屑、板目。1文字目は「残」「銭」などの可能性はある。E4区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。
- 木簡172 削屑、柁目。「岡本」の可能性はある。地名であるならば、『和名抄』によると、「岡本郷」は、河内国交野郡、相模国足上郡、同国高座郡、近江国浅井郡、越前国丹生郡、同国足羽郡、能登国羽咋郡、越中国婦負郡がみえ、山城国愛宕郡賀茂郷のコザト「岡本里」（天平6年（734）7月27日優婆塞貢進解、正倉院文書続修別集第47巻第1紙・『大日古』一583頁）、備中国都宇郡建部郷のコザト「岡本里」（天平11年（739）備中国大税負死亡人帳、正倉院文書正集第35巻第3紙・『大日古』二248頁）が知られる。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡173 削屑、板目。下端は原形をとどめるかもしくは二次的切断か。3文字目は「朔」の可能性はある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。
- 木簡174 削屑、板目。2文字目は「司」の可能性はある。E4区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出

土。

木簡175 削屑、板目。言偏の文字であろう。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡176 削屑、板目か。上端は原形をとどめるか。2文字目は「余」などの可能性がある。

E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡177 削屑、板目。2文字目は「六」の可能性がある。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡178 削屑、柁目。1文字目は「巾」「布」「内」などの可能性がある。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

木簡179 削屑、柁目。木簡97と同一簡の可能性がある。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

#### D 木簡の年代と内容

「四月中十七日」（木簡38）の理解 西橋木簡は、調査後早い段階に土器整理にかかわった川越俊一の論考に引用され、学界の注目を集めることとなった。川越は橋本義則の理解と断りつつ、「四月中」とは二十四節気のうち四月の中気小満（ママ）のことで、「四月中十七日」とは、それが17日に当たることを意味する」と述べた。その上で、7世紀後半では斉明天皇7年（661）と天武天皇元年（672）が該当すること、西橋遺跡出土土器の型式を考慮して、前者とみるべきと指摘した（川越俊一2000「藤原京条坊年代考」奈文研『研究論集XI』）。結果、西橋木簡は、釈文などの詳細が未公表のまま、斉明朝の木簡群と認知されてきた。しかしながら、「四月中」が二十四節気の四月中気（小満）を示すか否か、必ずしも自明ではない。少し丁寧に検討しておきたい。

『日本暦日総覧』によると、17日が4月中気（小満）にあたる年は、7世紀前半では推古天皇12年（604）4月17日壬午、同23年（615）4月17日己卯があり、大化年間（645～650）から延暦年間（782～806）までについて、日付に加え干支・納音・十二直を掲げると、「斉明天皇7年4月17日辛巳金建」「天武天皇元年4月17日戊寅土収（納）」「和銅3年（710）4月17日丁酉火定」「神亀6年（729）4月17日丁丑水成」「天平20年（748）4月17日丙辰土閉」「天平神護3年（767）4月17日丙申火平」「延暦5年（786）4月17日丙子水危」となる（『日本暦日総覧』具注暦篇古代前期3・4、古代中期1、本の友社、1993～95年）。このうち、納音が「水」になるのは8世紀に降り、十二直の文字も木簡とは合わない。カバネの表記「連公」「費直」や共伴遺物の年代観からこの木簡は8世紀には降らないとみるべきで、仮に暦注とみる場合は天武天皇元年以前にあたりとみるのが自然である。ただし、その場合元嘉暦になり、元嘉暦の納音・十二直が、それ以後の暦と同じなのか否か、また、もとになった暦法で、諱を避けるなどの事情で用字が異なっていたのか否か、など検討の余地は残されている（例えば、儀鳳暦の暦注は、二十四節気の正月中と二月節とで雨水と驚蟄が入れ替わり、驚蟄が「啓蟄」に変わっていた）。

次いで、仮に「四月中」を二十四節気の中気とみる場合、そもそも「中気」は日の後に記されるものである点、「水」を納音とした場合、日付の干支が記されない点是不審といわざるをえない。さらに、「水」を七曜とみる場合、天武天皇元年が該当するとはいえ、干支・納音・十二直を記さず七曜のみを記すことがありうるのか、そもそも天皇が独占する七曜暦を木簡に記すのかなど、なお不審な点が残されている。それだけではなく、ほぼ同内容とみられる「三月廿九日」の荷札（木簡37）に「節」や「中」の字がみえないことに留意するならば、「四月中」や「水」を暦注の一部とみることは困難といわざるをえない。

「某月中」の表記は、埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘の「七月中」、江田船山古墳出土大刀銘の「八月中」、兵庫県箕谷2号墳出土鉄刀銘の「五月中」、法隆寺釈迦三尊像光背銘の「三月中」など、列島の金石文にも類例が知られ、古くは漢代の居延漢簡にも認められるという。近年は「〇月において」「〇月に」の意、すなわち時格の用法とみる意見が強く、ここでもその理解にしたい（例えば、上田正昭2001「銘文研究二〇年と古代史」『稲荷山古墳の鉄剣を見直す』学生社。暦注の基礎的な理解は、細井浩志氏、古尾谷知浩氏のご教示をえた）。

**西橋木簡の年代観** 西橋木簡には確実な紀年木簡は認められないため、年代を確定することは困難である。まず依拠すべきは、サト表記であろう。大宝令以前のサト表記の変遷は、近年確実に増加した7世紀の荷札により、その年代はほぼ明らかにされている。すなわち、天武天皇10年(681)以前の表記は、すべて「五十戸」に限られ、天武天皇12年には「里」表記がみえはじめるが、「五十戸」表記も残存しており、持統天皇2年(688)以降、サト表記は「里」に統一される。近年、石神遺跡出土木簡の再読見知見を示し、「□□年十一月」の三野国不波評日佐里荷札(『藤原木簡概報』(17)21頁上126号)の年紀は、かつて甲寅(庚寅の誤植で、持統天皇4年、690年にあたると推測)の可能性が示されていたが(奈文研2006『評制下荷札木簡集成』89号木簡解説)、残画によるならば「壬午」が相応しいと指摘した(山藤正敏・山本崇2022「石神遺跡SD1347A出土の土器群・木簡—石神遺跡第14・15次」『奈文研紀要2022』)。そうであるならば、「里」表記の初見は、天武天皇11年11月へとやや遡ることとなる。西橋木簡には、「鎮評」(木簡40)、「八雲評」(木簡41)、「□評石」(木簡42)、「評造」(木簡84)など評にかかわる木簡をはじめ、「刀皮多五十戸」(木簡56)、「野椋五十□」(木簡55)、「□十戸人」(木簡57)にみられるごとく評五十戸制下の木簡が散見する。これに対して、「里」と記した木簡は1点も含まれていない点は、おおまかな年代を考える上で手がかりとなろう。付言するならば、「針間」(木簡39)のように『古事記』とも共通する表記が含まれる点や(館野和己2001「木簡の表記と記紀」『国語と国文学』78-11)、「三乃」(木簡94)のごとき古い国名表記がみえる点も、古相を示すといえる。

もう1点は、「□連公麻居」(木簡37)、「堅部連公君□」(木簡69)にみえる、カバネ「連公」の類例を2例追加したことである。カバネ「連公」は、異説もあるが、「費直」(直)、使主(臣)の類例ともあいまって、カバネ「連」の旧称とみる理解が有力である(平川2009前掲、中村友一2019「「連公」と系譜史料」篠川賢編『日本古代の氏と系譜』雄山閣出版など)。連は、天武天皇の時代に多く改賜氏姓され、いわゆる八色の姓で第7位のカバネとしてとどめられた(『日本書紀』天武天皇13年10月己卯朔条)。「連公」は、天武末年に降るものではなかろう。加えて、「山費直」(木簡38)、「青衣ア臣」(木簡89)といった古様を示す表記も注目される。

以上からするならば、西橋木簡の年代は、少なくとも天武天皇13年(684)の八色の姓以降に降るものではなく、里表記の登場する天武天皇11年以前に属するもので、天武朝の前半(あるいはそれ以前)と解するのが穏当であろう。

**西橋木簡の内容** 西橋木簡には、僧職・僧名とみられるものをはじめ、寺院や仏教にかかわる可能性のある語句が一定程度含まれている。例示するならば、「上坐君」(木簡2)、「恵賞」(木簡6)、「僧」(木簡5)、「三衣」(木簡20)であり、「弥勒仏王釈」「□光之難□」(木簡17)、「菩薩」(木簡103)、「賢愚」(木簡25)、「□波羅」(木簡26)、「寺」(木簡144)のほか、「寺」を旁にもつ文字の可能性は否定できないものの「寺」字の習書(木簡165・166)もみえる。「賤室」(木簡113)は、あるいは寺院の一施設の可能性があるが、そうであるならば、後の寺家人、あるいは寺奴婢の存在が推測される。また、「慈石二両白羊鮮二両橘皮二両□草二両鹿腎一具」のごとき「十八種」

の薬物（木簡32）、「当帰？」（木簡39）といった薬物は、正倉院や法隆寺に納められた例をあげるまでもなく（天平勝宝8歳（756）6月21日種々薬帳、正倉院御物・『大日古』四171頁。天平19年（747）2月11日法隆寺伽藍縁起并流記資財帳、法隆寺文書・『大日古』二602頁）、古代寺院に多く備えられており、寺院との関係がうかがわれる資料と解される。

西橋木簡が出土した谷頭は、東を正面とする橘寺の推定西限区画施設から約90mの至近にあたる。出土地のすぐ北には、飛鳥宮からほぼ真東西に敷設された、幅約12mの7世紀の東西道路があり、川原寺はこの東西道路の北側に、南面して建てられていた。木簡の廃棄主体を寺院とみる理解は、木簡の記載内容と遺跡の立地からして、蓋然性の高い推測といえる。

なお、「仕丁」（木簡37）、「五丁」（木簡31）は、廃棄主体に属する仕丁の存在を示す可能性がある。仕丁は、いわゆる大化改新詔第4条に「凡仕丁者、改<sub>レ</sub>旧每<sub>二</sub>卅戸<sub>一</sub>一人〈以<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>充<sub>レ</sub>廩也。〉而每<sub>二</sub>五十戸<sub>一</sub>一人〈以<sub>二</sub>一人<sub>一</sub>充<sub>レ</sub>廩。〉以充<sub>二</sub>諸司<sub>一</sub>。」とみえ（『日本書紀』大化2年（646）正月甲子朔条）、諸司に配属されたものがよく知られるが、他方で「若寺家仕丁之子者、如<sub>二</sub>良人法<sub>一</sub>、若別入<sub>二</sub>奴婢<sub>一</sub>者、如<sub>二</sub>奴婢法<sub>一</sub>。」ともみえ（『日本書紀』大化元年8月庚子条）、一例のみの乏しい史料から実態を明らかにするのは困難ながら、大化年間頃に「寺家仕丁」なる身分が存在したことは確実である。後者の事例であるならば、これらも寺院にかかわる木簡と解することも可能であろう。

しかしながら、木簡群の内容がすべて寺院関係にまとまる訳ではない。

「土官人」（木簡13）は土師氏の官人などとみるならば俗人であり、「馬口仕奉丁」の歴名（木簡30）は、「上丁」と「下（丁）」に分けられる10名の丁が奉仕したときのものとみられ、「仗轡」「井前轡」にまとめられていたらしい。あるいは、こうした馬の1頭が「王馬（ミコノウマ）」（木簡98）かもしれない。いずれにせよ、寺院とは異なる世俗社会、王族や官人にかかわる木簡も含まれているとみなければならない。

加えて、寺院由来の木簡と理解する場合、西橋木簡にみえる食品（材）が、思いのほか多彩であることには留意する必要があるだろう。荷札ないし付札とみられる木簡にみえる食品（材）を列挙する。蔬菜類は、「水（淵）菹（水菜?）」（木簡37・38）、海藻類は「伊支（須）」（木簡52）がみえる。このほかの品目は、「伊委之」（木簡43）、「斯自弥」（木簡47）、「須跛移利」（木簡48）、「猪突」（木簡45）、「加突」（木簡46）と、水産物とその加工品、および獣肉類が卓越する。米にかかわる荷札はみえず、「舂米」の習書（木簡100）がみえるのみである点も特徴的である。「竹筍」「慈（姑）」（木簡2）は文書木簡の裏面に記されることから、習書の一部であるかもしれない。僧尼令によると、「凡僧尼、飲<sub>レ</sub>酒、食<sub>レ</sub>肉、服<sub>二</sub>五辛<sub>一</sub>者、卅日苦使。若為<sub>二</sub>疾病薬分<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>須、三綱給<sub>二</sub>其日限<sub>一</sub>。若飲<sub>レ</sub>酒醉乱、及与<sub>レ</sub>人闘打者、各還俗。」（7飲酒条）とみえ、僧尼の飲酒肉食は「薬分」としての限られた処方を除き原則として禁じられていた。むろん、『日本霊異記』にみられる僧の魚食を想起する説話（下巻第6縁）などからするならば、僧尼の肉（魚）食は戒にそむくべき姿ではないとはいえ、実際には存在したとみなければならない。とはいえ、こうした破戒が7世紀から状態化していたか否か、判断に堪える資料は寡聞にして知らず、西橋木簡にみえる食品（材）は、寺に帰属するものとして相応しいとはいいがたいように思われる。

そこで、100年以上降る資料群ではあるが、確実な寺内資料である奈良市西大寺食堂院跡の井戸 SE950出土木簡と比較してみる。延暦年間（782～806）の紀年木簡を含むこの木簡群は、食材の進上、保管、あるいは分配にかかわる木簡に整理され、古代寺院の食生活がうかがわれる好例である。品目にのみ注目すると、酒（『平城木簡概報』（38）17頁下52号・53号など。以下、出典



の『平城木簡概報』を略し、(38) 17下52号のごとく示す) や、調味料の塩 ((39) 23下169号・(39) 32下=(38) 17下54号)・醬 ((39) 21上137号)・酢 ((39) 27上213号) が散見するほか、典拠は略すが概して米や飯が多くを占めている。その他の食品(材)は、「麦」((38) 20上92号)を除くと、「瓜」((38) 16上35号・(38) 19上76号)、「木瓜」((38) 16上35号)、「大豆」((38) 17下51号・(38) 18下65号・(39) 32下=(38) 17下51号)、「大角豆」((38) 16上35号・(39) 32下=(38) 16上38号+接続片)、「夾角豆」((38) 19上75号)、「茄子」((38) 16上35号・(38) 17上49号)、「蔓菁」((38) 16下42号)、「大根」「知佐」((39) 32下=(38) 16上36号)のように、蔬菜類に集中する傾向がある。やや異質なものとして、海藻類の「心太」((39) 30上(270号))がみえるほか、「伊賀栗拾使」((38) 16下40号)によるならば、栗も仏供あるいは食用に供されたのであろう。西大寺食堂院木簡は僧の食事に誠に相応しい内容で、それだけに西橋木簡との相違は著しいように思う。なお、山崎健によると、木簡にはみえないものの、井戸 SE950からはわずかながら魚の動物遺存体も出土しており、「寺院でも魚を食べることがあった」と評価している(山崎健2021「西大寺食堂院 SE950出土の動物遺存体—第404次」『奈文研紀要2021』)。同2023「西大寺食堂院跡出土の動物遺体」『古代寺院の食を再現する』吉川弘文館)。

もう一つの素材として、西橋木簡の年代とも比較的近い、飛鳥池遺跡出土木簡と比較してみる。飛鳥池工房は、かつて「造飛鳥寺官」とかかわらせる説も提起されたが(吉川真司2001「飛鳥池木簡の再検討」『木簡研究』23号)、寺崎保広による整理のごとく、一寺院のための工房とみるには大規模にすぎるとみるのが主流と思われる(寺崎保広2005「飛鳥池遺跡の性格についての覚書」のち『古代日本の都城と木簡』吉川弘文館、2006再収)。また、正報告書は、飛鳥池工房は「官司工房」「内廷工房」「寺院工房」など多様な側面をあわせもった総合工房であり、こうした未分化なあり方こそが、律令国家建設期に特有の官営工房の操業形態であった、と結論づけている(奈文研2022『飛鳥池遺跡発掘調査報告 本文編 [Ⅲ]』奈文研学報71)。飛鳥池木簡は、いまや造飛鳥寺官のみで理解することはできまいが、それが飛鳥寺全体の修造とみるか、あるいは東南禅院の造営とみるかはともかく、寺院を含む造営組織に由来する資料であること自体は動かない。そこで、同遺跡北地区出土木簡にみる食品(材)をみてみると、稲、米、飯にかかわるものが多く、「酒」(『飛鳥藤原京木簡一』788号。以下木簡番号のみ示す。)、 「塩」(204・328・331・341・342・923号)、がみえるほか、蔬菜類は「小豆」(198号)、「瓜」(1420号)、水産物として「鮑」(665号)、「伊支(須)」(226・227号)、「軍布」(196・228・229・932号)、「尔支米」(1428・1432号)など比較的多彩な食品(材)が認められる。のみならず、「万病膏」「神明膏」(939号)、「桑根白皮」(222号)、「甘草」「鼓」「桂心」(711号)、「加良志」(995号)といった薬物もみえる。質量を無視した単純な比較に過ぎないが、飛鳥池木簡と西橋木簡の食品(材)の内容は、近いといえよう。

**造寺官** 以上、西橋木簡は、寺院との関係をもちつつも、官の造営組織とのかかわりも推測される資料と理解した。そうであるならば、西橋木簡の廃棄主体は、某寺院の造営官司である可能性を考えてみる必要がある。木簡群に造営を示す直接的な資料は乏しいが、わずかながら痕跡は残されている。「余銅百五十斤」(木簡33)、「釘五十」(木簡49)は、造営にかかわる資料とみることもできよう。「須伎」(木簡50)、「久皮」(木簡51)は、耕作具ともみられるが、あるいは造営や整地などにかかわるかもしれない。谷埋土の出土遺物に、漆附着土器がごくわずかながら含まれている点にも留意したい。

遺跡の周辺に対象となる造寺官司を推測するとき、その立地からして、第1の候補は橘寺である。橘寺の創建は、『扶桑略記』や『聖徳太子伝暦』によると、推古天皇14年(606)7月とされるものの(同年7月条)、具体的な造営過程がうかがわれる史料に乏しい。確実な初見は、天

武天皇9年(680)、尼坊より失火し10房を焼いたとする記事をまたねばならない(『日本書紀』同年4月乙卯条)。西橋木簡が推定される670年代前後の動向を伝える史料は残らず、文献史学からの考究は限界があるものの、有力な候補の一つとみられる。なお、橋寺境内から川原寺式軒丸瓦が採集されていること(保井芳太郎1932『大和上代寺院志』大和史学会、第一書房1985年復刻)、北門周辺の調査では軒丸瓦C種の出土が報告されていること(花谷浩2009「飛鳥の川原寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒瓦の成立と展開』奈文研)、などをふまえ、川原寺の造営とほぼ同時期に本格的な伽藍をもつ寺として整備されたとする意見がある(大脇潔1989「橋寺」『飛鳥の寺』日本の古寺美術14、保育社)。この時期の橋寺の造営主体は、史料から詳らかにしえないものの、同時期に造営が進む近接する寺院で瓦などの資材が共有された可能性がある。

そうであるならば、もう一つの候補は、隣接する川原寺である。川原寺の創建は、齊明天皇の没後大津宮遷都までの間に、天智天皇が亡母の追福を祈り建立を開始したとする福山敏男の見解が、おおむね受け入れられている(福山敏男1948「川原寺(弘福寺)」『奈良朝寺院の研究』高桐書院、綜芸舎1978年増訂版)。天武天皇2年(673)3月、川原寺において一切経を写したとする記事が確実な初見とみられ(『日本書紀』同月是月条)、同年、500戸の封戸が常陸・上野・武蔵・紀伊におかれた(『新抄格勅符抄』寺封部)。続いて同14年8月に行幸し衆僧に稲を施したころまでには(『日本書紀』同月丙戌条)、伽藍の造営はほぼ終焉を迎えていたらしい。川原寺の造営の具体的な経過はこれまた不明であるが、四大寺(『続日本紀』大宝2年12月丁巳条ほか)に列する川原寺の造営は、「造川原寺官」ともいうべき官司が専当したとみられる。あるいは一切経の書写も含め、寺観を整える造作すべてをこの官が管轄したのかもしれない。なお、大宝元年(701)7月の太政官処分によると、「造大安薬師二寺官准<sub>レ</sub>寮。造塔丈六二官准<sub>レ</sub>司焉。」(同月戊戌条)とみえ、この段階に造寺官が設置されていた寺院は大安(大官大寺)・薬師寺の二寺のみとみられ、他に、特定は難しいながら某寺の塔の造営、丈六仏の造仏を専当する官が設置されていた(造大安薬師二寺の下部組織とみる理解もある)。してみれば、川原寺の大規模な造営は、7世紀におさまり、大宝初年にはほぼ終焉を迎えていたのであろう。

川原寺の工房は、北面大垣の内側に確認されている。この工房は30基以上の炉跡などからなり、鉄・銅・銀・ガラス・瓦・漆塗製品などの製造を行い、7世紀後半から平安時代まで操業したとみられている(奈文研2004『川原寺寺域北限の調査—飛鳥藤原第119-5次発掘調査報告』)。造寺官の施設は、工房に近接する伽藍北方ともみられよう。講堂の北で検出した、平安時代後期頃に廃絶する南北棟の総柱建物は、寺の管理施設かもしれない。しかしながら、東西2.5町南北3町と推定される川原寺の立地は、地形の制約によりその用益は制限されていた。中心伽藍こそ飛鳥川左岸の段丘上にあるが、金堂の西から北西には丘陵が張り出し、僧房のすぐ北には飛鳥川が形成した段丘崖が迫り、十分な空間は確保できない。わずかな平坦面が西金堂の西に残るものの、西回廊から西へ複廊の西渡廊が26m以上のびることが確認されており、中心伽藍西方には寺家にかかわる何らかの施設が推測されている。そうであるならば、狭小な寺域内に造川原寺官が立地する余地はなかった可能性があり、その候補地の一つは、寺城南の東西道路を隔てた橋寺寺域の西方、すなわち木簡出土地に隣接する北ないし東に求めることも一案ではなからうか。

以上、西橋木簡は、670年代前後と推測される資料群であり、その廃棄主体は遺跡近隣にある寺院の造営官司ではないかとの推論を述べた。ただし、いずれの寺院の造寺官であるかは確言しえない。末尾ながら、本稿は積文の公表とその理解に供する史料的事実の提示を旨とし、

表4-1 西橋遺跡出土釈読不能木簡一覽

木簡番号	地区	出土層位		形状	型式番号	樹種	木取り
180	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上端・左右両辺削り、下端粗い削りか。墨痕は極めて薄い。	5011	ヒノキ科	柎目
181	E 4		暗褐色有機土	上端・左右両辺削り、下端折れ。両面に墨痕があれども追いがたい。	5019	ヒノキ科	板目
182	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上下両端折れ、左右両辺割れ。	5081	ヒノキ科	板目
183	E 4	III層	暗青灰色砂土	上端・左辺削り、下端折れ、右辺二次的割り。	5081	ヒノキ科	追柎目
184	E 4	III層	暗青灰色砂土	上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。	5081	ヒノキ科	追柎目
185	E 4	III層	暗青灰色砂土	上端・左右両辺削り、下端折れ。	5019	ヒノキ科	板目
186	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上下両端折れ、左右両辺割れ。	5081	ヒノキ科	板目
187	E 4	—	谷堆積土	上下両端折れ、左右両辺割れ。	5081	ヒノキ科	追柎目
188	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上下両端折れ、左右両辺割れ。	5081	ヒノキ科	板目
189	E 4	III層	暗青灰色砂土	上下両端折れ、左辺割れ、右辺削り。	5081	ヒノキ科	柎目
190	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上下両端折れ、左右両辺割れ。	5081	ヒノキ科	柎目
191	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上端削り、下端折れ、左右両辺割れ。横材。	5081	ヒノキ科	柎目
192	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。	5081	ヒノキ科	板目
193	E 4	III層	暗青灰色砂土	上端・右辺削り、下端折れ、左辺割れ。	5081	ヒノキ科	板目
194	E 4	III層	暗青灰色砂土	上下両端折れ、左辺削り、右辺割れ。あるいは記号か。	5081	ヒノキ科	板目
195	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	上端二次的削りか、下端削り、左辺割れか、右辺二次的削り。	5081	ヒノキ科	追柎目
196	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
197	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
198	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	板目
199	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
200	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目か
201	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
202	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	柎目
203	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柎目
204	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
205	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
206	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
207	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	板目
208	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
209	E 4	III層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
210	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柎目
211	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柎目
212	E 4	VI層	青灰粘土	削屑。	5091	—	柎目
213	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
214	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
215	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
216	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柎目
217	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柎目
218	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	柎目
219	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柎目
220	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目か
221	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
222	E 4	III層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
223	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
224	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柎目
225	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柎目
226	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柎目
227	E 4	VI層	青灰粘土	削屑。	5091	—	柎目
228	E 4	IV層下層	緑灰色粘土	削屑。	5091	—	板目

## 木 簡

木簡 番号	地 区	出土層位		形 状	型式 番号	樹 種	木取り
229	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
230	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
231	E 4	IV層下層	緑灰色粘質土	削屑。	5091	—	板目
232	E 4	VI層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
233	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
234	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
235	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
236	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
237	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
238	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
239	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柁目
240	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	柁目
241	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
242	E 4	IV層下層	緑灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
243	E 4	IV層下層	緑灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
244	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
245	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
246	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
247	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
248	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柁目
249	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
250	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
251	E 4	III層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
252	E 4	IV層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
253	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	板目
254	E 4	VI層	青灰粘土	削屑。	5091	—	柁目
255	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柁目
256	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
257	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柁目
258	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
259	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
260	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
261	E 4	III層	暗青灰色砂土	削屑。	5091	—	柁目
262	E 4	VI層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目か
263	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
264	E 4	—	谷堆積土	削屑。	5091	—	板目
265	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	板目
266	E 4	IV層下層	灰黒色有機土	削屑。	5091	—	柁目
267	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目
268	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
269	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	柁目
270	E 4	IV層	暗青灰色粘土	削屑。	5091	—	板目か

再釈読の責を果たすため、木簡群の年代観と性格についてのみ検討の結果を述べることにした。個別の木簡にかかわる詳細な考察は差し控えたが、木簡群に散見する新出の評・五十戸名をはじめ、連公、費直などのカバネなど、さらなる検討を要する資料に富むことはいうまでもない。識者の検討を、鶴首して俟ちたい。 (山本崇)

### 第3節 木製品・骨角製品・植物遺存体

木製品は、E4区の各層から、整理用小コンテナ6箱分、計46点の製品類とともに、加工痕のある木材や雑木類が多く出土している。器種としては、又鋏や鋤などの農工具、人形や琴柱などの祭祀具、付札、楔や留針とみられる尖端多角棒などとともに、墨書資料がある。また、具体的な用途はわからないものが多いが、漆が付着する木製品や板材、木端、燃えさし、節が一部残る樹皮（樺皮）片が確認された。以下、『木器集成図録 近畿古代編』（奈文研史料第27冊）に準じながら、器種別に報告する。墨書資料については末尾に木簡報告番号を付した。

#### 木製品

1は二又の曲柄又鋏。紐をかけるための笠形上端と笠形下端の突出部、片方の刃部の一部が欠損する。笠形は、「ハ」字状になだらかに開き、下方に折れたのちに削り込みを入れる。削り込み部と刃部の境は明瞭で、削り込み部からゆるやかに内湾して幅を増しながら刃部へいたる。軸部分に対して、刃部は片方にやや偏る。刃部装着による圧痕、擦痕、鉄錆等の痕跡はみられない。現存長27.3cm、最大幅14.7cm、刃部幅3.5cm、厚さ2.0cm。アカガシ亜属の柾目材。E4区IV層下層（灰色黒色有機土）出土。

2は把手が付く槽状木製品で1/2が欠損する。平面形は長方形を呈するとみられ、横断面は緩やかに湾曲する。細かな斫りによって中央を削り抜き、短辺に把手を削り出す。現存長16.3cm、最大幅9.9cm、身部の厚さ4.4cm、把手径3.3~4.2cm。広葉樹散孔材の芯持材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

3は片方が欠損する木錘。柱状の丸材中央を両端よりも細く削り込み、そこから両端へ向かい円柱形状に加工する。遺存する端部木口側は割り取り後未調整で、全体的に粗雑で不整形な形状である。全長13.2cm、最大幅5.3cm、厚さ4.1cm。広葉樹の芯持材。E4区包含層出土。

4は鋤。長方形の磨り板中軸線上に橋状の把手を削り出す。磨り板下面は両端がやや反り上がり、把手の下、磨り板中央の上面はくぼむ。磨り面に付着物、擦痕等はみられなかった。全長16.2cm、幅6.0cm、厚さ1.1cm、把手径1.6cm。広葉樹散孔材の芯持材。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

5は片方の長辺を三角形に切り欠いた板状品。表面はケズリによって丁寧に整えられ、片方の短辺と両長辺は面をもつ。片方は、ケズリにより端部へ向けて厚さを減じ、短辺はやや不整形に丸く整える。片面に墨書のある木簡加工品で、表面には漆が点的に付着する。形状は馬形に類似するが、これまで報告されているものは全長17cm前後が多く、大きさが異なる。馬形とみるならば、裸馬で、頭、胴、尾の区分が簡略なA I型式。全長28.9cm、幅3.8cm、厚さ1.0cm。ヒノキ科の板目材。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。木簡98。

6~11は琴柱。6~7、9、11は等脚台形の両斜辺を途中で垂直に断ち落とした平面六角形のA型式。8、10は等脚台形を基本にし、下底中央に三角形や半円形の切欠きを入れて双脚とするB形式。6は上辺の弦受け溝に2条の切り込みをもち、下辺は中央を三角形に切り欠く。一方の下辺隅を面取りする。表裏両面に割裂面を残し、上辺に向かって厚さを減じる。幅3.3cm、高さ1.9cm、厚さ0.8cm。ヒノキの柾目材。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

7は一辺の斜辺がつくりだされず、折り取り面をそのまま残す。琴柱を横方向につなげて連

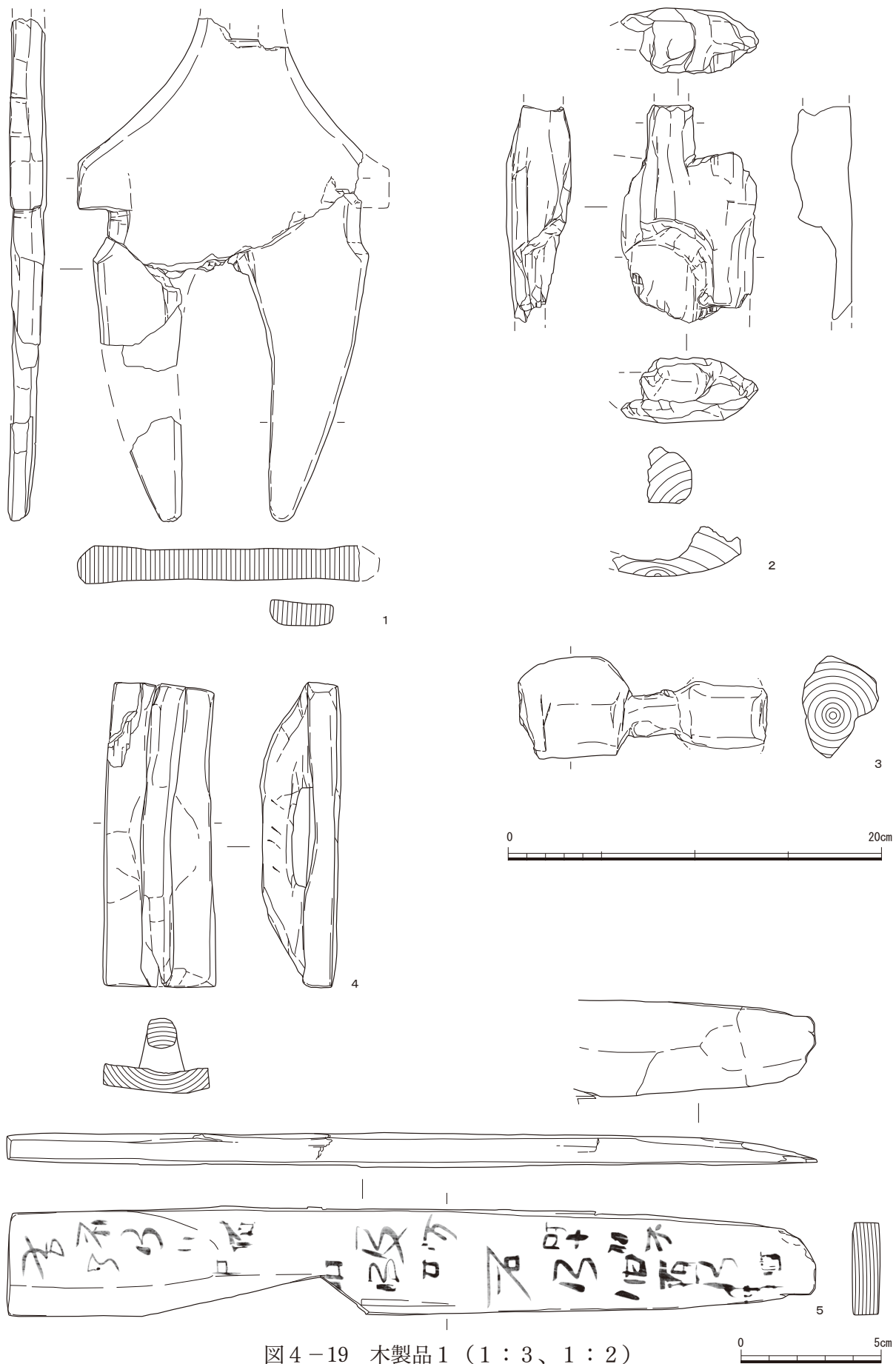


図4-19 木製品1 (1:3、1:2)

続的に製作する連結製作技法A（奈文研2019）の特徴をみせる。他辺には直立する垂辺をつくりだし、面取りを施す。弦受け溝の削り込みは浅く、下辺は中央を三角形に切り欠く。幅3.4cm、高さ1.3cm、厚さ0.6cm。ヒノキの柁目材。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

8は下辺縁辺を片面のみ斜めに削り、面取りする。下辺の削り込みは浅く、弧状をなす。片面に割裂面を残す。幅3.8cm、高さ1.7cm、厚さ0.4cm。針葉樹の追柁目材。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

9は厚さ0.2cmの薄い板目材で、下辺には削り込みをもたない。両垂辺は折り取り面を残す。幅3.7cm、高さ1.7cm。ヒノキの板目材。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

10は、両斜辺は丸みを帯び、非対称。下辺は中央を三角形に切り欠く。弦受け溝に擦痕はみられない。両面に墨書のある木簡再加工品。全長1.9cm、幅3.3cm、厚さ0.2cm。ヒノキ科の柁目材。木簡67。E 4区V層下層（暗青灰色砂土下層）出土。

11は、等脚台形の両斜辺立ち上がり部を弧状にかたどり、下辺中央を三角形に大きく切り欠く。両垂辺は折り取り後面取りし、一部に折り取り時の刃物痕が残る。弦受け溝には擦痕がみられ、上辺には加工時の刃物痕が残る。片面に墨書のある木簡再加工品。全長4.5cm、幅2.3cm、厚さ0.3～0.4cm。ヒノキ科の板目材。木簡68。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

12・13は鏃形。12は平根式で、鏃身は腸扶をもつ五角式。表裏ともに端部を斜めに削り、刃部を表現する。鏃身部に稜をもち、横断面は菱形を呈する。腸扶は左右非対称で、下端は斜めに切り欠く。現存長4.8cm、鏃身部幅2.6cm、茎部幅0.6cm、厚さ0.6cm。ヒノキの追柁目材。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。

13は細根式で、鏃身は腸扶をもたない柳葉式。頸部から鏃身部に向かって厚さを減じ、端部を薄く削り出して刃部を表現する。切先は丸みを帯び、側縁はわずかに内湾する。頸部には割裂面を一部残す。下端は割取面を残し、そのやや上方に削り込みを入れる。頸部と茎部の区別は曖昧で、削り込み部は茎部を表現したものかもしれない。現存長15.3cm、鏃身部幅1.35cm、頸・茎部幅1.4cm、最大厚1.1cm。ヒノキの追柁目材。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。

14は刀子形。刀身部のみが遺存する。丁寧なケズリを施し、先端を薄く削って刃部を表現する。切先は薄く仕上げ、形状は丸みを帯びる。横断面はレンズ状を呈し、棟に面をもたない。片面に漆とみられる付着物が点的に残る。下半部が欠損するため、茎や柄をかたどるものかは不明。現存長11.2cm、幅1.6cm、厚さ0.5cm。ヒノキ属の柁目材。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。

15は立体人形。断面方形に削り出した棒の先端に、計6本の刻み目を施して眉、目、鼻、口をあらわす。頭部下端は緩やかに突出させて、顎を表現している。胴部上位は丁寧なケズリを施し、滑らかに湾曲させて胸部の丸みをあらわす。胴部下端には段をもうけて、ソケット状をなす。頭部上面には切断面が残るが、全面を細かく削り滑らかに整える。なお、近隣では藤原宮から2点の立体人形の出土が報告されている<sup>1)</sup>。これらは上端を削り出して、頭部が「く」字状を呈するもので、烏帽子を表現したと考えられており（奈良県1969）、眉からなだらかに頭頂部へいたる本資料とは異なる。全長9.2cm、幅は頭部で0.8cm、胴部で0.6cm、厚さ0.67cm。ヒノキ科の板目材。E 4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

16・17は刀形あるいは、刀子形とみられる板状品で、上端を斜めに切り落とす。ともに刃部の削り出しはみられない。両面に墨書のある木簡再加工品で、16は残存長10.3cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm。ヒノキ科の追柁目材。木簡17。E 4区III層（暗青灰色砂土）出土。17は下端にコ

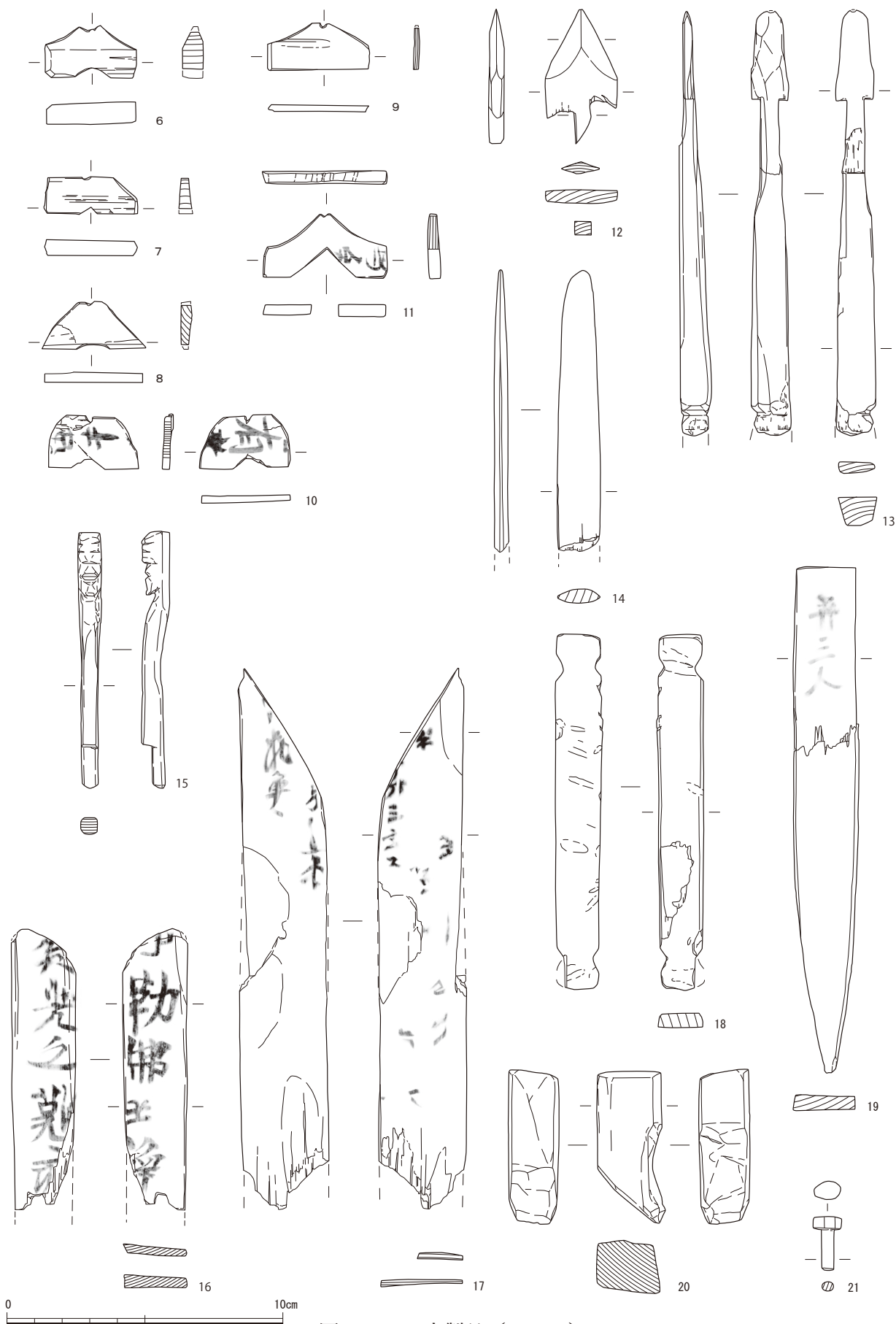


图4-20 木製品 (1:2)



ゲが付着する。残存長19.7cm、幅3.2cm、厚さ0.3cm。スギの板目材。木簡121。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

18は付札とみられる板状品で、両端には左右から2カ所、計4カ所の切り込みが入る。上方の切り込み部には紐状の擦痕がわずかに残る。両側面はケズリにより面取りするが、表面は粗い加工により割裂面が残る。全長12.8cm、幅1.7cm、厚さ0.6cm。ヒノキ科の柾目材。E4区IV層（暗青灰色粘土）出土。19は荷札。下半は剣先状をなし、下方へ向かい厚さを減じる。両側縁は丁寧に削り整える。上端部は土圧で歪み、片面に墨書あり。全長18.2cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm。ヒノキ科の追柾目材。木簡36。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

20は上端を平坦に切断した角柱状の木製品。下半部は、片側は斜めに切り落とし、その反対側は細かく斫り、「く」字状に挟りを入れ支脚状をなす。全長5.5cm、最大幅2.1cm、厚さ1.8cm。ヒノキ属の追柾目材。E4区包含層出土。

21は木釘。楕円形を呈する頭部と軸部の境は段をなし、全面を緩く曲面をつけて削り整える。軸部断面は楕円形である。全長2.0cm、頭径1.0×0.7cm、軸部幅0.4cm。広葉樹の辺材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

22～26、38、39は棒状品。22は円柱状を呈し、端部に向けて先細る。縦方向に細く長く削り出して断面円形に整える。上端は再度細かく削り整え、面をもつ。上半には0.6×0.7cmの円形の窪みがあり、その中央にはさらに径0.1cm、深さ0.2cmの小孔が穿たれる。表面は滑らかで、部分的に赤漆とみられる赤色塗彩が残ることから、本来は全面に塗彩していたと考えられる。現存長24.9cm、最大径1.6cm。ヒノキの辺材。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。

23は摺棒状を呈し、下半へ向かい太さを増す。下端は欠損し、表面には節、樹皮が残る。現存長14.1cm、最大で直径3.5cmを測る。アカガシ亜属の芯持材。4区包含層出土。24は断面楕円形を呈し、一端を杭状に尖らせる。他端は削り込みを入れて、一段細く仕上げている。現存長14.0cm、最大で直径2.4cm。ヒノキ科の柾目材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。25は心持丸木材の一端を削り、先端を尖らせる。全面に縦方向のケズリを施し、断面は多角形をなす。現存長11.6cm、直径3.2～3.3cm。スギ、またはヒノキ科の芯持材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

26は用途不明の加工棒。上半に削り込みを入れて角柱状の頭部をつくりだし、反対の下端は斜めに削り出して尖頭状に整える。角柱状の体部側縁の三辺には、10～20個の刻み目を3～4mmの間隔で施す。上半はコゲが付着する。全長12.3cm、幅1.2cm、厚さ0.9cm。ヒノキ科の柾目材。E4区暗褐色有機土出土。

38は断面長方形を呈し、一端を尖らせる。両面、両側縁にケズリを施し、面取りする。全長7.1cm、最大幅0.9cm、最大厚0.5cm。ヒノキの追柾目材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。39は小型の棒状品。縦方向にケズリを施し、面取りする。頭部はやや丸みを帯びる。現存長4.5cm、最大幅0.5cm、最大厚0.4cm。ヒノキ科の板目材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。

27～32、37、40は板状品。ケズリにより表面を平坦に整える。27は板材の一端を柄状に削り出す。他端は両側から斜めに削り、面取りを施す。裏面は未調整で割取面が残る。全長13.8cm、最大幅3.6cm、最大厚1.3cm。ヒノキの追柾目材。E4区IV層下層（灰黒色有機土）出土。28は楕円形の板材の中央を長方形に切り欠く。現存長18.0cm、幅5.6cm、最大厚0.7cm。ヒノキ科の追柾目材。E4区III層（暗青灰色砂土）出土。37は1/2を欠損する楕円形の板材で、上方に

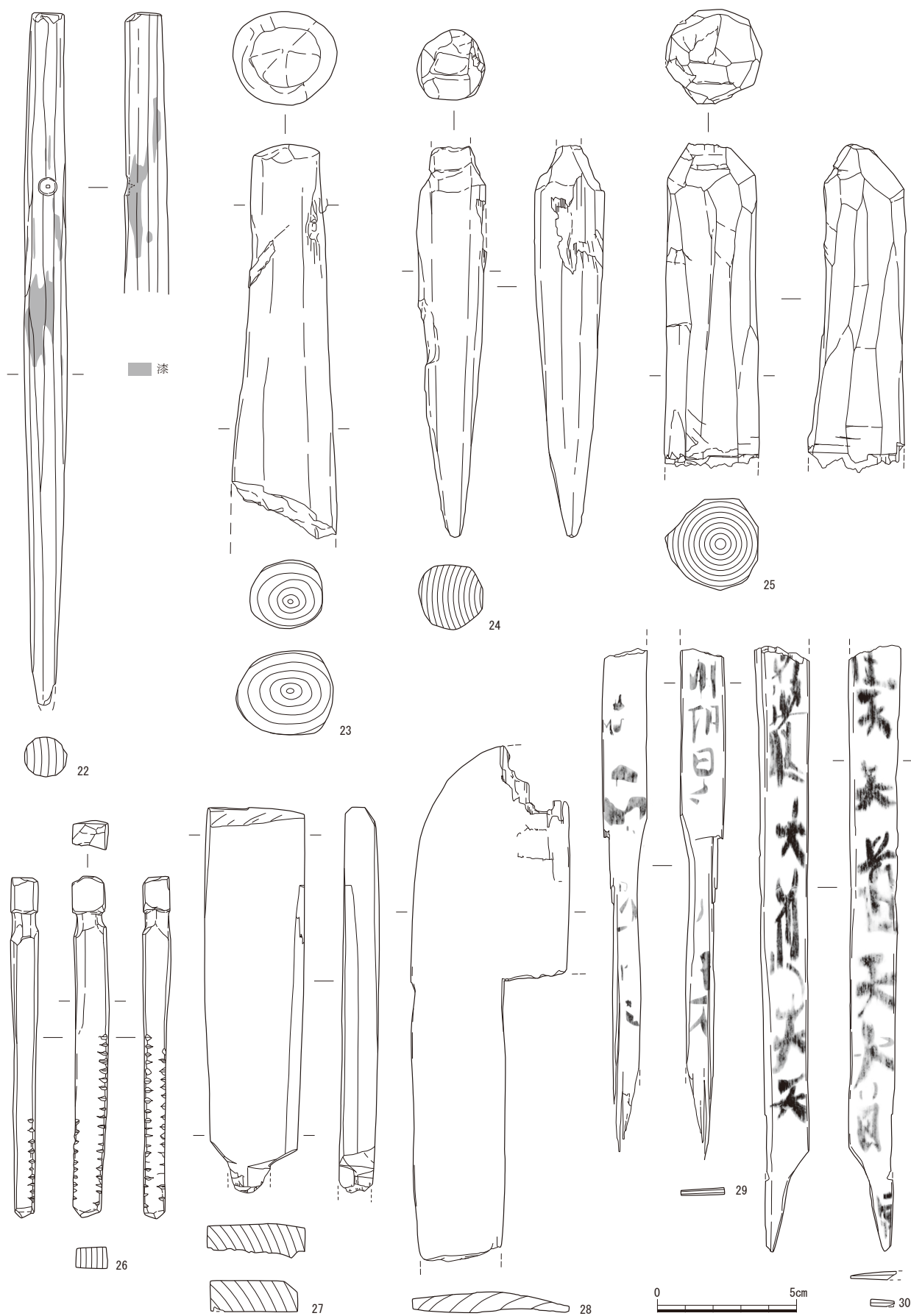


图4-21 木製品(1:2)

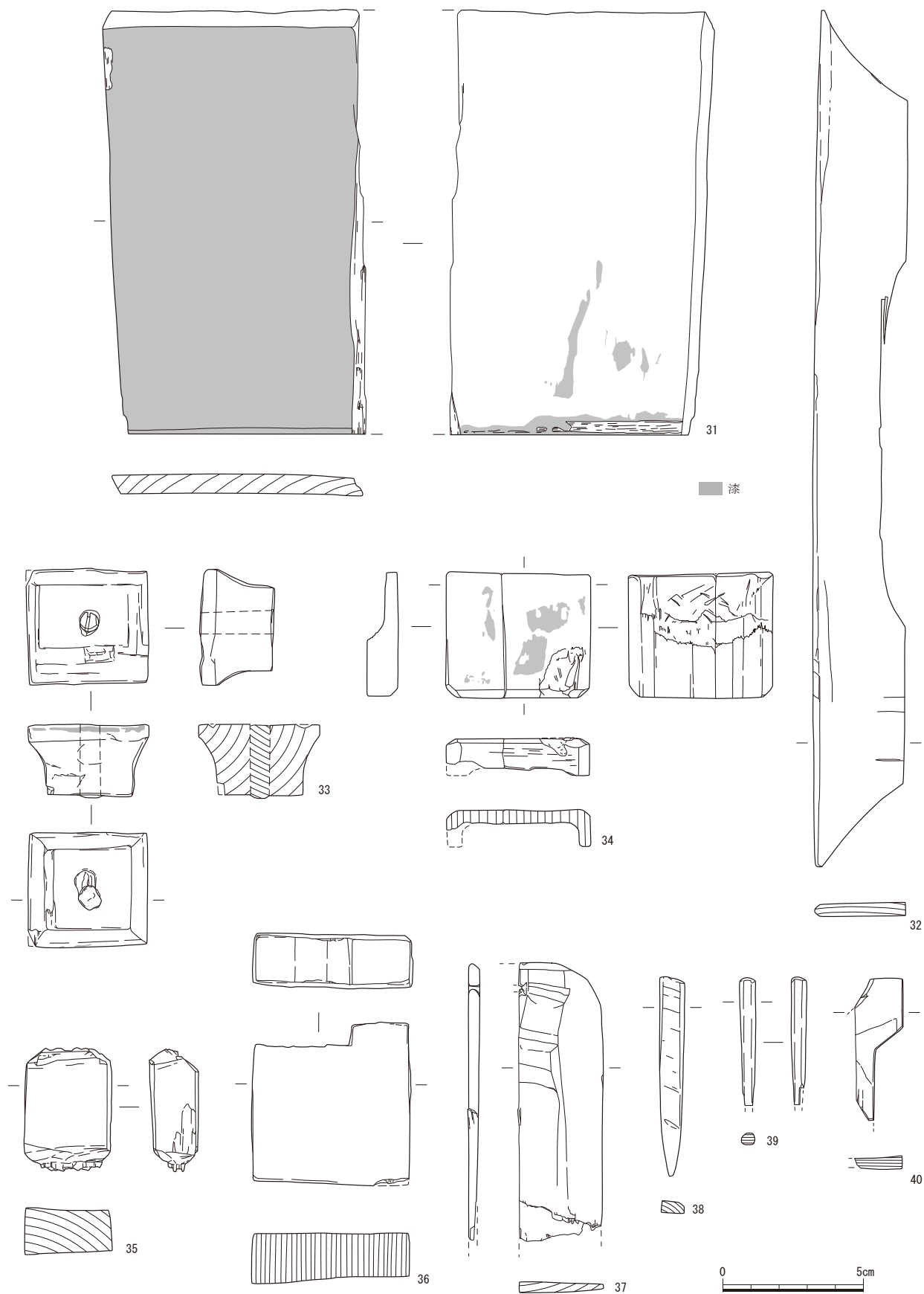


图4-22 木製品 (1:2)

径0.2cmの小孔を穿つ。現存長9.8cm、最大幅3.0cm、厚さ0.4cm。ヒノキの追柂目材。

E 4 区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。

29・30は片側端部や側縁を切り欠いた板状品で、両面に墨書のある木簡再加工品。29は片側長辺をケズリにより湾曲させ、片面は斜めに面取りする。残存長18.1cm、最大幅1.6cm、厚さ0.4cm。ヒノキ科の板目材。E 4 区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。木簡122。30は片側の下端部を弧状に削り出す。残存長21.5cm、残存最大幅3.2cm、厚さ0.1～0.3cm。ヒノキ科の板目材。木簡101。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。

31は黒色漆が付着する板状品。両面は滑らかに平坦に整え、横断面はやや湾曲する。漆は表面全面と下端木口面にあり、とくに表面は均一に塗布されている。裏面にも漆がしずく状に付着することから、表面の塗布時に付着したものとみられる。裏面下端には漆の上に幅0.5cmの範囲で木質が遺存することから、別材の木口板を組み合わせていたと考えられる。長さ15.0cm、幅9.1cm、厚さ0.7cm。ヒノキの追柂目材。E 4 区Ⅲ層（暗青灰色砂土）出土。

32は細板の両端を斜めに切り落とし、片方の側面中央に浅い割り込みを入れる。表面はケズリによって平坦に整え、長辺は両側から面取りを施す。裏面は割裂面が残る。全長30.4cm、最大幅3.2cm、厚さ0.4cm。ヒノキの板目材。E 4 区Ⅳ層（暗青灰色粘土）出土。40は切欠きのある長方形の細板。上端片側も斜めに切り落とす。現存長5.0cm、最大幅2.7cm、厚さ0.5cm。スギ、またはヒノキ科の柂目材。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。

33は建築模型部材の巻斗。中央が内湾し、下面に向かって広がる四角柱状の木製品。敷面にはケビキ状の切欠き溝が四周にめぐるが、仕口は作り出されていない。中央に穿たれた0.7cmの丸柄穴内にはダボが打ち込まれ、敷面側にはダボ中央に厚さ1mmの木片が楔状に嵌る。上面側面に赤漆が帯状に残る。斗尻長3.0cm、斗幅4.3cm、現存高2.5cm、斗縁高2.0cm、敷面高2.5cm。ヒノキの横木取り材。E 4 区Ⅳ層（暗青灰色粘土）出土。

34は、片面に方形に割り込みを入れた加工材。割り込み小口側は研りによる加工痕が粗く残る。下面の両角は斜めに面取りし、割り込み面側には打割面をそのまま残す。割り込みのない面には黒色漆が部分的に遺存する。一辺4.4cm、幅5.1cm、最大厚1.3cm。ヒノキの柂目材。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。

35、36は角材。35は全長4.3cm、幅2.9cm、厚さ1.7cm。ヒノキの追柂目材。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。36は全長5.8cm、幅5.7cm、厚さ1.8cm。ヒノキ属の板目材。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。（松永悦枝・谷澤亜里）

### 骨角製品

1点出土した。先端を鋭利に尖らせて、刃部をつくりだす。鏑は明瞭で、先端に向かってやや反り返る。下端に擦り切り痕を残し、側縁にはカットマークとみられる線状痕が長軸に直行する方向に複数みられる。全面は丁寧に研磨し、刃部は断面三角形、それ以外は断面長方形をなす。裏面には骨組織が一部残る。刺突具か。全長7.0cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm。E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）出土。

くわえて、E 4 区より鉄器片、E 4 区暗褐色有機土より鉄滓が出土したほか、E 4 区Ⅳ層下層（灰黒色有機土）を中心に、木炭が多く出土した。（松永）

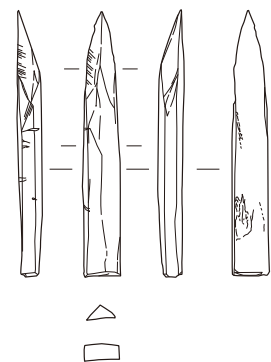


図4-23 骨角製品  
(1:2)

植物遺存体

種実は、E4区から26袋が出土している。分類に際しては、これまで飛鳥・藤原地区で整理作業に用いていた出土種実標本(2014年那須浩郎氏同定試料)、植物種実に関する図鑑を参照し、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター客員研究員(2022年当時)の上中央子の協力を得た。以下、個体の2分の1以上が遺存するものを個体1点、2分の1以下のものを破片としてカウントした。

出土種実としてもっとも多いのは、モモ核で302点(破片158点)、次いでモモ種子で、65点(破片61点)が出土している。モモ核は全体の個体数の81%を占める。そのほか、オニグルミ核、オニグルミ種子、サクラ節核、カヤ種子、ハイイヌガヤ種子にくわえ、ナシ亜科とみられる果実が出土した。

これらは、大部分がE4区の実測基準点から6.5m付近に堆積するⅢ層(暗青灰色砂土)とⅣ層(灰黒色有機土)からの出土であり、いずれも食用可能な種実である。(松永)

表4-2 西橋遺跡出土種実一覧

分類群	部位	暗褐色有機土		Ⅲ層		Ⅲ層5.5*		Ⅲ層6.5*		Ⅳ層下層3.5*		Ⅳ層下層4.5*		Ⅳ層下層5.5*		Ⅳ層下層6.5*		谷堆積土6.5		谷堆積土		備考
				暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	暗青灰色砂土	
モモ	核	4	7		3	1				4	2	2			1	271	130	2	1	18	14	
モモ	種子						65	61														
スモモ	核	1																				
オニグルミ	核		1					2						1		14					1	
オニグルミ	種子							5														
ナシ亜科(?)	果実							1								1	1					
サクラ節	核	1																				
カヤ	種子															1						
ハイイヌガヤ	種子					1																
不明	果実															2						ナシ亜科?

左列が個体数、右列が破片数

※実測基準点からの距離を示す

註

1、内裏東外郭の大溝SD105と内濠SD2300より各1点の出土が報告されている(奈良文化財研究所1985)。

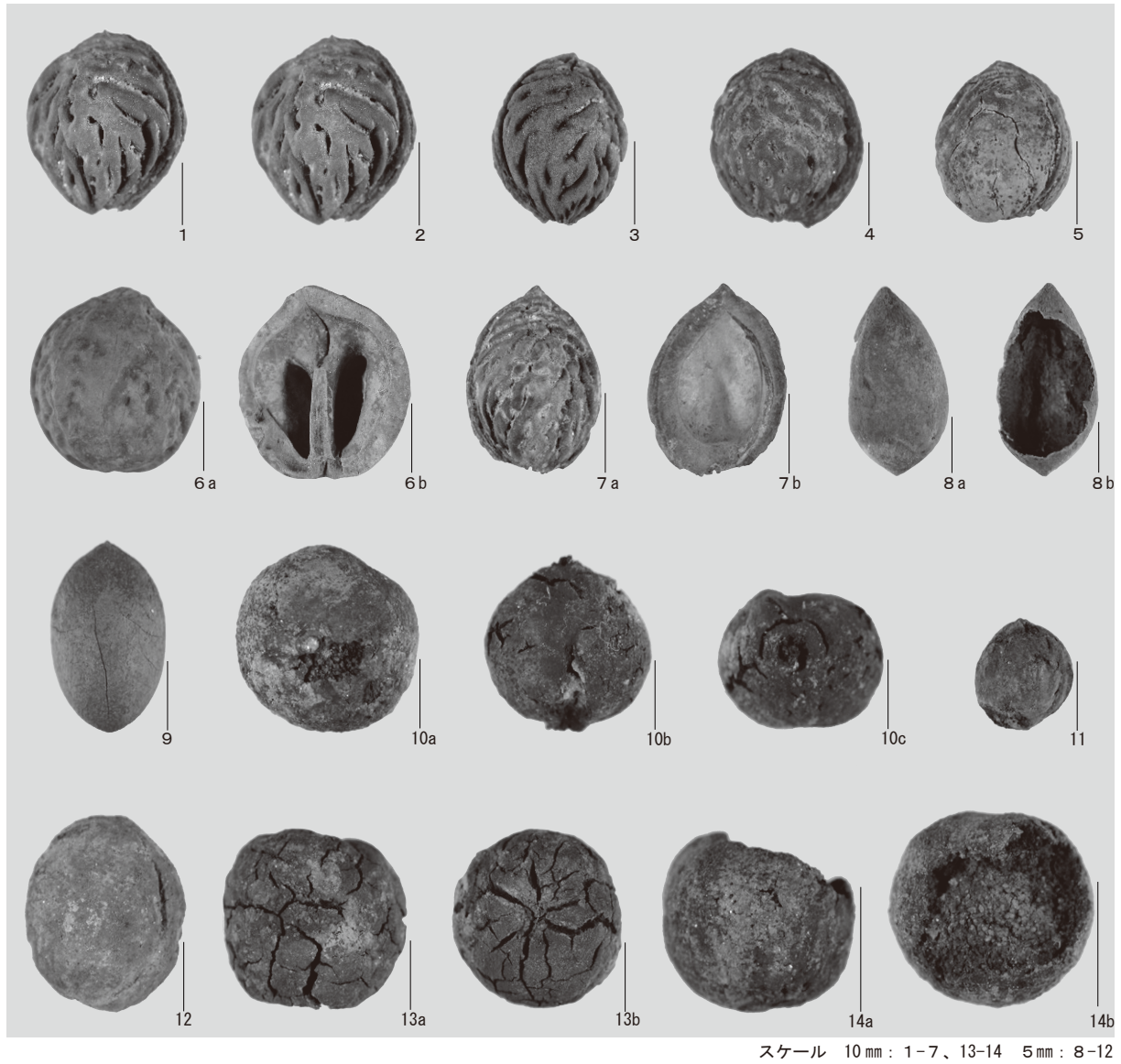
引用・参考文献

奈良文化財研究所2019『木器集成図録-飛鳥藤原篇I-』

奈良国立文化財研究所1979「藤原宮第24次(東面大垣)の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報9』

奈良県教育委員会1969『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第25冊

奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録 近畿古代編』奈文研史料第27冊



スケール 10mm：1-7、13-14 5mm：8-12

1-5、7. モモ核、6. オニグルミ種子、8. カヤ種子、9. ハイヌガヤ種子、10. ナシ亜科、11. サクラ節核、12. スモモ核、13-14. 不明

写真4-1 西橘遺跡出土植物遺存体

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 西橋遺跡出土木簡及び木製品の樹種同定

#### 1. 生物顕微鏡による樹種同定

対象とした木質遺物は、木簡33点、木製品30点の計63点である。同定は、『平城宮木簡七』（奈文研2010）で示した木簡における方法を木製品も含めて踏襲し、各遺物から作成した木材組織プレパラート（透過断面標本）を生物顕微鏡で観察する方法で実施した。

#### 2. 方法

まず、各遺物から木材組織（概ね1～2mm角、厚さ数10 $\mu$ m程度）を直接採取し、スライドガラス上に並べた後、カバーガラスをかけてガムクロラール（抱水クロラール50g、グリセリン20ml、アラビアゴム粉末40g、蒸留水50mlの混合物）で封入し、観察用のプレパラートを作成した。次にこのプレパラート上の解剖学的特徴を生物顕微鏡（オリンパス・BH2）で観察し、次項で述べる識別拠点にもとづいて樹種を同定した。

試料採取は、割れ等による破面を中心に行い、木簡にあつては墨の残りや加工の痕跡を損なわないよう、また木製品にあつても同等の配慮を講じ、作業には細心の注意を払った。その際、採取箇所は必ず写真台紙、もしくは実測図上に記録し、後から参照できるようにしたほか、無理な作業はもとより控えた。また、通常であれば木口、柾目、板目の三断面からもれなく試料を採取するところ、各遺物への影響を最小限に抑える観点から、採取断面が少なく済むよう心掛けた。特に針葉樹の場合は、識別のポイントが柾目面にもっとも端的にあらわれることから、試料の採取は柾目面に限定することとし、木口面や板目面からの採取は行わないようにした。

樹種の識別に際しては、筆者が所蔵する現生木材組織プレパラートや文献（島地・伊東1982ほか）を参照した。学名および植物学的分類は北村・村田（1979）等によった。具体的な樹種の識別に至らないものについては、「広葉樹散孔材」など可能な範囲で種類を記載した。

#### 3. 識別拠点の記載

##### ●モミ属 (*Abies* sp.)

針葉樹。樹脂道や樹脂細胞、放射仮道管がない。分野壁孔はスギ型で、各分野に1～4個程度。

##### ●スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

針葉樹。晩材部を中心に樹脂細胞が含まれる。早材から晩材への移行は比較的急。分野壁孔は大型のスギ型で、分野あたり概ね2個、水平方向に整然と並ぶ。

##### ●コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

針葉樹。樹脂細胞、樹脂道、放射仮道管は存在しない。分野壁孔は窓状。

##### ●ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)

針葉樹。晩材部を中心に樹脂細胞が含まれる。早材から晩材への移行はゆるやか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、分野あたり概ね2個、水平方向に整然と並ぶ。

なお、ヒノキかサワラの可能性が考えられるものであって、分野壁孔の形状が明確でなく、両者の区別がつかないものはヒノキ属 (*Chamaecyparis* sp.)、分野壁孔の数が明確でないものはヒノキ科 (Cupressaceae) とした。

●アカガシ亜属 (*Quercus* Subgen. *Cyclobalanopsis* sp.)

広葉樹放射孔材。道管は年輪とは無関係に放射方向に列をなし、接線方向には一定間隔で直立帯状柔組織が分布する。放射組織は概ね同性で、単列のものと広放射組織の2種類。柔細胞に結晶が顕著にみられる。

●針葉樹材A、針葉樹材C

識別のよりどころが十分でなく、具体的な同定に至らなかった針葉樹材を『藤原宮木簡四』(奈文研2019)の例に倣い、便宜的に区分した。

このうち、晩材部を中心に樹脂細胞が含まれ、分野あたり2個程度の分野壁孔の存在が観察できるが、その種類や形状、早材から晩材への移行状況が明確ではないものを針葉樹材A、また、針葉樹材Aと同様、晩材部を中心に樹脂細胞が含まれるが、早材から晩材への移行状況をはじめ、分野壁孔の個数や種類、形状が明確でないものは針葉樹材Cとした。

なお、樹脂道や仮道管壁にらせん肥厚を確認できた針葉樹材は、今回の対象には含まれていなかった。針葉樹材Cは、木材組織の劣化が極端に激しいものばかりであった。

4. 結 果

結果は各報文中、もしくは表5-1・2に示したとおりである。

今回も『藤原宮木簡三』や『同 四』をはじめとする飛鳥・藤原地域の例と同様、全般的に木質の劣化が著しく、同定にまで至らないものが多く残った。しかし、針葉樹材Aは、その特徴からスギ、ヒノキ、サワラのいずれかに絞り込むことができる。針葉樹材Cは、スギを含むヒノキ科の樹種のいずれかと考えられ、出土木製品の報文(第4章第3節)においては「スギ、またはヒノキ科」と記述した。広葉樹散孔材としたうち、木製品4はハコヤナギ属、木製品2はサクラ属、また広葉樹とした木製品3は、アカガシ亜属もしくはコナラ亜属クヌギ節の顕微鏡像に近いが、いずれかに断定できる根拠を欠いている。(藤井裕之)

参考文献

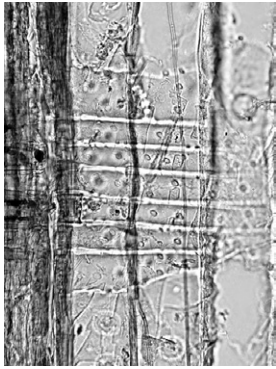
奈良文化財研究所 2010『平城宮木簡七』奈良文化財研究所史料第85冊  
 北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑 木本編〔II〕』保育社  
 島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社

樹種 (同定点数)	木簡の報告番号	樹種 (同定点数)	木製品の報告番号
モミ属 (1)	54	ヒノキ (14)	6,7,9,12,13,22,27,31,32,33,34,35,37,38
スギ (3)	19,47,121	ヒノキ属 (3)	14,20,36
コウヤマキ (2)	86,159	ヒノキ科 (5)	15,18,24,28,39
ヒノキ (19)	4,5,7,11,15,22,33,38,50,69,70, 73,76,84,100,105,113,120,124	針葉樹材C (スギ、 またはヒノキ科) (2)	25,40
ヒノキ属 (5)	16,32,49,59,114	針葉樹 (1)	8
ヒノキ科 (1)	64	アカガシ亜属 (2)	1,23
針葉樹材A (1)	3	広葉樹散孔材 (2)	2,4
針葉樹 (1)	55	広葉樹 (1)	3

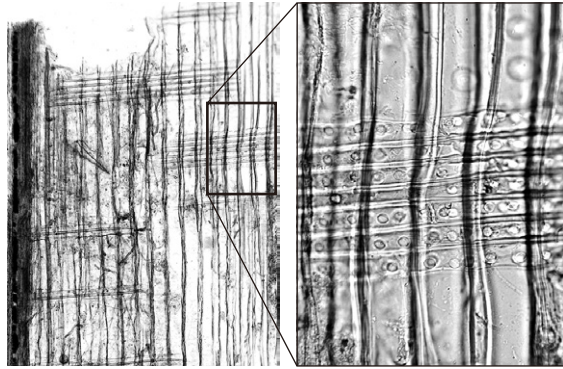
表5-1  
同定結果一覧 (木簡・樹種 / 分類群別)

表5-2  
同定結果一覧 (木製品・樹種 / 分類群別)

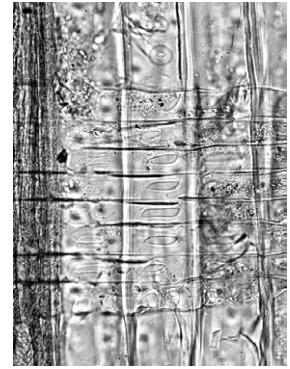




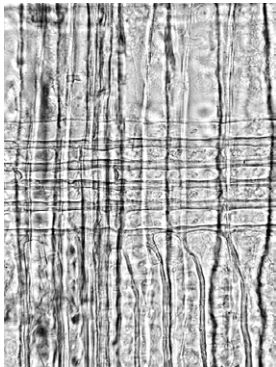
1.モミ属(木筒54)柾目320x



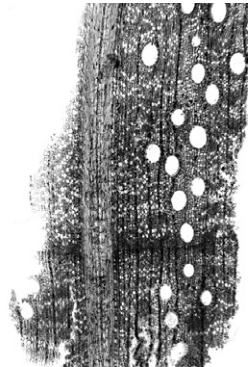
2.スギ(木筒19)左:柾目80x、右:同左部分拡大320x



3.コウヤマキ(木筒86)柾目320x



4.ヒノキ(木製品12)柾目320x



5.アカガシ亜属(木製品23)



左:木口40x、中:柾目40x、右:板目40x

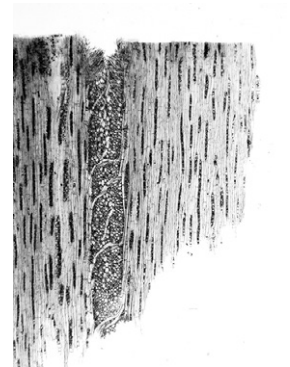


写真5-1 木材組織の顕微鏡写真

## 第2節 西橋遺跡から出土した動物遺存体

第4調査区(E4区)の谷SX3041(7世紀後半)とその上層である暗褐色有機土(古代以降)から動物遺存体が出土した。谷SX3041では第Ⅲ～Ⅴ層から様々な遺物とともに動物遺存体が見つかっており、遺物の様相より北側の丘陵部から比較的短期間に谷へ投棄されたものと考えられる。資料採集方法の詳細は不明で、基本的に調査現場で採集された資料の可能性が高い。

### 1. 同定・計測

出土資料の同定は現生骨格標本との比較によって実施し、比較標本には環境考古学研究室が所蔵する標本を用いた。癒合の完了した資料については、Driesch(1976)や西中川ほか(2015)に従い、デジタルノギスを用いて0.01mmの単位まで計測した。

同定した動物遺存体は計53点であった(表5-3)。以下、分類群ごとに記載していく。

**アカニシ** 谷SX3041の第Ⅳ層下層(灰黒色有機土)から1点が出土した。残存するアカニシの殻高は、119.28mmと大型である。それ以外に、第Ⅲからアカニシの可能性のある貝殻片が出土した。

**カツオ** 谷SX3041の第Ⅳ層下層(灰黒色有機土)から尾椎1点が出土した(写真5-2)。尾柄隆起線支持骨が水平に張り出しており、マグロ族(マグロ・カツオ類)に特徴的な形状を有する。椎体側面からみると、椎体の上方や下方はソウダガツオ属のように明瞭なくびれはない。尾柄隆起線支持骨は1枚で、椎体よりも前には出ていない。以上の特徴から、カツオの尾椎と同定した。

**キジ科** 谷SX3041の第Ⅳ層下層(灰黒色有機土)から計3点出た。そのうち、足根中足骨は欠損しているものの内側足底稜の形成を確認できるため、ニワトリではなく、キジあるいはヤマドリの骨と判断することができる(江田・井上2011)。

**カモ科** 谷SX3041の第Ⅲ層(暗青灰色砂土)から鳥口骨が1点出た。

**ウマ** 暗褐色有機土から8点、谷SX3041の第Ⅲ～Ⅴ層から15点の計23点が出た。大腿骨の顆上窩周辺や中節骨に線状痕が認められ、大腿骨や尺骨、末節骨にイヌの咬み痕が残されていた。

**ウシ** 暗褐色有機土と谷SX3041の第Ⅲ層(暗青灰色砂土)から遊離歯が1点ずつ出た。

**ニホンジカ** 暗褐色有機土から1点、谷SX3041の第Ⅲ～Ⅴ層下層から9点の計10点が出た。踵骨の踵骨隆起には浅い線状痕が認められ、肩甲骨や上腕骨、橈骨にはイヌの咬み痕が残されていた。落角の角座部も出たしており、角幹は切断されている。



写真5-2 西橋遺跡から出土したカツオの尾椎

イノシシ 暗褐色有機土から1点、谷SX3041の第Ⅲ～Ⅴ層から6点の計7点が出土した。橈骨の遠位部には骨を打ち割った痕跡、肩甲骨や上腕骨遠位部にはイヌの咬み痕が認められた。

## 2. まとめ

西橋遺跡からは、アカニシやカツオといった魚介類、キジ科やカモ科といった鳥類のほか、ウマ、ウシ、ニホンジカやイノシシといった哺乳類が出土した。ウマやニホンジカ、イノシシの骨には刃物の跡が残されており、解体されて肉や皮などを得ていたと考えられる。こうした動物遺存体の様相は、水産物や獣肉類が記された出土木簡の内容とも共通している。また、鹿角を切断した後の残滓（落角の角座部）も出土し、鹿角製品を製作していた可能性がある。

注目されるのが、腐りやすい魚として知られるカツオ尾椎の出土である。平城宮・京では堅魚の荷札木簡が数多く出土しており、「煮堅魚」や「荒（麩）堅魚」、「堅魚煎汁」といった保存の効く堅魚製品が主に駿河・伊豆から貢進されていたことが知られる（仁藤1996）。先行研究で指摘されているように（瀬川・小池1990、宮下2000、三舟・中村2019）、煮堅魚や荒（麩）堅魚がカツオの切り身を加工したもの、堅魚煎汁がカツオの煮汁を煮詰めたものであるならば、カツオの背骨が含まれる可能性は低い。カツオ尾椎の出土は、こうした堅魚製品とは異なるカツオの搬入を想定させるものである。藤原宮跡では「生堅魚」（『藤原宮木簡三』1259号）と記された荷札木簡が出土し、加熱処理をせずに近国から貢進されたと解釈されており（竹内2006）、関連性が示唆される。

（山崎健）

本報告にあたり、奥松島縄文村歴史資料館の松崎哲也氏にご教示をいただいた。

## 引用文献

- 江田真毅・井上貴央2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』  
28
- 瀬川裕市郎・小池裕子1990「煮堅魚と埴形土器・覚え書き」『沼津市博物館紀要』14
- 竹内亮2006「古代の堅魚木簡」『高橋氏文注釈』翰林書房
- 西中川駿・幸村真由美・吉野文彦・塗木千穂子・松元光春2015「ウマの臼歯の計測値から体高および年齢の推定法」『動物考古学』  
32
- 仁藤敦史1996「駿河・伊豆の堅魚貢進」『東海道交通史の研究』清文堂出版
- 三舟隆之・中村絢子2019「古代の堅魚製品の復元—堅魚煎汁を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』218
- 宮下章2000『鯉節』ものと人間の文化史97、法政大学出版局
- Driesch,A. 1976 A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1



写真5-3 西橋遺跡から出土した動物遺存体（縮尺1/3）

1～9：ウマ [1：橈尺骨・右 (No.25-1)、2：大腿骨・左 (No.23-1)、3：中手骨・左 (No.4-1)、4：中手・中足骨 (No.13-1)、5：下顎骨 (No.4-2)、6：下顎歯・右 (No.3-2)、7：基節骨 (2-2)、8：中節骨 (23-2)、9：末節骨 (No.40-1)]、10～11：ウシ [10：上顎歯・右 (No.27)、11：下顎歯・右 (No.5-1)]、12～13：イノシシ [12：肩甲骨・左 (No.15)、13：橈骨・右 (No.24-2)]、14～15：ニホンジカ [14：落角、15：踵骨・左]、16：カモ科鳥口骨・右 (18-5)、17～18：キジ科 [17：脛足根骨・右 (No.52)、18：足根中足骨 (No.67)]、19：アカニシ (No.86)

表5-3 西橘遺跡から出土した動物遺存体

番号	出土遺構・層位		動物種	部位	左右	残存部位	癒合状況	痕跡	計測値 (mm)
86	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	アカニシ						殻高 (残存) : 119.28
69	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	カツオ	尾椎		完存			
72-2	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	魚類種不明	鱗					
87	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	魚類種不明	鱗					
67	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	キジ科	足根中足骨	右	完存	癒合		
52	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	キジ科	脛足根骨	右	遠位端	癒合		
68	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	キジ科	脛足根骨	右	遠位端	癒合		
18-5	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	カモ科	鳥口骨	右	遠位端			
2-5	暗褐色有機土		ウマ	下顎骨	左右	下顎体 (切歯部)			
4-2	暗褐色有機土		ウマ	下顎骨	左	[12 13]	萌出途中		
3-2	暗褐色有機土		ウマ	下顎歯	右	P3/P4/M1/M2			歯冠高 : 24.54
39	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	下顎歯	左	P3/P4/M1/M2			歯冠高 : 35.08
5-2	暗褐色有機土		ウマ	寛骨	右	寛骨臼	不明		
2-2	暗褐色有機土		ウマ	基節骨	不明	完存	癒合		
14	SX3041	III層 (灰黒色有機土)	ウマ	基節骨	不明	完存	不明		
18-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	胸椎		椎体	癒合		
30-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	肩甲骨	右	破片	不明		
47	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	軸椎		椎頭	癒合		
5-1	暗褐色有機土		ウマ	上顎歯	右	P3/P4/M1/M2			計測不可
31	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	上顎歯	右	P3/P4/M1/M2			歯冠高 : 47.87
2-1	暗褐色有機土		ウマ	上腕骨	右	遠位端	癒合	スパイラル	Bd : 86.26 BT : 78.69
23-1	SX3041	V層 (暗青灰色粘土)	ウマ	大腿骨	左	完存	近位端 : 癒合 遠位端 : 癒合	イヌ咬み痕	GL : 360.66 GLC : 336.96
57	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ウマ	大腿骨	左	骨幹部	不明	カットマーク	
30-2	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	第3手根骨	右	完存			
4-1	暗褐色有機土		ウマ	中手骨	左	完存	癒合		GL : 204.32 GLI : 200.69 LI : 196.52 Bp : 47.87 Dp : 29.07 Bd : 45.99 Bd : 44.03
9-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	中手/中足骨	不明	遠位端	癒合		
13-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	中手/中足骨	不明	遠位端	癒合	スパイラル	Bd : 43.74
23-2	SX3041	V層 (暗青灰色粘土)	ウマ	中節骨	不明	完存	癒合	カットマーク	
51	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ウマ	中足骨	右	近位端~骨幹部	癒合		Bp : 47.01 Dp : 43.62
40-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウマ	末節骨	不明	完存	癒合	イヌ咬み痕	
25-1	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ウマ	橈骨+尺骨	右	完存	橈骨近位端・ 遠位端 : ともに癒合	イヌ咬み痕	橈骨 GL : 308.12 橈骨 PL : 298.82 橈骨 LI : 297.78 橈骨 Bp : 74.50 橈骨 Bd : 67.20 橈骨 Bfd : 57.74
5-1	暗褐色有機土		ウシ	下顎歯	右	M3			
27	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ウシ	上顎歯	左	P2			
18-2	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ニホンジカ	肩甲骨	右	関節窩	癒合	イヌ咬み痕	
18-4	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ニホンジカ	鹿角	不明	角座部 (落角)		打割痕跡	
2-3	暗褐色有機土		ニホンジカ	上腕骨	右	完存	近位端 : 癒合 遠位端 : 癒合		Bd : 39.73
29	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ニホンジカ	上腕骨	右	骨幹部	不明	イヌ咬み痕 スパイラル	
20-1	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	ニホンジカ	中足骨	左	近位端	癒合	スパイラル	Bp : 28.09
17-1	SX3041	V層下層 (暗青灰色粘土)	ニホンジカ	橈骨	左	近位端	癒合		Bp : 34.81
58	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ニホンジカ	橈骨	右	遠位端	癒合	イヌ咬み痕	Bd : 33.28
62-1	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ニホンジカ	脛骨	右	近位端	癒合		GD : 56.46
50	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	ニホンジカ	踵骨	左	完存	癒合	カットマーク	
24-4	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土) またはV層 (暗青灰色粘土)	ニホンジカ	頸椎		椎頭	癒合		
70-2	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	イノシシ	臼歯片	不明				
25-2	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土)	イノシシ	環椎		前関節窩	不明		
2-4	暗褐色有機土		イノシシ	肩甲骨	左右	関節窩	癒合	イヌ咬み痕	
15	SX3041	III層 (灰黒色有機土)	イノシシ	肩甲骨	左	完存	未癒合脱落		
20-3	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	イノシシ	上腕骨	右	骨幹部	不明	イヌ咬み痕	
24-2	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土) またはV層 (暗青灰色粘土)	イノシシ	橈骨	右	近位端	癒合	スパイラル	Bp : 33.77
36	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	イノシシ	脛骨	右	遠位端	癒合	打割痕跡	Bd : 29.13
3-1	暗褐色有機土		哺乳類種不明	椎骨		棘突起			
24-6	SX3041	IV層下層 (灰黒色有機土) またはV層 (暗青灰色粘土)	哺乳類種不明	椎骨?		椎体?			
39-2	SX3041	III層 (暗青灰色砂土)	哺乳類種不明	肋骨	左	近位端			

※ / は「または」を示し、[ ] は顎骨の残存位置を示す。



## 第6章 総括

### 遺跡の位置

西橋遺跡は、橋寺旧境内地の西側に広がる遺跡で、北は周遊歩道、東は橋寺西面大垣（推定）、南は明日香小学校南辺、西は橋と野口地内との境界までの範囲にある遺跡である。このうち本報告は、明日香小学校の北側で実施した中山間地域農村活性化総合整備及び明日香村役場新庁舎建設に伴う調査を取り纏めたものである。

西橋遺跡北辺の周遊歩道は近世の街道であり、その北約10mには、飛鳥時代の幅12mの東西道路が通過する。この道路は、東から西に延びる尾根の頂部を真東西に直線に通過した計画的な道路である。また、遺跡中央には、橋寺西面大垣（推定）の西に谷頭をもち、西に開く東西方向の大きな谷が走っている。これによって遺跡は大きく南北に二分される。谷の北側の、東西にのびる丘陵頂部には飛鳥時代の道路が通過することに加え、丘陵の南北幅も大きくはない。これに対して南側の明日香小学校のある丘陵は大規模で、遺跡が存在した可能性が高いと考える。今回は、この丘陵の北裾部が調査対象範囲に含まれている。

### 遺跡の状況

#### 北地区

飛鳥時代の遺構は、西端のN 6区で検出した土坑・溝と、北辺の標高の高い部分よりも一段さがった調査区（N 9・12・13・14・18区）の柱穴がある。ただし、これらの注穴は削平のためか、建物等にはまともらない。周遊歩道に近い部分では、中世の遺構が残存しており、飛鳥時代の遺構は削平された可能性が高い。

奈良～平安時代の遺構は北地区東辺のN 8・13区で土坑・溝が確認されているのみで、他には確実な遺構がない。当該時期の活動は低調であったとみるべきであろう。

中世になると、谷底を除き、ほぼ全域で柱穴や小溝などが確認されており、活発な活動が窺われる。しかし、遺構の残存状況や調査範囲の関係で、建物等に復元できるものは少ない。

#### 南地区

古墳時代の遺構は、東辺のS 1・3区で検出した竪穴建物と土坑、そして、西辺のS 7・9・10・11区の西への落ち込みである。土坑は5世紀後半から6世紀前半のものである。遺構の分布範囲からみて、遺跡の南東に古墳時代の遺構が広がる可能性がある。一方、落ち込みは、中央谷に向けてのびる落ち込みと考えられるが、ここに古墳時代の土器が含まれる。

一方、飛鳥・奈良時代の遺構はなく、立地からみると、現明日香小学校の丘陵上にあった可能性がある。次は中世の柱穴・小溝が、谷部を除いて全域で検出されている。

#### 東地区

飛鳥時代の遺構には掘立柱建物（E 1区）と谷を埋める堆積土（E 4区）がある。谷の埋め立ては、7世紀後半の比較的短期間に行われており、木簡も多数出土している。

奈良時代には井戸が掘削されており、南の谷の整地土のさらに上層には、比較的多くの奈良時代の土器が出土している。

中世になると、先の井戸を改修し、さらに石組みの井戸も掘削される。また、多くの柱穴があり、いくつかは掘立柱建物として復元される。

## 西橋遺跡の変遷

各地区の時期別の遺構の展開状況をみると、古墳時代の遺構は、遺跡南東部（中央谷頭の南）に展開していた。このあたり（東地区南方）は比較的広い平坦面を確保できる場所で、一部で竪穴建物があるので、古墳時代からの遺跡が展開する可能性がある。

飛鳥時代になると、現周遊歩道の北側に、幅12mの東西道路が通過する。この道路沿線に遺構が展開していたと思われるが、道路沿いの丘陵の高い部分では削平が大きく、まとまった遺構は少ない。東西道路の北側にも、飛鳥時代の柱穴もみられるが、やはり削平が激しい。この東西方向の丘陵の頂部を東西道路が通過する関係で、飛鳥時代の集落は、道路により、南北に分断される。そして、いずれも谷に向かって傾斜していることから、大規模な施設は難しい。道路沿いの南と北に建物などが散在する景観であろう。この中で、橋寺に近い東地区は谷頭を整地によって人為的に埋めており、その北に掘立柱建物も確認され、比較的平坦面を確保できる。なお、この谷の埋め立ては、東地区にしか見られず、この下流では、整地土や土器・木簡の出土は確認できていない。このため、谷の埋め立ては、東地区の谷頭のみの可能性が高い。一方、谷の南では、飛鳥時代の遺構は確認できないが、現在の明日香小学校の場所は丘陵地となっており、その立地からみて、遺跡があった可能性は残されている。

奈良・平安時代の遺構は北地区東端と東地区にのみ確認される。このことから、東西道路南方の、遺跡北東部にのみ展開していたのであろう。しかし、確認されている建物などは少なく、活発な活動はみられない。さらに性格を特定することも難しい。

これに対して中世になると、中央の谷を挟んで、北・東・南地区のいずれにおいても、柱穴・小溝が多く確認される。調査区の関係で、建物等にまとまるのは少ないが、この時期になると、全域で活発な生活活動がみられる。しかし、これらの中世の建物群等も、室町時代頃になると廃絶し、遺構はみられなくなる。おそらく現在の水田景観へと変化したものと推定される。

## 東地区の性格

東地区では、谷S X3041の埋め立て土から大量の土器と共に、270点の木簡が出土している。第4章の報告の中で、その時期や位置づけなど、若干の検討をしているが、ここでそれらをまとめておきたい。

### 谷S X3041埋め立て時期

谷S X3041は、その堆積状況からみて、北側から南の谷に向かって埋められている。そして、その埋め立て期間も、出土土器や木簡の出土状況から見る限り、極めて短期間に施工されていたことがわかる。このS X3041出土土器は、これまでの飛鳥編年の中では、坂田寺S G100よりも新しく、大官大寺S K121・藤原京下層S K2355よりも古くに位置づけられ、水落遺跡出土土器に近い。水落遺跡出土土器は、従来提示されていた土器群が一括遺物とするには問題があり、新しい土器が混じっていることが指摘されてきた。それでもS X3041は、これと最も類似する。

飛鳥編年の実年代比定については、近年議論を呼んでおり、今回の調査でも明確にはできていない。従来から指摘されていた「四月中十七水□□」木簡は、今回の再検討の結果からは、年代推定の根拠にするのは難しいと判断された。よって、土器型式からみるかぎり、S X3041の土器群は7世紀後半（660～670年頃）あたりを推定しておきたい。この年代観は、木簡群の検討で、天武11年よりも古く、天武朝前半（あるいはそれ以前）の670年代前後という年代



観と大きくは齟齬しない。今後の調査研究によって、より年代幅を狭める必要がある。

#### 谷S X3041出土木簡の性格

谷S X1041出土木簡には、僧職・僧名など寺院に関係する木簡、王族・官人に関係する木簡がある。これらのことから谷S X3041出土木簡は、寺院との関係をもちつつも、官の造営組織との関わりもある木簡群と推定される。ただし、他の遺物からは、積極的に造営を示唆するものはみられない。この寺院の候補としては、橘寺と川原寺が推定される。

西橘遺跡は、橘寺の西面大垣（推定）のすぐ西外側に隣接しており、西に向かって開く谷は、寺域の外で止まる。その谷頭の埋め立てにあたり、大量の土器や木簡を含む整地土によって埋めている。このことから橘寺が木簡の出自の第一候補となろう。しかし、官の造営組織ということを中心とするならば、橘寺の北の川原寺も候補となる。川原寺の寺域西限がどこまで広がっていたのかは明確ではないが、東西道路の北方にあるのは間違いないので、谷S X3041からは少し距離がある。ただ、7世紀後半の橘寺の整備にあたっては官が関与した可能性もあり、川原寺の造営と、橘寺の整備に関わる造営主体が共通する可能性もあり、現時点では、どちらとも確定はできない。いずれにしても両寺院のいずれか（あるいは両寺）に関する木簡群と造成行為であると考えておきたい。

#### 今後の課題

本報告において、西橘遺跡の様相が判明してきた。遺構の残存状況や展開状況からは、北区・南区は古代の遺構は少ない。これは中央に東から西に広がる大きな谷が通過するためである。さらに北地区では、丘陵頂部にあたる東西道路周辺は、遺構の削平が激しい。よって、古代の遺構が残存する可能性は低く、頂部からやや南に下った部分、西へ下った部分のみ、断片的に遺構が残存する可能性がある。一方の、南区は東部で古墳時代の竪穴建物などがあるが、古代の遺構はない。しかし、さらに南の現明日香小学校の丘陵には、立地からみて、遺跡があった可能性がある。これらのことから、西橘遺跡の今回の報告範囲では、今後は、東地区を重点的に調査する必要があるだろう。特に、谷頭には、木簡を含む大量の遺物が包含されている可能性があり、西橘遺跡のみならず、橘寺・川原寺の造営・整備の解明にも資するものと考えられる。

（納谷守幸・相原嘉之・長谷川透）



---

版 圖

---





北地区 第1調査区 全景（東から）



北地区 第2調査区 全景（東から）



北地区 第3調査区 全景（東から）



北地区 第4調査区 全景（東から）



北地区 第5調査区 全景（西から）



北地区 第6調査区 近景（西から）



北地区 第6調査区 近景（北から）



北地区 第7調査区 全景（東から）



北地区 第7調査区 全景（西から）





北地区 第8調査区 全景（西から）



北地区 第9調査区 近景（東から）



北地区 第10調査区 全景（東から）



北地区 第10調査区 全景（西から）



北地区 第11調査区 全景（東から）



北地区 第11調査区 全景（西から）



北地区 第12調査区 全景（東から）



北地区 第13調査区 全景（東から）



北地区 第13調査区 全景（西から）



北地区 第14調査区 全景（南東から）



北地区 第15調査区 全景（南東から）



北地区 第16調査区 全景（南から）



北地区 第17調査区 全景（南東から）



北地区 第18調査区 全景 (南西から)



南地区 第1調査区 近景 (東から)



南地区 第2調査区 全景（東から）



南地区 第3調査区 全景（西から）



南地区 第4調査区 全景（西から）



南地区 第5調査区 全景（北から）



南地区 第6調査区 全景（東から）



南地区 第7調査区 全景（東から）  
（左奥：第8調査区）



南地区 第9調査区 全景（北から）





南地区 第10調査区 全景（南から）



南地区 第11調査区 全景（南西から）



南地区 第12調査区 全景（西から）



南地区 第13調査区 全景（南西から）



南地区 第14調査区 全景（西から）



南地区 第15調査区 全景（北西から）



東地区 第1調査区 全景（西から）



東地区 第1調査区 近景（東から）



東地区 第1-2調査区 近景①（西から）



東地区 第1-2調査区 近景② (西から)



東地区 第2調査区 近景 (南から)



東地区 第1-2調査区 近景③(南から)



東地区 第2調査区 井戸S E 3022(北から)



東地区 第3調査区 近景（北から）



東地区 第4調査区 南拡張前 全景（東から）

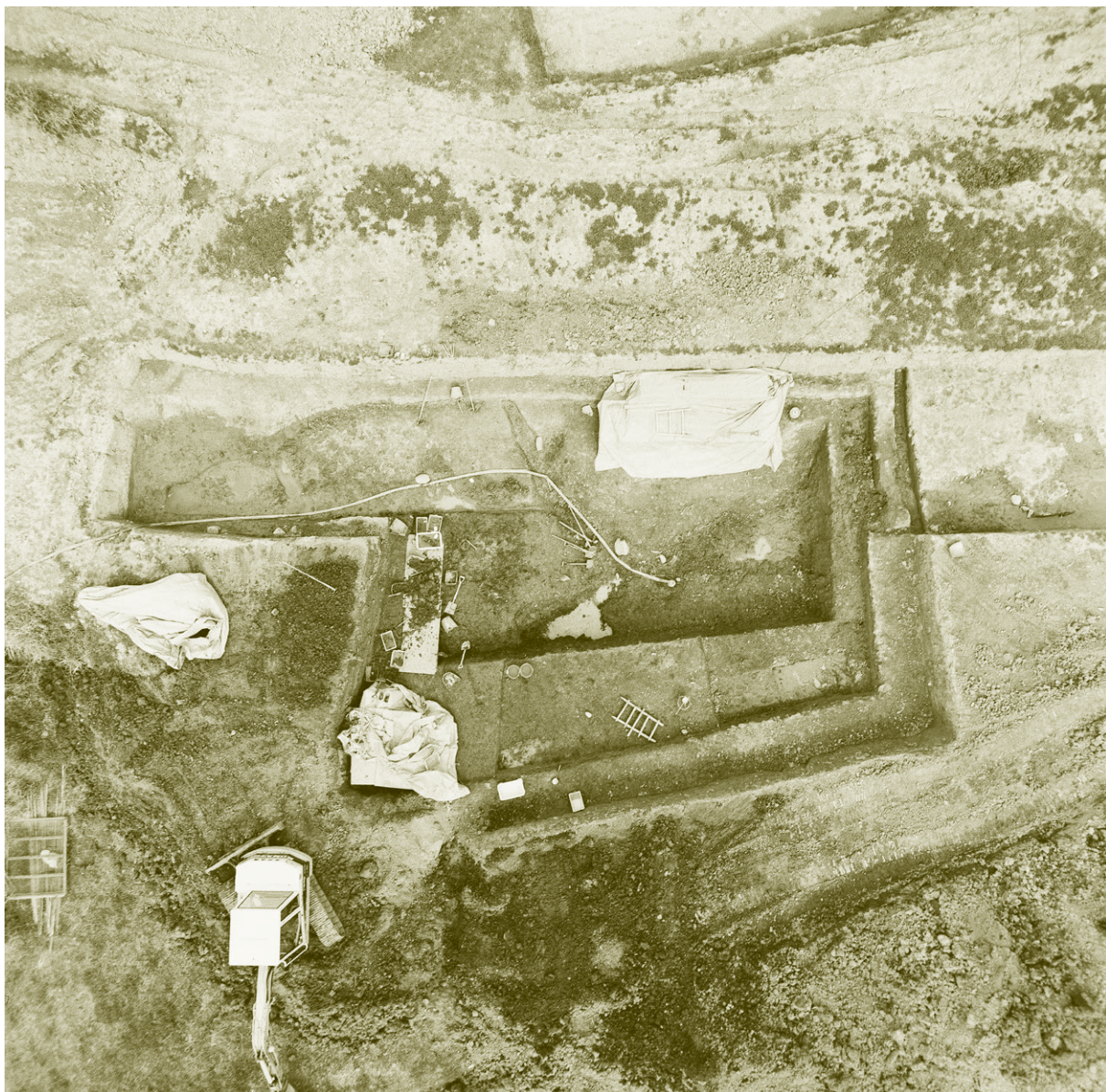


東地区 第4調査区 南拡張区 全景（東から）



東地区 第4調査区 南拡張区 全景（西から）





東地区 第4調査区 上空写真（上が北）



2



4



7



3



1 斜光



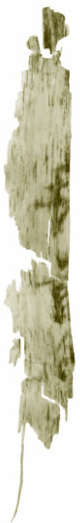
6



10



5



8



9



20



12



15



11



18



16



14



13



17



19



21



24



23



26



29



25



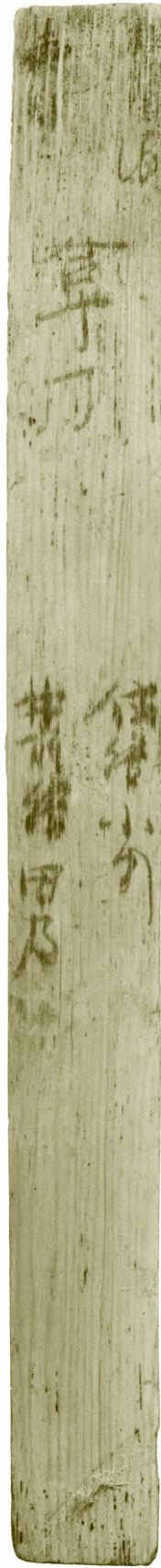
27



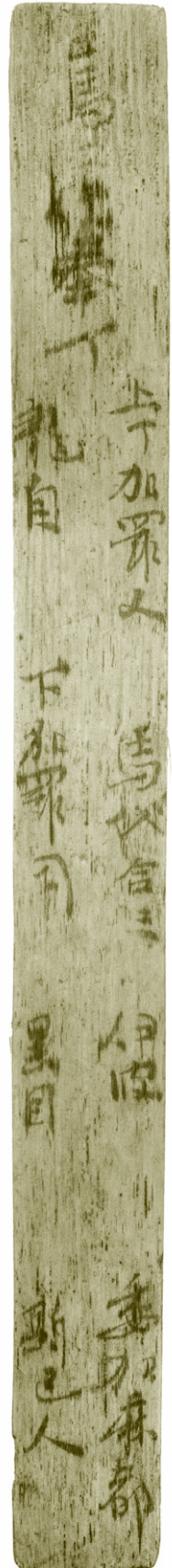
22



28



30(50%)





33



31



32



36



39



50



45



53



42



34



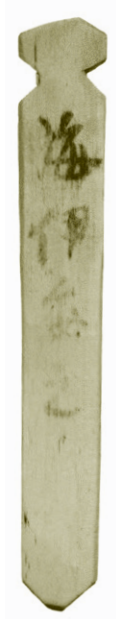
35



51



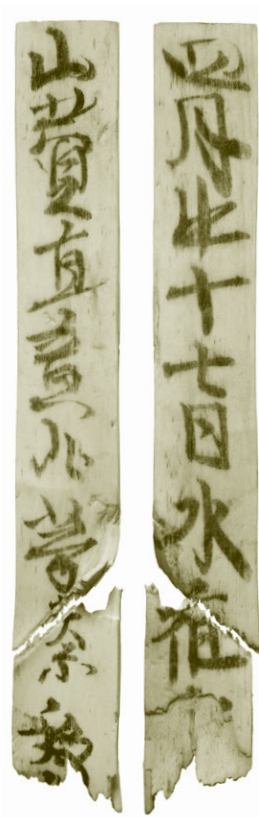
49



43



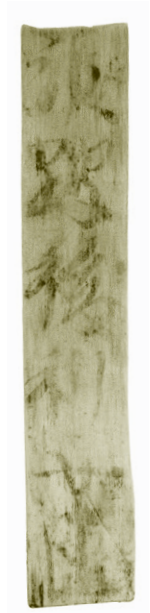
41



38



37



48



40



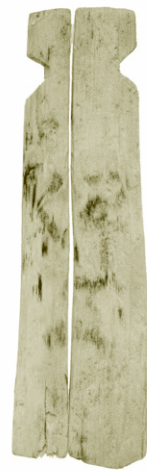
44



46

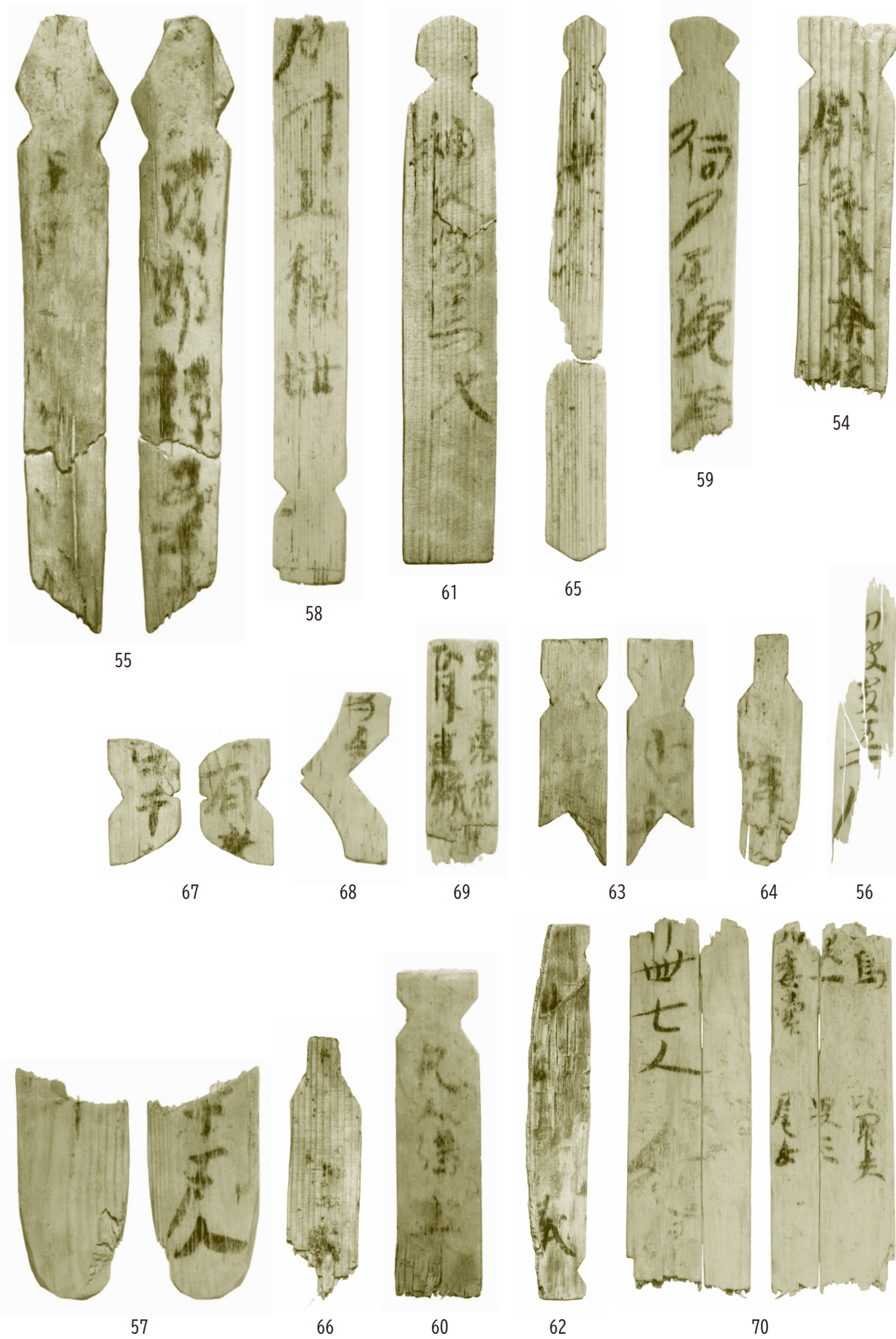


47



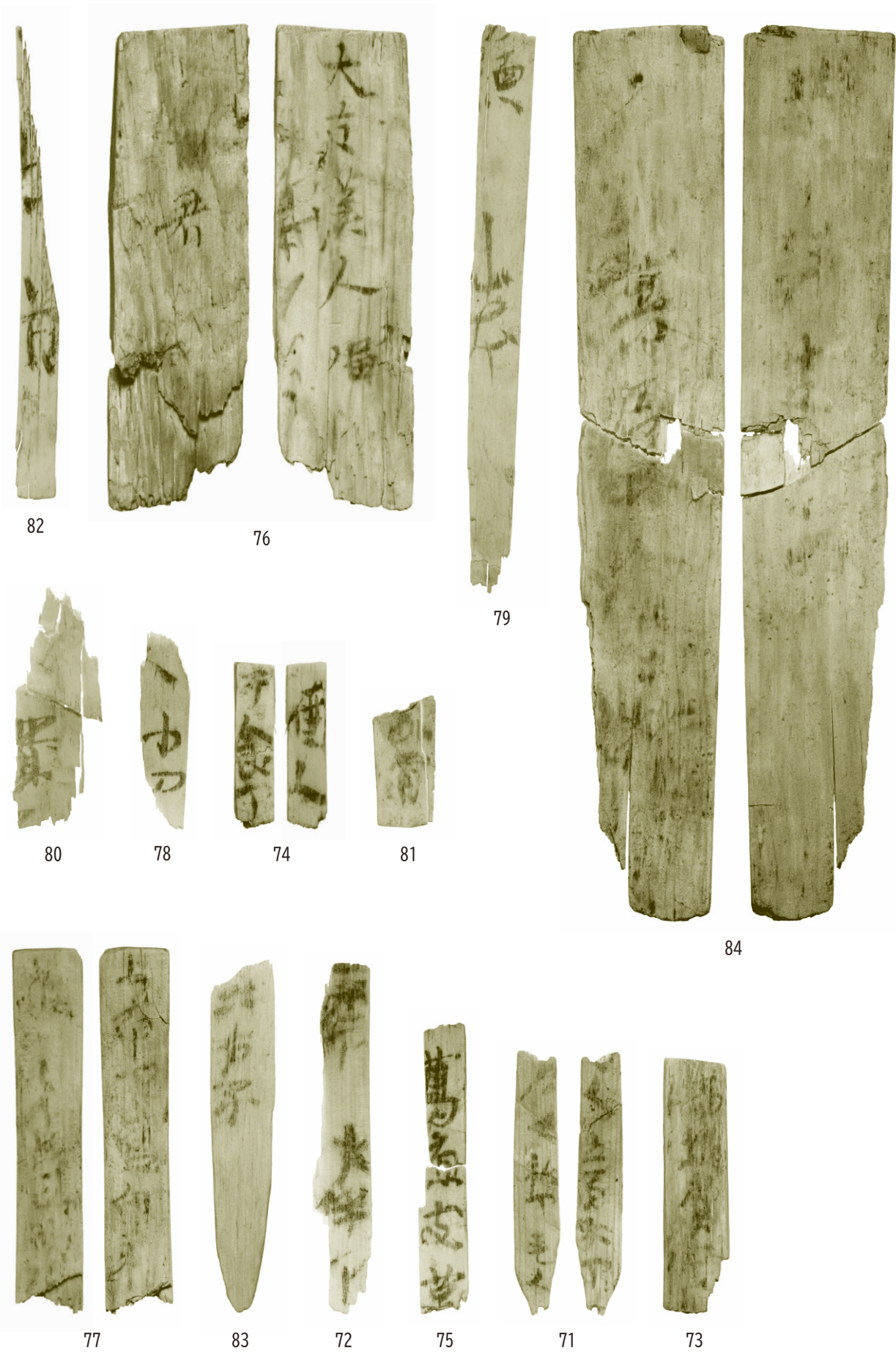
52

木簡 (六)



木簡 (七)





82

76

79

80

78

74

81

84

77

83

72

75

71

73

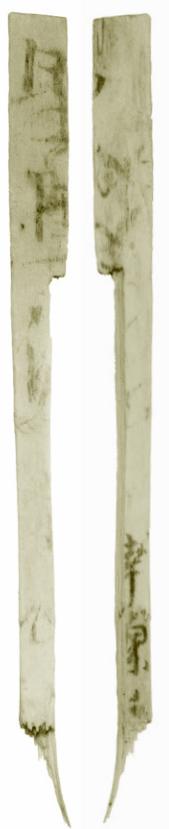
木簡 (八)



99



91



86



90



89



87



98



96



92



97



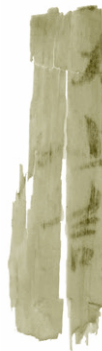
95



85



88



93



94



101



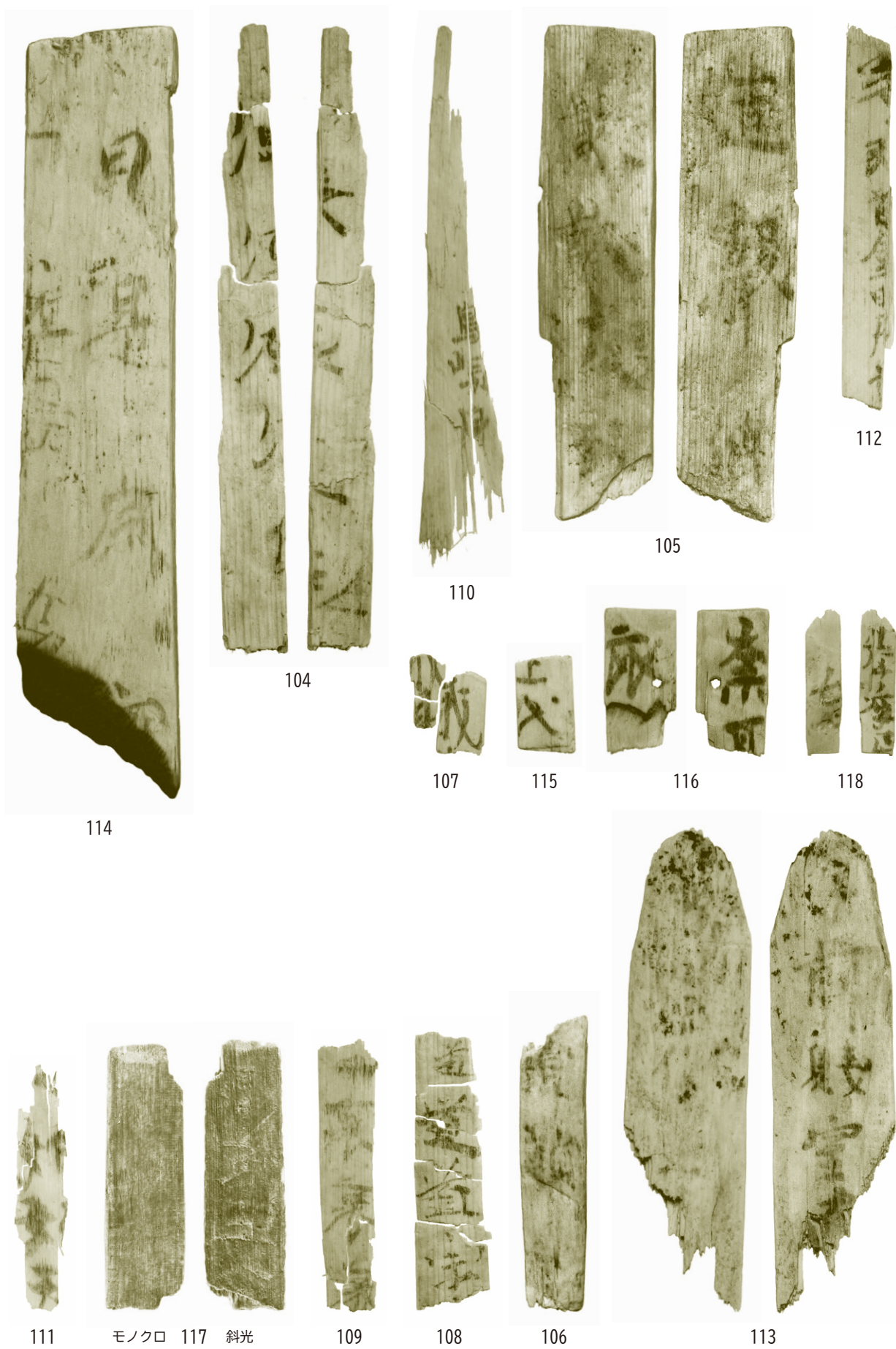
102



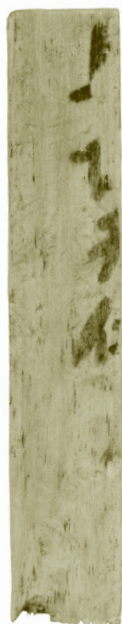
100



103



木簡 (十一)



128



122



121



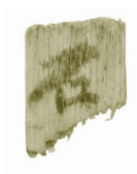
120



130



124



127



119



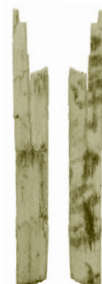
125



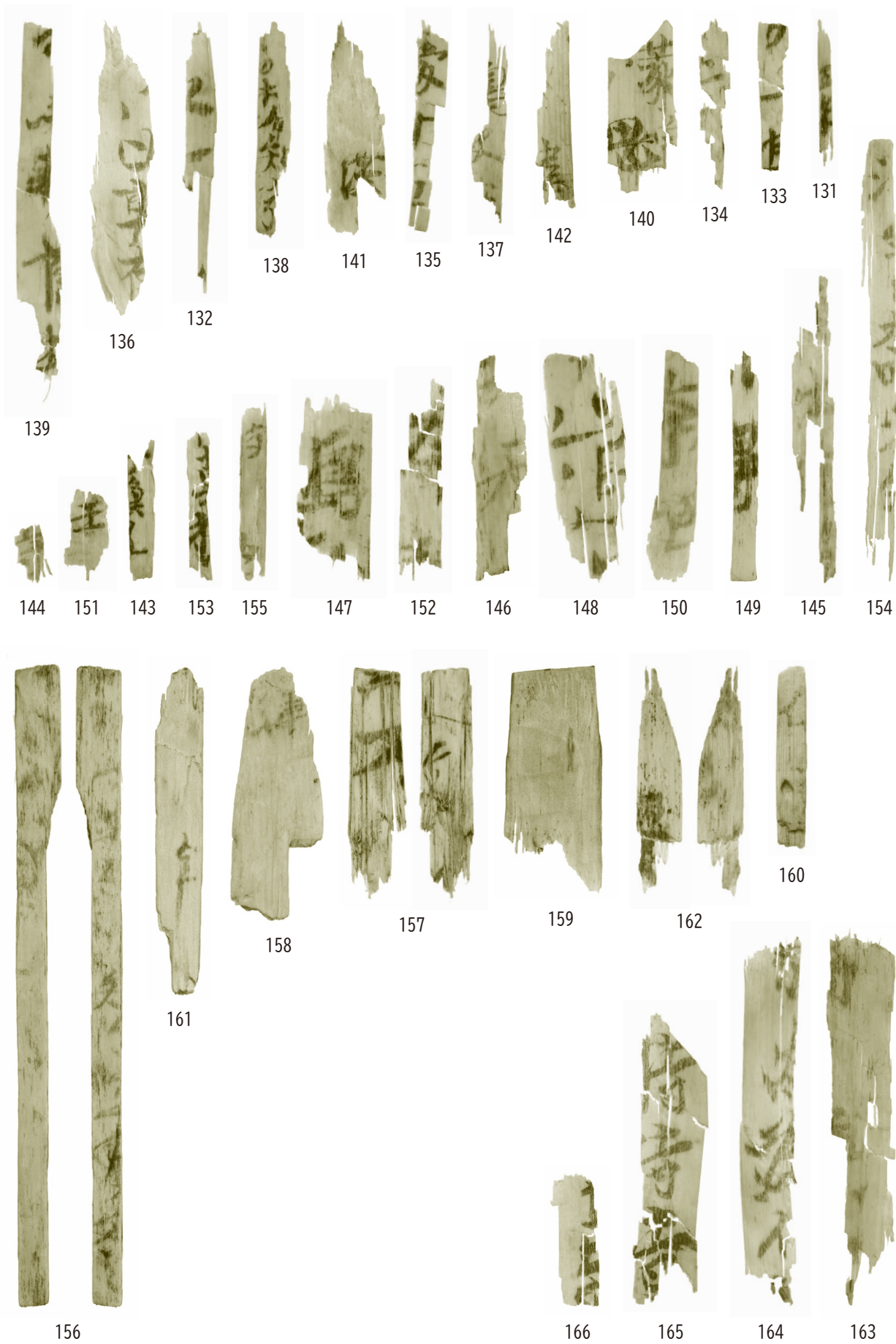
129

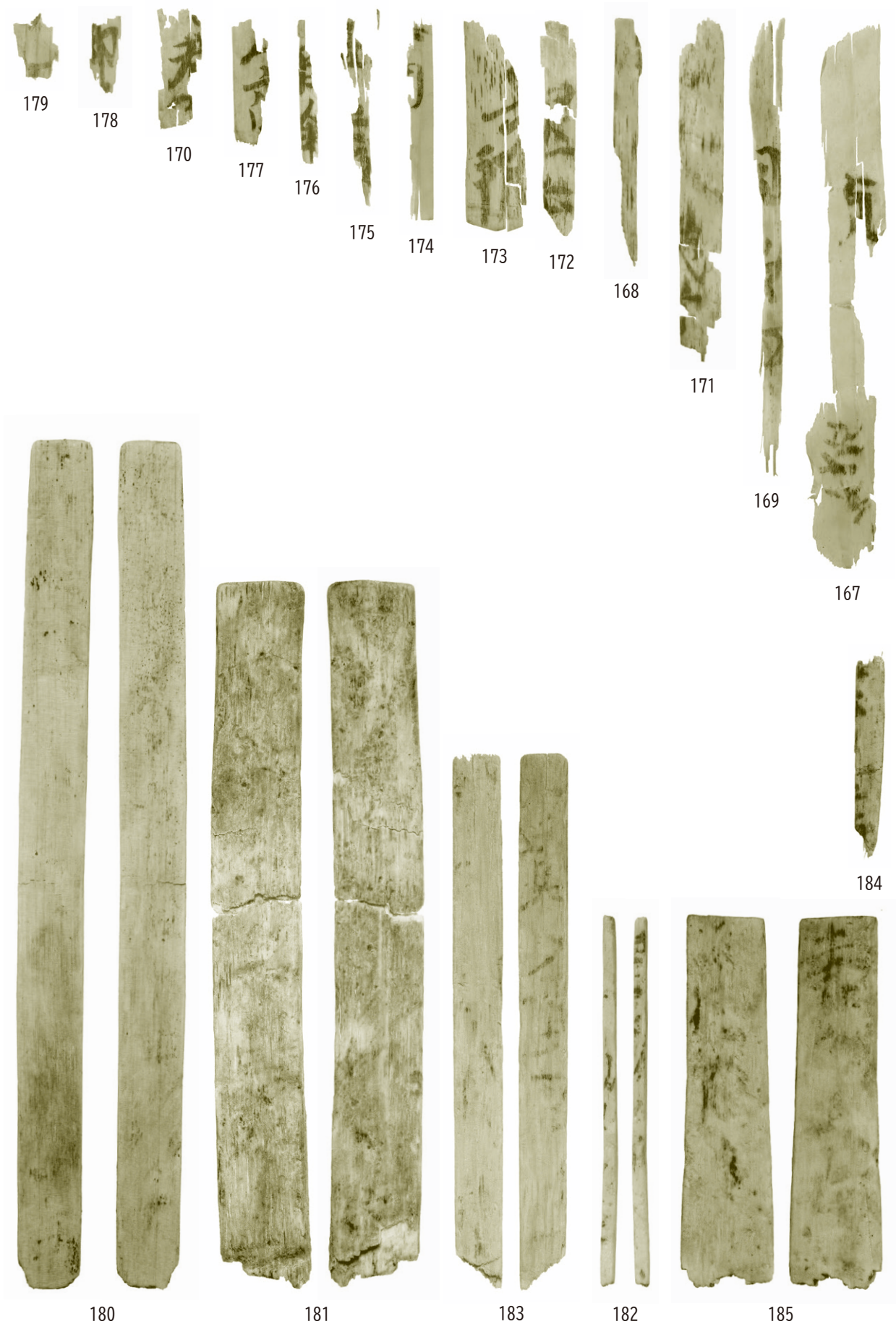


126

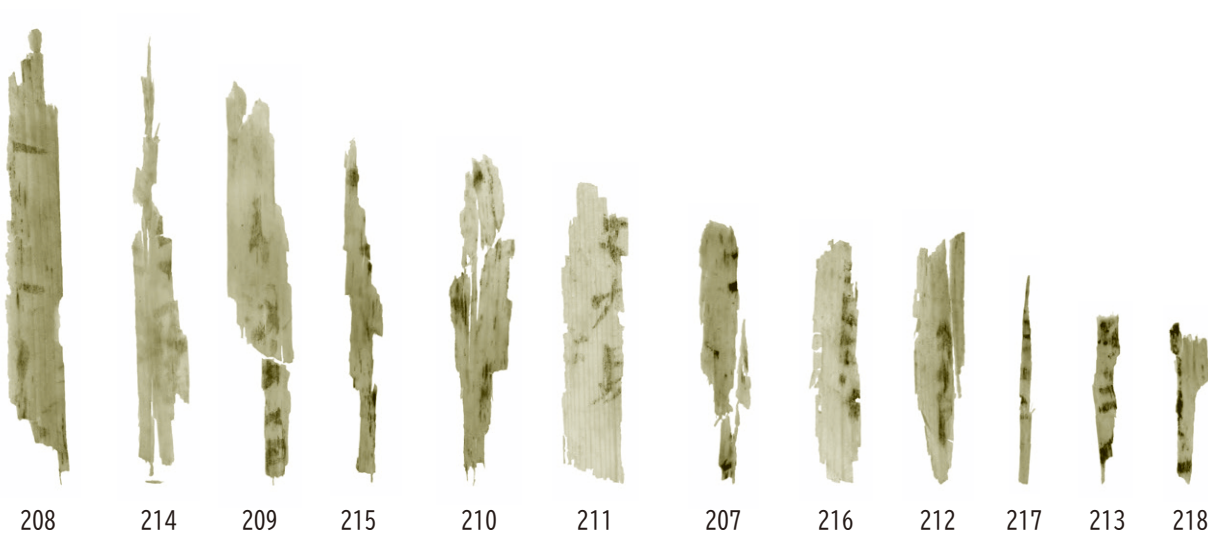
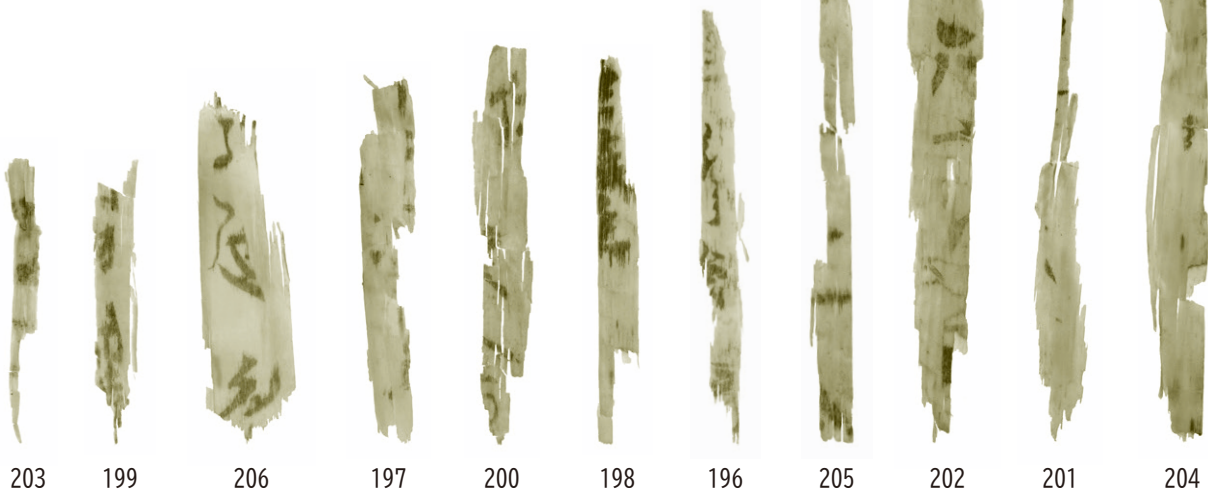
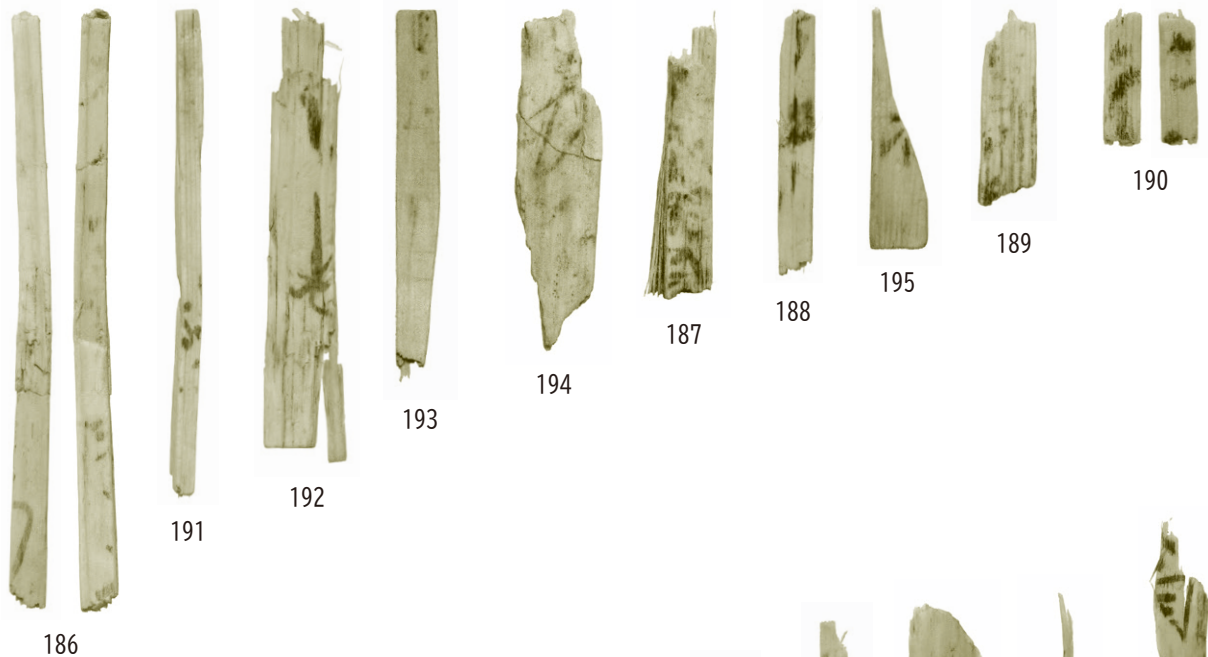


123

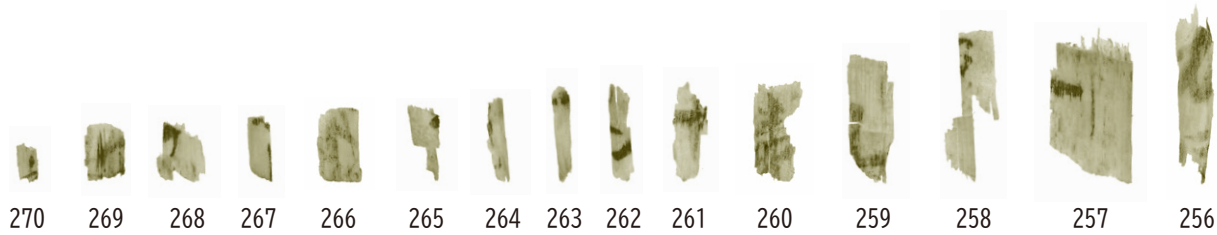
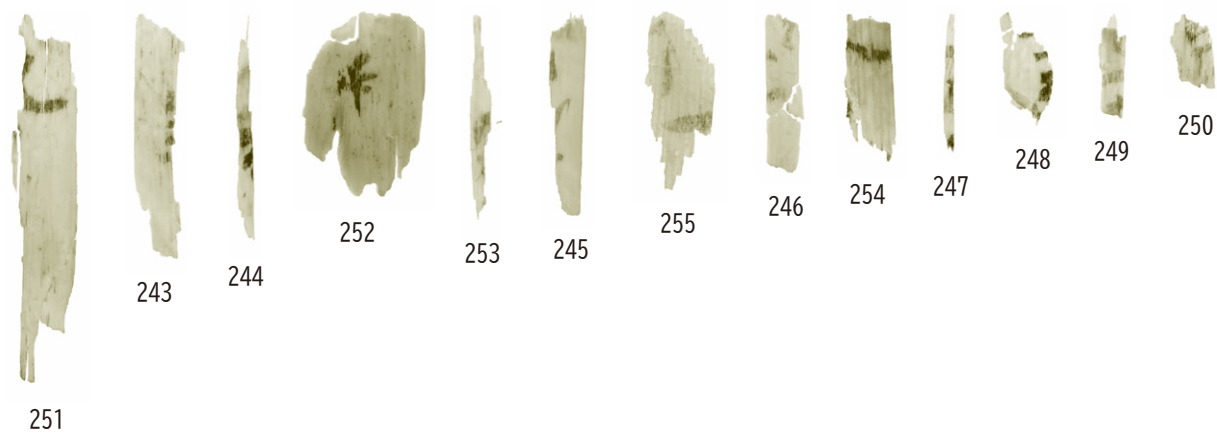
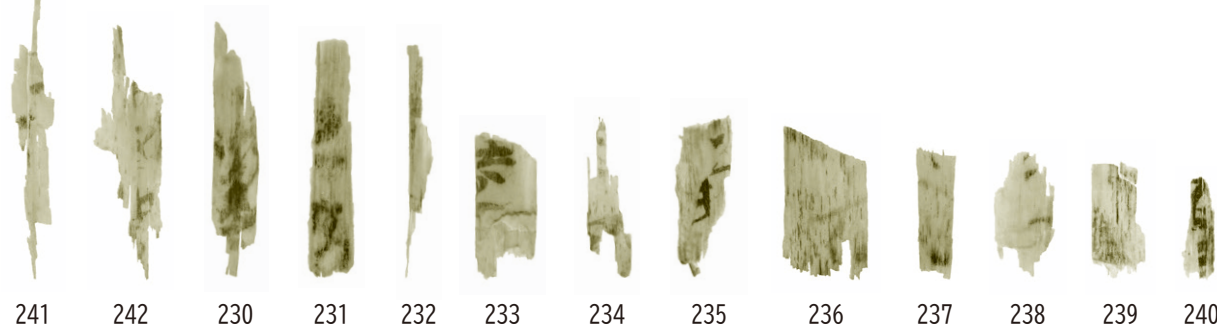
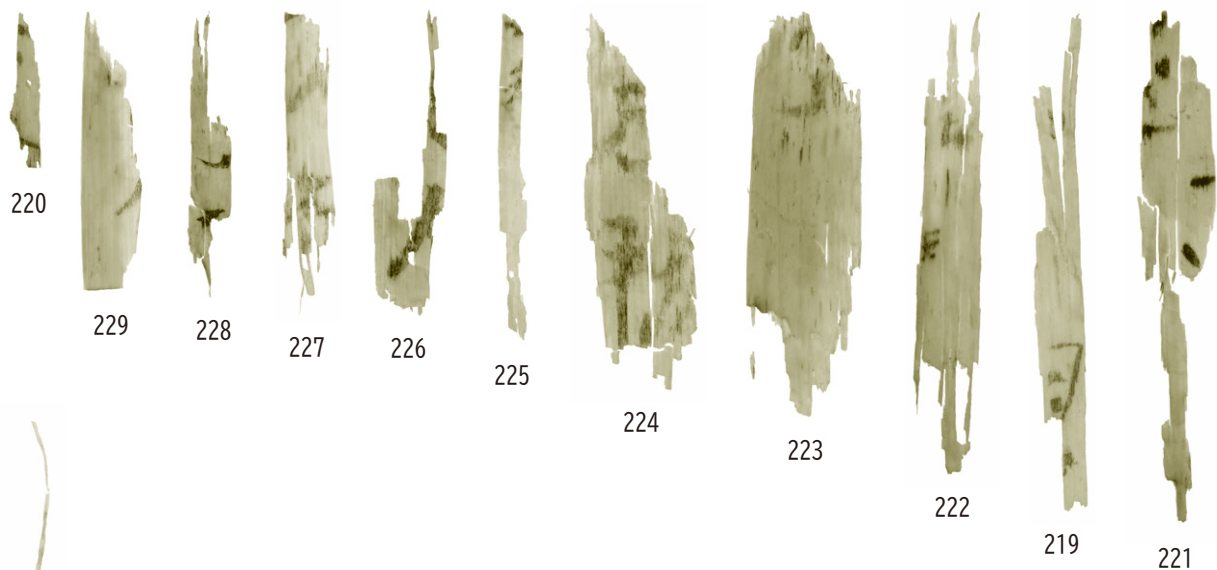




木簡 (十四)









木製品 (一)



木製品 (二)



木製品 (三)

243 242 241 240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230



*160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160*  
*16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16*

257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244



*160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160*  
*16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16*

270 269 268 267 266 265 264 263 262 261 260 259 258



*160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160* *160*  
*16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16* *16*

201	200	199	198	197	196	195	194	193	192	191	190
091 15	091 15	091 15	091 15	091 15	091 15	46×(11)×2 087 Eノキ科・追 榫目 15	(66)×18×3 087 Eノキ科・板 目 15	(71)×(9)×3 087 Eノキ科・板 目 15	(85)×(13)×3 087 Eノキ科・板 目 15	(4)×(93)×5 087 Eノキ科・榫 目 15	(27)×(7)×1 087 Eノキ科・榫 目 15

215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202
060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15	060 15

229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217	216
091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 16	091 15	091 15	091 15

180	179	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168
224×18×2 ピアノ科・ 榫目 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14	091 14

189	188	187	186	185	184	183	182	181
(38) × (11) × 4 ピアノ科・ 榫目 15	(52) × (8) × 2 ピアノ科・ 板目 15	(55) × (10) × 5 ピアノ科・ 追榫目 15	(115) × (7) × 3 ピアノ科・ 板目 15	(100) × 25 × 3 ピアノ科・ 板目 14	(54) × (8) × 2 ピアノ科・ 追榫目 14	(142) × 13 × 2 ピアノ科・ 追榫目 14	(98) × (4) × 3 ピアノ科・ 板目 14	(185) × 25 × 4 ピアノ科・ 板目 14





130	129	128	127	126	125	124	123	122
<p>128 × (20) × 4 081 ヒノキ科・追 板目 12</p>	<p>(59) × (13) × 2 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(118) × (22) × 6 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(28) × 20 × 3 081 ヒノキ科・追 板目 12</p>	<p>(58) × (13) × 2 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(50) × (17) × 3 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(99) × (21) × 5 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(53) × (6) × 2 081 ヒノキ科・板 目 12</p>	<p>(181) × (16) × 4 065 ヒノキ科・板 目 12</p>

142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131
091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13	091 13





69

「堅部連公君  
正月連」  
〔鎖カ〕

(60) × 19 × 2 019  
ビノキ科・追柵目 7

70

・鳥 比羅夫  
〔児カ〕〔児カ〕  
□一 □三  
□委売 尾女  
(別筆1) (別筆2)  
□冊七人 □

(101) × 33 × 3 081  
ビノキ科・板目 7

71

・人 五百木ア □  
□人 私ア 毛人

(69) × 12 × 1 059  
ビノキ科・柵目 8

72

□□ア 大伴ア

091 8

73

〔葛カ〕  
□城費 □

(68) × (18) × 3 081  
ビノキ科・板目 8

74

・「酒人  
・「干食ア

(43) × (11) × 4 081  
ビノキ科・板目 8

75

葛原支菅

(67) × (13) × 3 081  
ビノキ科・板目 8

76

・「大古漢人富  
・「君

(127) × 37 × 7 019  
ビノキ科・板目 8

77

・〔小カ〕〔管カ〕  
□布ア □伊利

96 × 19 × 2 019  
ビノキ科・板目 8

78

□ 小ア

091 8

79

□德 山本

(148) × (15) × 1 081  
ビノキ科・板目 8

80

費 □

091 8

81

加〔首カ〕  
□

(35) × (18) × 2 081  
ビノキ科・板目 8

82

□〔首カ〕  
□

(124) × (11) × 1 081  
ビノキ科・板目 8

83

□〔子カ〕  
□戸 □

(92) × 17 × 3 059  
ビノキ科・追柵目 8

84

・「□□評造 □

(232) × 39 × 4 019  
ビノキ科・板目 8

85

・「□□小子 □ □

(69) × (11) × 2 081  
ビノキ科・追柵目 9

86

・「□□□□□  
□□□□□  
〔桑〕  
□□□□□  
□□□□□  
□□□□□  
□□□□□  
□□□□□  
□□□□□

(157) × (11) × 3 081  
ロウヤマキ科・板目 9

58	57	56	55	54	53	52	51	50	49
×□寸□□ <sub>山カ</sub> ≡ <sub>山カ</sub> ∨	・□ <sub>十戸人</sub> □	刀皮多五 <sub>十戸カ</sub> □□	・ <sub>野棟五十</sub> ∨□□□□ □□□□□	∨□□□□奈□	・ <sub>伊</sub> ∨□□□ <sub>皮カ</sub> □□□□	∨伊支□	□久皮 □□□□	∨ <sub>須伎カ</sub> □□□□	∨釘五十
(149)×20×3 039 ゴノキ科・追柁目 7	61×31×5 051 ゴノキ科・板目 7	091 7	(162)×29×4 039 針葉樹*・板目 7	100×26×5 032 ナニノキ科*・追柁目 7	(65)×19×3 039 ゴノキ科・追柁目 5	89×27×3 032 ゴノキ科・板目 6	091 5	121×26×2 032 ゴノキ科*・板目 5	111×24×6 032 ゴノキ科*・追柁目 6
68	67	66	65	64	63	62	61	60	59
□□ (琴柱)	・□ <sub>有</sub> □□ <sub>干</sub> □□ (琴柱)	∨□□□□	∨□□□□□	∨詳	・ <sub>止</sub> ∨□□□ □□□□	∨□□□□□ 奉	∨ <sub>神人勝馬</sub> □□ <sub>代カ</sub>	∨凡人 <sub>得カ</sub> □□ <sub>上</sub>	∨阿刀 <sub>塊カ</sub> □□ <sub>奈</sub>
45×23×3 061 ゴノキ科・板目 7	33×19×2 061 ゴノキ科・柁目 7	(74)×19×2 039 ゴノキ科・柁目 7	142×16×5 033 ゴノキ科・追柁目 7	(61)×17×3 039 ゴノキ科*・板目 7	60×18×4 039 ゴノキ科・追柁目 7	97×(17)×4 031 針葉樹・板目 7	143×24×5 032 ゴノキ科・柁目 7	86×23×4 032 ゴノキ科・板目 7	(114)×19×4 039 ゴノキ科*・追柁目 7

37	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「連公麻居 仕丁男□□□□□□□□」</li> <li>・「三月廿九日水□□□□□□□□□□」</li> <li>・「淵植カ」</li> <li>・「十四カ女三カ」</li> </ul>	(196) × 15 × 2 019 ヒノキ科・板目 6
36	「并三人」	182 × 23 × 6 051 ヒノキ科・追榎目 5
35	「合四人」	091 5
34	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「合十□□□□」</li> <li>・「八カ」</li> <li>・「大カ」</li> </ul>	(70) × (11) × 2 081 ヒノキ科・板目 5
33	并合余銅百五十斤」	(223) × 31 × 4 019 ヒノキ科・榎目 5
32	<ul style="list-style-type: none"> <li>・慈石二両 白羊鮮二両 橘皮二両」</li> <li>・「草二両 鹿腎一具 十八種」</li> </ul>	(186) × (16) × 4 081 ヒノキ科・板目 5
31	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「多□□」</li> <li>・「胡カ」</li> <li>・「羅カ」</li> <li>・「刀□□」</li> <li>・「五丁」</li> <li>・「久□□□□□□」</li> </ul>	(207) × (11) × 4 081 ヒノキ科・板目 5
30	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「馬口仕奉丁 上丁加羅人 馬代合三 伊波 委加麻都 斯己人」</li> <li>・「龍自 下加羅閉 黒目」</li> <li>・「須□□」</li> <li>・「留カ」</li> <li>・「合十丁」</li> <li>・「仗轡カ」</li> <li>・「小閑□□□□」</li> <li>・「井前□田乃」</li> <li>・「轡カ」</li> </ul>	382 × 39 × 3 011 ヒノキ科・追榎目 4
48	「須跛移利廿□□」	(196) × 15 × 2 019 ヒノキ科・板目 6
47	「ス自弥」	94 × 18 × 4 032 ヒノキ科・板目 6
46	「加宍 日佐」	94 × 30 × 3 032 ヒノキ科・板目 6
45	猪宍	(39) × (18) × 1 081 ヒノキ科・板目 5
44	「伊□加皮」	99 × 25 × 3 065 ヒノキ科・榎目 6
43	「海伊委之」	114 × 17 × 3 033 ヒノキ科・板目 6
42	「評石□□□□」	091 5
41	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「八カ」</li> <li>・「雲評□□」</li> <li>・「綿十四斤」</li> </ul>	135 × 19 × 3 032 ヒノキ科・板目 6
40	「鎮評」	109 × 23 × 2 033 針葉樹・板目 6
39	「針間□□□□」	175 × (17) × 3 031 ヒノキ科・榎目 5
38	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「四月中十七日水植□□」</li> <li>・「山費直意比等奈移□□」</li> </ul>	(147) × 20 × 3 019 ヒノキ科・追榎目 6







## 出土木簡積文凡例

- 一、ここには、西橋遺跡から出土した二七〇点の木簡（うち削屑一四六點）のすべての積文を掲載した。
- 一、木簡の排列は、文書、貢進物付札（荷札）、物品付札、その他の順に並べること原則とした。
- 一、積文の体裁、符号、および型式番号は、木簡学会方式に統一した。
- 一、木簡の積文は、木目方向を縦として組むのを原則とした。但し、曲物の底板などについては必ずしもこの限りではない。
- 一、積文の漢字は概ね現行常用字体に改めたが、「實」「寶」「證」「龍」「廣」「盡」「應」「傳」などについては木簡の表記を尊重した。異体字は「マ」「ア」「井」「季」「躰」などについてのみに用いた。
- 一、積文に加えた符号は次の通りである。
- ・ 木簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。
  - 「」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す（端とは木目方向の上下両端をいう）。
  - < 木簡の上端・下端などに切り込みのあることを示す。
  - ゝゝ 抹消された文字であるが、字画の明らかな場合に限り原字の左傍に付した。
  - 穿孔のあることを示す。但し、釘孔など別の用途の穿孔は省略した。
  - ■ 抹消により判読困難なもの。
  - □ □ 欠損文字のうち字数の確認できるもの。
  - □ □ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。
  - × 欠損文字のうち字数の数えられないもの。
  - 前後に文字の続くことが内容上推定されるが、折損などにより文字が失われているもの。
  - 「」 異筆、追筆。
  - 「」 合点。
  - … 木目と直交する方向の刻線を示す。
  - … 校訂に関する註で、本文に置き換わるべき文字を含むもの。原則として文字の右傍に付す。
  - ( ) 右以外の校訂註、及び説明註。
  - (X) 文字の上に重書して原字を訂正している場合、訂正箇所の左傍に・を付し原字を上のを要領で右傍に示す。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マ、 文字に疑問はないが、意味の通じ難いもの。

… 同一木簡と推定されるが、折損などにより直接つながらず、中間の文字が不明なもの。

字が不明なもの。

- 一、積文下の上段のアラビア数字は木簡の長さ（文字の方向）・幅・厚さを示す（単位㎞）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。なお、円形の木製品の法量は、径と厚さを示し（単位㎞）、欠損している場合は復原径を示した場合がある。最下段のアラビア数字（イタリック）は図版のプレート番号を示す。たとえば、「2」は、木簡図版二に対応する。
- 一、型式番号は、木簡の形態を示し、次の一八型式からなる。時代を表す四桁目は省略した。

- 011型式 短冊型。
  - 015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。
  - 019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。
  - 021型式 小型矩形のもの。
  - 022型式 小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの。
  - 021型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。
  - 022型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。
  - 033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。
  - 039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
  - 041型式 長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。
  - 043型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状に作り、残りの部分の左右に切り込みをいれたもの。
  - 049型式 長方形の材の一端を羽子板の柄状にしているが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。
  - 051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。
  - 059型式 長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損。
  - 061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。
  - 065型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。
  - 081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。
  - 091型式 削屑。
- 一、積文の次行には、木簡（削屑を除く）の樹種・木取りを記した。

出土木簡积文

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしたちばないせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	西橋遺跡発掘調査報告書							
副書名	明日香村役場新庁舎建設及び明日香村中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う調査							
巻次								
シリーズ名	明日香村文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編者名	長谷川透、相原嘉之							
著者名	長谷川透、相原嘉之、西光慎治、辰巳俊輔、高橋幸治、谷澤亜里、納谷守幸、藤井裕之、松永悦枝、山崎健、山本崇							
編集機関	明日香村教育委員会事務局文化財課							
所在地	〒634-0142 奈良県高市郡明日香村大字橋21番地 TEL0744-54-5600 FAX0744-54-9030							
発行年月日	西暦2024（令和6）年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西橋遺跡	奈良県 高市郡明日香村 大字橋21番地 他	29402		34° 28' 13"	135° 48' 48"	1991年12月17日～ 1992年3月9日 1992年4月1日～ 1993年3月31日	2965	中山間地域農 村活性化総合 整備
						2017年5月15日～ 2017年6月13日 2018年3月1日～ 2018年3月30日 2020年7月28日～ 2020年12月23日	1380	新庁舎移転及 び建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西橋遺跡	官衙	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物、 掘立柱塼、石敷、 土坑、溝、井戸	土師器、須恵 器、黒色土器、 緑釉陶器、灰 釉陶器、瓦器、 瓦、鞆羽口、 鉄滓、金属製 品、銭貨、石 製品、石材、 木簡、木製品、 植物遺存体、 骨角製品、動 物遺存体	橋寺境内の西側にある東西方向の谷を飛鳥時代後半頃に造成した痕跡を確認した。造成土内には多量の土器と木簡、木製品などが出土し、飛鳥時代後半期の標識資料たるべきものと位置付けられる。遺跡の立地と遺物の様相から、橋寺または川原寺の造営・整備との関連が推定される。			

## 西橋遺跡発掘調査報告書

編集・発行 明日香村教育委員会文化財課  
〒634-0142  
奈良県高市郡明日香村大字橋21番地  
TEL 0744-54-5600  
FAX 0744-54-9030  
発行年月日 令和6（2024）年3月25日  
印刷 橋本印刷株式会社

RESEARCH REPORT OF CULTURAL HERITAGE  
IN  
ASUKA VILLAGE, VOL. XVIII

EXCAVATIONS REPORT  
IN  
NISHITACHIBANA SITE

2024

PUBLISHED BY  
ASUKA VILLAGE BOARD OF EDUCATION  
ASUKA, NARA, JAPAN